

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第214集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第41集

# 神保植松遺跡

《本文編I》

1 9 9 7

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本道路公団



群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第214集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第41集

# 神保植松遺跡

《本文編 I》

1 9 9 7

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日 本 道 路 公 団







神保植松遺跡全景



## 序

関越自動車道藤岡ジャンクションから分岐して長野・新潟に向かう上信越自動車道は、平成8年11月に長野市まで開通するところとなりました。この高速道路は、群馬西部の藤岡市から富岡市にかけて鐮川が形成した河岸段丘とそれに連なる丘陵の中を走ります。

この河岸段丘や丘陵上には数多くの遺跡が分布することが知られています。多野郡吉井町に所在する神保植松遺跡もその一つで、上信越自動車道建設にかかわる発掘調査によって旧石器時代から近世におたる数多くの遺構・遺物が発見されました。

特に本遺跡の注目される遺構として、壺や甕形土器などを埋設した弥生時代中期の土壌群や、中世の地方豪族であった神保氏の居城とみられる城館跡があります。堀で区切られた複数の郭内から掘立柱による建物遺構・柵列・木戸・井戸跡などが検出され、戦国期における地方城館の構造を研究する上で貴重な資料を提供しています。

ここに「神保植松遺跡」の発掘調査報告書が刊行の運びとなりましたが、発掘調査から刊行に至るまで、日本道路公団、群馬県教育委員会、吉井町教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに発掘調査・整理事業にかかわった多くの皆様のご協力とご支援に厚くお礼を申し上げます。そして、本書が地域の歴史を解明する上で、多くの方に広く活用されますことを願い序といたします。

平成8年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之



## 例 言

1. 本書は、関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「神保植松遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 神保植松遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字神保字植松・辻・稲荷山・仁賀久保に所在する。
3. 発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して行われた。

### 4. 調査期間及び担当者

- (1) 発掘調査期間 昭和62年10月1日～平成元年3月31日

調査面積 31.500㎡

担当者 昭和62年度 鬼形芳夫、谷藤保彦、三浦茂三郎、飯塚聡、外山政子（嘱託）

昭和63年度 藤巻幸男、谷藤保彦、小島達夫、外山政子

- (2) 整理期間 平成6年4月1日～平成9年3月31日

担当者 谷藤保彦

- (3) 事務 常務理事 白石保三郎（昭和62・63年度）、中村英一（平成6・7年度）、菅野清（平成8年度）

事務局長 井上唯雄（昭和62年度）、松本浩一（昭和63年度）、近藤 勲（平成6年度）、原田恒弘（平成7・8年度）

管理部長 田口紀雄（昭和62年度）、蜂巣 実（平成6年度～平成8年度）

研究部長 上原啓巳（昭和62・63年度）、神保佑史（平成6・7年度）、赤山容造（平成8年度）

課 長 岸田治男（平成6・7年度）、平野進一（平成8年度）

庶務課 課 長 斎藤俊一（平成6年度）、小淵 淳（平成7・8年度）

(総) 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光

柳岡良宏、高橋定義（平成6・7年度）、宮崎忠司（平成8年度）

非常勤職員 大沢友治

臨時職員 今井もと子、内山佳子、塩浦ひろみ、菅原淑子、角田みづほ、羽鳥京子、星野美智子、松井美智代、山口蘭子、吉田恵子、若田誠

関越道上越線調査事務所長 井上 信（昭和62・63年度）

総括次長 片桐光一（昭和62・63年度）

次 長 原田恒宏（昭和62年度）、徳江 紀（昭和63年度）

課 長 鬼形芳夫（昭和63年度）

庶務課 黒沢重樹（昭和62・63年度）

臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、町田康子、本城美樹

### 5. 報告書作成関係者

本文執筆 谷藤保彦、関根慎二（第4章2）、高島成侑（第4章3）

編集担当 谷藤保彦

遺物写真 佐藤元彦

保存処理 関 邦一、土橋まり子、小材浩一、小沼恵子

整理補助員 磯邊住子、大澤亜矢子、掛川智子、神谷みや子、霜田恵子、白井和子、萩原由美子、船津博子、星野春子、細井敏子、本多琴恵

6. 石材鑑定は(群馬地質研究会)飯島静男氏に依頼した。
7. 石器の一部の実測図作成は、榊枝研測量設計に委託し、写真実測を行った。また、遺構・遺物トレースの一部についても、榊枝研測量設計に委託した。
8. 中世城郭に伴う掘立建物の分析及び復元は、高島成侑氏に依頼した。
9. 中世城郭の復元図は、(仮)歴史環境研究所に委託し、香川元太郎氏が作成した。
10. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の方々より種々のご協力、ご教示をいただいた。記して感謝する次第である。(敬称略)  
吉井町教育委員会、浅野晴樹、今村啓爾、上田典男、梅沢重昭、大竹憲治、木下哲夫、小林謙一、設楽博己、渋谷昌彦、鈴木徳雄、高島成侑、田中耕作、寺崎裕助、戸田哲也、費田明、服部敬史、細田勝、本田秀生、本間宏、峰岸純夫、山崎一、山下歳信、芳賀英一、若狭徹、綿田弘実、渡辺誠
11. 本書を作成するにあたり、事業団職員諸氏に多くのご教示を受けた。記して感謝する次第である。

## 凡 例

1. 遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。座標系は国家座標第IX系である。
2. 遺構断面図、等高線に付した数字は標高を表す。
3. 欠番の遺構については、番号を記載し欠番と明示してある。
4. 遺構の位置を示すグリッドの表記は、その遺構が面積的に最も多く掛かるグリッド名を示した。
5. 遺構実測図の縮尺は基本的に次の通りである。  
住居1/60、竈1/30、掘立柱建物跡1/80、土坑1/60（一部1/20）、方形周溝墓・古墳1/100（1/50）  
これら以外についても、図中に縮尺を記した。
6. 遺物実測図の縮尺は次の通りである。  
土器1/3・1/4、石器4/5・1/2・1/3・1/4・1/6、石製品1/2・1/3、鉄製品4/5・1/2、土器の拓影図1/3、  
これら以外についても、図中に縮尺を記した。
7. 縄文土器のうち、図中の繊維土器と無繊維土器の区分については、土器断面に●を付してあるものが繊維土器を表す。
8. 出土遺物のうち、縄文・弥生時代の土器・石器については、その出土量が多く、紙面等の都合により代表的なものを掲載した。その結果、未掲載遺物も多い。  
また、本文中に掲載した遺物は、必ずしも写真図版編に掲載されていない。特に、遺構外遺物については、その一部を代表させている。
9. 遺物の観察については、縄文・弥生時代のは文章による記述を行い、古墳時代以降の遺物は遺物観察表を用いて記した。石器・石製品・鉄器等については、各計測表を用いて記した。
10. 石器計測表での石材については、一部に略した名称を使用した。略名で記載した石材は、次の通りである。

石 材 名 称	略 名
粗粒輝石安山岩	粗 輝 安 山 岩
細粒輝石安山岩	細 輝 安 山 岩
デイサイト質凝灰岩	デ イ 質 凝 灰 岩
ホルンフェルス	ホ ル ン

# 目 次

<本文編 I・II>

## 序 例 言 凡 例 抄 録

### 第 1 章 調査の概要

- 第 1 節 調査に至る経過……………1
- 第 2 節 調査の方法と経過……………2
- 第 3 節 調査日誌抄……………4

### 第 2 章 遺跡の環境

- 第 1 節 地理的環境……………6
- 第 2 節 歴史的環境……………6
- 第 3 節 基本土層……………11

### 第 3 章 検出された遺構と遺物

- 第 1 節 旧石器時代の遺物……………12
- 第 2 節 縄文時代の遺構と遺物……………14
  - 1. 住 居 跡……………14
  - 2. 土 坑……………97
  - 3. 遺構外出土遺物……………150
- 第 3 節 弥生時代の遺構と遺物……………514
  - 1. 住 居 跡……………514
  - 2. 土 坑……………519
  - 3. 遺構外出土遺物……………572
- 第 4 節 弥生時代終末から古墳時代初頭  
および古墳時代の遺構と遺物……………609
  - 1. 弥生時代終末から古墳時代初頭の  
住居跡……………609
  - 2. 方形周溝墓……………665
  - 3. 古墳時代後期の住居跡……………681
  - 4. 古 墳……………688

- 第 5 節 平安時代の遺構と遺物……………739
  - 1. 住 居 跡……………739
  - 2. 土 坑……………822
  - 3. 遺構外出土土器……………823
  - 4. 畚状遺構……………832
- 第 6 節 中世の遺構と遺物……………833
  - 1. 城郭の堀と郭……………833
  - 2. 掘立建物・櫓列・木戸・門跡遺構……………882
  - 3. 井 戸……………973
  - 4. 竪穴状遺構……………974
  - 5. 土 坑……………980
  - 6. 出土遺物……………998
  - 7. 神保城(榎松城)について……………1057
- 第 7 節 近世土坑……………1064
- 第 8 節 時期不明遺構……………1065
  - 1. 土 坑……………1065
  - 2. 追加資料……………1090

### 第 4 章 考 察

- 1 縄文時代前期中葉土器群について……………1093
- 2 縄文時代前期終末土器群について……………1108
- 3 中世掘立建物について……………1118



## 挿 図 目 次

### 〔本文編1〕

- 第 1 図 調査範囲及びグリッド設定図  
第 2 図 遺跡位置及び周辺遺跡地図  
第 3 図 基本土層模式図  
第 4 図 旧石礫試験配置図  
第 5 図 遺構外出土石器  
第 6 図 7号住居跡平面図・出土遺物  
第 7 図 7号住居跡出土遺物(1)  
第 8 図 7号住居跡出土遺物(2)  
第 9 図 25・30号住居跡  
第 10 図 25号住居跡出土遺物  
第 11 図 26(A・B)・27・28・35・40・41号住居跡平面図  
第 12 図 26号住居跡平面図  
第 13 図 26号住居跡出土遺物(1)  
第 14 図 26号住居跡出土遺物(2)  
第 15 図 26号住居跡出土遺物(3)  
第 16 図 26号住居跡出土遺物(4)  
第 17 図 26号住居跡出土遺物(5)  
第 18 図 26号住居跡出土遺物(6)  
第 19 図 26号住居跡出土遺物(7)  
第 20 図 26号住居跡出土遺物(8)  
第 21 図 26号住居跡出土遺物(9)  
第 22 図 26号住居跡出土遺物(10)  
第 23 図 26号住居跡出土遺物(11)  
第 24 図 26号住居跡出土遺物(12)  
第 25 図 26号住居跡出土遺物(13)  
第 26 図 26号住居跡出土遺物(14)  
第 27 図 26号住居跡出土遺物(15)  
第 28 図 26号住居跡出土遺物(16)  
第 29 図 26号住居跡出土遺物(17)  
第 30 図 26号住居跡出土遺物(18)  
第 31 図 26号住居跡出土遺物(19)  
第 32 図 26号住居跡出土遺物(20)  
第 33 図 26号住居跡出土遺物(21)  
第 34 図 26号住居跡出土遺物(22)  
第 35 図 26号住居跡出土遺物(23)  
第 36 図 26号住居跡出土遺物(24)  
第 37 図 26号住居跡出土遺物(25)  
第 38 図 26号住居跡出土遺物(26)  
第 39 図 26号住居跡出土遺物(27)  
第 40 図 26号住居跡出土遺物(28)  
第 41 図 26号住居跡出土遺物(29)  
第 42 図 26号住居跡出土遺物(30)  
第 43 図 26号住居跡出土遺物(31)  
第 44 図 26号住居跡出土遺物(32)  
第 45 図 26号住居跡出土遺物(33)  
第 46 図 26号住居跡出土遺物(34)  
第 47 図 26号住居跡出土遺物(35)  
第 48 図 26号住居跡出土遺物(36)  
第 49 図 26号住居跡出土遺物(37)  
第 50 図 26号住居跡出土遺物(38)  
第 51 図 26号住居跡出土遺物(39)  
第 52 図 26号住居跡出土遺物(40)  
第 53 図 26号住居跡出土遺物(41)  
第 54 図 26号住居跡出土遺物(42)  
第 55 図 26号住居跡出土遺物(43)  
第 56 図 26号住居跡出土遺物(44)  
第 57 図 26号住居跡出土遺物(45)  
第 58 図 26号住居跡出土遺物(46)  
第 59 図 26号住居跡出土遺物(47)  
第 60 図 26号住居跡出土遺物(48)  
第 61 図 27号住居跡出土遺物(1)  
第 62 図 27号住居跡出土遺物(2)  
第 63 図 28号住居跡出土遺物(1)  
第 64 図 28号住居跡出土遺物(2)  
第 65 図 28号住居跡出土遺物(3)  
第 66 図 28号住居跡出土遺物(4)  
第 67 図 28号住居跡出土遺物(5)  
第 68 図 28号住居跡出土遺物(6)  
第 69 図 28号住居跡出土遺物(7)  
第 70 図 35号住居跡出土遺物(1)  
第 71 図 35号住居跡出土遺物(2)  
第 72 図 35号住居跡出土遺物(3)  
第 73 図 40号住居跡出土遺物  
第 74 図 59・60号住居跡平面図  
第 75 図 59号住居跡出土遺物  
第 76 図 61号住居跡平面図  
第 77 図 61号住居跡出土遺物  
第 78 図 35号土坑平面図  
第 79 図 770号土坑平面図  
第 80 図 745・774号土坑平面図  
第 81 図 縄文時代土坑平面図(1)  
第 82 図 縄文時代土坑平面図(2)  
第 83 図 縄文時代土坑平面図(3)  
第 84 図 縄文時代土坑平面図(4)  
第 85 図 縄文時代土坑平面図(5)  
第 86 図 縄文時代土坑平面図(6)

- 第87圖 繩文時代土坑平面圖(7)
- 第88圖 繩文時代土坑平面圖(8)
- 第89圖 土坑出土遺物(1)
- 第90圖 土坑出土遺物(2)
- 第91圖 土坑出土遺物(3)
- 第92圖 土坑出土遺物(4)
- 第93圖 土坑出土遺物(5)
- 第94圖 土坑出土遺物(6)
- 第95圖 土坑出土遺物(7)
- 第96圖 土坑出土遺物(8)
- 第97圖 土坑出土遺物(9)
- 第98圖 土坑出土遺物(10)
- 第99圖 土坑出土遺物(11)
- 第100圖 土坑出土遺物(12)
- 第101圖 土坑出土遺物(13)
- 第102圖 土坑出土遺物(14)
- 第103圖 土坑出土遺物(15)
- 第104圖 土坑出土遺物(16)
- 第105圖 土坑出土遺物(17)
- 第106圖 土坑出土遺物(18)
- 第107圖 土坑出土遺物(19)
- 第108圖 土坑出土遺物(20)
- 第109圖 土坑出土遺物(21)
- 第110圖 土坑出土遺物(22)
- 第111圖 土坑出土遺物(23)
- 第112圖 土坑出土遺物(24)
- 第113圖 土坑出土遺物(25)
- 第114圖 土坑出土遺物(26)
- 第115圖 土坑出土遺物(27)
- 第116圖 遺構外出土土器(1)
- 第117圖 遺構外出土土器(2)
- 第118圖 遺構外出土土器(3)
- 第119圖 遺構外出土土器(4)
- 第120圖 遺構外出土土器(5)
- 第121圖 遺構外出土土器(6)
- 第122圖 遺構外出土土器(7)
- 第123圖 遺構外出土土器(8)
- 第124圖 遺構外出土土器(9)
- 第125圖 遺構外 A區出土土器(1)
- 第126圖 遺構外 A區出土土器(2)
- 第127圖 遺構外 A區出土土器(3)
- 第128圖 遺構外 B區出土土器(1)
- 第129圖 遺構外 B區出土土器(2)
- 第130圖 遺構外 C區出土土器(1)
- 第131圖 遺構外 C區出土土器(2)
- 第132圖 遺構外 C區出土土器(3)
- 第133圖 遺構外 C區出土土器(4)
- 第134圖 遺構外 C區出土土器(5)
- 第135圖 遺構外 C區出土土器(6)
- 第136圖 遺構外 C區出土土器(7)
- 第137圖 遺構外 C區出土土器(8)
- 第138圖 遺構外 C區出土土器(9)
- 第139圖 遺構外 C區出土土器(10)
- 第140圖 遺構外 C區出土土器(11)
- 第141圖 遺構外 C區出土土器(12)
- 第142圖 遺構外 C區出土土器(13)
- 第143圖 遺構外 C區出土土器(14)
- 第144圖 遺構外 C區出土土器(15)
- 第145圖 遺構外 C區出土土器(16)
- 第146圖 遺構外 C區出土土器(17)
- 第147圖 遺構外 C區出土土器(18)
- 第148圖 遺構外 C區出土土器(19)
- 第149圖 遺構外 C區出土土器(20)
- 第150圖 遺構外 C區出土土器(21)
- 第151圖 遺構外 C區出土土器(22)
- 第152圖 遺構外 C區出土土器(23)
- 第153圖 遺構外 C區出土土器(24)
- 第154圖 遺構外 C區出土土器(25)
- 第155圖 遺構外 C區出土土器(26)
- 第156圖 遺構外 C區出土土器(27)
- 第157圖 遺構外 C區出土土器(28)
- 第158圖 遺構外 C區出土土器(29)
- 第159圖 遺構外 C區出土土器(30)
- 第160圖 遺構外 C區出土土器(31)
- 第161圖 遺構外 C區出土土器(32)
- 第162圖 遺構外 C區出土土器(33)
- 第163圖 遺構外 C區出土土器(34)
- 第164圖 遺構外 C區出土土器(35)
- 第165圖 遺構外 C區出土土器(36)
- 第166圖 遺構外 C區出土土器(37)
- 第167圖 遺構外 C區出土土器(38)
- 第168圖 遺構外 C區出土土器(39)
- 第169圖 遺構外 C區出土土器(40)
- 第170圖 遺構外 C區出土土器(41)
- 第171圖 遺構外 C區出土土器(42)
- 第172圖 遺構外 C區出土土器(43)
- 第173圖 遺構外 C區出土土器(44)
- 第174圖 遺構外 C區出土土器(45)
- 第175圖 遺構外 C區出土土器(46)
- 第176圖 遺構外 C區出土土器(47)
- 第177圖 遺構外 C區出土土器(48)
- 第178圖 遺構外 C區出土土器(49)
- 第179圖 遺構外 C區出土土器(50)
- 第180圖 遺構外 C區出土土器(51)



第275図	遺構外	C区出土土器	(146)	第322図	遺構外出土石器	原石
第276図	遺構外	C区出土土器	(147)	第323図	遺構外出土石器	磨石 (1)
第277図	遺構外	C区出土土器	(148)	第324図	遺構外出土石器	磨石 (2)
第278図	遺構外	C区出土土器	(149)	第325図	遺構外出土石器	磨石 (3)
第279図	遺構外	C区出土土器	(150)	第326図	遺構外出土石器	磨石 (4)
第280図	遺構外	C区出土土器	(151)	第327図	遺構外出土石器	磨石 (5)
第281図	遺構外	C区出土土器	(152)	第328図	遺構外出土石器	磨石 (6)
第282図	遺構外	C区出土土器	(153)	第329図	遺構外出土石器	磨石 (7)
第283図	遺構外	C区出土土器	(154)	第330図	遺構外出土石器	凹石 (1)
第284図	遺構外	C区出土土器	(155)	第331図	遺構外出土石器	凹石 (2)
第285図	遺構外	C区出土土器	(156)	第332図	遺構外出土石器	凹石 (3)
第286図	遺構外	C区出土土器	(157)	第333図	遺構外出土石器	凹石 (4)
第287図	遺構外	C区出土土器	(158)	第334図	遺構外出土石器	凹石 (5)
第288図	遺構外	C区出土土器	(159)	第335図	遺構外出土石器	凹石 (6)
第289図	遺構外	C区出土土器	(160)	第336図	遺構外出土石器	凹石 (7)
第290図	遺構外	C区出土土器	(161)	第337図	遺構外出土石器	凹石 (8)
第291図	遺構外	C区出土土器	(162)	第338図	遺構外出土石器	凹石 (9)
第292図	遺構外	C区出土土器	(163)	第339図	遺構外出土石器	凹石 (10)
第293図	遺構外	C区出土土器	(164)	第340図	遺構外出土石器	凹石 (11)
第294図	遺構外	C区出土土器	(165)	第341図	遺構外出土石器	凹石 (12)
第295図	遺構外	C区出土土器	(166)	第342図	遺構外出土石器	凹石 (13)
第296図	遺構外	E区出土土器	(1)	第343図	遺構外出土石器	凹石 (14)
第297図	遺構外	E区出土土器	(2)	第344図	遺構外出土石器	凹石 (15)
第298図	遺構外出土石器	石鏃	(1)	第345図	遺構外出土石器	凹石 (16)
第299図	遺構外出土石器	石鏃	(2)	第346図	遺構外出土石器	凹石 (17)
第300図	遺構外出土石器	石鏃	(3)	第347図	遺構外出土石器	凹石 (18)
第301図	遺構外出土石器	石鏃・石鏃		第348図	遺構外出土石器	凹石 (19)
第302図	遺構外出土石器	石鏃		第349図	遺構外出土石器	凹石 (20)
第303図	遺構外出土石器	スクレイパー	(1)	第350図	遺構外出土石器	凹石 (21)
第304図	遺構外出土石器	スクレイパー	(2)	第351図	遺構外出土石器	凹石 (22)
第305図	遺構外出土石器	スクレイパー	(3)	第352図	遺構外出土石器	凹石 (23)
第306図	遺構外出土石器	スクレイパー	(4)	第353図	遺構外出土石器	凹石 (24)
第307図	遺構外出土石器	スクレイパー	(5)	第354図	遺構外出土石器	凹石 (25)
第308図	遺構外出土石器	スクレイパー	(6)	第355図	遺構外出土石器	凹石 (26)
第309図	遺構外出土石器	打製石斧	(1)	第356図	遺構外出土石器	凹石 (27)
第310図	遺構外出土石器	打製石斧	(2)	第357図	遺構外出土石器	凹石 (28)
第311図	遺構外出土石器	打製石斧	(3)	第358図	遺構外出土石器	凹石 (29)
第312図	遺構外出土石器	打製石斧	(4)	第359図	遺構外出土石器	凹石 (30)
第313図	遺構外出土石器	打製石斧	(5)	第360図	遺構外出土石器	凹石 (31)
第314図	遺構外出土石器	打製石斧	(6)	第361図	遺構外出土石器	凹石 (32)
第315図	遺構外出土石器	打製石斧	(7)	第362図	遺構外出土石器	凹石 (33)
第316図	遺構外出土石器	打製石斧	(8)	第363図	遺構外出土石器	凹石 (34)
第317図	遺構外出土石器	打製石斧	(9)	第364図	遺構外出土石器	凹石 (35)
第318図	遺構外出土石器	打製石斧	(10)	第365図	遺構外出土石器	凹石 (36)
第319図	遺構外出土石器	磨製石斧		第366図	遺構外出土石器	凹石 (37)
第320図	遺構外出土石器	石核	(1)	第367図	遺構外出土石器	凹石 (38)
第321図	遺構外出土石器	石核	(2)	第368図	遺構外出土石器	凹石 (39)

- 第369回 遺構外出土石器 凹石 (40)
- 第370回 遺構外出土石器 凹石 (41)
- 第371回 遺構外出土石器 凹石 (42)
- 第372回 遺構外出土石器 凹石 (43)
- 第373回 遺構外出土石器 凹石 (44)
- 第374回 遺構外出土石器 多孔石 (1)
- 第375回 遺構外出土石器 多孔石 (2)
- 第376回 遺構外出土石器 多孔石 (3)
- 第377回 遺構外出土石器 多孔石 (4)
- 第378回 遺構外出土石器 多孔石 (5)
- 第379回 遺構外出土石器 多孔石 (6)
- 第380回 遺構外出土石器 多孔石 (7)
- 第381回 遺構外出土石器 多孔石 (8)
- 第382回 遺構外出土石器 多孔石 (9)
- 第383回 遺構外出土石器 多孔石 (10)
- 第384回 遺構外出土石器 多孔石 (11)
- 第385回 遺構外出土石器 多孔石 (12)
- 第386回 遺構外出土石器 多孔石 (13)
- 第387回 遺構外出土石器 多孔石 (14)
- 第388回 遺構外出土石器 多孔石 (15)
- 第389回 遺構外出土石器 多孔石 (16)
- 第390回 遺構外出土石器 多孔石 (17)
- 第391回 遺構外出土石器 多孔石 (18)
- 第392回 遺構外出土石器 多孔石 (19)
- 第393回 遺構外出土石器 多孔石 (20)
- 第394回 遺構外出土石器 多孔石 (21)
- 第395回 遺構外出土石器 多孔石 (22)
- 第396回 遺構外出土石器 多孔石 (23)
- 第397回 遺構外出土石器 多孔石 (24)
- 第398回 遺構外出土石器 多孔石 (25)
- 第399回 遺構外出土石器 石皿 (1)
- 第400回 遺構外出土石器 石皿 (2)
- 第401回 遺構外出土石器 石皿 (3)
- 第402回 遺構外出土石器 石皿 (4)
- 第403回 遺構外出土石器 石皿 (5)
- 第404回 遺構外出土石器 石皿 (6)
- 第405回 遺構外出土石器 石皿 (7)
- 第406回 遺構外出土石器 石皿 (8)
- 第407回 遺構外出土石器 石皿 (9)
- 第408回 遺構外出土石器 石棒・磨石
- 第409回 遺構外出土遺物 ミニチュア土器・土製品
- 第410回 遺構外出土遺物 土偶・岩偶
- 第411回 遺構外出土遺物 耳飾り・玉・垂飾り
- 第412回 遺構外出土遺物 垂飾り
- 第413回 遺構外出土遺物 土製・石製円盤
- 第414回 遺構外出土遺物 石製品 (1)
- 第415回 遺構外出土遺物 石製品 (2)
- 第416回 遺構外出土遺物 石製品 (3)
- 第417回 遺構外出土遺物 石製品 (4)
- 第418回 遺構外出土遺物 石製品 (5)
- 第419回 遺構外出土遺物 石製品 (6)
- 第420回 遺構外出土遺物 石製品 (7)
- 第421回 51号住居跡平面図・出土遺物
- 第422回 65号住居跡平面図
- 第423回 65号住居跡出土遺物
- 第424回 67号住居跡平面図・出土遺物
- 第425回 1号土坑平面図
- 第426回 41号土坑平面図
- 第427回 159号土坑平面図
- 第428回 245号土坑平面図
- 第429回 495号土坑平面図
- 第430回 669号土坑平面図
- 第431回 670号土坑平面図
- 第432回 683号土坑平面図
- 第433回 688号土坑平面図
- 第434回 705・706号土坑平面図
- 第435回 弥生時代土坑平面図 (1)
- 第436回 弥生時代土坑平面図 (2)
- 第437回 弥生時代土坑平面図 (3)
- 第438回 弥生時代土坑平面図 (4)
- 第439回 弥生時代土坑平面図 (5)
- 第440回 弥生時代土坑平面図 (6)
- 第441回 弥生時代土坑平面図 (7)
- 第442回 弥生時代土坑平面図 (8)
- 第443回 土坑出土土器 (1)
- 第444回 土坑出土土器 (2)
- 第445回 土坑出土土器 (3)
- 第446回 土坑出土土器 (4)
- 第447回 土坑出土土器 (5)
- 第448回 土坑出土土器 (6)
- 第449回 土坑出土土器 (7)
- 第450回 土坑出土土器 (8)
- 第451回 土坑出土土器 (9)
- 第452回 土坑出土土器 (10)
- 第453回 土坑出土土器 (11)
- 第454回 土坑出土土器 (12)
- 第455回 土坑出土土器 (13)
- 第456回 土坑出土土器 (14)
- 第457回 土坑出土土器 (15)
- 第458回 土坑出土土器 (16)
- 第459回 土坑出土土器 (17)
- 第460回 土坑出土土器 (18)
- 第461回 土坑出土土器 (19)
- 第462回 土坑出土土器 (20)

第463图 土坑出土石器(1)  
第464图 土坑出土石器(2)  
第465图 土坑出土石器(3)  
第466图 H区弥生时代遗物分布图  
第467图 遺構外 A·B·C区出土土器(1)  
第468图 遺構外 A·B·C区出土土器(2)  
第469图 遺構外 A·B·C区出土土器(3)  
第470图 遺構外 A·B·C区出土土器(4)  
第471图 遺構外 E·F区出土土器(1)  
第472图 遺構外 E·F区出土土器(2)  
第473图 遺構外 H·H区B下出土土器(1)  
第474图 遺構外 H·H区B下出土土器(2)  
第475图 遺構外 H·H区B下出土土器(3)  
第476图 遺構外 H·H区B下出土土器(4)  
第477图 遺構外 H·H区B下出土土器(5)  
第478图 遺構外 H·H区B下出土土器(6)  
第479图 遺構外 H·H区B下出土土器(7)  
第480图 遺構外 J区出土土器  
第481图 遺構外表探出土土器(1)  
第482图 遺構外表探出土土器(2)  
第483图 遺構外表探出土土器(3)  
第484图 遺構外表探出土土器(4)  
第485图 遺構外表探出土土器(5)  
第486图 遺構外表探出土土器(6)  
第487图 遺構外表探出土土器(7)  
第488图 遺構外出土石器 打製石斧(1)  
第489图 遺構外出土石器 打製石斧(2)  
第490图 遺構外出土石器 打製石斧(3)  
第491图 遺構外出土石器 打製石斧(4)  
第492图 遺構外出土石器 打製石斧(5)  
第493图 遺構外出土石器 打製石斧(6)  
第494图 遺構外出土石器 打製石斧(7)  
第495图 遺構外出土石器 打製石斧(8)

《本文圖2》

第496图 1号住居跡平面图  
第497图 1号住居跡出土遺物(1)  
第498图 1号住居跡出土遺物(2)  
第499图 1号住居跡出土遺物(3)  
第500图 1号住居跡出土遺物(4)  
第501图 2号住居跡平面图  
第502图 2号住居跡出土遺物(1)  
第503图 2号住居跡出土遺物(2)  
第504图 2号住居跡出土遺物(3)  
第505图 3号住居跡平面图  
第506图 3号住居跡出土遺物(1)  
第507图 3号住居跡出土遺物(2)

第508图 4号住居跡平面图  
第509图 4号住居跡出土遺物(1)  
第510图 4号住居跡出土遺物(2)  
第511图 5号住居跡平面图·出土遺物  
第512图 9号住居跡平面图  
第513图 9号住居跡出土遺物(1)  
第514图 9号住居跡出土遺物(2)  
第515图 9号住居跡出土遺物(3)  
第516图 24号住居跡平面图  
第517图 24号住居跡出土遺物(1)  
第518图 24号住居跡出土遺物(2)  
第519图 24号住居跡出土遺物(3)  
第520图 24号住居跡出土遺物(4)  
第521图 29号住居跡平面图·出土遺物  
第522图 31号住居跡出土遺物  
第523图 31号住居跡平面图  
第524图 33号住居跡平面图  
第525图 33号住居跡出土遺物(1)  
第526图 33号住居跡出土遺物(2)  
第527图 47号住居跡平面图  
第528图 47号住居跡出土遺物  
第529图 49号住居跡平面图·出土遺物  
第530图 54号住居跡平面图  
第531图 54号住居跡遺物出土狀態  
第532图 54号住居跡出土遺物(1)  
第533图 54号住居跡出土遺物(2)  
第534图 54号住居跡出土遺物(3)  
第535图 54号住居跡出土遺物(4)  
第536图 54号住居跡出土遺物(5)  
第537图 54号住居跡出土遺物(6)  
第538图 54号住居跡出土遺物(7)  
第539图 58号住居跡平面图  
第540图 58号住居跡出土遺物(1)  
第541图 58号住居跡出土遺物(2)  
第542图 58号住居跡出土遺物(3)  
第543图 58号住居跡出土遺物(4)  
第544图 66号住居跡平面图·出土遺物  
第545图 69号住居跡平面图  
第546图 1号方形周溝墓平面图  
第547图 1号方形周溝墓出土遺物  
第548图 2号方形周溝墓平面图  
第549图 3号方形周溝墓平面图  
第550图 3号方形周溝墓出土遺物  
第551图 4号方形周溝墓平面图  
第552图 5号方形周溝墓平面图  
第553图 6号方形周溝墓平面图  
第554图 5·6·7号方形周溝墓出土遺物

- 第555図 7号方形周溝墓平面図  
 第556図 8号方形周溝墓平面図  
 第557図 8号方形周溝墓土層断面図  
 第558図 9号方形周溝墓  
 第559図 11号住居跡平面図  
 第560図 12号住居跡平面図  
 第561図 11号住居跡出土遺物  
 第562図 12号住居跡出土遺物(1)  
 第563図 12号住居跡出土遺物(2)  
 第564図 1号古墳平面図  
 第565図 1号古墳石室平面図  
 第566図 1号古墳石室断面図  
 第567図 1号古墳出土遺物(1)  
 第568図 1号古墳出土遺物(2)  
 第569図 1号古墳出土遺物(3)  
 第570図 1号古墳出土遺物(4)  
 第571図 2号古墳地形図  
 第572図 2号古墳平面図  
 第573図 2号古墳墳丘土層断面図  
 第574図 2号古墳石室平面図  
 第575図 2号古墳石室断面図  
 第576図 出土埴輪(1)家形  
 第577図 出土埴輪(2)家形  
 第578図 出土埴輪(3)家形  
 第579図 出土埴輪(4)家形・太刀形  
 第580図 出土埴輪(5)盾・柄・髷形  
 第581図 出土埴輪(6)髷形  
 第582図 出土埴輪(7)髷形  
 第583図 出土埴輪(8)人物  
 第584図 出土埴輪(9)馬形  
 第585図 出土埴輪(10)馬形  
 第586図 出土埴輪(11)朝顔  
 第587図 出土埴輪(12)円筒  
 第588図 出土埴輪(13)円筒  
 第589図 出土埴輪(14)円筒  
 第590図 出土埴輪(15)円筒  
 第591図 出土埴輪(16)円筒  
 第592図 出土埴輪(17)円筒  
 第593図 出土埴輪(18)円筒  
 第594図 出土埴輪(19)円筒  
 第595図 出土埴輪(20)円筒  
 第596図 出土埴輪(21)円筒  
 第597図 出土埴輪(22)円筒  
 第598図 出土埴輪(23)円筒  
 第599図 城古墳の石室と出土遺物  
 第600図 3号古墳平面図  
 第601図 8号住居跡平面図  
 第602図 8号住居跡出土遺物  
 第603図 10号住居跡平面図  
 第604図 10号住居跡出土遺物  
 第605図 14号住居跡平面図  
 第606図 14号住居跡出土遺物(1)  
 第607図 14号住居跡出土遺物(2)  
 第608図 14号住居跡出土遺物(3)  
 第609図 14号住居跡出土遺物(4)  
 第610図 16号住居跡平面図  
 第611図 17号住居跡平面図  
 第612図 17号住居跡出土遺物(1)  
 第613図 17号住居跡出土遺物(2)  
 第614図 18号住居跡平面図  
 第615図 18号住居跡出土遺物  
 第616図 19号住居跡平面図  
 第617図 19号住居跡出土遺物  
 第618図 20号住居跡平面図  
 第619図 20号住居跡出土遺物  
 第620図 21号住居跡平面図  
 第621図 21号住居跡出土遺物  
 第622図 22号住居跡平面図・出土遺物  
 第623図 32号住居跡平面図  
 第624図 32号住居跡カマド  
 第625図 32号住居跡出土遺物(1)  
 第626図 32号住居跡出土遺物(2)  
 第627図 32号住居跡出土遺物(3)  
 第628図 34号住居跡平面図  
 第629図 34号住居跡出土遺物(1)  
 第630図 34号住居跡出土遺物(2)  
 第631図 34号住居跡出土遺物(3)  
 第632図 36号住居跡平面図  
 第633図 36号住居跡カマド  
 第634図 36号住居跡出土遺物(1)  
 第635図 36号住居跡出土遺物(2)  
 第636図 36号住居跡出土遺物(3)  
 第637図 37号住居跡平面図  
 第638図 37号住居跡カマド・出土遺物  
 第639図 37号住居跡出土遺物  
 第640図 38・39・45号住居跡平面図  
 第641図 38・39・45号住居跡カマド  
 第642図 38・39・45号住居跡掘り方  
 第643図 38号住居跡出土遺物  
 第644図 42号住居跡平面図  
 第645図 42号住居跡出土遺物  
 第646図 43号住居跡平面図  
 第647図 43号住居跡出土遺物  
 第648図 44号住居跡平面図

- 第649図 44号住居跡出土遺物  
 第650図 48号住居跡平面図・出土遺物  
 第651図 50号住居跡平面図・出土遺物  
 第652図 52号住居跡平面図  
 第653図 52号住居跡出土遺物  
 第654図 53号住居跡平面図・出土遺物  
 第655図 55号住居跡平面図・出土遺物  
 第656図 55号住居跡出土遺物  
 第657図 56号住居跡平面図  
 第658図 56号住居跡出土遺物  
 第659図 57号住居跡平面図  
 第660図 57号住居跡出土遺物  
 第661図 62号住居跡平面図  
 第662図 63号住居跡平面図  
 第663図 63号住居跡出土遺物  
 第664図 64号住居跡平面図  
 第665図 68号住居跡平面図  
 第666図 68号住居跡カマド・住居出土遺物  
 第667図 90号土坑  
 第668図 平安時代土坑平面図  
 第669図 土坑出土遺物  
 第670図 遺構外出土遺物(1)  
 第671図 遺構外出土遺物(2)  
 第672図 遺構外出土遺物(3)  
 第673図 遺構外出土遺物(4)  
 第674図 遺構外出土遺物(5)  
 第675図 F区畠状遺構図  
 第676図 各郭の呼称図  
 第677図 1号堀平面図  
 第678図 1号堀土層断面図  
 第679図 1号堀断面図(1)  
 第680図 1号堀断面図(2)  
 第681図 2号堀(東側)平面図  
 第682図 2号堀(東側)土層断面図  
 第683図 2号堀(西側)平面図  
 第684図 2号堀(西側)断面図  
 第685図 3・5号堀平面図  
 第686図 3・5号堀土層断面図  
 第687図 4号堀平面・土層断面図  
 第688図 6号堀(西側)平面図  
 第689図 6号堀(北側)平面図  
 第690図 6号堀(西側南部)平面図  
 第691図 6号堀断面図  
 第692図 6号堀(西側北部)平面図  
 第693図 7号堀平面図  
 第694図 7号堀断面図  
 第695図 橋脚遺構平面図  
 第696図 橋脚遺構出土木製品(礎板)  
 第697図 土橋(1号堀)  
 第698図 土居下遺物出土状態平面図  
 第699図 掘立建物遺構配置図(1)  
 第700図 掘立建物遺構配置図(2)  
 第701図 掘立建物遺構配置図(3)  
 第702図 掘立建物遺構配置図(4)  
 第703図 掘立建物遺構配置図(5)  
 第704図 掘立建物遺構配置図(6)  
 第705図 掘立建物遺構柱間計測図(1)  
 第706図 掘立建物遺構柱間計測図(2)  
 第707図 掘立建物遺構柱間計測図(3)  
 第708図 掘立建物遺構柱間計測図(4)  
 第709図 掘立建物遺構柱間計測図(5)  
 第710図 掘立建物遺構柱間計測図(6)  
 第711図 1号掘立建物遺構平面図  
 第712図 2号掘立建物遺構平面図  
 第713図 3号掘立建物遺構平面図  
 第714図 4号掘立建物遺構平面図  
 第715図 5号掘立建物遺構平面図  
 第716図 7号掘立建物遺構平面図  
 第717図 8号掘立建物遺構平面図  
 第718図 10号掘立建物遺構平面図  
 第719図 9号掘立建物遺構平面図  
 第720図 11号掘立建物遺構平面図  
 第721図 11号掘立建物遺構断面図  
 第722図 12号掘立建物遺構平面図  
 第723図 13号掘立建物遺構平面図  
 第724図 14号掘立建物遺構平面図  
 第725図 15号掘立建物遺構平面図  
 第726図 16号掘立建物遺構平面図  
 第727図 17号掘立建物遺構平面図  
 第728図 19号掘立建物遺構平面図  
 第729図 20号掘立建物遺構平面図  
 第730図 21号掘立建物遺構平面図  
 第731図 22・23号掘立建物遺構平面図  
 第732図 24号掘立建物遺構平面図  
 第733図 25号掘立建物遺構平面図  
 第734図 26号掘立建物遺構平面図  
 第735図 29号掘立建物遺構平面図  
 第736図 27号掘立建物遺構平面図  
 第737図 28号掘立建物遺構平面図  
 第738図 30号掘立建物遺構平面図  
 第739図 30号掘立建物遺構断面図  
 第740図 31号掘立建物遺構平面図  
 第741図 32号掘立建物遺構平面図  
 第742図 33号掘立建物遺構平面図



- 第743図 34号掘立建物遺構平面図  
 第744図 35号掘立建物遺構平面図  
 第745図 36号掘立建物遺構平面図  
 第746図 37号掘立建物遺構平面図  
 第747図 38号掘立建物遺構平面図  
 第748図 39号掘立建物遺構平面図  
 第749図 40号掘立建物遺構平面図  
 第750図 41号掘立建物遺構平面図  
 第751図 42号掘立建物遺構平面図  
 第752図 43号掘立建物遺構平面図  
 第753図 44号掘立建物遺構平面図  
 第754図 48号掘立建物遺構平面図  
 第755図 46号掘立建物遺構平面図  
 第756図 49号掘立建物遺構平面図  
 第757図 50号掘立建物遺構平面図  
 第758図 51号掘立建物遺構平面図  
 第759図 52号掘立建物遺構平面図  
 第760図 53号掘立建物遺構平面図  
 第761図 54号掘立建物遺構平面図  
 第762図 55号掘立建物遺構平面図  
 第763図 56号掘立建物遺構平面図  
 第764図 57号掘立建物遺構平面図  
 第765図 58号掘立建物遺構平面図  
 第766図 59号掘立建物遺構平面図  
 第767図 60号掘立建物遺構平面図  
 第768図 61号掘立建物遺構平面図  
 第769図 62号掘立建物遺構平面図  
 第770図 1・2号櫓(柱列)遺構平面図(1)  
 第771図 3・4・5号櫓(柱列)遺構平面図(2)  
 第772図 6・7号櫓(柱列)遺構平面図(3)  
 第773図 8・9・10号櫓(柱列)遺構平面図(4)  
 第774図 B区1・2・3号櫓(柱列)遺構平面図(5)  
 第775図 11号櫓(柱列)遺構平面図(6)  
 第776図 2・4号井戸遺構平面図  
 第777図 3号井戸遺構平面図  
 第778図 3号井戸遺構断面図  
 第779図 5号井戸遺構平面図  
 第780図 1号竪穴遺構平面図  
 第781図 2・3号竪穴遺構平面図  
 第782図 4号竪穴遺構平面図  
 第783図 5号竪穴遺構平面図  
 第784図 181号土坑平面図(中世火葬墓)  
 第785図 225号土坑平面図  
 第786図 235・281号土坑平面図  
 第787図 458号土坑平面図  
 第788図 459号土坑平面図  
 第789図 459・460号土坑平面図  
 第790図 中世土坑平面図(1)  
 第791図 中世土坑平面図(2)  
 第792図 中世土坑平面図(3)  
 第793図 中世土坑平面図(4)  
 第794図 中世土坑平面図(5)  
 第795図 中世土坑平面図(6)  
 第796図 中世土坑平面図(7)  
 第797図 中世土坑平面図(8)  
 第798図 中世土坑平面図(9)  
 第799図 中世出土遺物 内耳鍋(1)  
 第800図 中世出土遺物 内耳鍋(2)  
 第801図 中世出土遺物 内耳鍋(3)  
 第802図 中世出土遺物 内耳鍋(4)  
 第803図 中世出土遺物 内耳鍋(5)  
 第804図 中世出土遺物 内耳鍋(6)  
 第805図 中世出土遺物 内耳鍋(7)  
 第806図 中世出土遺物 内耳鍋(8)  
 第807図 中世出土遺物 内耳鍋(9)  
 第808図 中世出土遺物 内耳鍋(10)  
 第809図 中世出土遺物 内耳鍋(11)  
 第810図 中世出土遺物 摺鉢(1)  
 第811図 中世出土遺物 摺鉢(2)  
 第812図 中世出土遺物 摺鉢(3)  
 第813図 中世出土遺物 摺鉢(4)  
 第814図 中世出土遺物 カワラケ(1)  
 第815図 中世出土遺物 カワラケ(2)・香炉・火鉢  
 第816図 中世出土遺物 磁器  
 第817図 古銭  
 第818図 鉄製品(1)  
 第819図 鉄製品(2)  
 第820図 石白(1)  
 第821図 石白(2)  
 第822図 石白(3)  
 第823図 石白(4)  
 第824図 石白(5)  
 第825図 凹石  
 第826図 板碑(1)  
 第827図 板碑(2)  
 第828図 板碑(3)  
 第829図 板碑(4)  
 第830図 板碑(5)  
 第831図 板碑(6)  
 第832図 板碑(7)  
 第833図 板碑(8)  
 第834図 板碑(9)  
 第835図 板碑(10)  
 第836図 板碑(11)

- 第837図 板碑 (12)
- 第838図 五輪塔 (1)
- 第839図 五輪塔 (2)
- 第840図 五輪塔 (3)
- 第841図 五輪塔 (4)
- 第842図 第5地点平面図と本調査地との位置関係
- 第843図 城郭縄張り図
- 第844図 城郭推定縄張り図
- 第845図 近世土坑平面図
- 第846図 時期不明土坑平面図 (1)
- 第847図 時期不明土坑平面図 (2)
- 第848図 時期不明土坑平面図 (3)
- 第849図 時期不明土坑平面図 (4)
- 第850図 時期不明土坑平面図 (5)
- 第851図 時期不明土坑平面図 (6)
- 第852図 時期不明土坑平面図 (7)
- 第853図 時期不明土坑平面図 (8)
- 第854図 時期不明土坑平面図 (9)
- 第855図 時期不明土坑平面図 (10)
- 第856図 時期不明土坑平面図 (11)
- 第857図 時期不明土坑平面図 (12)
- 第858図 時期不明土坑平面図 (13)
- 第859図 時期不明土坑平面図 (14)
- 第860図 時期不明土坑平面図 (15)
- 第861図 時期不明土坑平面図 (16)
- 第862図 時期不明土坑平面図 (17)
- 第863図 時期不明土坑平面図 (18)
- 第864図 時期不明土坑平面図 (19)
- 第865図 時期不明土坑平面図 (20)
- 第866図 時期不明土坑平面図 (21)
- 第867図 縄文時代 埋壘
- 第868図 主な施文法と出土状況
- 第869図 北関東における有尾式土器変遷図
- 第870図 大形菱形文系土器群段階変遷図
- 第871図 諸磯b式・下島式・諸磯c式土器
- 第872図 下島土器
- 第873図 諸磯c式・齧歯状貼付文土器
- 第874図 喺々峯式・十三菩提式・異系統の土器
- 第875図 下島式・諸磯式土器の系譜
- 第876図 主な掘立柱建物の構造 (1)
- 第877図 主な掘立柱建物の構造 (2)
- 第878図 27号掘立柱建物復元図
- 第879図 11号掘立柱建物復元図
- 第880図 28号掘立柱建物復元図
- 第881図 12号掘立柱建物復元図

## 表 目 次

### 〔本文編1〕

表1	周辺の主要遺跡
表2	石器計測表
表3	7号住居跡出土石器計測表
表4	25号住居跡出土石器計測表
表5	26号住居跡出土石製品計測表
表6	26号住居跡出土石器計測表
表7	27号住居跡出土石器計測表
表8	28号住居跡出土石器計測表
表9	35号住居跡出土石器計測表
表10	40号住居跡出土石器計測表
表11	縄文時代土坑一覽表
表12	25号土坑出土石器計測表
表13	35号土坑出土石器計測表
表14	212号土坑出土石器計測表
表15	268号土坑出土石器計測表
表16	282号土坑出土石器計測表
表17	288号土坑出土石器計測表
表18	289号土坑出土石器計測表
表19	290号土坑出土石器計測表
表20	304号土坑出土石器計測表
表21	306号土坑出土石器計測表
表22	308号土坑出土石器計測表
表23	328号土坑出土石器計測表
表24	340号土坑出土石器計測表
表25	346号土坑出土石器計測表
表26	351号土坑出土石器計測表
表27	408号土坑出土石器計測表
表28	676号土坑出土石器計測表
表29	745号土坑出土石器計測表
表30	761号土坑出土石器計測表
表31	763号土坑出土石器計測表
表32	767号土坑出土石器計測表
表33	770号土坑出土石器計測表
表34	774号土坑出土石器計測表
表35	遺構外出土石鏃計測表
表36	遺構外出土石鏃計測表
表37	遺構外出土石鏃計測表
表38	遺構外出土スクレイバー計測表
表39	遺構外出土打製石斧計測表
表40	遺構外出土磨製石斧計測表
表41	遺構外出土石核計測表
表42	遺構外出土磨石計測表
表43	遺構外出土凹石計測表

表44	遺構外出土多孔石計測表
表45	遺構外出土石皿計測表
表46	遺構外出土石棒計測表
表47	遺構外出土ミニチュア土器計測表
表48	遺構外出土土・岩偶計測表
表49	遺構外出土耳飾り・玉・垂飾り計測表
表50	遺構外出土土・石製円盤計測表
表51	遺構外出土石製品Ⅰ類計測表
表52	遺構外出土石製品Ⅱ類計測表
表53	遺構外出土石製品Ⅲ類計測表
表54	65号住居跡出土石器計測表
表55	弥生時代土坑一覽表
表56	21号土坑出土石器計測表
表57	245号土坑出土石器計測表
表58	492号土坑出土石器計測表
表59	513号土坑出土石器計測表
表60	568号土坑出土石器計測表
表61	569号土坑出土石器計測表
表62	670号土坑出土石器計測表
表63	671号土坑出土石器計測表
表64	680号土坑出土石器計測表
表65	683号土坑出土石器計測表
表66	688号土坑出土石器計測表
表67	721号土坑出土石器計測表
表68	722号土坑出土石器計測表
表69	749号土坑出土石器計測表
表70	遺構外出土打製石斧計測表

### 〔本文編2〕

表71	1号住居跡出土石器計測表
表72	2号住居跡出土石器計測表
表73	4号住居跡出土石器計測表
表74	9号住居跡出土石器計測表
表75	24号住居跡出土石器計測表
表76	31号住居跡出土石器計測表
表77	33号住居跡出土石器計測表
表78	47号住居跡出土石器計測表
表79	54号住居跡出土石器計測表
表80	58号住居跡出土石器計測表
表81	66号住居跡出土石器計測表
表82	1号方形周溝墓出土土器観察表
表83	3号方形周溝墓出土土器観察表
表84	5・6・7号方形周溝墓出土土器観察表
表85	11号住居跡出土土器観察表

表86	12号住居跡出土土器觀察表
表87	1号古墳出土遺物觀察表
表88	遺構外出土埴輪觀察表
表89	8号住居跡出土土器觀察表
表90	10号住居跡出土土器觀察表
表91	14号住居跡出土土器觀察表
表92	17号住居跡出土土器觀察表
表93	18号住居跡出土土器觀察表
表94	19号住居跡出土土器觀察表
表95	20号住居跡出土土器觀察表
表96	21号住居跡出土土器觀察表
表97	22号住居跡出土土器觀察表
表98	32号住居跡出土土器觀察表
表99	34号住居跡出土土器觀察表
表100	36号住居跡出土土器觀察表
表101	37号住居跡出土土器觀察表
表102	38号住居跡出土土器觀察表
表103	42号住居跡出土土器觀察表
表104	43号住居跡出土土器觀察表
表105	44号住居跡出土土器觀察表
表106	48号住居跡出土土器觀察表
表107	50号住居跡出土土器觀察表
表108	52号住居跡出土土器觀察表
表109	53号住居跡出土土器觀察表
表110	55号住居跡出土土器觀察表
表111	56号住居跡出土土器觀察表
表112	57号住居跡出土土器觀察表
表113	63号住居跡出土土器觀察表
表114	68号住居跡出土土器觀察表
表115	平安時代土坑一覽表
表116	89・90号土坑出土土器觀察表
表117	遺構外出土土器觀察表
表118	中世土坑一覽表
表119	中世遺物觀察表
表120	古錢觀察表
表121	鉄製器觀察表
表122	石臼觀察表
表123	凹石計測表
表124	板碑觀察表
表125	五輪塔觀察表
表126	近世土坑一覽表
表127	時期不明土坑一覽表

# 抄 録

## 1. 遺跡の概略

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字神保に位置する。遺跡の発掘調査は、昭和62年10月1日から開始され、平成元年3月31日を以て終了した。遺跡は、調査前より中世城郭の「植松城」、神保古墳群の支群となる古墳群、弥生時代の遺物散布地として周知の複合遺跡であり、調査では縄文時代から中世に至る各時代の遺構が検出された。縄文時代の遺構には、竪穴住居跡や多くの土坑があり、包含層中よりは前期から中期の多量の土器・石器が出土した。特に前期中葉から中期初頭にかかる土器は、従来の群馬県内での不明な時期を充足させる良好な資料であり、併せて周辺地域からの土器の混在には、注目すべき点がある。弥生時代では、中期の土坑群が主体をなし、土坑内からは多くの土器が出土している。「岩櫃式土器」に関する土器群であり、今後の土器研究に重要な資料として位置づけられるものと考えられる。また本遺跡は、古墳時代初頭の集落でもあり、出土した土器群は弥生時代終末期を含めた在地的な様相を知る上で、良好な資料である。さらに、中世城郭「植松城」については、その主要部分が調査対象となったため、ほぼその全様が解明されるに至った。特に掘立建物のあり方等から、居館城としての性格が強く、この地の有力郷族とされる「神保」氏との関係が問われる。

## 2. 遺構数量

旧石器時代	槍先形尖頭器	3点
縄文時代	竪穴住居跡	12軒、土坑 81基、埋設土器 5基、包含層（出土遺物多量）
弥生時代	竪穴住居跡	2軒、土坑 77基、包含層（出土遺物多量）
古墳時代初頭	竪穴住居跡	16軒、方形周溝墓 9基
古墳時代後期	竪穴住居跡	2軒、古墳 3基
平安時代	竪穴住居跡	32軒、土坑 7基
中世	城郭	1、掘立建物 62棟、竪穴遺構 5基、土坑 142基、井戸 4基
時期不明	土坑	250基、溝

## 3. ま と め

調査地内からは、旧石器時代の遺物を始め、縄文時代早・前・中・晩期、弥生時代中期、古墳時代初頭、古墳時代中期の遺構・遺物から、各時代の集落が営まれたことが判明した。さらに、平安時代の集落の存在からは、当地に置かれた「神級郷」に関連し、中世においては在地郷族の居館としての城郭が築かれるに至った。



## 第1章 調査の概要

### 第1節 発掘調査に至る経緯

首都圏と上信越地方を結ぶ関越自動車道上越線（上信越自動車道）は、東京都練馬から群馬県藤岡市まで関越自動車道新潟線と併用し、藤岡 JC から藤岡市・吉井町・甘栗町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を經由して長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280kmに及ぶ高速自動車道である。平成5年3月に藤岡インターから佐久インター間の69kmが開通するところとなったが、この上越線建設事業にかかわり多くの遺跡が発掘調査された。その調査に至る経緯を要約すると次のとおりである。

#### 1) 発掘調査に至るまでの経過

関越自動車道上越線の路線決定は、昭和47年に群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画が策定され、同54年に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が行われている。昭和56年には藤岡市・吉井町・甘栗町・富岡市・下仁田町・松井田町（東部）の路線、同57年には松井田町・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。

群馬県教育委員会では、路線内の文化財に対応するため、昭和49年度に県企画部幹線交通対策課に対して、路線文化財保護法の遵守、指定文化財をさける等、文化財に関係する事項について協議を行った。昭和55年、群馬県教育委員会（文化財保護課）は路線及びその周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を実施した。その結果は同年3月藤岡市～松井田町間、同年11月に松井田町～下仁田町間の包蔵地としてまとめ、群馬県（企画部交通対策課）から「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として報告した。

昭和59年、建設事業の具体化に伴い、日本道路公団から埋蔵文化財の取り扱いについての依頼を受けた県教委文化財保護課は路線内の詳細な分布調査を行った。昭和60年、県教委文化財保護課は分布調査の結果に基づき、包蔵地を濃い分布地、薄い分布地、試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査想定面積を約100万㎡、55遺跡とする回答を日本道路公団に行った。また、調査の基本方針を次のように策定した。

- ①発掘調査は昭和61～66年の6年間とする（後に平成2年までの5年間に変更）。
- ②発掘調査の中核機関となる財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が藤岡市～富岡市の約76万㎡を担当し、他の22万㎡は関係市町村で調査会を組織し対応する。
- ③埋文事業団は発掘調査の円滑化を図るため上越線調査事務所を開設し、整理事業も含めて行うものとする。なお、調査の実施にあたり、日本道路公団と県教委は年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受けて埋文事業団、関係市町村の遺跡調査会に対して再委託契約を締結するものとした。

#### 2) 神保植松遺跡の発掘調査

県教委の再委託を受けた群馬県埋蔵文化財調査事業団は、昭和61年4月、多野郡吉井町南陽台に「上越線調査事務所」を開所した。発掘調査の体制は、初年度には4班15人体制としたが、その後、調査体制の拡充・整備につとめ、最終年度にあたる平成2年には12班45人体制に増員している。

路線内の文化財包蔵地にあたる多野郡吉井町神保に所在する植松遺跡（神保植松遺跡）は、中世居館跡の植松城、神保古墳群、弥生時代の遺物散布地として周知された複合遺跡である。本遺跡の発掘調査は、大沢川等の橋梁工事にかかわる道路公団の要請にかかわり、当初の調査計画を変更して、昭和62年10月から平成元年3月末の1年5ヶ月にわたり実施するところとなった。

## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 調査の方法

本遺跡の調査範囲は、大沢川の西側台地上の全長約400mが対象となっており、調査区内は高低差に富み、さらに取り付け道路等により複雑な形を呈している。

調査は、調査区の東側に位置する中世城郭「神保城」(植松城)の存在が予め知られていたことから、この城郭の調査から開始された。グリッドの設定にあたっては、城郭調査当初は路線に平行するように任意に10m四方の方眼を城郭のみに設定していたが、途中の段階で国家座標に合わせた設定に変更した。この国家座標を基としたグリッドの設定は、基点を調査区の南東(国家座標、 $x=26700.00$ 、 $y=76600.00$ )に取り、調査範囲全体を覆うように4mの方眼を組むこととした。グリッドの呼称については、基点を0-0とし、 $x$ 軸方向に北へ0、1、2、3・・・、 $y$ 軸方向に西へ0、1、2、3・・・と設定し、その南東の交点をもってグリッド名とした。なお、その呼称は $x$ 軸- $y$ 軸とした。

また、グリッドの設定とは別に、調査の進展の上から調査範囲全体を地形等を考慮し、小単位の調査区(A~K)に分割し調査区の呼称を行った。

遺構等の図面の作成にあたっては、20分の1を原則としたが、城郭にかかわる図面等に関しては40分の1で作成している。また、住居跡の竈、土坑の一部等については10分の1とした。最終的な遺構の全体図については、100分の1で図化を行った。なお、城郭の図化にあたっては、調査期間の短縮という面から委託による航空測量を行った。

### 2. 調査の経過

発掘調査は、道路公団側からの強い要望に応える形で、年度途中にして他遺跡の調査を切り上げ、昭和62年10月1日から本遺跡の調査に着手することとなった。道路公団側の大沢川等からむ橋梁工事のために優先して調査を行ってほしいということであったため、調査区の東側に位置する中世城郭から調査が開始された。

城郭の調査は、A区からD区とした部分が対象となり、表土除去の後の遺構確認の結果から堀および各郭の存在が明らかとなった。この確認調査により、城郭の約2分の1、主郭の約3分の2が調査対象となることになった。内堀の調査が先行され、調査が開始された。内・外堀の調査の後、外郭そして内郭の調査へと進み、区画された内郭内には複数に重複した掘立建物跡が検出されたとともに、内土塁、柵、木戸、土橋、井戸、暗渠、土坑等の城郭に伴う遺構・遺物が数多く検出された。

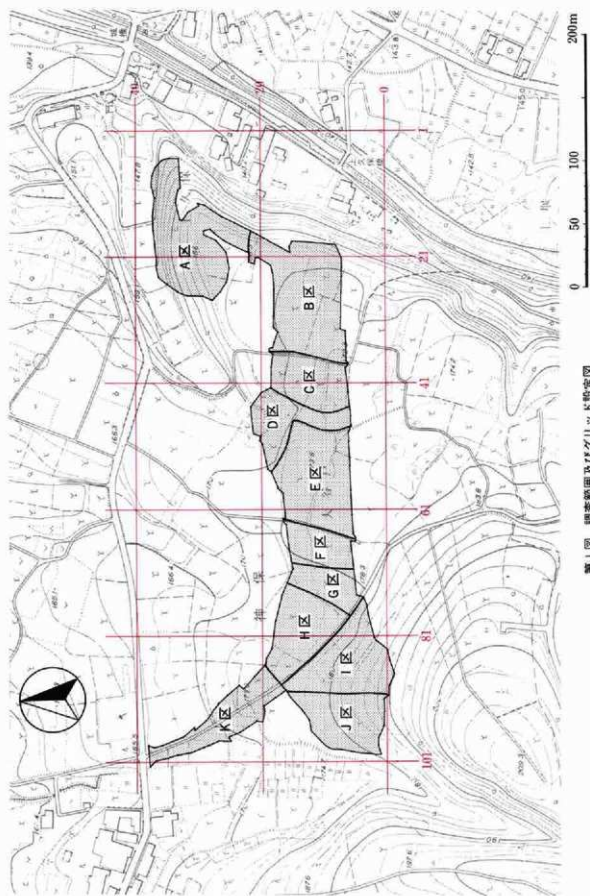
このA区からD区の城郭調査の終了後は、奈良・平安時代、古墳及び古墳時代、弥生時代、縄文時代への調査へと移り、多くの遺構・遺物を検出した。特にC区とした部分では、城郭築城に伴う盛り土が成されていたため、それ以前の時代の遺構・遺物の残存状況がきわめて良好な状態にあり、縄文時代の包含層に至っては、膨大な量の遺物が出土した。

なお、城郭調査の途中で、昭和63年度へと調査が継続された。

続いてE・F区の調査では、城郭外部にあたる部分でもあり、築城に伴う盛り土等の整地や、複数の掘立建物跡、多くの土坑・溝等が検出されたほか、古墳時代の方形周溝墓・古墳、弥生時代の土坑、縄文時代の包含層等の多くの遺構が検出された。

G・H区については、谷地部にあたることから調査の必要性が問われていたが、県教育委員会(文化財保





第1図 調査範囲及びグリッド設定図

## 第1章 調査の概要

課)による試掘調査の結果、調査対象地とされた。調査では、古代の畠跡の他、古墳時代から平安時代にかけての遺物包含層、ならびに弥生時代の遺物包含層が検出され、多くの遺物が出土した。

I・J区は調査範囲の西側の尾根にあたり、I区とした尾根の東斜面には、中世の土坑、平安時代の住居跡、さらには弥生時代中期の土坑墓群が多く検出された。J区とした尾根の西斜面では、中世の竪穴状遺構等が検出されている。

さらに調査範囲全体の中で、ローム層が堆積している台地上については、旧石器時代の遺構・遺物の確認のための試掘調査を行ったが、遺構の確認はできなかった。

昭和62年10月から平成元年3月末までの1年半の本遺跡の調査の結果、検出された主な遺構には縄文時代から平安時代にかけての住居跡69軒、縄文時代から中世までの土坑約770基、溝37条、古墳時代の方形周溝墓9基、古墳3基、中世城郭、城郭に伴うないしは中世の掘立建物62棟、柱穴多数、井戸5基、さらに縄文・弥生時代の遺物包含層等がある。出土した遺物は、縄文時代から中世までの土器・陶器類が約300箱、石器類が約350箱を数える。

調査期間中、道路公団側からの工事工程上の要望により、工事用道路用地の先行調査・引渡し等はあったが、平成元年3月末をもって発掘調査の作業を終了した。

## 第3節 調査日誌抄

昭和62年度

- 10月1日 本日より作業開始。調査区内の重機による桑の抜根。
- 10月9日 城郭(B区)の表土掘削を開始する。
- 10月12日 B区の遺構確認を開始する。
- 10月26日 栗崎八幡遺跡の調査を終了し、全員植松遺跡に合流。この日より本格的に調査を開始する。
- 11月1日 1号および2・3号堀(内堀)の調査を開始する。
- 11月19日 吉井町資料館友の会来訪。
- 12月3日 D区6号・7号堀(外堀)の調査を開始する。
- 12月12日 A区の遺構確認および6号堀(外堀)の調査を始める。
- 12月25日 年内の作業終了、調査区内の整理および安全対策を行う。
- 1月6日 年明けの作業開始。
- 1月14日 業者委託により国家座標にあわせたグリッドの設定、および杭打ちを行う。
- 1月18日 この日より担当の鬼形は他の遺跡の試掘調査へ出向、代わりに安坪遺跡より飯塚が担当となる。
- 1月20日 未買収地の件で、道路公団と打ち合せ。
- 1月25日 道路公団と地権者が来訪。
- 2月3日 県教委文化財保護課長視察。
- 2月8日 安坪遺跡より作業員の応援を受ける。
- 2月22日 奈良女子大学の村田修三先生来訪。
- 2月21日 この日より井出遺跡の調査を終えた三浦が本遺跡の担当として帰任、飯塚は安坪遺跡へ帰任する。
- 3月3日 中世城郭について、業者委託による航空測量を行う。
- 3月7日 工事用道路の件で、文化財保護課と協議を行う。

- 3月8日 文化財保護課により、G・H区の工事用道路範囲の試掘調査を開始する。
- 3月10日 A区の方形周溝墓・住居跡等の調査を開始する。
- 3月23日 昭和62年度の発掘作業終了日。調査区内の整理および安全対策を行う。
- 昭和63年度
- 4月12日 昨年度の継続で、発掘作業を開始する。
- 4月15日 事務局長視察。堀の安全対策について指示を受ける。
- 4月19日 道路公団、工事企業体との三者で、調査区内の農道復元について協議を行う。城郭に伴う堀の埋め戻しを始める。
- 5月11日 C区の平安時代以前の遺構確認を始める。その結果、多くの遺構の存在が予測される。
- 5月20日 道路公団、文化財保護課との三者で、調査工程についての協議を行う。この協議の中で、工事用道路範囲の先行調査、および早期引渡しが議題となる。
- 5月25日 この日より工事用道路の先行調査のため、G・H・I・J区の調査を開始する。
- 6月3日 工事用道路について三者協議を行う。
- 6月14日 H区の調査が進められている中、谷地部の斜面に弥生時代中期の遺物包含層の存在が確認される。
- 7月4日 この日から隣接する神保富士塚遺跡より、作業員の応援を受ける。
- 7月15日 峰岸純夫先生が来訪。
- 7月25日 工事用道路範囲を含めた第1期分の引渡しとなるF・G・H・I・J区の調査がほぼ終了し、E区の調査を開始する。
- 8月4日 E区の工事用道路範囲の調査を終え、同範囲の旧石器時代の試掘調査を開始する。
- 8月8日 第2期の引渡し部分であるE区の工事用道路範囲を引き渡す。これよりA・B・C区の調査を再開させ、工事用道路範囲を先行させる。
- 10月19日 B・C区の工事用道路範囲の全ての調査が終了する。この工事用道路範囲の調査終了により、B区の城郭の主郭部およびA・C区を主体に調査を全面展開させる。
- 11月4日 文化財保護課長視察。
- 11月10日 B区主郭部の掘立建物の調査を開始する。
- 11月30日 A区の旧石器時代の試掘調査を開始する。併せて、I・J区の本線部分の調査を開始する。
- 12月10日 B区の城郭主郭部の航空測量を行う。
- 12月26日 年内の作業終了日。調査区内の整理および安全対策を行う。
- 12月27日 八戸工業大学高島成侑先生から、主郭部内の掘立建物について指導を受ける。
- 1月6日 年明けの作業開始。隣接する多胡蛇黒遺跡より、作業員の応援を受ける。
- 1月9日 F区からK区の本線部分の調査を始める。
- 1月18日 I・J・K区について、気球による写真撮影を行う。
- 2月1日 H区において縄文時代前期の遺物包含層が確認され、この部分に調査を集中させる。
- 2月14日 F区からK区までの調査を終了。E区2号古墳の調査を始める。
- 3月1日 B区の旧石器の試掘調査を開始する。E区の方形周溝墓の調査に集中する。
- 3月10日 C区の縄文時代の遺物包含層の調査に集中するが、遺物の出土量が極めて多い。
- 3月15日 矢田遺跡から作業員の応援を受け、調査終了に向けC・E区の調査に集中する。
- 3月29日 C・E区の旧石器時代の試掘調査を終了し、この日をもって植松遺跡の発掘調査を終了する。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

神保植松遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字神保字植松他に所在し、北側約3kmを東流する鍋川の右岸上位段丘上にある。この段丘は下位丘陵への変換点にあたり、北流し鍋川にそそぐ東の大沢川、西の安坪川に挟まれ、小河川の侵食によって形成された起伏に富んだ地形が展開し、舌状台地が多くみられる。遺跡は、この台地の東側にあたり、大沢川の左岸台地上に位置する。吉井町の中心部から、南側へ約1.5kmほどの所にあたる。

遺跡地内にはいくつかの小谷地が見られ、遺跡の西側は南に位置する稲荷山から北へ延びる馬の背状の丘陵が発達しているため、起伏に富んだ地形となっている。対象的に、遺跡の東側に位置する中世城郭の周辺は、比較的平坦な場所となっている。調査範囲は、高速道路の路線内であるため東西に細長く伸び、前述したような南から北へ延びるいくつかの丘陵性の台地を横切る形となっている。こうした地形の差が、調査を難しくさせると共に、検出される遺構の時期や種類等にも違いが認められるようである。

この地域を流れる鍋川は、長野県との境にその源を発し、県西部をやや蛇行しながら西から東へ流れ、高崎市倉賀野付近で烏川と合流し、さらに利根川へと至る。この鍋川が作用して形成されたのが、下仁田町、富岡市、甘楽町、吉井町、藤岡市の各市町が所在する通称「甘楽の谷」である。本遺跡が所在する吉井町は、日本三古碑の一つで国指定史跡である「多胡碑」で知られ、古代史研究の上からも注目されている地域でもある。また、遺跡の東方約500mには、西暦711年（和銅4年）にこの地に置かれたと言われる「韓級郷」の名を残していると考えられている「辛科神社」が鎮座している。

吉井町の中にあつて、本遺跡の周辺は養蚕業などを中心とした典型的な農村地帯であったが、昨今の高速道路建設に伴い宅地造成やゴルフ場建設など、にわかに開発の波が押し寄せてきており、高速道路の開通後はさらに開発の勢いが増すものと予想される。

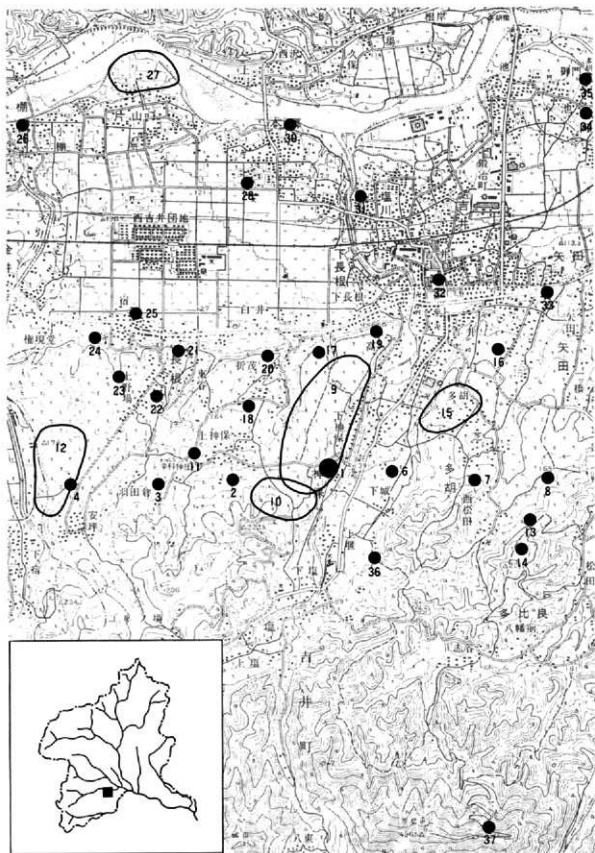
### 第2節 歴史的環境

本遺跡の地形的な概観は、前述した通りである。こうした地形を有するこの地域には、旧石器時代から現在に至るまでの数多くの遺跡が存在している。

#### 旧石器時代

これまで県西部地域での調査例は少なく、代表的な遺跡には藤岡市北山遺跡等の数遺跡を上げるとどまっていたが、今回の上越線の調査により数カ所の遺跡で旧石器の存在が確認された。A.T 降下以前の石器を出土させた遺跡には、甘楽町に所在する天引狐崎遺跡、天引向原遺跡、白倉下原遺跡、吉井町栗崎八幡遺跡の調査が相次ぎ、本遺跡の西側に隣接する神保富士塚遺跡では、比較的上層のAs-APに絡む石器群である。この他にも、矢田遺跡、多比良遺跡等においても、ローム層中からの石器が出土している。

また、吉井町誌（1974）には、本遺跡から表採された槍先形尖頭器が掲載され紹介されている。



第2図 遺跡位置及び周辺遺跡地図

## 第2章 遺跡の環境

表1 周辺の主要遺跡

No	遺跡名	遺跡の概要	備考
1	神保植松遺跡	戦国時代の城郭、江戸期の建物跡、奈良・平安時代の住居跡30軒、古墳時代の住居跡17軒、弥生時代の住居跡7軒、土坑約50基、再葬墓5基、縄文時代の住居跡13軒。	昭和62年 群埋文調査
2	神保富士塚遺跡	弥生時代中期の土坑、古墳時代から平安時代にかけての住居跡、土坑、溝等。	昭和62年 群埋文調査
3	長根羽田倉遺跡	古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡、土坑、溝、井戸などを検出。古墳時代後期の祭祀遺構と、これに伴う滑石製模造品類が出土。	昭和61・62年 群埋文調査
4	長根安坪遺跡	竪穴住居跡111軒。6世紀代の古墳、弥生時代の住居址、方形周溝墓、古墳時代の住居址。縄文時代の配石遺構、住居跡等。	昭和63・平元年 群埋文調査
5	神保下篠遺跡	竪穴住居7軒、方形周溝墓2基、古墳3基、AS-A下の水田、畠跡。	平成元年 群埋文調査
6	多胡蛇馬遺跡	旧石器時代の遺物、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落。	昭和63年 群埋文調査
7	矢田遺跡	古墳時代から平安時代にかけての集落。「八田郷」の線刻のある紡錘車出土。	昭和61年 群埋文調査
8	神保古墳群	南の谷あいから鶴川に注ぎ込む大沢川の左岸段丘上の線刻に70基以上が分布していた。	
9	稲高山遺跡	弥生時代中期の土器が多く散布している。本遺跡で同時期の土坑が検出された丘陵の断面断面。	
10	辛科神社・神保館	・上野神名帳（永仁6年）に記載、多胡郡の筆頭に上げられている。群馬県古墳墓址の研究・辛科神社の東北に接する牟那城で、東北から南西120m、西北から東南100mの規模を持つ、辛科神社境内にも堀を巡らす。植松城との関連が考えられる。	
11	安坪古墳群	後期の群集墳、上毛古墳総覧では44基を上げている。	
12	松田鹿寺	詳細は不明。	
13	山ノ神古墳群	後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基を上げている。	
14	多胡古墳群	大沢川をはさま神保古墳群と対峙する。約50基が確認されるが、かつては80基以上あったと思われる。	
15	川内遺跡	縄文時代の土坑、弥生時代の住居跡、方形周溝墓、古墳時代、奈良・平安時代の住居跡等。	昭和57年 吉井町教委調査
16	下高原鹿寺	9～10世紀時代の寺院址か。	
17	折茂東遺跡	弥生後期の住居・方形周溝墓。古墳時代、平安時代の住居。昭和61年吉井町教育委員会調査。	昭和61年 吉井町教委調査
18	高登	詳細は不明。	
19	折茂寺	詳細は不明。	
20	長根城跡	小瀬氏の東邸、長根氏の居城か。	
21	東脇場鹿寺	9～10世紀代に寺跡か。	
22	西脇場・長根宿遺跡	古墳時代前期の住居跡、平安時代の住居跡。昭和61年吉井町教育委員会調査。	昭和61年 吉井町教委調査
23	悪行寺裏古墳	径約40m、高さ約8mの円墳。6世紀代の構築か。	
24	長根館（城の内）	奥平信昌の二男で松平右京大夫家治の居館か。詳細は不明。	
25	小籠城	詳細は不明。	
26	片山古墳群	後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基が上げられている。内1基（片山1号墳）は平成3年8月に吉井町教育委員会より調査が行われ主体部に粘土郭を持つ前期古墳と判明。鏡、鉄鏃、滑石製模造品、櫛などが出土。	
27	道六神遺跡	一部にAS-B下水田、平安時代の住居。	昭和60年 吉井町教委調査
28	本郷古墳群	後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基を上げている。本郷城。	
29	塩川城	詳細は不明。菅沼の常の居城か。	
30	吉井陣屋・吉井城	吉井藩の陣屋。天正18年以降菅沼小八郎康助の領となり、松平式部大助信友をへて宝暦の頃から、明治初期まで存続する。	
31	矢田陣屋	詳細は不明。	
32	岡鹿寺	8世紀代前半の寺跡か。	

No	遺跡名	遺跡の概要	備考
33	多胡碑	和暦4年3月9日甲寅 織茂（おりも）、韓敏（からしな）、矢田（やた） 大家（おおやけ） 武美（むみ）、山等（やまな）の六郷を置いたことが記されている。日本三古碑の一つ。	国指定史跡
34	多胡下城（金沢城）	詳細は不明。	
35	一郷山城	新城の要害城。詳細は不明。	

### 縄文時代

この地域の縄文時代の遺跡としては、前・中期の遺跡が蒲川の兩岸の上位段丘上に散在していることが、これまでに確認されている。吉井町誌に記載されている遺跡数としては、117遺跡が上げられている。主な場所としては、本遺跡である植松地区、多比良字笠懸地区、中城地区（新堀城跡およびその周辺）、多胡字蟹沢地区、長根字安坪・宿西・椿森地区、岩崎字東吹上・西吹上地区、吉井字腰巻・三平田地区が上げられている。このうち本遺跡周辺は表探資料も多く、以前より周知されていた場所である。ちなみに同地域における上越線の調査では、本遺跡の西側に隣接する神保富士塚遺跡、長根羽田倉遺跡、長根安坪遺跡からも前・中期の遺物が出土している。

### 弥生時代

吉井町内での弥生時代中期の遺物が散布する場所として、本遺跡の南側に位置する稲荷山の東北斜面が知られ、同町誌にも紹介されている。この稲荷山の東北斜面には、本遺跡の調査範囲も含まれるようであり、同稲荷山から延びる丘陵上にある西側の神保富士塚遺跡においても同時期の土坑が多数検出されていることから、本遺跡を含めたこの辺り一帯が中期の大遺跡であることが予測される。また、大沢川を隔てた東側に位置する神保下條遺跡においても、中期の土坑群が検出されている。

さらに後期の遺跡としては、安坪遺跡等の数遺跡が町誌に記載されている。調査が行われた遺跡としては、入野遺跡、祝神遺跡、黒船遺跡群、折茂東遺跡、川内遺跡等が上げられ、住居跡や方形周溝墓等が検出されている。

### 古墳時代

上毛古墳総覧および吉井町誌によると、同町内には多くの古墳群が点在しており、同町で最も大きいと言われる大字神保に所在する神保古墳群、大沢川を挟んだ対岸の多胡古墳群、大字長根に所在する安坪古墳群、大字塩の塩古墳群等が本遺跡の周辺に存在する。このうち神保古墳群については、本調査の調査範囲が同古墳群を横切る形となり、本調査地内での古墳の存在が予測された。なお、神保古墳群の中には、一本杉古墳や城古墳が含まれ、過去の調査により鈴鯛、金環、勾玉、小玉、直刀等が出土している。近年の調査で注目される古墳としては、1991年に同町教委の調査による吉井町65号墳が上げられる。同古墳は粘土層を持つ古墳で、主体部からは鏡、剣、鏃、斧等の鉄製品、滑石製模造品などが出土している。

集落跡としては、本遺跡の西側にある神保富士塚遺跡、長根羽田倉遺跡、長根安坪遺跡、折茂東遺跡、大沢川を挟む対岸にある多胡蛇黒遺跡、矢田遺跡等があり、いずれの遺跡も6世紀後半を中心とした時期の住居跡群が調査されている。中には古墳時代初頭の方形周溝墓とともに、同時期の住居の調査が行われた遺跡もある。近年、吉井町教育委員会により、本遺跡の北側約100m程の場所（南高原遺跡）で発掘調査が行われ、方形周溝墓、古墳、住居跡等が検出されている。

### 奈良・平安時代

本遺跡を含む周辺の多くの遺跡で、この時期の住居跡等が検出されている。「多胡碑」にも見られるように、当時のこの辺り一帯には郡・郷が置かれていたようであり、矢田遺跡では集落内の住居から出土した刻線をもつ紡錘車から矢田郷ではないかと推測されている。また、本遺跡地周辺についても、古代における多胡郡韓飯郷の比定地とされている場所でもある。近年の南高原遺跡の調査でも、住居跡39軒、掘立柱建物遺構等が検出されている。

### 中・近世

この甘楽の谷と呼ばれる鍋川流域一帯には、群馬県の中世城館跡(1988)によれば約200カ所余の中世城郭・館跡が点在していることが知られている。これは西上州における地域豪族ないしは武士団が、活発に活動していたことを物語る。

13世紀前半の承久の変の頃には、「吾妻鏡」の中に吉井町に關係する多胡、小串、多比良、神保の各氏名がみられ、14世紀中ごろには神保、小串、瀬下、奥平、岩崎等の氏名が様々な文獻等にみられる。16世紀の戦国時代になると、平井城(藤岡市)には関東管領の山内上杉氏が在り、小田原の北条氏、甲斐の武田氏、越後の長尾氏と対峙していたが、その後武田信玄による小幡氏(甘楽郡国峰城主)を拠点とした西上州への進出を行うこととなる。武田信玄への起請文は数多く残されているが、その中に神保、小河原周氏連名のももあり、この地域の豪族(武士団)達が時流の中で、時の大勢力の中に組み込まれていった様子がうかがえよう。なお、小河原氏は本遺跡の西方約1.5kmにある長根城主であり、神保氏は本遺跡地に大きく関わる人物と考えられる。



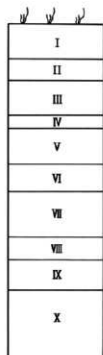
## 第3節 基本土層

本遺跡は、錦川右岸の神保丘陵と呼ばれる上位段丘面上にあり、基盤層は吉井層と呼ばれる泥岩層から成り、その上の上部に粘性土層、下部に砂質土層の丘陵堆積物層がある。その上に、火山噴出物であるいわゆるローム層が堆積し、さらに現代に至る暗褐色土等の表土層が覆っている。この暗褐色土中には、浅間山を給源とするAs-AやAs-Bの各軽石が混在する層がある。またローム層中には、同じ浅間山を給源とするAs-YP、As-SP、As-BPの混在層ないしは純層が確認されると共に、As-BPの下位にAs-MPも確認されている。A.Tについては、基本土層のⅨ層の上部に確認されており、この地域一帯の堆積状況は同様である。

基本土層は、ローム層の堆積が良好な丘陵部と、黒色土の堆積が厚い谷地部とに大別される。丘陵部での堆積状況は、以下のように分層される。谷地部では、黒色土や暗褐色土が1m以上も厚く堆積し、基本土層のⅡ層下面にはAs-B軽石が薄く堆積している。

なお、中世城郭部分については、もともと東急斜面で西側に大きく斜面が広がる台地であったものと思われ、築城のさいの整地により旧地形とはかなり異なっているようである。

- I 黒色土……耕作土、As-Aの軽石を含む。
- II 暗褐色土……As-B軽石を含み、締りがなく比較的サラサラしている。  
中世遺構の復土にもなる。
- III 暗褐色土……軽石等の混入物がなく、縄文時代から平安時代の包含層であり、遺構の復土でもある。
- IV 明褐色土……ロームを多く含む漸移層。
- V 暗黄褐色土……As-YPの黄色軽石を少量含む軟質なローム。
- VI 明黄褐色土……やや堅く締まったロームで、層中にAs-SPの黄色軽石を含む。
- VII 淡褐色土……堅く締まってはいるが、風化したAs-BPを多く含み、部分的には幾枚かの間層もみられる。
- VIII 茶褐色土……As-BPの最下位に位置するAs-MPの純層である。
- IX 暗褐色粘質土……いわゆる暗色帯に相当する層であり、堅く締まった粘質土で小礫を混入する。A.Tは、この層中の上部に確認できる。
- X 青灰色粘質土……きめの細かい粘土。城郭の一部では、この粘土層まで整地がおよんでいる。



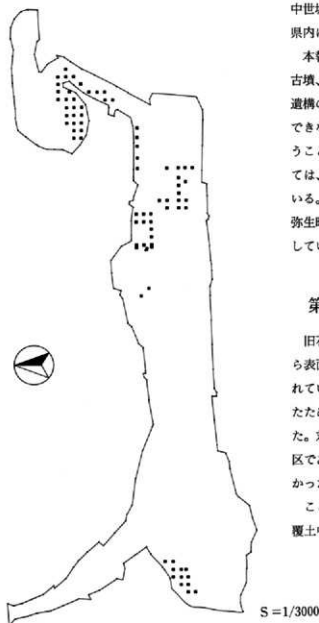
第3図 基本土層模式図

## 註

- As-A (浅間—A軽石) 浅間山を給源とし、天明三年(1783)に降下。  
 As-B (浅間—B軽石) 浅間山を給源とし、天仁元年(1108)に降下とされる。  
 As-YP(浅間—板鼻黄色軽石) 浅間山を給源とし、約13,000年前に降下とされる。  
 As-SP (浅間—白糸軽石) 浅間山を給源とし、約15,000年前に降下とされる。  
 As-BP(浅間—板鼻褐色軽石) 浅間山を給源とし、約17,000~20,000年前に降下したとされる軽石群で、最下位にAs-MP(浅間—室田軽石)がある。

## 第3章 検出された遺構と遺物

本遺跡において検出された遺構および遺物は、主に縄文時代から中世の多期多様にわたるものである。遺構としては、縄文時代から平安時代にかけての住居跡が69軒、縄文時代から弥生時代中期の土坑墓を含む中世までの土坑約770基、溝37条、古墳時代の方形周溝墓9基、古墳3基、中世城郭、城郭に伴うないしは中世の獨立建物62棟、竪穴遺構5棟、柱穴多数、井戸5基、さらに谷地部ないしは斜面部での縄文・弥生時代の遺物包含層等がある。出土した遺物は、縄文時代から中世までの土器・陶器類が約300箱、石器類が約350箱を数える。



第4図 旧石器試掘配置図

こうした遺構のうち特に注目されるものとしては、中世城郭および弥生時代中期の土坑墓群などがあり、県内においても調査例は少なく、貴重な資料と言える。

本報告書では、これらの遺構について縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世の各時代に分け、それぞれの遺構の記載を行っているが、土坑、溝等の時期の確定できなかったものについては、それぞれの項の中で扱うこととした。また、各遺構に付した遺構番号については、調査時の番号を用いているため順不同となっている。なお、本遺跡での遺構・遺物の多さから、縄文・弥生時代編と、古墳・平安・中世編とに文冊して報告している。

### 第1節 旧石器時代の遺物

旧石器時代の調査については、吉井町誌に本遺跡から表面採集された黒色頁岩製の槍先形尖頭器が掲載されていることから、その存在の可能性が指摘されていたため、ローム台地を対象として随時試掘調査を行った。対象となった調査区は、A・B・C・E・Jの各区であったが、結果としては石器の検出は確認されなかった。

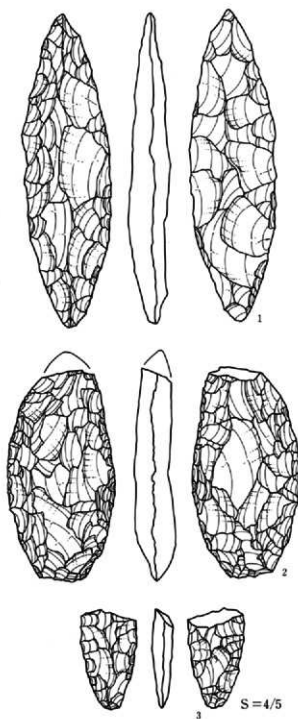
ここに掲載する石器は、いずれも表土中および遺構覆土中より出土したものである。

## 1. 出土遺物 (第5図)

1は表土中より出土したもので、黒色頁岩製の槍先形尖頭器である。全体にやや粗い両面調整を施し、やや細身となる木葉形を呈している。器体の厚みが比較的あり、裏面が平に近いことから、断面形が蒲鉾状に近い形状を呈している。周縁への細部調整も、あまり施されていない。また、裏面の一部には、素材面が残されていることから、素材には比較的大振りな横長剥片が用いられたものと考えられる。長さ10.1cm、幅2.8cmを測る。

2は中世城郭に伴う1号堀の覆土中より出土したもので、チャート製の槍先形尖頭器である。周縁調整の細かく施された両面調整で、基部は欠損による再加工のためか、やや円くなる形状を呈している。先端部は、欠損している。残存するのは、長さ6.9cm、幅3.9cmを測る。

3は26号住居跡の覆土中より出土したもので、チャート製の槍先形尖頭器である。あまり質の良い石材を使用し、全体にやや粗い感じの両面調整を施すもので、比較的細身となる小振りな木葉形を呈する。先端部側の上半が、節理面で欠損している。残存するのは、長さ3.2cm、幅1.9cmを測る。



第5図 遺構外出土石器

表2 石割計測表

No.	出土位置	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)
1	表 探	黒色頁岩	10.3	2.9	1.2	36.8
2	B 区	チャート	7.0	3.5	1.8	36.5
3	C 区	チャート	3.3	1.9	0.7	4.5

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡における縄文時代の遺構としては、住居跡がA区で1軒、C区で5軒検出され、土坑はA・B・C区に集中して81基が検出されている。なお、土坑については、縄文時代の所産であると認定できたもののみをこの項に掲載している。

これらの遺構が検出された場所は、もともと東側が急傾斜となり西側に広い緩斜面をもつ北側につき出た台地であったが、中世城郭の築城の際に整地され現地形を見せている。この整地により、旧地形が削平された部分では遺構が消滅ないしは残存状態が悪く、逆に盛り土された部分は良好な状態で検出されるといった状況であった。したがって検出された遺構は、削平のあまり及んでいない台地周縁部に点在して認められた。

遺構以外では、遺物包含層が良好な状態でC区に残されていた。また、A・H区の小谷地部からも、遺物が多く出土している。これらの遺物については、他時期の遺構から出土したものと合わせて、遺構外遺物として掲載している。

### 1. 住居跡

検出された住居跡については、先述したようにA・C区からの6軒である。このうちC区の26・27・28・35・41号住居の5軒については、ほぼ同じ位置に重複するように検出された。またこの周辺には、埋め塹や焼土遺構も検出されたが、掘り込みが不明であること等から、住居としては扱わずにその他の遺構とした。

#### 7号住居跡 (第6～8図 表3)

A区の台地の北側の縁辺にあり、26・27-23・24グリッドに位置する。平面形状は、隅丸となるやや不整な正方形を呈している。掘り込みは比較的浅く、確認された壁高は深いところでも10cm前後であり、城郭築城の際の整地のために残存状況はあまり良くない。床面は不明瞭で、住居に伴う柱穴も確認できなかった。また炉跡についても、確認できなかった。覆土はローム粒を含む汚れた暗褐色土で、覆土中に少量の遺物を出土させたのみである。

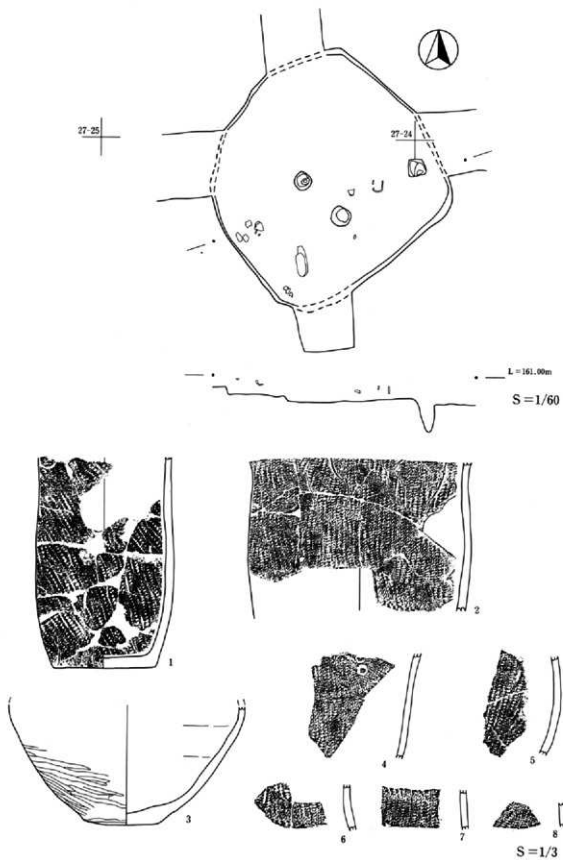
出土した遺物は、第6図の下段から第8図に示すごとくで、縄文時代前期を主体に若干の中期の土器、石器からなる。遺物については、次の通りである。

#### 土器

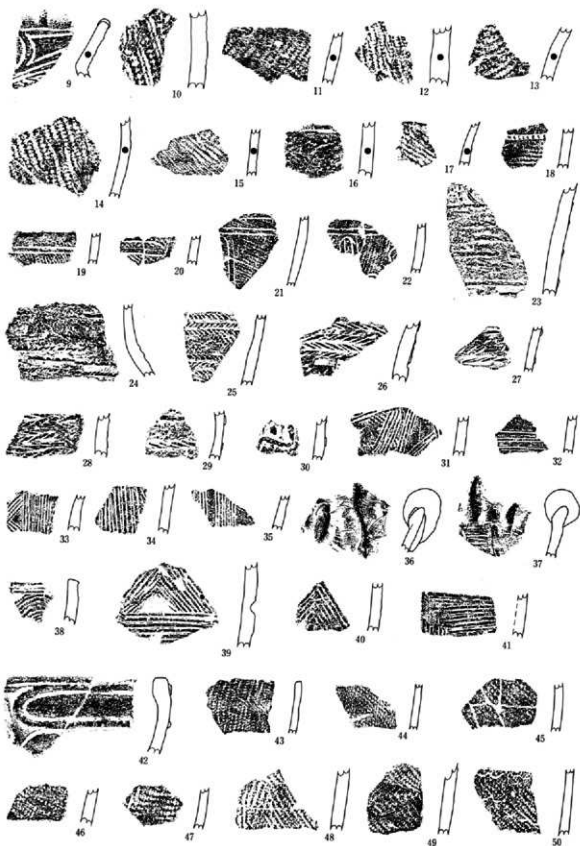
1・2は頸部が僅かにくびれる深鉢形となるもので、1は胴部にRLの縄文を斜位に施し、頸部下に円形刺突をもつ。2は頸部下の胴部に、条が縦走るRLの縄文を施すもので、4～8が同一個体となる。4の頸部には、縦位に円形刺突が施文されている。3は無文となる胴部下半である。

10～17は胎土に繊維を含むもので、10は正反の合による縄文を施す胴部片である。11～17は胴部にLRないしRLの縄文を施すものであるが、15には0段多条の縄が用いられ、16には1条の横位沈線がみられる。

18～50は無繊維のもので、18の胴部には半截竹管による細い平行沈線間に、爪形刺突をもつ。19～22は地文に縄文をもち、胴部に半截竹管による細い平行沈線で文様を描くものである。23～29は胴部に刻みをもつ浮線数を数条巡らせるもので、地文に縄文をもつ。23の上端には、浮線による曲線的な文様がみられる。30は胴部に浮線状の波状文が貼付され、豆状貼付文をもち、地文に縄文を施す。31は地文に縄文をもち、半截竹管により曲線的な文様が描かれるものである。32～35は胴部に、縦位の集合沈線および斜位の集合沈線を施すもの。36・37は口縁部に耳状突起と、縦長の貼付文をもち、地文に横位の集合沈線をもつ。38～41は



第6図 7号住居跡平面図・出土遺物



S=1/3

第7図 7号住居跡出土遺物(1)

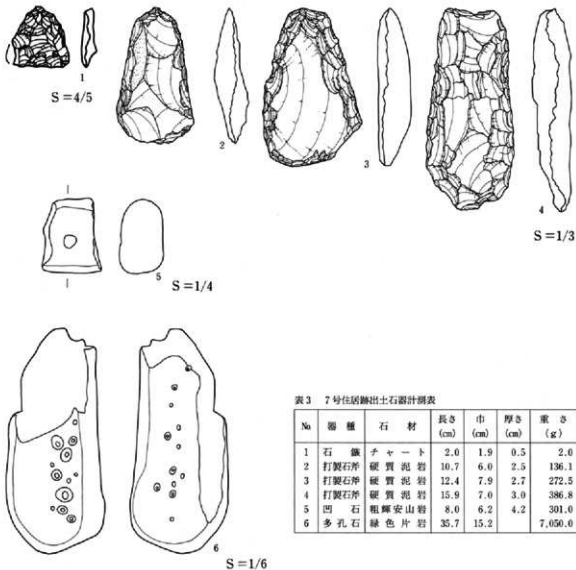


表3 7号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 鏃	チャート	2.0	1.9	0.5	2.0
2	打製石斧	硬質泥岩	10.7	6.0	2.5	136.1
3	打製石斧	硬質泥岩	12.4	7.9	2.7	272.5
4	打製石斧	硬質泥岩	15.9	7.0	3.0	386.8
5	凹石	粗輝安山岩	8.0	6.2	4.2	301.0
6	多孔石	緑色片岩	35.7	15.2		7,050.0

第8図 7号住居跡出土遺物(2)

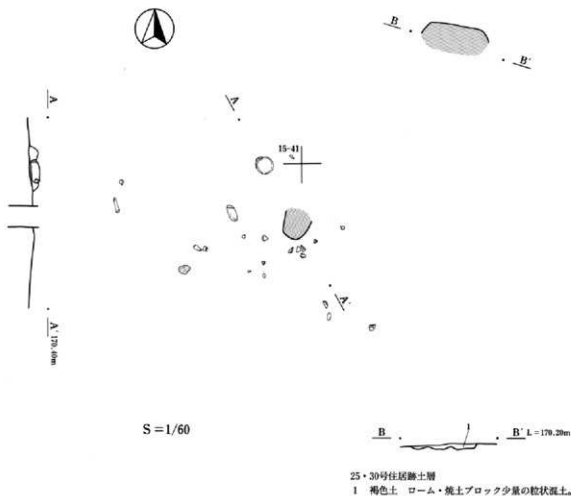
口縁部および胴部に半藪竹管で文様を描くもので、38の口縁下には三角の印刻文と渦状の文様が描かれ、39は縦位の矢羽根状・横位の集合状沈線、および三角の印刻文をもつものである。

9は波状口縁となる口縁部で、波底近くに小突起をもち、口縁部に沈線で平行および弧状の文様を描く。42は平口縁となる口縁部に隆带状の楕円区画をもち、区画内に押し引き状沈線が施されるもので、口縁下にも1ないし2条の押し引き状沈線が巡る。

42～50は胴部に縄文が施されるもので、50には結節文がみられる。

石器

石器には、第8図に示した6点がある。黒曜石製の石鏃1点、打製石斧3点、磨石で片面に凹孔をもつもの1点、多孔石1点である。



第9図 25・30号住居跡

25号住居跡 (第9・10図 表4)

東側台地 (C区) の西縁辺寄りの平坦面にあり、14-40・41グリッドに位置し、24号住居跡の西側、39号住居跡の北側にある。中世城郭造成時の削平をうけ、さらには縞状に耕作溝による破壊をうけているため、残存状態は極めて悪く、焼土を伴う炉跡のみが検出された。

壁や床面等の検出ができなかったことから、平面形は不明である。検出された炉跡周辺の精査を試みたが、明確な床面の検出にはいたらなかった。また、柱穴等の検出もできなかった。

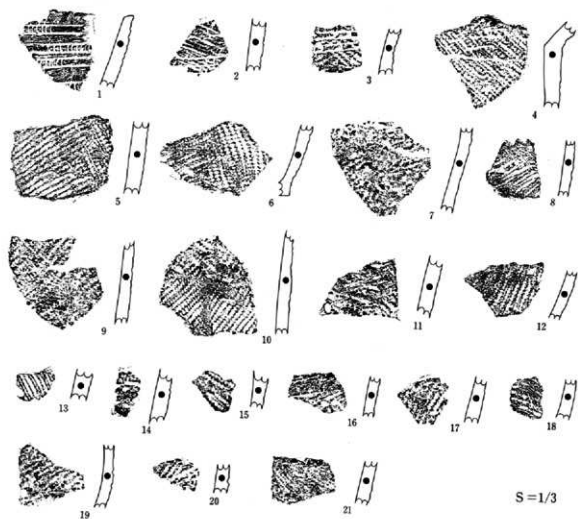
遺物の分布状況は、炉跡周辺で土器および石器が比較的まとまって出土している。

出土遺物は、第10図に示すごとくで、次の通りである。

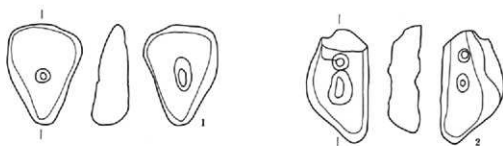
土器

1~21は胎土に繊維を含むものである。1は口縁部に斜位の沈線を施し、その下に半截竹管による平行沈線を数条もつが、沈線内に爪形刺突をもつ。この爪形刺突は、沈線内全体に及ぶものではなく、爪形を施す部分と、施さない部分とがみられ、条を変えて交互となるように施されるようである。3は頸部下に半截竹





S=1/3



S=1/4

第10図 25号住居跡出土遺物

表4 25号住居跡出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	緑色片岩	10.7	7.9	3.9	385.0
2	凹石	黒色片岩	12.1	6.7	3.4	440.0

### 第3章 検出された遺構と遺物

管による平行沈線と爪形刺突をもつもので、胴部に羽状縄文が施されている。2・4～21は胴部に縄文が施されるものであり、5・6・8は羽状縄文となるものである。このうち、4は附加条縄（1本附加）が用いられ、6は無節のしと1本附加の附加条縄 RLによる羽状縄文となるものである。13にも附加条縄（1本附加）が用いられている。

#### 石器

石器は、第10図の下段に示した凹石の2点である。この凹石は、両面に凹孔を有するものである。

#### 30号住居跡（第9図）

本住居跡は、東側台地の西縁辺寄りの平坦面にあり、15-40グリッドに位置し、24号住居跡の西側、25号住居跡の北側にある。中世城郭造成時の削平をうけ、さらには溝状に耕作溝による破壊をうけているため、残存状態は極めて悪く、焼土を伴う炉跡のみが検出された。

壁や床面等の検出ができなかったことから、平面形は不明である。検出された炉跡周辺の精査を試みたが、明確な床面の検出にはいたらなかった。柱穴等の検出もできなかった。

明らかに本住居に伴う遺物の出土はなかった。時期は、不明である。

#### 26号住居跡（第11～60図 表5・6）

C区の台地の西側縁辺にあり、17・18-40グリッドに位置する。27・28・35・40・41号住居およびいくつかの土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のもと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は27・28・35・40号住居跡よりも新しく、平面形状は隅丸方形を呈している。北側の隅には、円形となる一段高い掘り込みが検出され、これを26号住Bとし、前者を26号住Aとした。両者の新旧関係は、Aが新しくBが古い。このBについても、住居跡としての可能性は高いと考えられる。

26号住Aは、長軸4.8m、短軸3.8mを測り、長軸方向は北東をさす。壁は比較的しっかりと立ち上がり、壁高は確認面から1.2mもあり、床面がかなり深い。床面は堅くよく踏みしめられ、平坦である。炉跡は確認されなかったが、いくつかのピットが検出されており、対角線上に主柱穴が4本配されていたものと考えられる。覆土中からは、多量の遺物の他にかなりの量の小礫が出土している。おそらく、人為的な埋没によるものと考えられよう。

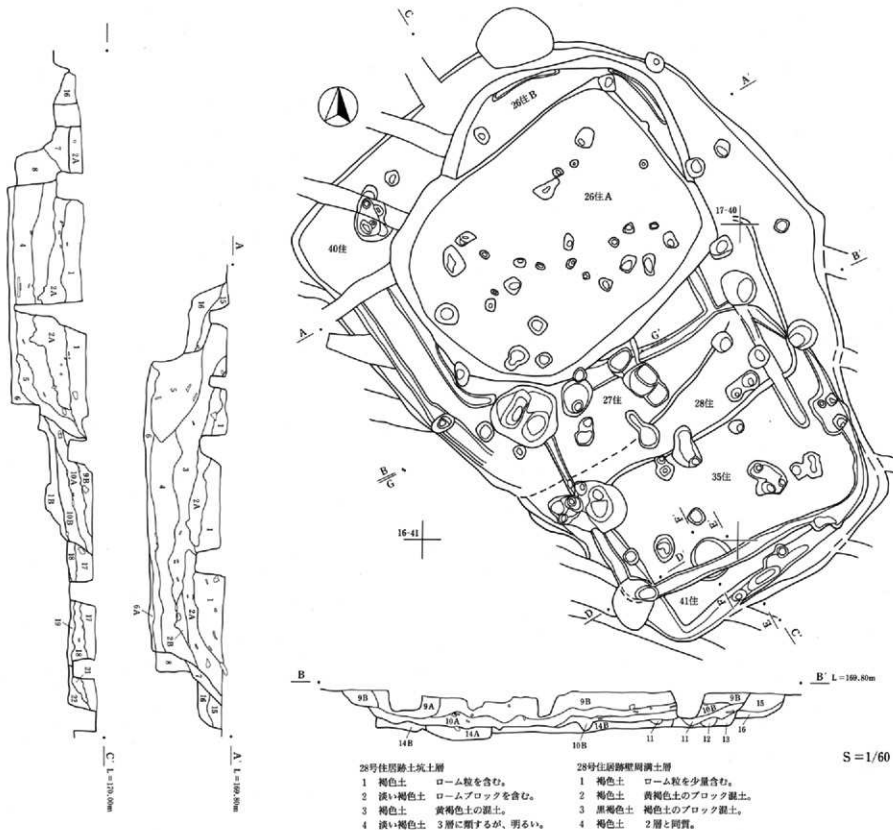
26号住Bは、先の26号住Aの北側に重複し、18-40グリッドに位置する。重複する住居との新旧関係は、土層の堆積状況等から26号住Aより古く、40号住よりは新しいと考えられる。平面形状は、その大部分が26号住Aに覆われているためさだかではないが、円形ないしは楕円状を呈するものと考えられよう。壁はしっかりと立ち上がり、壁高は確認面から約1.0mを測る。床面は堅く踏みしめられ平坦であり、柱穴と考えられるピットがみられる。また壁際の一部には、周溝がみられる。

出土遺物は、復土中のものも含め、膨大な量が出土している。26号住A・Bから出土した遺物は、それぞれの住居の判別が困難であることから、26号住出土遺物として一括して扱うこととした。また、調査当初は重複する他の住居跡も含め、一括して遺物を取り上げていたため、他の住居遺物を一部に含んでいる。

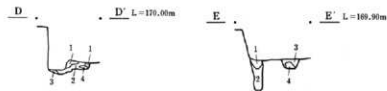
遺物については、次の通りである。

#### 土器

1・2は波状口縁となり、口縁が靴先状に大きく内側へ屈曲し、頸部がくびれ、胴部上半が僅かに膨らむ深鉢となる器形を呈する。1は地文に縄文をもち、刻みをもつ浮線文で文様を描く。波状となる口縁下に4条



第11図 26 (A・B)・27・28・35・40・41号住居跡平面図

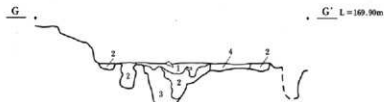


41号住居跡燧溝とA土坑

- 1 淡い褐色土 ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土 2層より高い。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを含む。

35号住居跡燧溝と41号住居跡B土坑

- 1 褐色土 ロームの混土。
- 2 褐色土 ロームのブロック混土。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。

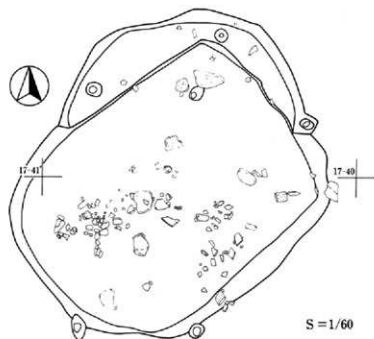


26・27・28・35・40・41号住居跡土層

- 1 褐色土 ローム中の白色粒子・浮石・炭化物・骨片を多量に含む。やや粘性で硬質。
- 2 A 灰黄褐色土 白色粒子・炭化物を多量含む。粘性・硬質。
- 2 B 褐色土 燧土と2層間のブロック混土。
- 3 くすんだ黄褐色土 ローム中の軽石・砂を多量に炭化物を少量含む。粘性弱くやや軟質。
- 4 くすんだ黄褐色土 3層と近似。色調やや明るく硬質。
- 5 淡い褐色土 3層に類する。
- 6 黄褐色土 やや軟質。
- 7 淡い褐色土 白色粒子・軽石を多量に含む。粘性弱く硬質。
- 8 くすんだ黄褐色土 4層と同質。
- 9 A くすんだ褐色土 白色軽石を多量に炭化物を少量含む。硬質。
- 9 B 褐色土 1層と同質。
- 10 A 黒褐色土 炭化物を多量に含む。やや粘性・硬質。
- 10 B 黒褐色土 10Aと同質。ローム粒を含む10A層よりやや軟質。
- 11 黒褐色土 10A層と同質。ロームブロックを含む。
- 12 黒褐色土 ロームとの混土。
- 13 淡い褐色土 ロームとの混土。軟質。
- 14 A くすんだ褐色土 ロームブロック・燧土・炭化物を含む。軟質。
- 14 B くすんだ褐色土 ローム粒を多量に含む軟質。上面に粘り床。
- 15 くすんだ褐色土 白色粒子を多量に含む硬質。
- 16 くすんだ褐色土 ローム粒の混土。
- 17 くすんだ灰褐色土 白色粒子・炭化物を含む。粘性なく硬質。
- 18 くすんだ灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 19 黄褐色土 18層のブロック混土。
- 20 淡い褐色土 白色粒子を多量に含む。
- 21 淡い褐色土 白色粒子を多量に含むやや軟質。
- 22 黄褐色土 21層のブロック混土。

S=1/60





第12図 26号住居跡平面図

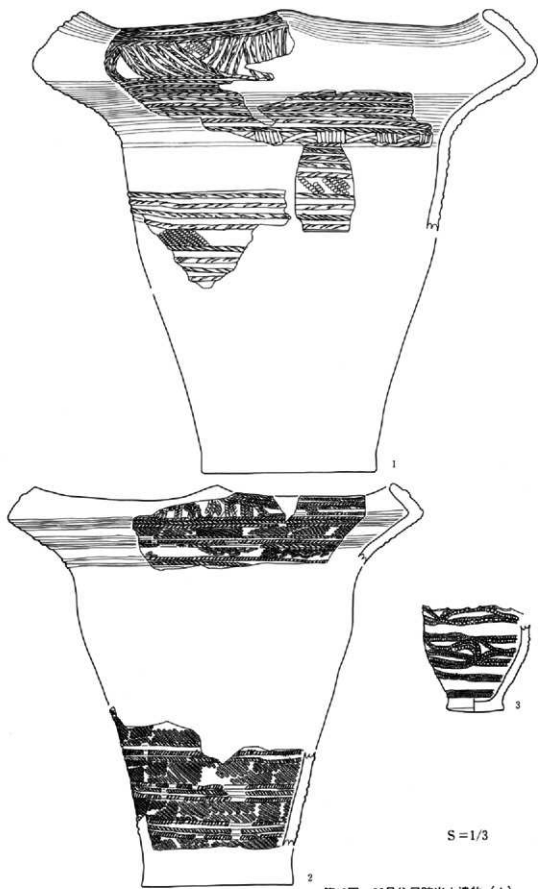
の浮線を巡らせ、その下に弧状ないし渦状の文様をもち、頸部には11条の平行な浮線が巡り、頸部下にはX字状の文様を施す。胴部には、数条を単位とする平行な浮線が数段巡る。2は1と同様に地文に縄文をもち、刻みをもつ浮線により文様を描くもので、波状となる口縁下に3条の浮線を巡らせ、その下に弧状・渦状の文様をもち、頸部以下の胴部に3条を単位とする平行な浮線が数段巡る。3は小形の深鉢となるもので、棒状工具による連続刺突列点により文様を描く。施文される文様は、2条を単位とし、平行に数段巡らせただけで、渦状等の曲線的な文様を描いている。4は胴部に屈曲をもつ深鉢で、浮線により文様を描く。施文される文様は、胴部に数条を単位とする浮線を数段巡らせ、その間に渦状ないし入り組み状・弧状・矢羽根状等の文様を描かれる。また、浮線文様を描いた後、縄文を施したものとみられ、浮線上に縄文をもつ。さらには、浮線に刻みを施す部分もみられる。5は平口縁となり、口縁が大きく内反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ深鉢となるもので、キャリバー状の器形を呈する。口縁には獸面突起をもち、縄文地文に、刻みをもつ浮線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に4条の浮線を巡らせ、その下に渦状・弧状等の文様を描き、頸部以下に数条を単位とする平行な浮線を数段巡らせている。6は胴部上半に膨らみをもつ深鉢である。施文される文様は、胴部上半までに1条の刻みをもつ浮線を数段巡らせ、その間に半截竹管による横位の矢羽根状沈線を施す。胴部下半には、RLの縄文を施す。7は波状口縁となる大形の深鉢で、頸部がくびれ、口縁部が朝顔状に直線的に開く器形を呈する。地文に縄文をもち、刻みをもつ浮線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に4条の浮線を巡らせ、その下に弧状等の文様をもち、頸部以下には数条を単位とする平行な浮線を数段巡らせる。8は平口縁となり、口縁部が屈曲するように外反し、胴部が膨らみ、胴部下に段をも

つ浅鉢となるもので、口縁下の屈曲部に規則的に孔を有し、無文である。いわゆる有孔浅鉢である。9は深鉢の底部であり、胴部下半に刻みをもつ浮線を平行に巡らせたもの。地文にRLの縄文を施している。10は大形の深鉢の胴部であり、胴部上半に膨らみをもつ。地文に縄文をもち、刻みをもつ浮線で文様を描く。施文される文様は、胴部上半に溝状・弧状・横位の矢羽根状の文様を一帯もち、以下に平行に数条巡らせている。11は口縁部が靴先状に大きく内側へ屈曲する大波状口縁となり、頸部がややくびれる深鉢の器形を呈する。波頂部は両側に小突起をもつ三山状となり、波頂下に瘤状の貼付文を有する。地文に無節の縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に口縁に添うように沈線が巡らされ、波頂下の頸部にV字状の沈線をもつ。頸部以下には、1ないし数条の平行沈線が数段巡らされている。12は口縁部が大きく内側へ屈曲する波状口縁となる深鉢で、波頂下に瘤状の貼付文を有する。11と同様に、地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に数条の平行沈線を巡らせ、波頂部分に瘤状貼付文を中心とする菱形を構成させる。頸部以下には、数条を単位とする平行沈線を数段巡らせるようである。13は頸部から口縁にかけて大きく開き、頸部がくびれ、頸部下に外側への屈曲部を有する深鉢の器形を呈する。地文に無節の縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様には、頸部から胴部にかけて1ないし数条を単位とする平行沈線が数段巡るものであり、頸部のくびれ部には弧状のX字状の文様と、その間に縦位の沈線が描かれる。14は13と同様の器形を呈する深鉢で、地文に縄文をもち、半裁竹管により平行沈線で文様を描く。施文される文様は、頸部および胴部に数条を単位とする平行沈線を数段巡らせるものであり、頸部下の屈曲部上端には縦位の沈線帯をもつ。15は胴部下半が大きくすばまる深鉢の胴部であり、地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描かれる。施文される文様は、胴部に幅の広い集合状の平行沈線帯を数段もち、その間に入り組み状・弧状・横位の矢羽根状等の文様を描いている。16は緩やかな波状口縁となり、口縁がやや内反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ深鉢の器形を呈する。波頂下に瘤状の貼付文をもち、地文に縄文を施し、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に数条を単位とする平行沈線を巡らせ、その下の波頂下に同様の沈線で三角状の文様を描く。頸部以下には数条を単位とする平行沈線を巡らせ、胴部中央に弧状の曲線および横位に矢羽根に近いV字状となる文様を描く文様帯をもつ。17は平口縁の直線的に開く口縁となる深鉢で、地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に幅の広い集合状の平行沈線帯をもち、隙間を空けて胴部にも平行沈線を施している。18は胴部下半がすばまり、胴部から口縁にかけて緩やかに開き、口縁部が大きく屈曲するように内反し、平口縁となる深鉢の器形を呈する。内反する口縁部には、貼付文の剝落痕があり、貼付文による口縁部装飾が施されていたようである。また貼付文間には、半裁竹管による斜位の沈線を有する。口縁部屈曲下および胴部下方には、数条の平行沈線が回り、胴部文様帯を区画する。区画内には、縦位の平行沈線より大きく区割りされ、区割り内に弧状の文様が描かれ、さらに縦位の鋸歯状ならびに斜位の沈線が施されている。19は深鉢となる胴部下半である。地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様には、胴部下端に横位の集合沈線で胴部文様帯を区画し、区画内に縦位・弧状等の集合沈線が施され、その間に曲線的な文様が描かれている。20は胴部がくびれ、胴部下半がすばまらずに底部となる細身の深鉢の器形を呈し、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、胴部下端に横位の集合沈線で胴部文様帯を区画し、区画内に縦位の集合沈線で大きく区割りし、区割り内に弧状の集合沈線が描かれ、縦位の矢羽根状沈線ならびに鋸歯状の沈線が施されている。21は平口縁となる口縁部が開き、胴部下半が膨らむ深鉢の器形を呈する。地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁部には文様をもたず、胴部下半に2段の横位の集合沈線帯を施し

て胴部文様帯を区画し、区画内に縦位の集合沈線で大きく2単位に区割りしている。さらに区割り内には、弧状の集合沈線により3単位に区分され、中央の弧状区画内には8字状の文様が、その両側の区画内には曲線の文様がそれぞれ施されている。なお、この土器については、その器形・施文文様のあり方（特に、口端部で文様が切れている）から、本来の口縁部を除去した姿と考えられ、現存する口縁部は、何等かの理由で除去された後に、疑似的に口縁を作り出したものと思われる。22は平口縁となる口縁部がくぼみ気味に僅かに外反し、胴部から口縁にかけて緩やかに開き、胴部下半がやや膨らむ深鉢の器形を呈する。内面口端部は、有段状となる。口縁には4単位の耳タブ状の貼付文がつき、地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁部および胴部下半に横位の集合沈線を施して胴部文様帯を区画し、区画内の耳タブ状貼付文下に縦位の集合沈線で4単位に区割りする。さらに区割り内には、弧状の集合沈線が施され、4単位の内の3単位の内部に横位・弧状・斜位等の集合沈線が施され、残る1単位の弧状ないしV字状の集合沈線による文様が描かれている。23は胴部下半から口縁部にかけて、朝顔状に開く深鉢の器形を呈する。器面には、沈線や浮線・縄文等による文様はみられず、ミズ張れ状の微隆線が横位方向に全面にみられるものである。この微隆線は、2ないし3本ほどの指で、横位方向に撫でられたものと思われ、他の土器文様とは大きく異なるものである。24は深鉢となる胴部で、全面にRLの縄文が施されるものである。25は深鉢となる胴部下半で、地文に縄文を施し、2条の垂下する懸垂文をもつ。26~28は深鉢の胴部下半で、地文に縄文を施し、半裁竹管による平行沈線で文様を描くものであり、数条を単位とする平行沈線を数段巡らせている。26には胴部文様帯があり、弧状の文様が描かれている。29は平口縁で、両側に小突起をもつ4単位の突起を有し、口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ小形の土器で、内面の頸部位置は屈曲する。施文される文様は、半裁竹管による密な爪形刺突をもつ結節浮線で、口縁部突起下に円形および弧状、さらに方形状の文様が描かれ、胴部上半にも同様に二重となる円形文や三角文等が描かれる。その下には、2条の結節浮線を巡らせて文様帯区画を行い、胴部下半にはLRの縄文を施すものである。

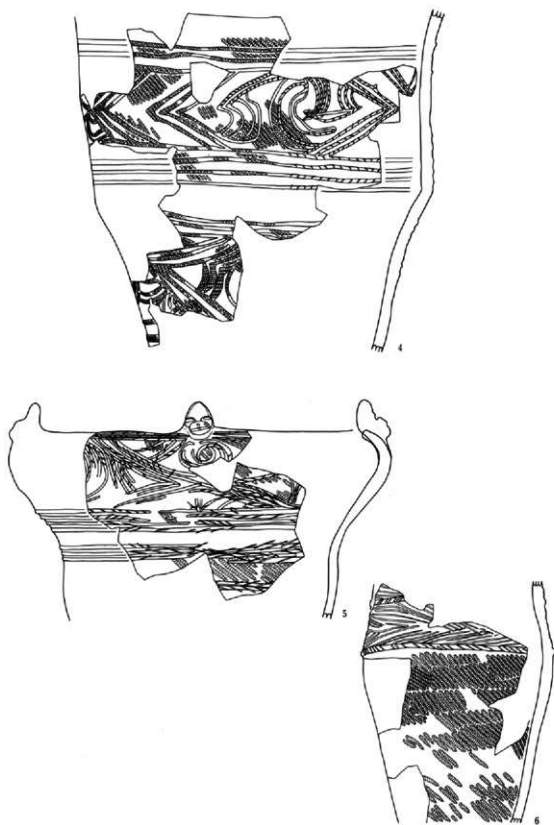
第23~25図に示した30~108は、胎土に繊維を含むものである。30~42は口縁部および頸部に文様をもつものであり、30は爪形刺突、31~33は連続爪形により、菱形の文様が描かれるもの。34~39・42は半裁竹管による平行沈線で、菱形文様が描かれる。41は頸部に2条の細い隆帯が巡り、胴部に縦位回転による無節の羽状縄文を施すものである。43~57・104は口縁部以下に縄文を施すものであり、49は波状口縁となる。52の口縁部には、角状の突起が2個みられる。43・44・56・57は羽状縄文が施されるものであり、43はRLと0段多条のLRによる羽状、43には正反の合、56・57は無節による羽状縄文である。また、45・49~51・54は無節の縄である。58~103・105は胴部に縄文が施されるものであり、60・62~79・83は羽状縄文となる。この内、58は正反の合が、59は軸縄の回転絡条体が、60・61・63・64・77には附加条（1本附加）の縄によるものであり、66・74・79・81・82・84・87・89・90・93・97・99・105には無節の縄が用いられている。106・107は無文となる口縁部であり、108は無文の底部近くで円底気味のものである。

第26図以降は、胎土に繊維を含まないものである。特に、31~42図に示す土器群が多量に出土している。109~116・121は口縁以下に半裁竹管による弧状沈線を施すものであり、109は口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を3条巡らせ、その下に横位の弧状沈線を施し、円形刺突を加えている。110は地文に縄文をもち、口縁以下に連続する弧状沈線を施したものの。115・116は縦位沈線間に弧状沈線を施すものであり、115は地文に縄文を施し、113・115には円形刺突をもつ。112は櫛状工具により、弧状沈線を施すものである。117~144は口縁以下に櫛状工具により、波状の沈線を施すものである。117のように平行に巡る条線間に、波状文を施すも



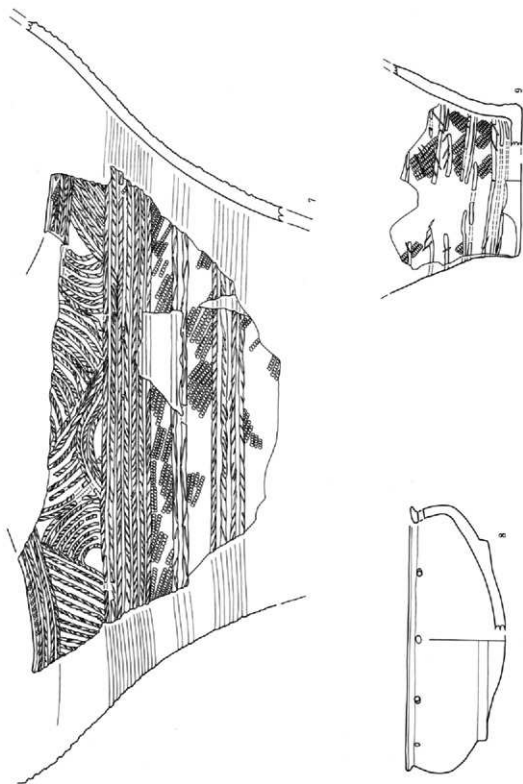
第13図 26号住居跡出土遺物（1）





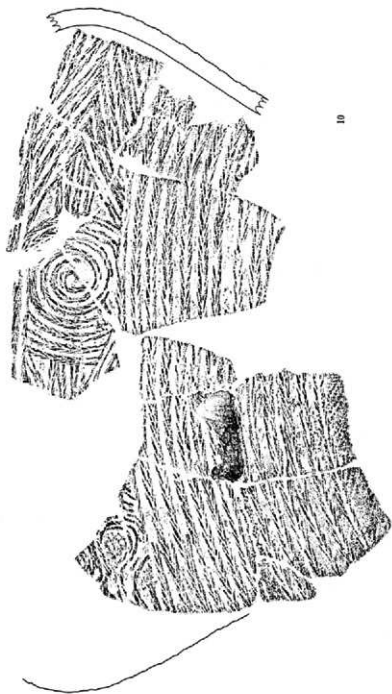
第14図 26号住居跡出土遺物(2)

S=1/3

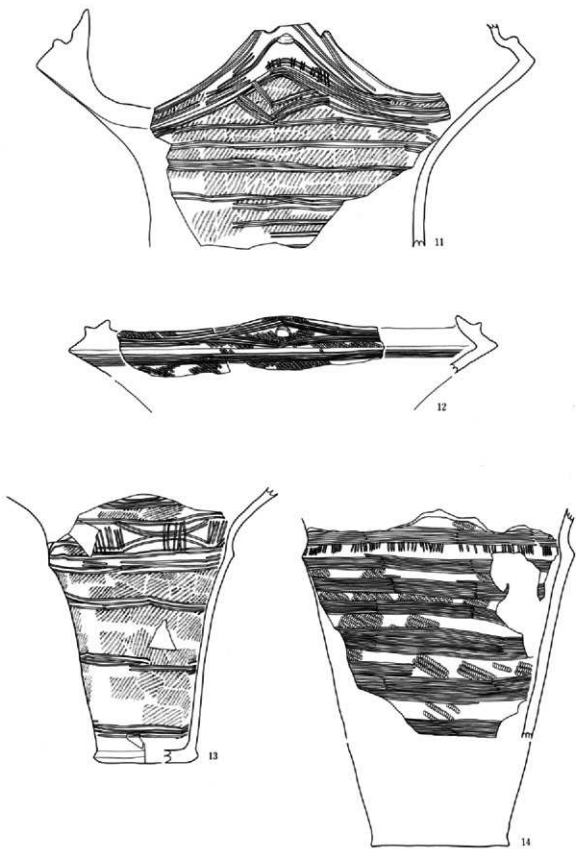


S = 1/3

第150図 26号住居跡出土遺物(3)

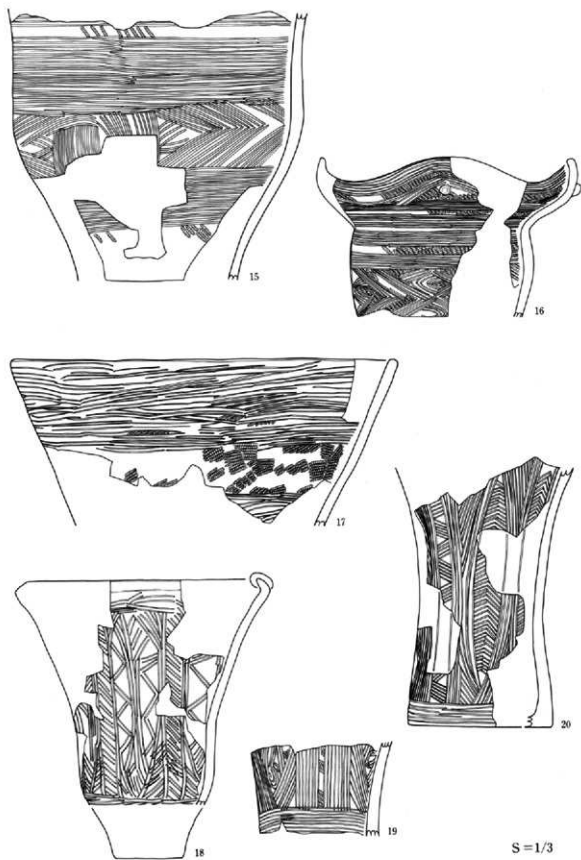


第16図 26号住居跡出土遺物(4)

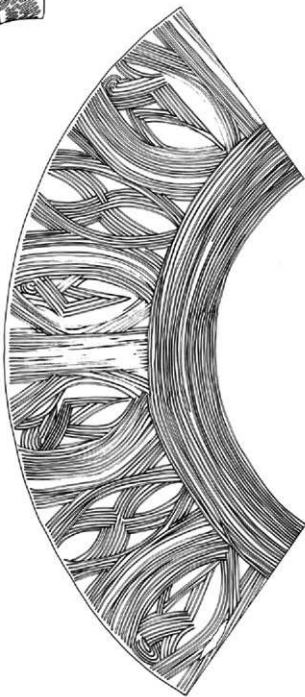
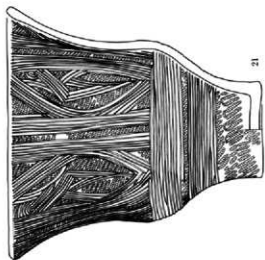


第17図 26号住居跡出土遺物(5)

S=1/3

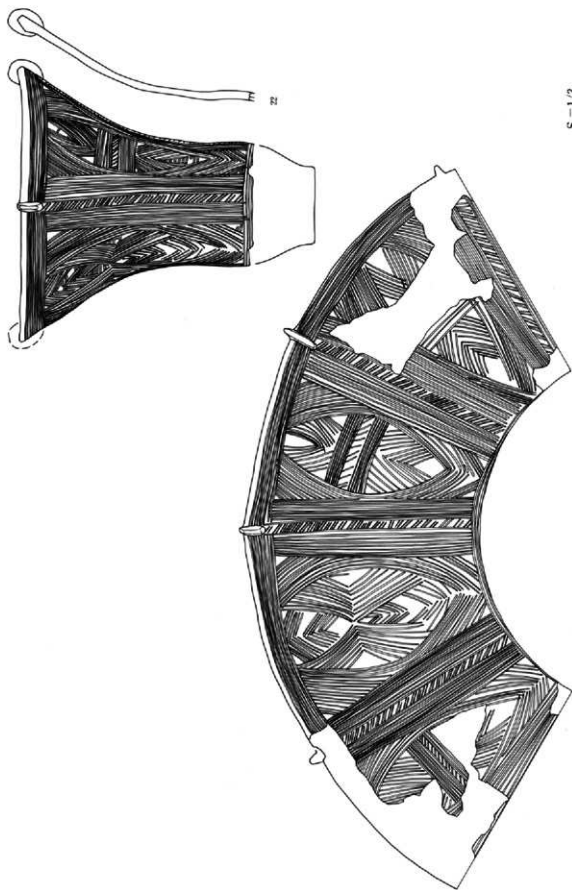


第18図 26号住居跡出土遺物(6)



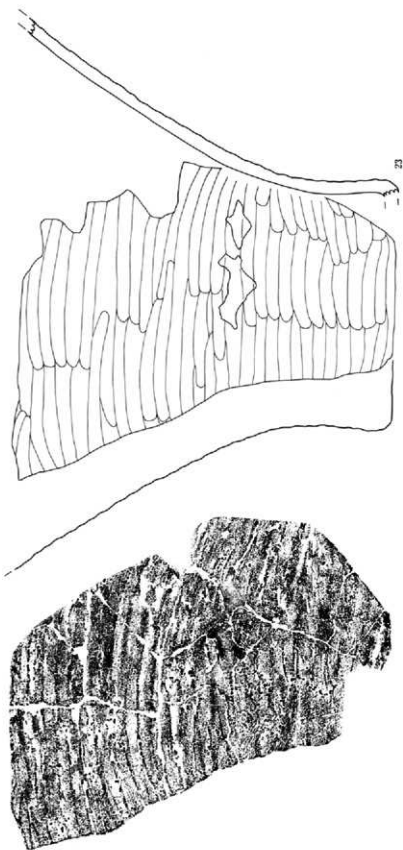
S=13

圖19 26号住居跡出土遺物(7)



S = 1/3

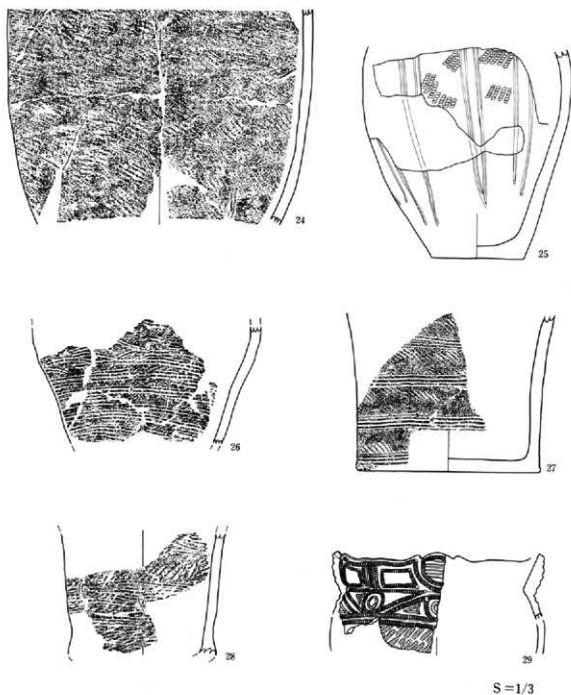
第20図 26号住居跡出土遺物（8）



S = 1/3

第21図 26号住居跡出土遺物（9）





第22図 26号住居跡出土遺物 (10)

のや、136のように波状文のみを連続的に施文する例もある。また、縦位に円形刺突を加えるものもみられる。141・142・144をみると、胴部に縄文が施されている。145～193は細い半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くものであり、145～154は口縁下に数条巡らせるもの。156は口縁下に2条巡らせ、その下にレンズ状的な文様を描き、円形刺突を加えるもの。163～169は木葉文を描くもので、区画内に縄文をもち、円形刺突を加えるものもある。170～173は直線および曲線的に沈線を施して文様を描くものであり、区画内に縄文を施している。

### 第3章 検出された遺構と遺物

194～312は口縁以下に爪形をもつ平行沈線および沈線間に刻みをもち、入り組み状・波状等の曲線的な文様を描くものである。207・210・211・218・233の口舌部には刻みが施され、円形刺突を加えるものもある。233・234・300・301・303～306には刻みをもつ浮線が施されている。233・234・309～312は半裁竹管による格子目状の文様が施されるものである。これらの内、231・232は波状口縁となるものであり、中には地文に縄文をもつものもある。

313～322は浅鉢の器形を呈するものであり、313～316・322は口縁下に孔を有する有孔浅鉢となるものである。施文される文様は、半裁竹管による木葉文等であり、爪形刺突を加えるものや、320のように刻みをもつ浮線が施されるものもある。321は底部近くで有段となるもので、322は無文となる。

323～439は口縁以下に刻みをもつ浮線により平行および入り組み状・渦状・弧状等に曲線的な文様を描くものである。323・324・331・354・357の口舌部には、X字状等の文様が浮線で施されるものであり、329は八字状の刻みが、335・339・342には刻みが、それぞれ施されている。358～364は口縁部に付く獣面突起であり、口縁部以下には刻みをもつ浮線で文様が描かれる。365・366は同一個体となるもので、頸部下に外側への屈曲部を有し、その上端にX字状と、その内部に縦位の浮線を施している。394の頸部には、平行な浮線間に縦位の浮線をもつものである。胴部下半には、平行な浮線のみが施されるものが多い。これらの土器の地文には、ほとんどに縄文をもつ。

440～453は半裁竹管により施文するもので、先の浮線文と同様の文様を描くものである。

454～475は半裁竹管の集合沈線により、入り組み状・弧状等の曲線的な文様を描くものであり、454は靴先状となる大波状口縁である。476～495は口縁部から頸部にかけて、横位の矢羽根状等の集合沈線による文様を描くものであり、496～522はそれらの胴部である。541～546も胴部に横位の幅広い集合沈線を施すものである。630～440は大波状口縁となるものであり、538・539の波頂下にボタン状貼付文が施されている。

548～553・629～652は口縁部にボタン状貼付文および横位の集合沈線をもち、胴部に縦位・弧状等の文様を描くものであり、554・555は口縁部に横位の矢羽根状沈線や耳タブ状・ボタン状貼付文をもつものである。556は口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線をもち、その下に地文に横位の矢羽根状沈線をもち、棒状の貼付文を施すものである。

653～655は結節浮線により曲線的な文様が描かれるものであり、656は爪形刺突をもつ平行沈線と鋸歯状の浮線が施されている。

557～628は口縁以下および胴部に縄文を施すものであり、結節文や結束による羽状縄文もみられる。

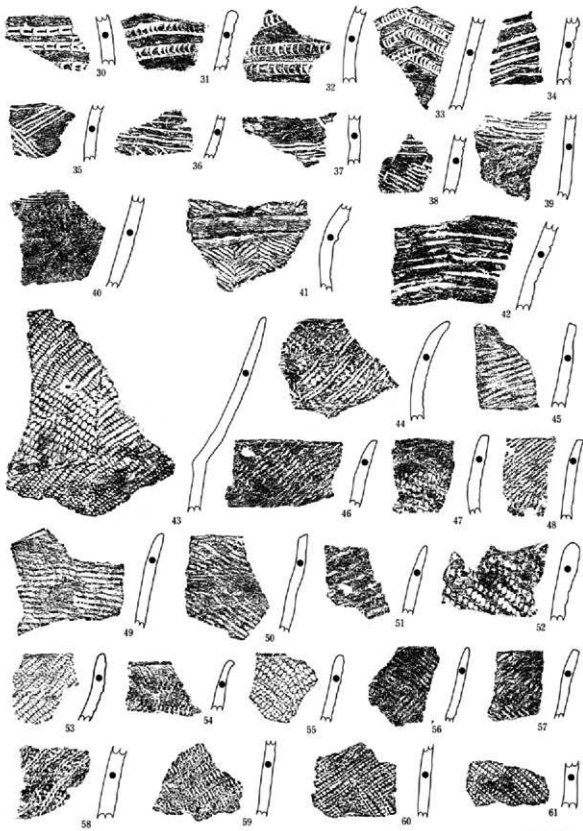
657～659は胴部に凹凸状の刺突を施すものであり、661～665は縦位の矢羽根状沈線と三角印刻文をもつものである。666は第22図29と同一の土器である。667・668は口舌部に半裁竹管による刺突をもち、口縁部に幅広い半裁竹管による平行沈線と、支点を交互に変える変形爪形文、さらに刺突を施し、その下に細い半裁竹管で沈線を施すものである。

669はミニチュア土器であり、670は土器片を利用した土製円盤、671は三角錐状の粘土塊である。

672～701は底部であり、701の胎土には繊維を含む。

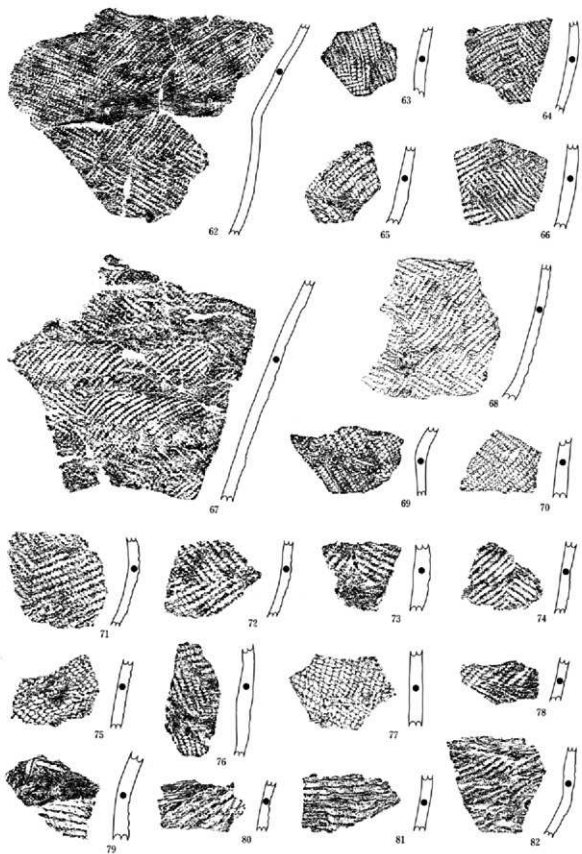
### 石製品類 (第47図1～7)

1・2は円形で中央に孔をもち、挾状耳飾りないし垂れ飾りと考えられる。3は中央に孔をもつ玉である。4～6は石製の円盤であり、4の側面には溝を有し、6の片面は凸状をなし、丁寧な研磨が施されている。7も不整形ではあるが、中央に孔を有し、垂れ飾りと考えられるものである。



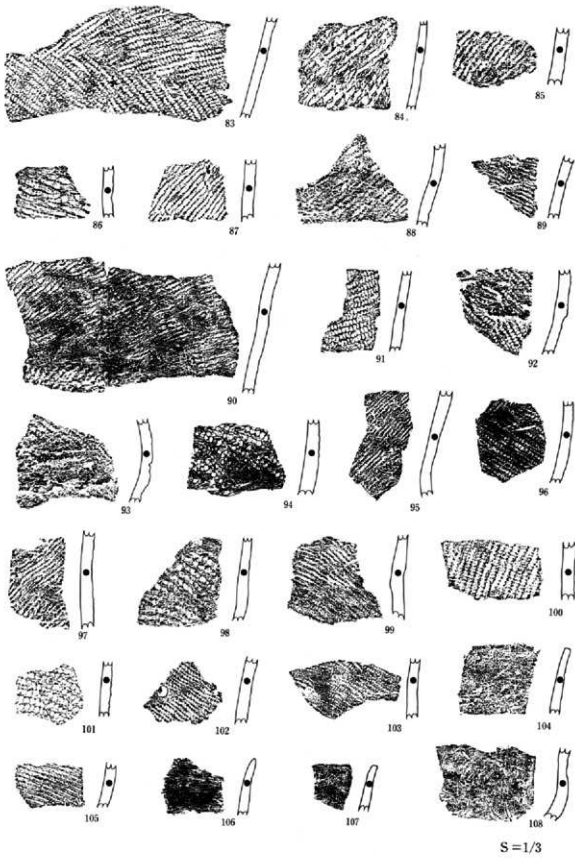
S=1/3

第23図 26号住居跡出土遺物 (11)



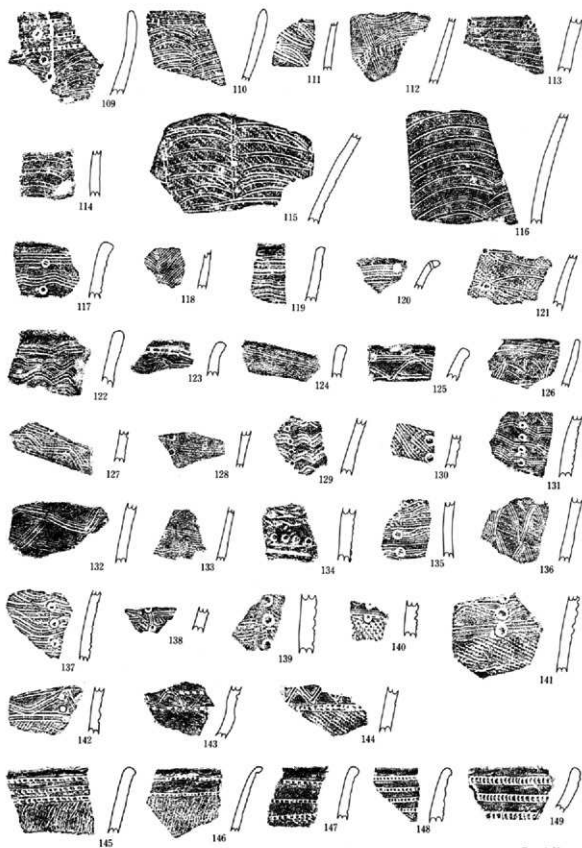
第24図 26号住居跡出土遺物 (12)

S=1/3



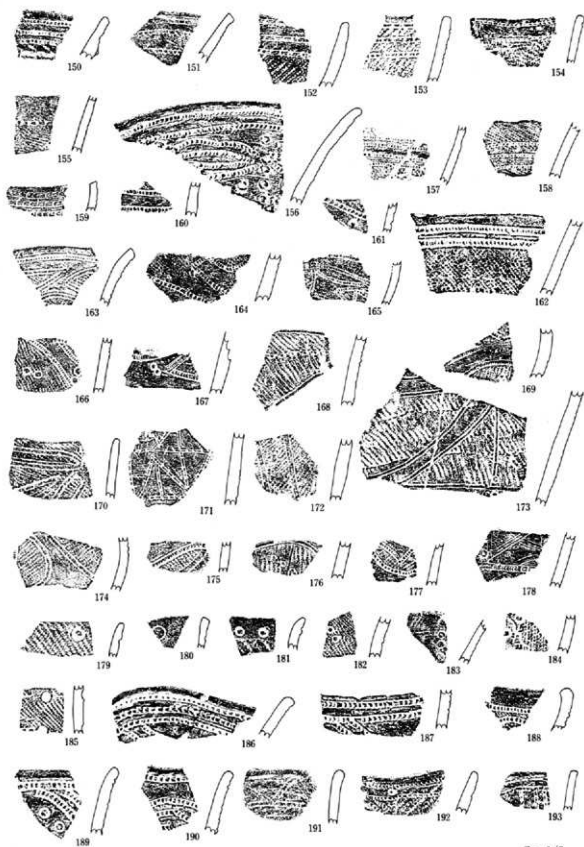
S=1/3

第25図 26号住居跡出土遺物 (13)



第26図 26号住居跡出土遺物 (14)

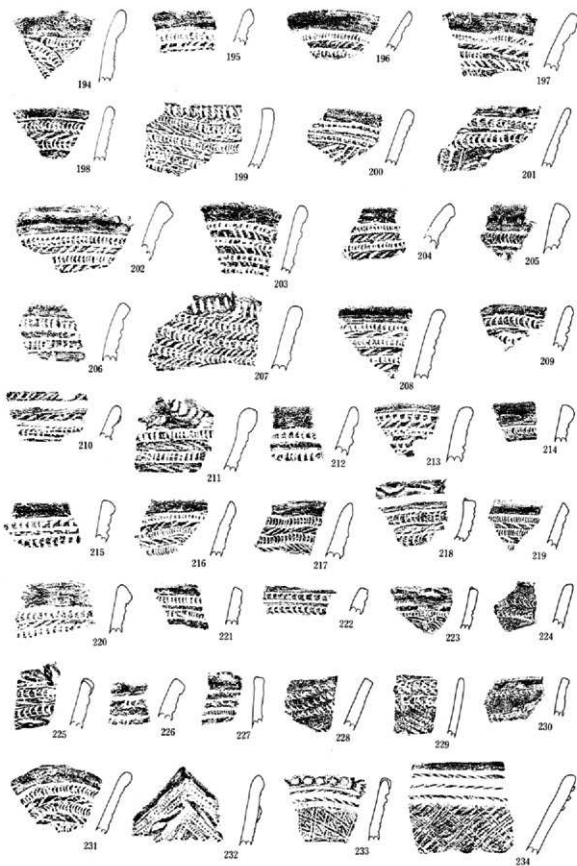
S=1/3



S=1/3

第27図 26号住居跡出土遺物 (15)

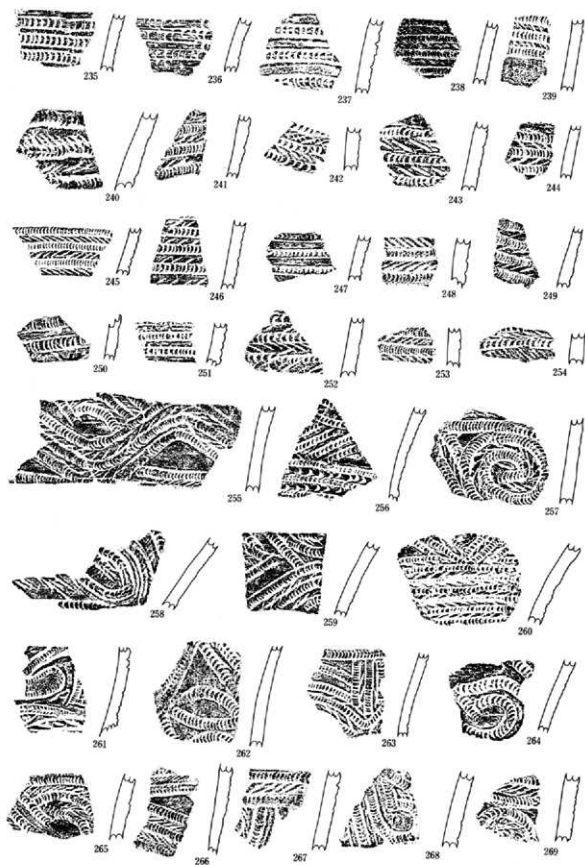
第3章 検出された遺構と遺物



第28図 26号住居跡出土遺物 (16)

S=1/3

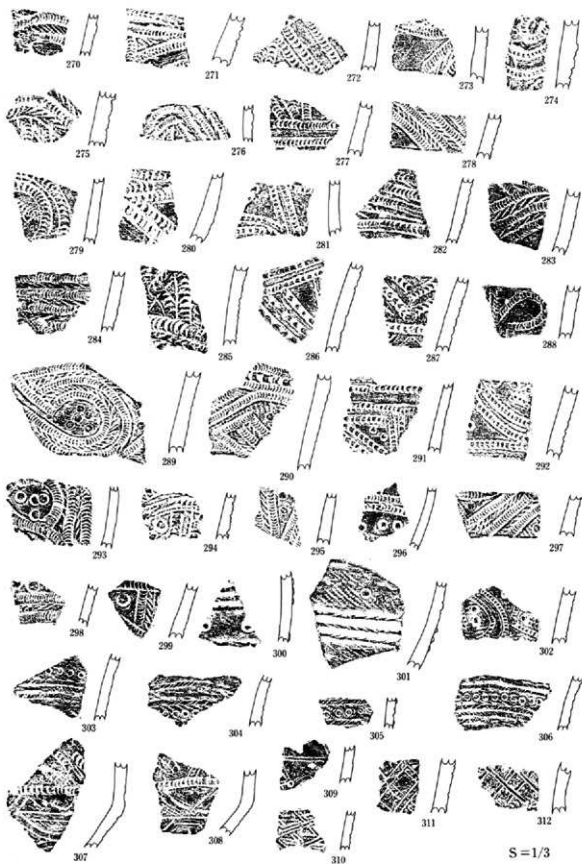




第29図 26号住居跡出土遺物 (17)

S=1/3

第3章 検出された遺構と遺物

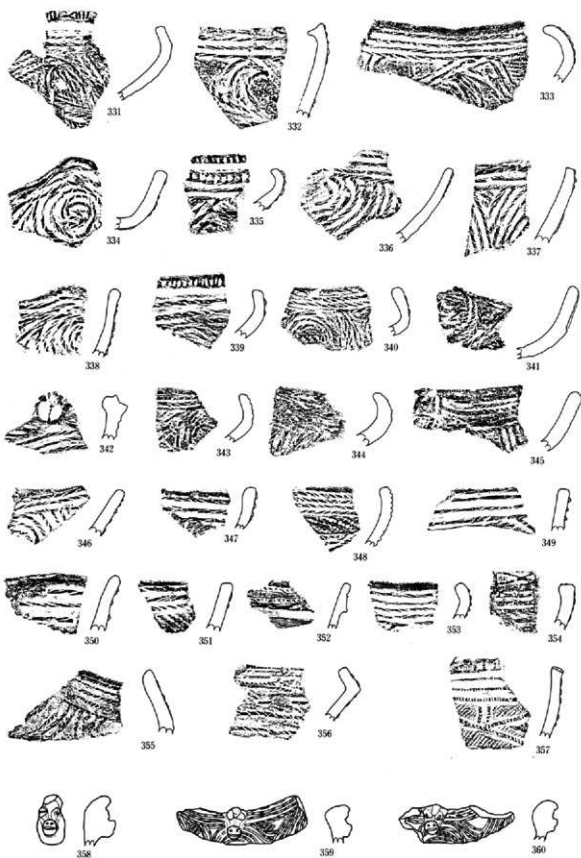


第30図 26号住居跡出土遺物 (18)



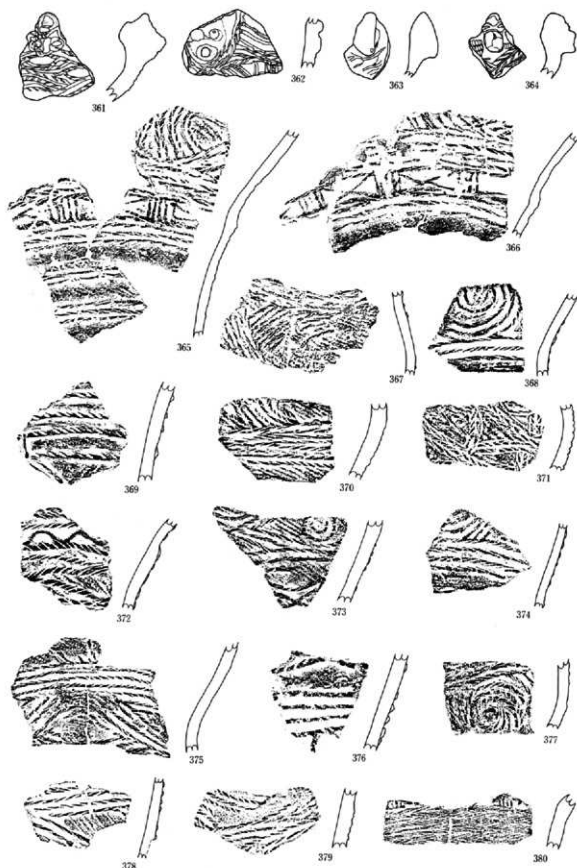
第31図 26号住居跡出土遺物 (19)

S=1/3



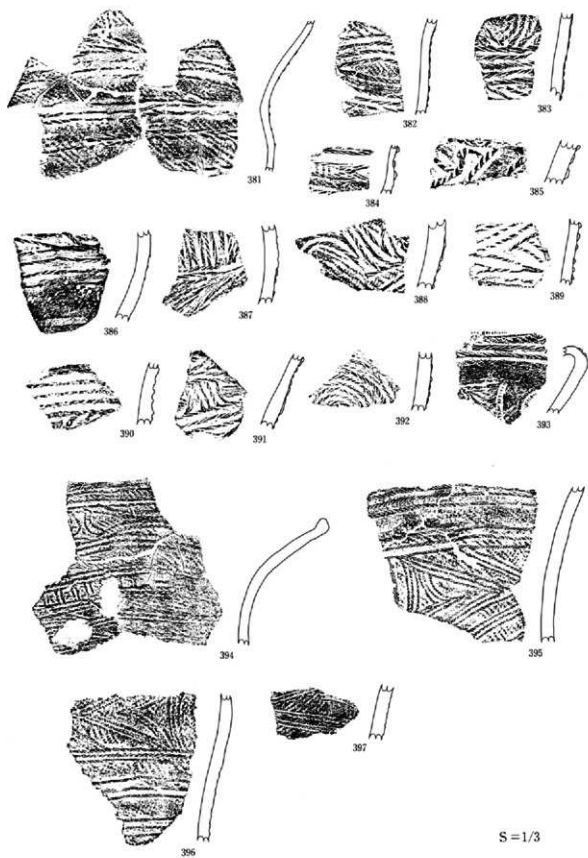
S = 1/3

第32図 26号住居跡出土遺物 (20)



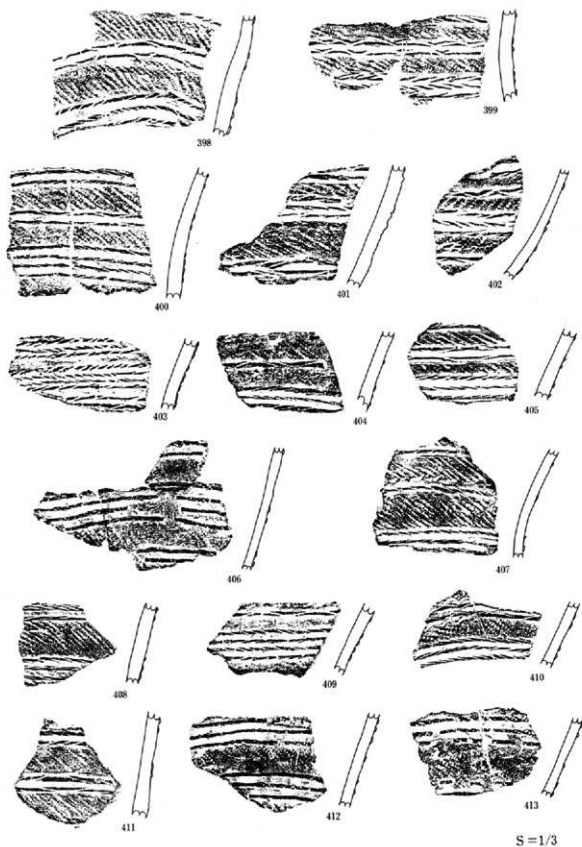
第33図 26号住居跡出土遺物 (21)

S = 1/3



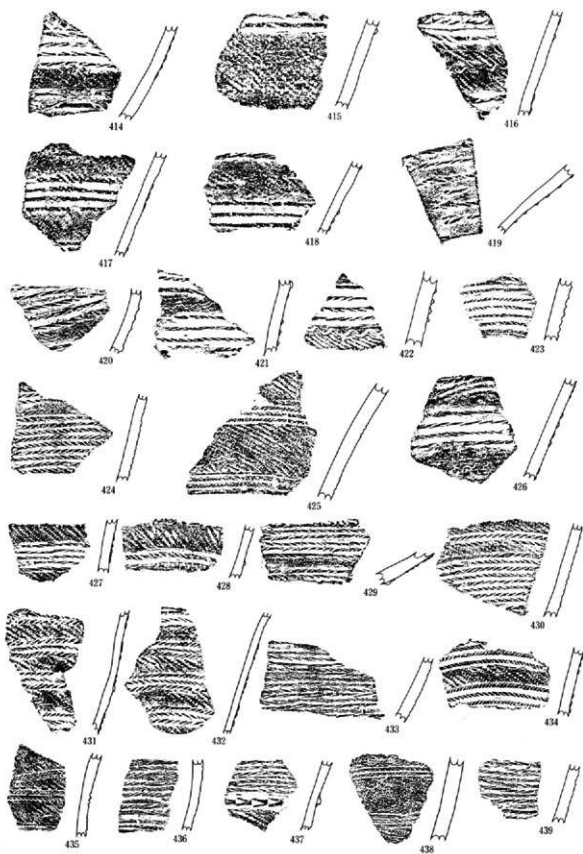
S=1/3

第34図 26号住居跡出土遺物 (22)



S=1/3

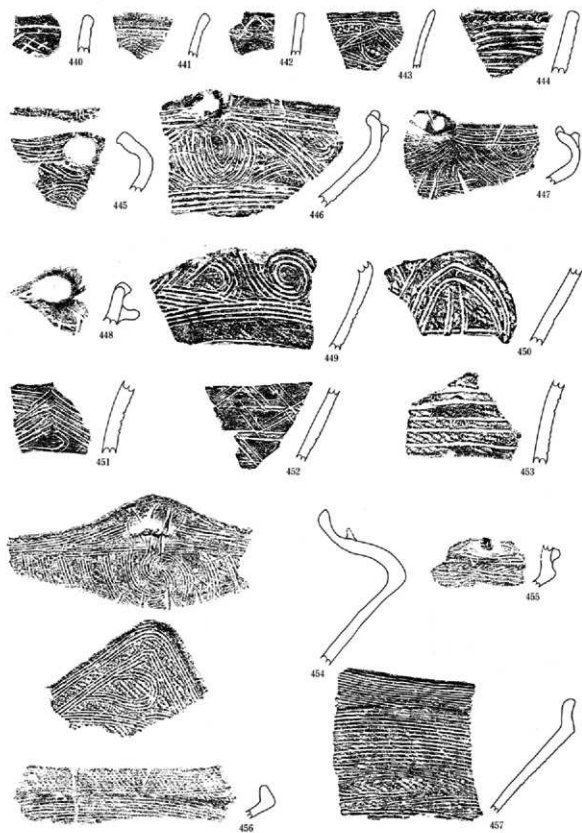
第35図 26号住居跡出土遺物 (23)



第36図 26号住居跡出土遺物 (24)

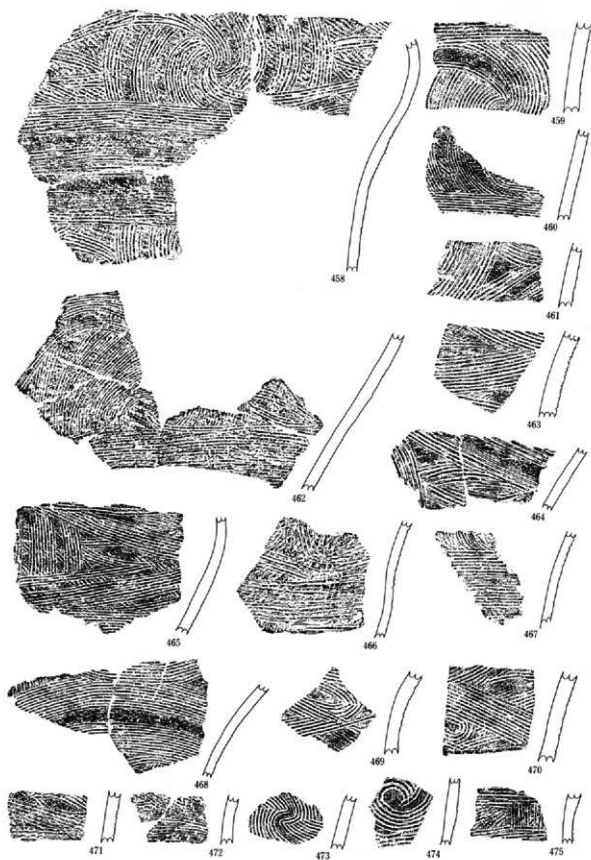
S=1/3





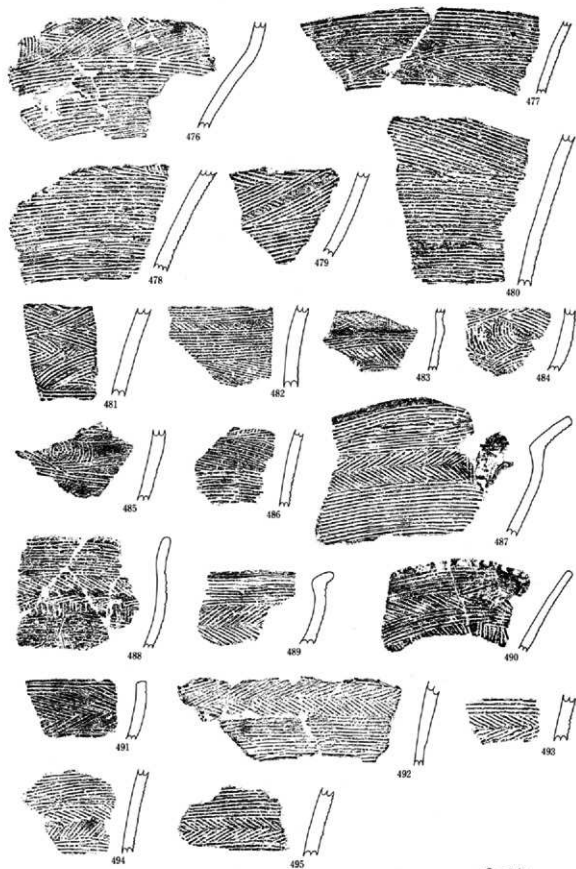
S=1/3

第37図 26号住居跡出土遺物 (25)



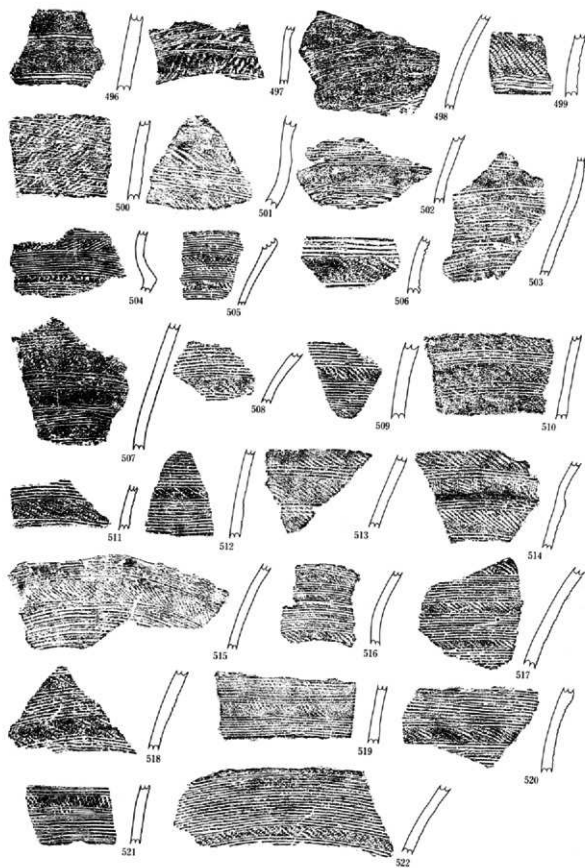
第38図 26号住居跡出土遺物 (26)

S=1/3



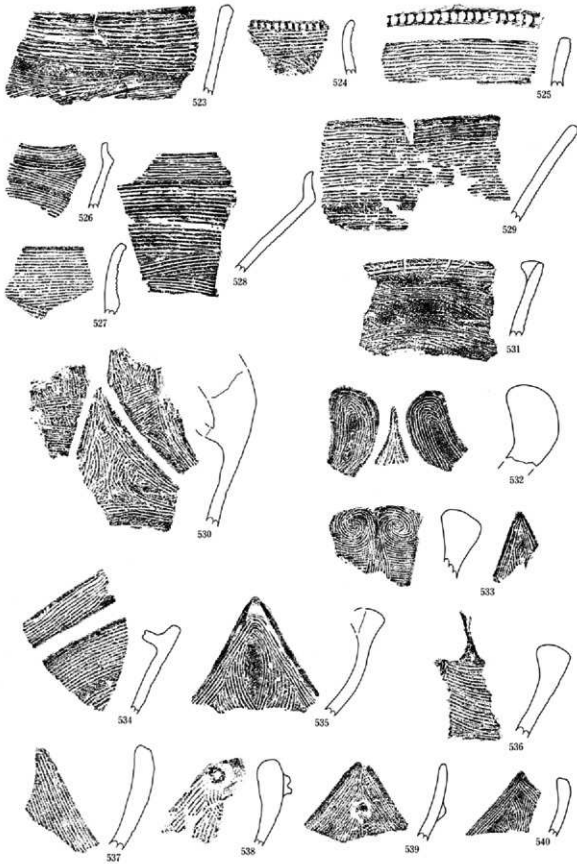
第39図 26号住居跡出土遺物 (27)

S=1/3



第40図 26号住居跡出土遺物 (28)

S=1/3



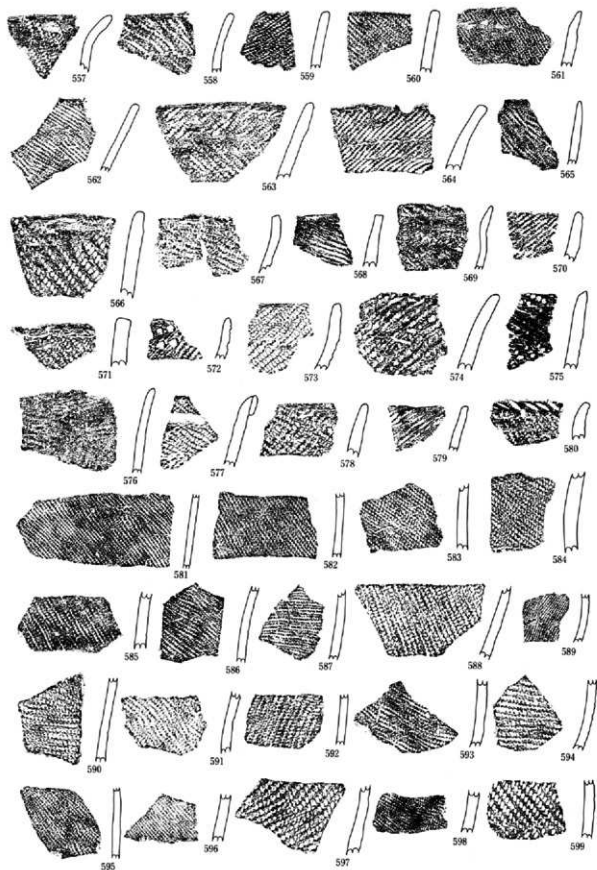
第41図 26号住居跡出土遺物 (29)

S=1/3



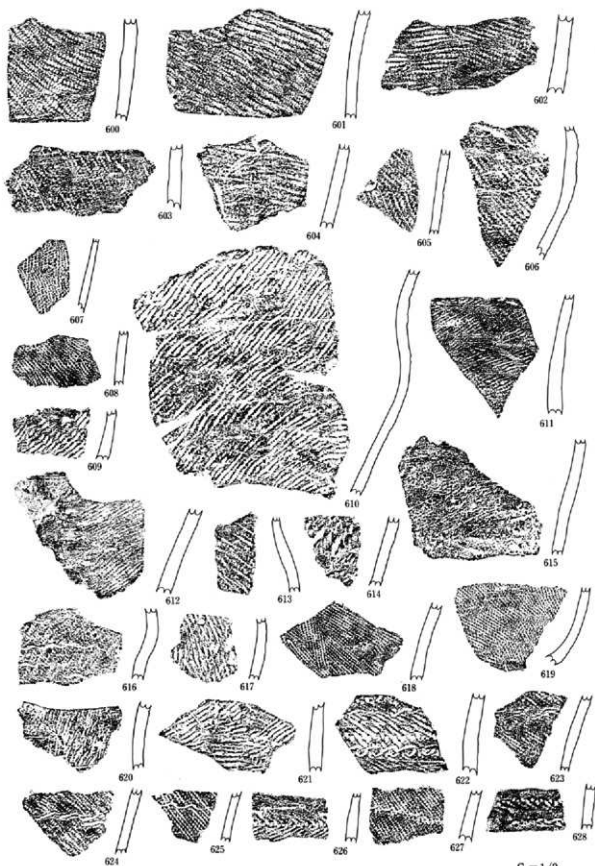
第42図 26号住居跡出土遺物 (30)

S=1/3



第43号 26号住居跡出土遺物 (31)

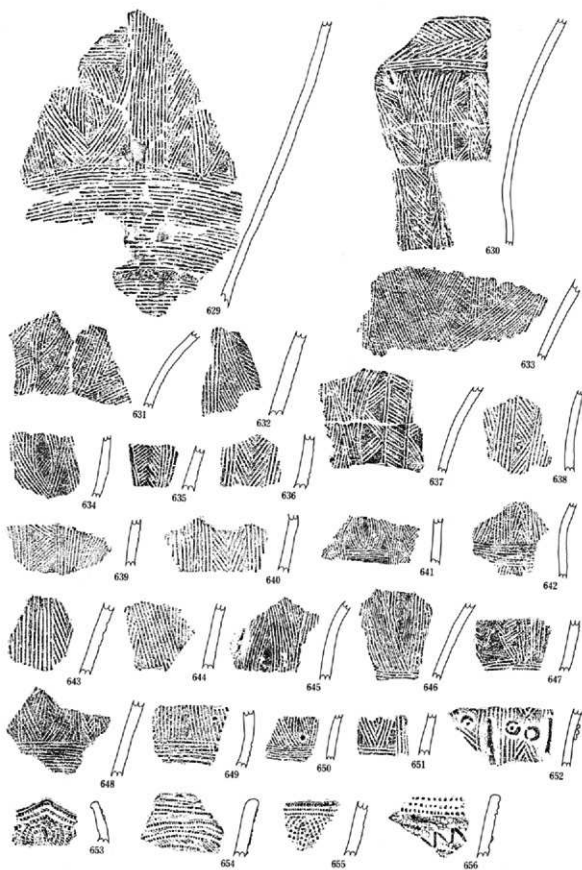
S=1/3



S = 1/3

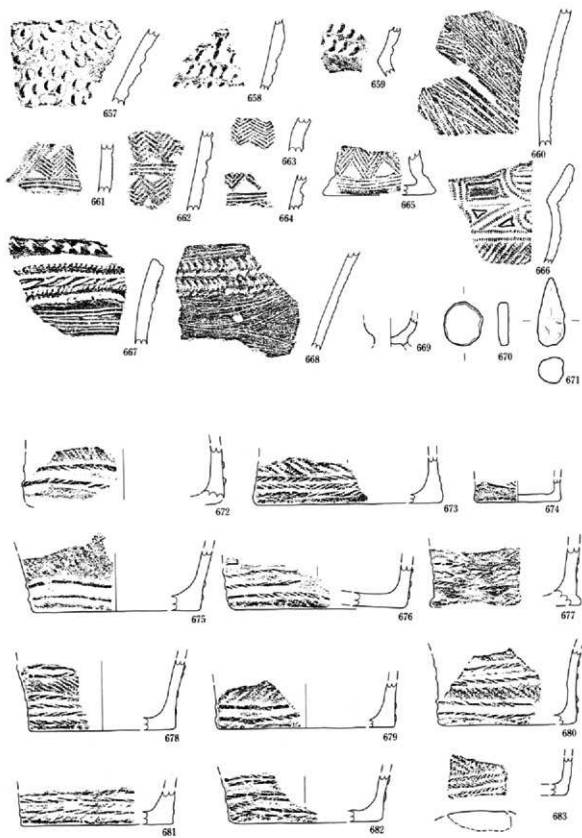
第44号 26号住居跡出土遺物 (32)





第45図 26号住居跡出土遺物 (33)

S=1/3



S = 1/3

第46図 26号住居跡出土遺物 (34)

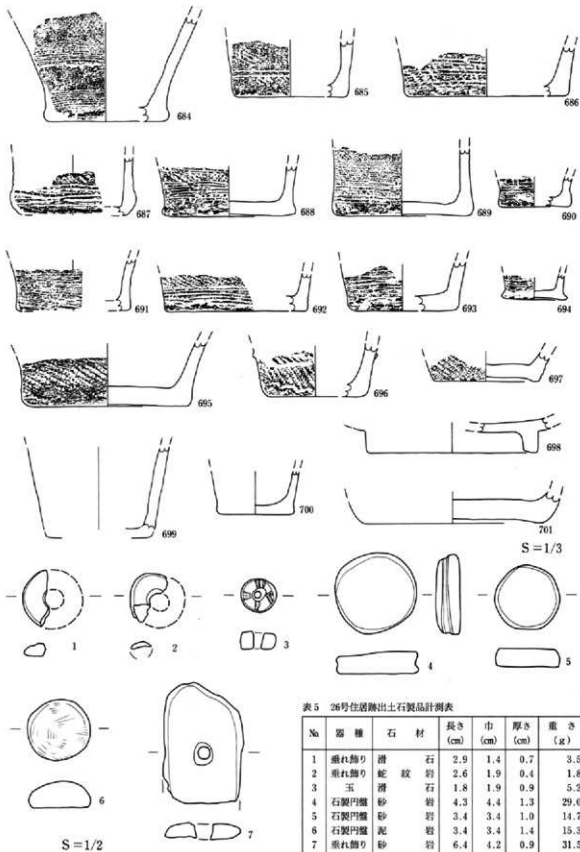
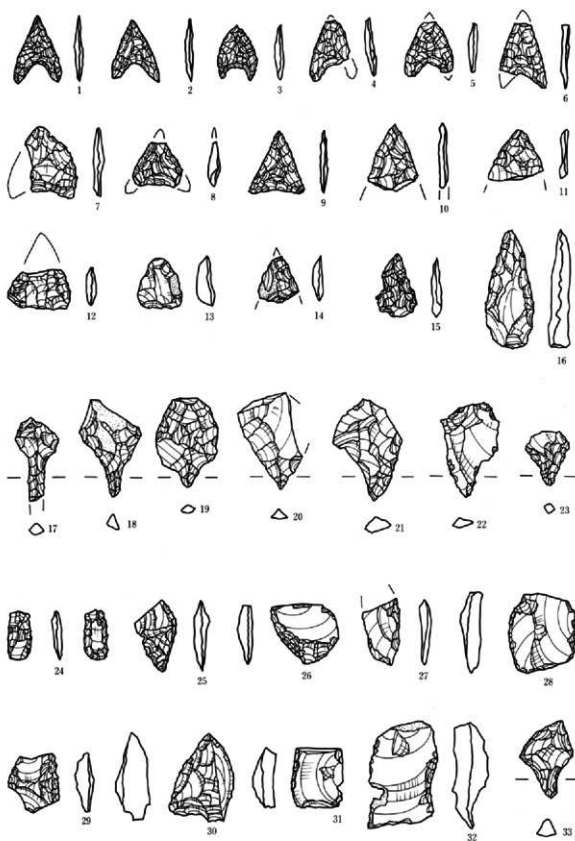


表5 26号住居跡出土石製品計測表

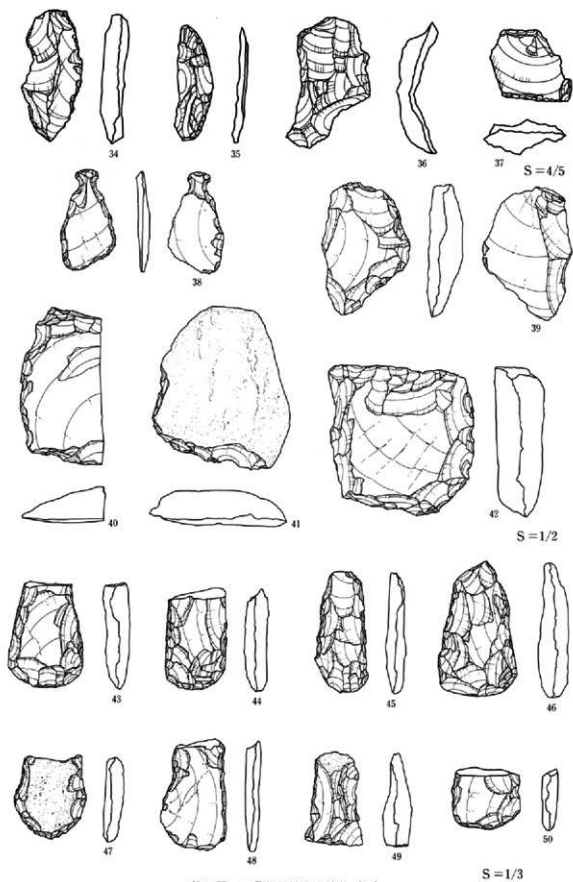
No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	垂れ飾り	滑石	2.9	1.4	0.7	3.5
2	垂れ飾り	蛇紋岩	2.6	1.9	0.4	1.8
3	玉	滑石	1.8	1.9	0.9	5.2
4	石製円盤	砂岩	4.3	4.4	1.3	29.0
5	石製円盤	砂岩	3.4	3.4	1.0	14.7
6	石製円盤	泥岩	3.4	3.4	1.4	15.3
7	垂れ飾り	砂岩	6.4	4.2	0.9	31.5

第47図 26号住居跡出土遺物 (35)



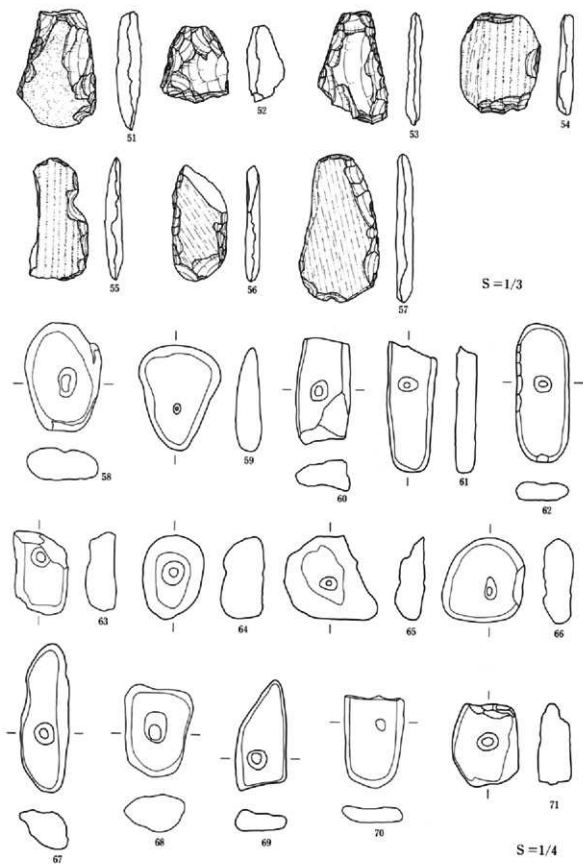
S=4/5

第48図 26号住居跡出土遺物 (36)

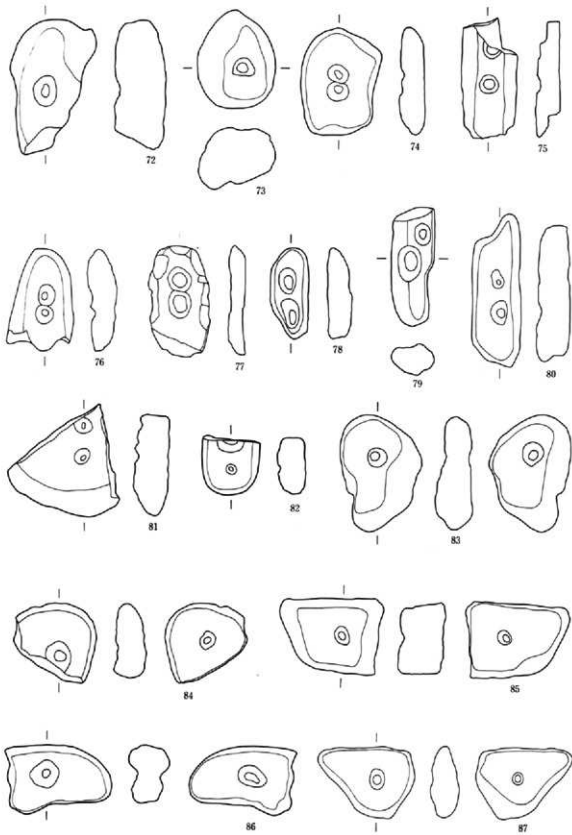


第49図 26号住居跡出土遺物 (37)

第3章 検出された遺構と遺物



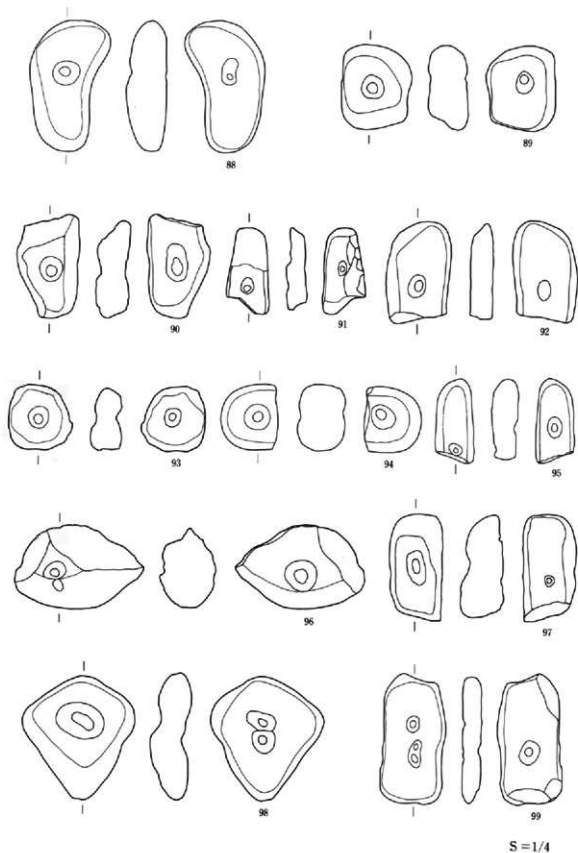
第50図 26号住居跡出土遺物 (38)



S=1/4

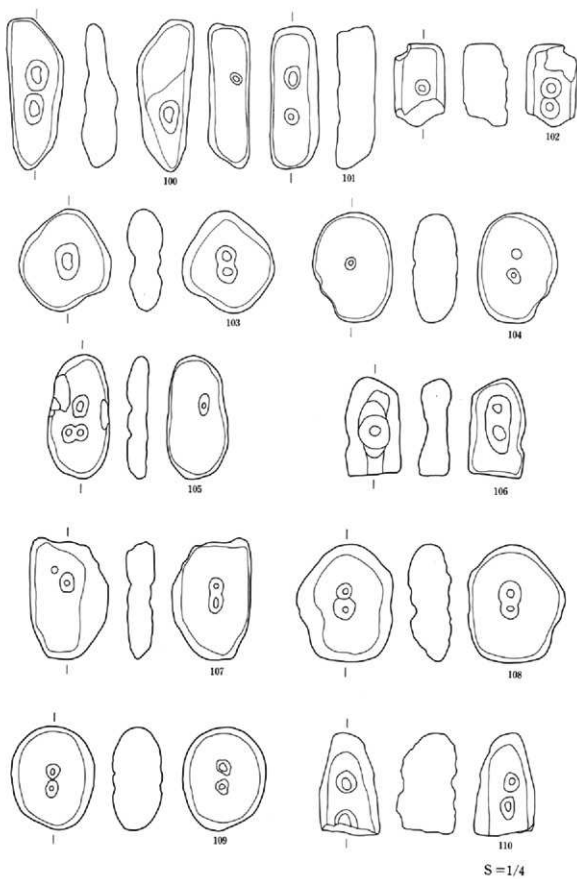
第51図 26号住居跡出土遺物 (39)

第3章 検出された遺構と遺物

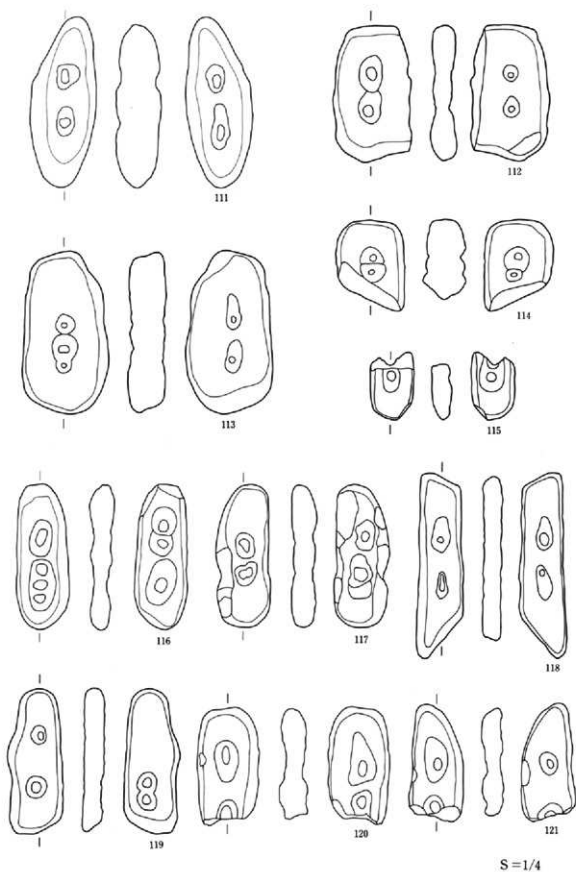


第52図 26号住居跡出土遺物 (40)

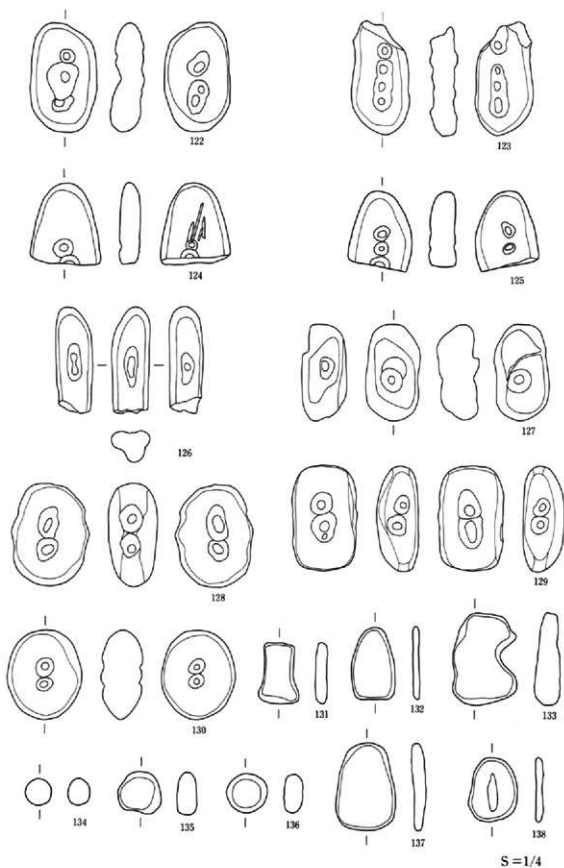




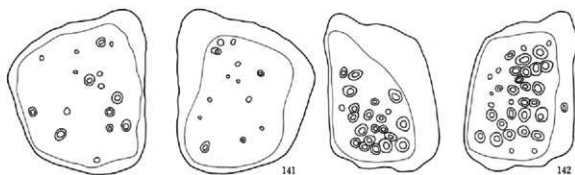
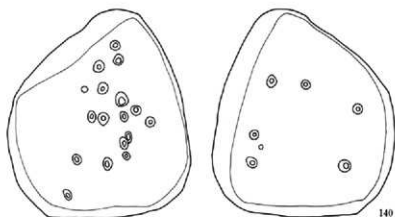
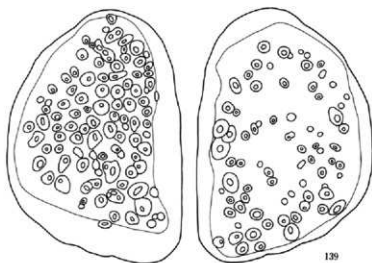
第53図 26号住居跡出土遺物 (41)



第54図 26号住居跡出土遺物 (42)

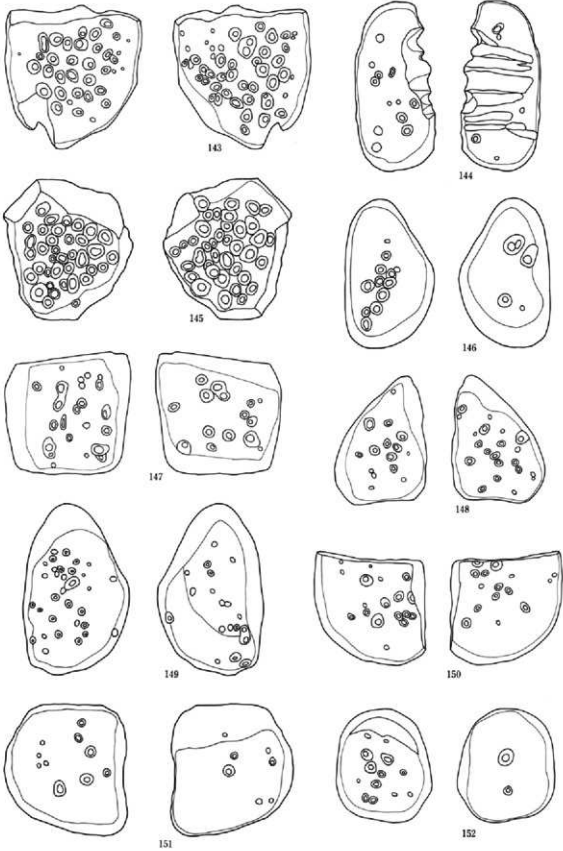


第55図 26号住居跡出土遺物 (43)



S=1/6

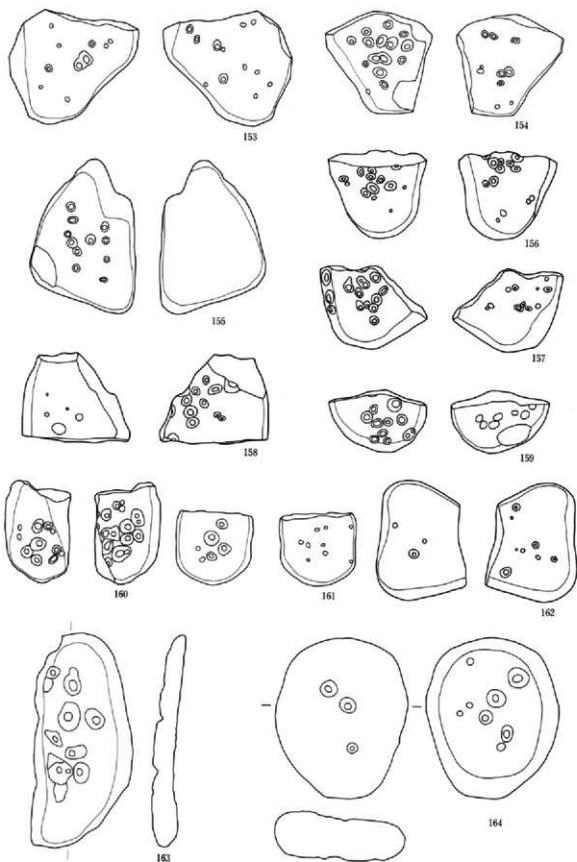
第56図 26号住居跡出土遺物 (44)



第57図 26号住居跡出土遺物 (45)

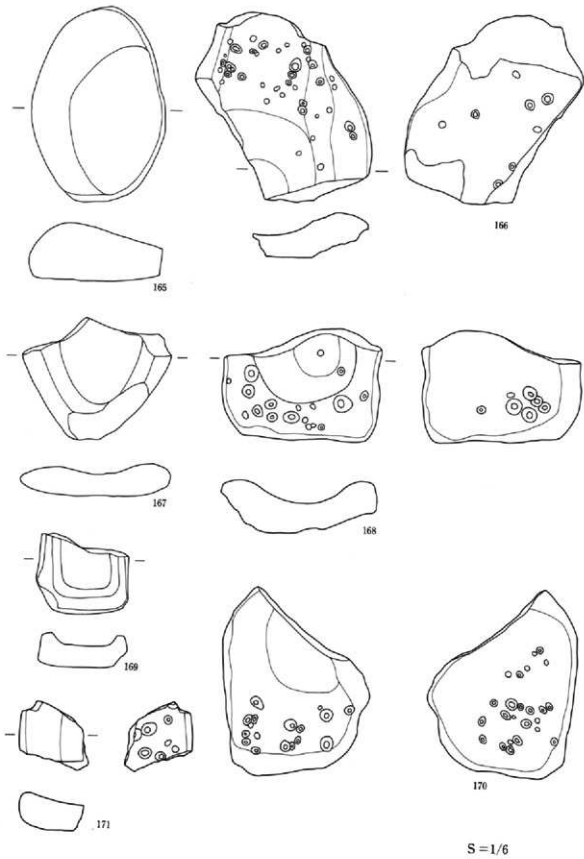
S=1/6

第3章 検出された遺構と遺物



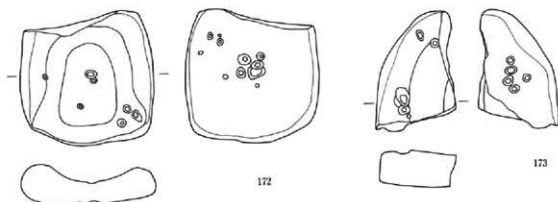
第58図 26号住居跡出土遺物 (46)

S=1/6



第59図 26号住居跡出土遺物 (47)

第3章 検出された遺構と遺物



第60図 26号住居跡出土遺物(48)

S=1/6

表6 26号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.3	0.5
2	石 鏃	黒曜石	2.1	1.6	0.3	0.4
3	石 鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5
4	石 鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.4	0.5
5	石 鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.7
6	石 鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.7
7	石 鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.4	1.0
8	石 鏃	黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.8
9	石 鏃	チャート	2.1	1.8	0.2	0.6
10	石 鏃	チャート	2.2	1.6	0.3	1.2
11	石 鏃	黒曜石	1.6	1.8	0.3	0.6
12	石 鏃	黒曜石	1.3	2.1	0.3	0.9
13	石 鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.6	1.2
14	石 鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.6
15	石 鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.3	0.7
16	石 鏃	珪質頁岩	3.8	1.6	0.7	4.0
17	石 鏃	チャート	2.7	1.4	0.7	1.7
18	石 鏃	黒曜石	3.2	2.1	0.9	3.2
19	石 鏃	チャート	3.0	2.1	0.9	4.1
20	石 鏃	チャート	3.1	2.2	0.4	2.6
21	石 鏃	黒曜石	3.4	2.3	1.5	6.4
22	石 鏃	黒曜石	3.1	1.9	0.4	1.6
23	石 鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.5	0.8
24	スレイバー	黒曜石	1.6	0.8	0.3	0.4
25	スレイバー	黒曜石	2.9	0.8	0.5	0.8
26	スレイバー	黒曜石	1.9	2.2	0.5	1.7
27	スレイバー	チャート	2.2	1.3	0.4	0.8
28	スレイバー	黒曜石	2.2	2.2	0.7	3.1
29	スレイバー	黒曜石	2.0	1.7	0.6	0.8
30	スレイバー	チャート	2.9	2.1	1.0	4.3
31	スレイバー	黒曜石	1.9	1.6	0.8	2.4
32	スレイバー	黒曜石	3.5	2.7	1.2	6.0
33	石 鏃	黒曜石	2.6	1.8	1.0	2.4
34	スレイバー	黒曜石	4.3	1.9	0.8	5.4
35	スレイバー	チャート	3.8	1.2	0.4	1.5
36	スレイバー	黒曜石	4.3	2.3	1.4	6.1
37	スレイバー	黒曜石	2.3	2.7	1.2	3.8
38	石 鏃	珪質頁岩	5.3	2.9	0.7	8.3

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
39	スレイバー	硬質泥岩	7.0	4.7	1.8	55.0
40	スレイバー	硬質泥岩	7.4	4.4	1.9	76.0
41	スレイバー	珪質頁岩	8.6	7.3	1.9	116.4
42	スレイバー	硬質泥岩	7.9	7.9	2.7	216.6
43	打製石斧	珪質頁岩	8.3	6.0	2.2	138.6
44	打製石斧	硬質泥岩	9.0	4.9	1.9	99.5
45	打製石斧	黒色頁岩	9.5	4.3	1.6	64.9
46	打製石斧	粗輝安山岩	10.6	6.3	2.4	180.0
47	打製石斧	粗輝安山岩	6.7	5.8	1.5	81.4
48	打製石斧	硬質泥岩	8.7	5.3	1.2	66.1
49	打製石斧	粗輝安山岩	7.4	4.8	2.3	69.3
50	打製石斧	珪質頁岩	4.8	5.5	1.3	50.3
51	打製石斧	硬質泥岩	9.3	6.4	2.0	130.0
52	打製石斧	硬質泥岩	6.0	5.5	3.0	93.0
53	打製石斧	珪質頁岩	8.9	5.1	1.2	57.9
54	石 鏃	緑色片岩	7.9	6.4	1.3	98.6
55	打製石斧	雲母石英片岩	9.6	4.3	1.4	71.8
56	打製石斧	緑色片岩	9.1	4.4	1.1	77.2
57	打製石斧	雲母石英片岩	11.6	6.4	1.4	145.9
58	凹 石	黒色片岩	8.3	11.4	3.4	430.0
59	凹 石	牛伏砂岩	11.2	8.8	2.8	243.0
60	凹 石	黒色片岩	11.3	5.8	3.3	250.0
61	凹 石	雲母石英片岩	13.9	5.3	2.2	250.0
62	凹 石	緑色片岩	14.7	5.8	2.0	300.0
63	凹 石	緑色片岩	8.9	5.7	3.2	255.0
64	凹 石	緑色片岩	9.0	6.4	4.5	415.0
65	凹 石	牛伏砂岩	8.9	9.9	3.1	250.0
66	凹 石	牛伏砂岩	8.8	8.5	3.0	280.0
67	凹 石	黒色片岩	15.7	5.2	4.1	455.0
68	凹 石	緑色片岩	7.4	9.8	4.0	415.0
69	凹 石	緑色片岩	5.5	11.6	2.3	210.0
70	凹 石	緑色片岩	9.9	6.4	1.8	195.0
71	凹 石	緑色片岩	8.8	7.1	3.5	360.0
72	凹 石	牛伏砂岩	14.4	9.2	5.5	665.0
73	凹 石	緑色片岩	8.4	10.4	6.5	700.0
74	凹 石	牛伏砂岩	11.4	8.5	2.3	300.0
75	凹 石	緑色片岩	12.7	5.9	2.6	260.0
76	凹 石	緑色片岩	10.9	7.1	3.1	300.0



## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)
77	凹石	緑色片岩	11.8	6.4	1.8	216.0
78	凹石	緑色片岩	9.7	4.2	2.8	160.0
79	凹石	黒色片岩	12.6	4.6	3.4	240.0
80	凹石	雲母石英片岩	16.3	5.2	3.6	450.0
81	凹石	緑色片岩	12.0	11.8	3.8	660.0
82	凹石	牛伏砂岩	6.5	6.1	3.0	145.0
83	凹石	黒色片岩	12.4	8.7	4.0	480.0
84	凹石	牛伏砂岩	8.3	8.8	3.4	245.0
85	凹石	緑色片岩	8.1	11.0	4.8	700.0
86	凹石	牛伏砂岩	7.3	11.4	4.3	370.0
87	凹石	黒色片岩	7.6	10.3	3.1	290.0
88	凹石	緑色片岩	13.9	8.5	4.3	640.0
89	凹石	緑色片岩	9.1	7.5	4.2	450.0
90	凹石	黒色片岩	11.1	6.6	3.6	380.0
91	凹石	緑色片岩	9.2	4.5	2.1	110.0
92	凹石	緑色片岩	10.8	6.9	2.5	325.0
93	凹石	牛伏砂岩	7.0	6.8	3.3	170.0
94	凹石	粗輝安山岩	7.0	6.0	5.0	285.0
95	凹石	黒色片岩	9.0	4.1	2.9	150.0
96	凹石	牛伏砂岩	9.0	13.6	6.0	650.0
97	凹石	黒色片岩	11.3	5.7	4.6	440.0
98	凹石	牛伏砂岩	13.2	12.0	4.2	590.0
99	凹石	緑色片岩	13.9	6.8	2.1	335.0
100	凹石	緑色片岩	16.1	6.0	3.7	530.0
101	凹石	黒色片岩	15.1	5.2	4.1	550.0
102	凹石	粗輝安山岩	8.8	5.4	4.9	330.0
103	凹石	緑色片岩	10.8	9.7	3.8	530.0
104	凹石	粗輝安山岩	11.6	8.4	4.7	700.0
105	凹石	緑色片岩	13.2	6.7	2.3	300.0
106	凹石	牛伏砂岩	10.4	5.9	3.3	245.0
107	凹石	緑色片岩	12.8	8.4	3.1	480.0
108	凹石	牛伏砂岩	12.5	10.3	4.6	685.0
109	凹石	デイサイト	11.0	8.8	5.2	690.0
110	凹石	緑色片岩	10.9	6.4	6.3	610.0
111	凹石	緑色片岩	18.0	6.9	4.7	790.0
112	凹石	牛伏砂岩	14.4	8.4	2.9	395.0
113	凹石	緑色片岩	17.3	9.2	4.2	985.0
114	凹石	緑色片岩	9.8	7.3	4.6	470.0
115	凹石	緑色片岩	7.2	4.7	2.2	120.0
116	凹石	緑色片岩	15.4	5.4	2.4	360.0
117	凹石	黒色片岩	15.1	5.8	2.7	325.0
118	凹石	黒色片岩	19.7	5.0	2.0	375.0
119	凹石	緑色片岩	15.4	5.8	2.3	390.0
120	凹石	雲母石英片岩	12.5	6.6	3.1	385.0
121	凹石	緑色片岩	12.6	5.8	2.3	260.0
122	凹石	黒色片岩	11.7	7.1	3.7	425.0
123	凹石	雲母石英片岩	12.0	6.0	2.9	300.0
124	凹石	緑色片岩	8.6	7.5	2.3	205.0
125	凹石	牛伏砂岩	8.6	6.7	2.9	180.0

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)
126	凹石	雲母石英片岩	11.3	4.1	3.4	220.0
127	凹石	緑色片岩	10.3	5.8	4.5	410.0
128	凹石	黒色片岩	10.9	8.3	5.2	590.0
129	凹石	粗輝安山岩	11.1	6.8	4.4	490.0
130	凹石	粗輝安山岩	9.6	7.8	4.4	450.0
131	凹石	牛伏砂岩	6.5	4.4	1.4	43.0
132	凹石	牛伏砂岩	7.8	4.6	0.7	40.0
133	凹石	牛伏砂岩	9.8	6.8	2.7	198.0
134	凹石	粗輝安山岩	2.8	2.8	2.4	19.0
135	凹石	牛伏砂岩	4.6	4.7	2.2	48.0
136	凹石	牛伏砂岩	4.2	4.4	2.1	40.0
137	凹石	牛伏砂岩	9.3	6.4	1.5	100.0
138	凹石	牛伏砂岩	6.9	5.2	0.9	38.0
139	多孔石	牛伏砂岩	40.0	27.7		15,150.0
140	多孔石	雲母石英片岩	32.6	28.0		12,200.0
141	多孔石	牛伏砂岩	26.5	22.3		8,250.0
142	多孔石	牛伏砂岩	25.0	18.1		5,800.0
143	多孔石	牛伏砂岩	22.1	21.6		3,950.0
144	多孔石	牛伏砂岩	27.3	12.7		2,690.0
145	多孔石	牛伏砂岩	22.6	20.4		4,150.0
146	多孔石	牛伏砂岩	24.0	14.5		3,410.0
147	多孔石	雲母石英片岩	19.0	20.0		7,700.0
148	多孔石	牛伏砂岩	20.4	14.6		2,830.0
149	多孔石	牛伏砂岩	26.7	16.7		5,000.0
150	多孔石	牛伏砂岩	17.7	17.6		2,780.0
151	多孔石	牛伏砂岩	21.0	19.8		3,950.0
152	多孔石	緑色片岩	18.0	15.4		3,800.0
153	多孔石	牛伏砂岩	18.5	20.8		1,645.0
154	多孔石	牛伏砂岩	16.2	17.0		1,870.0
155	多孔石	黒色片岩	24.7	17.2		3,200.0
156	多孔石	牛伏砂岩	14.0	15.5		1,395.0
157	多孔石	牛伏砂岩	13.0	17.1		1,350.0
158	多孔石	牛伏砂岩	14.2	16.7		1,550.0
159	多孔石	牛伏砂岩	10.0	16.0		990.0
160	多孔石	牛伏砂岩	16.2	10.4		1,480.0
161	多孔石	牛伏砂岩	11.7	12.1		730.0
162	多孔石	牛伏砂岩	19.0	13.7		1,675.0
163	多孔石	黒色片岩	22.7	10.4	2.8	880.0
164	多孔石	牛伏砂岩	17.1	14.1	5.1	1,450.0
165	石皿	雲母片岩	31.0	21.2	9.2	9,100.0
166	石皿	牛伏砂岩	30.2	28.6	7.3	4,800.0
167	石皿	牛伏砂岩	19.4	23.6	5.2	1,990.0
168	石皿	牛伏砂岩	17.7	25.0	8.7	3,850.0
169	石皿	粗輝安山岩	13.0	14.5	5.5	1,210.0
170	石皿	牛伏砂岩	29.7	23.5		5,550.0
171	石皿	粗輝安山岩	11.0	11.0	6.0	620.0
172	石皿	牛伏砂岩	20.8	21.5	6.3	3,300.0
173	石皿	牛伏砂岩	18.8	12.8	6.0	1,810.0

石器

出土した石器は、第48～60図に示すように、器種および量も豊富で173点を数えるが、図示できない剥片類の量は多量である。石鎌は黒曜石を石材とするものが多く16点、石錐は黒曜石とチャートを石材とし8点、スクレイパーは黒曜石・チャート・硬質泥岩を石材とし17点、珪質頁岩を石材とする石匙1点があり、さらに各種の石材を用いた打製石斧14点、凹石81点、多孔石26点、石皿9点がある。

27号住居跡（第11・61・62図 表7）

C区の台地の西側縁辺にあり、17・18—40グリッドに位置する。先の26号住居跡および28・35・40・41号住居跡・土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のもと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は26号住居跡よりも古く、28・35・40号住居跡よりも新しいものと考えられるが、28・40号住居跡との関係については不明な点もある。

住居の北側の大半を26号住居跡と重複しているため、残存するのは南側の一部分である。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われるが、定かではない。また、同様に重複する28号住居跡とは、僅かに段をもち、本住居床面の方が低い位置にあることが確認された。しかし、調査当初においては、重複している状況が解らなかつたため、出土した遺物の多くは28号住居と混在した部分がある。壁は南側で僅かに検出されただけであり、床面は堅く平坦である。炉跡は確認されていない。いくつかのピットが検出されているが、本住居に伴うかどうかは不明。

出土遺物は、先にも述べたように28号住居と混在した部分はあるが、第61・62図に示すものは、明らかに本住居内から出土した遺物で、次の通りである。

土器

1～3は胎土に繊維を含むもので、1は口縁以下に縄文を施すものであり、2・3は胴部に縄文を施すもの。3はLRとRLによる羽状縄文となるものである。

4～48は胎土に繊維を含まないもので、4・5は外反する口縁部に半截竹管により平行・斜位の沈線で文様を描くもの。6～8はやや内反気味となる口縁部に、刻みをもつ浮線で平行・曲線的な文様を描くもので、6は沈線による文様をもつもの。7・8の口舌部には、浮線によるX字状等の文様が施されている。9～13は胴部に爪形刺突をもつ平行沈線で文様が描かれるものであり、10～12は沈線間に刻みを有する。11には爪形刺突が充填される部分もみられる。14は胴部に地文縄文とし、半截竹管による斜行沈線を羽状に施すもの。15～31は胴部に刻みをもつ浮線で文様を描くものであり、地文に縄文が施されている。これらは、数条の浮線を平行に施すものが多いが、17・18のように平行な浮線間に波状等の浮線による文様を施すものもある。

32～47は口縁部および胴部に縄文のみが施されるもので、33は平口縁となる口舌部に縦の浮線が施されるもの。34・35も、平口縁となるものである。施される縄文は、RLないしLRの縄文であるが、47は結束による羽状縄文が施されている。

48は器厚がかなり薄い土器で、胴部に大きい爪形による密な連続刺突により文様を描くもので、他の出土土器に比べ、異なる様相の土器である。

石器

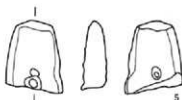
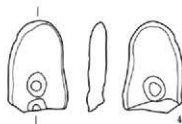
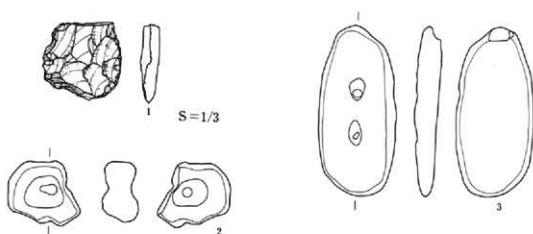
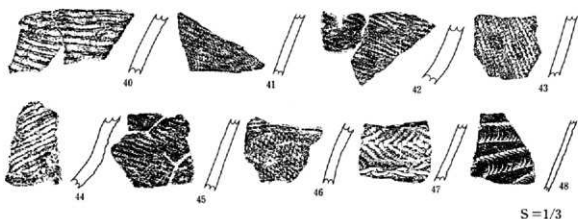
出土した石器には、第62図下段に示すごとく、上端を欠損する珪質頁岩製の打製石斧1点、片面ないし両面に凹孔を有する凹石が4点ある。この他にも、剥片類は多く存在する。



S=1/3

第61図 27号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



S=1/4

表7 27号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	打製石斧	珉質頁岩	6.2	5.3	1.5	67.0
2	凹石	牛伏砂岩	7.0	7.7	4.0	205.0
3	凹石	緑色片岩	18.1	8.2	2.5	650.0
4	凹石	緑色片岩	9.8	6.3	2.0	195.0
5	凹石	雲母石英片岩	7.7	6.0	2.7	165.0

第62図 27号住居跡出土遺物(2)

## 28号住居跡 (第11・63～69図 表8)

C区の台地の西側縁辺にあり、17・18—40グリッドに位置する。先の26・27号住居跡および35・40・41号住居跡・土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のもと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は、26・27号住居跡よりも古く、35・40号住居跡よりも新しいものと考えられるが、27・40号住居跡との関係については不明な点もある。

住居の北側の大半を26・27号住居跡と重複しているため、残存するのは南側の一部分である。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われる。また、重複する27号住居跡とは、僅かに段をもち、本住居床面の方が高い位置にあることが確認された。しかし、調査当初においては、重複している状況が解らなかったため、出土した遺物の多くは27号住居と混在した部分がある。さらに、35号住居跡とも同様に、床面が段差により区分できた。壁は、南側で35号住居跡を切るように検出され、東側でも一部が検出されている。残存する床面は、堅く平坦である。炉跡は確認されていない。いくつかのピットが検出されているが、本住居に伴うかどうかは不明。

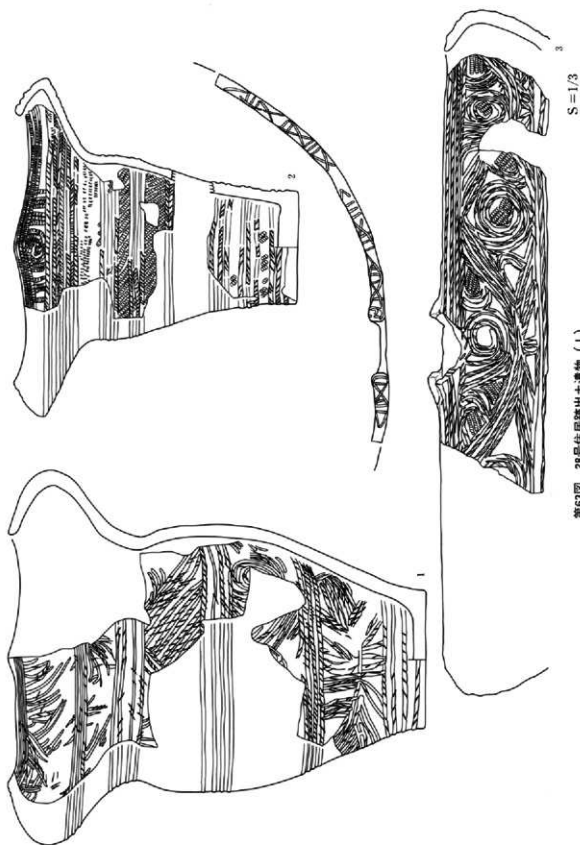
出土遺物は、先にも述べたように27号住居と混在した部分はあるが、第63～69図に示した。遺物については、次の通りである。

## 土器

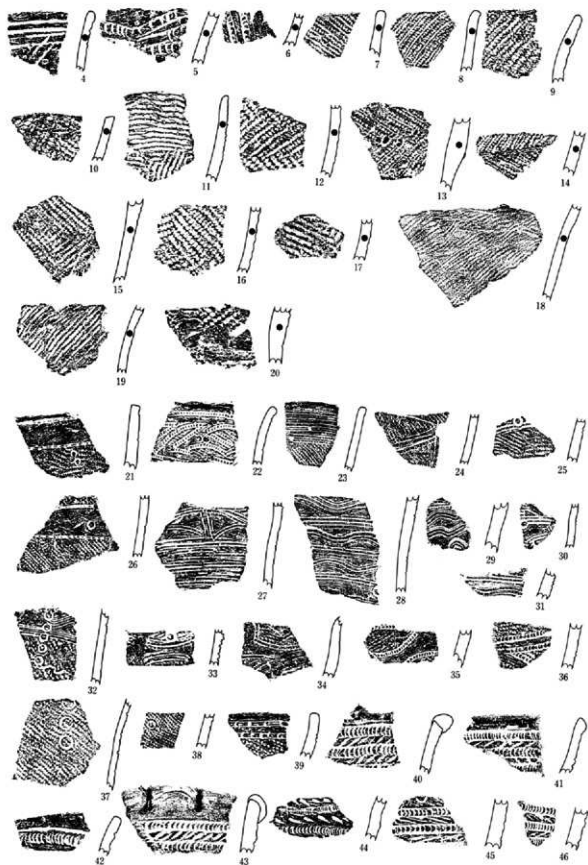
1は波状口縁となり、口縁が大きく内反し、頸部がくびれ、胴部がやや膨らむ深鉢となるもので、キャリパー状の器形を呈する。施文される文様は、刻みをもつ浮線によるもので、口縁から底部に至る間に、5段の文様区画を成すように数条の平行な浮線を巡らせる。各区画内には、渦状・弧状等の曲線的な文様が施される。2は波状口縁となり、口縁部が靴先状に大きく内側へ屈曲し、頸部がくびれ、胴部上半が僅かに膨らむ深鉢となる。施文される文様は、刻みをもつ浮線によるもので、口縁下に3条巡り、波頂下に渦状および両側に弧状の文様を描く。頸部に端数状の浮線が巡り、頸部下には浮線を伴わない爪形刺突が3条ほど巡る。胴部は地文縄文とし、3条を単位とする浮線が数段巡っている。3は平口縁となり、口縁が大きく内反する大形の深鉢を呈する口縁部で、口舌部に4単位の獣面突起が付いていたものと考えられるが、剥落している。施文される文様は、突起下を中心に、渦状・弧状等の曲線的な文様が組み合わされて施文されている。地文には、縄文を施している。

4～20・39は胎土に繊維を含むものである。4は口縁部に半葎竹管による平行沈線を巡らせ、その下に菱形の文様を描くものである。5・6は頸部に半葎竹管による平行沈線で菱形を描き、沈線内には爪形刺突を施すものである。7～20は口縁以下および胴部に縄文を施すもので、7～11は口縁部片である。施文される縄文は、11・18・19は無節が用いられ、7・8・12～14は1本ないし2本を附加させた附加条縄が使われている。12～17は羽状縄文となるものである。39はやや内反する平口縁となるもので、口縁下に細い半葎竹管による平行沈線を2条巡らせ、沈線内に爪形刺突をもち、以下に縄文を施すものである。

21～38・40～140は胎土に繊維を含まないものである。21～23は口縁部片で、21は口縁下に細い半葎竹管により間隔のある2条の平行沈線を巡らせ、沈線内に爪形刺突を加える。沈線間は無文帯となり、胴部には縄文が施されると共に、円形刺突をもつ。22は口縁下に細い半葎竹管により平行沈線を巡らせ、沈線内に爪形刺突を加える。その下には、同様の爪形をもつ平行沈線で、木葉文を描くと共に円形刺突をもち、地文に縄文を施している。23は口縁下に数条の平行沈線を巡らせ、以下に縄文を施す。24～26は胴部に地文縄文とし、細い半葎竹管により文様を描くもので、爪形刺突を加えるものや、円形刺突をもつもの等がある。28～32は半葎竹管により4条を単位とする沈線で平行・波状の文様を描き、28・32には円形刺突がみられ、胴部下半



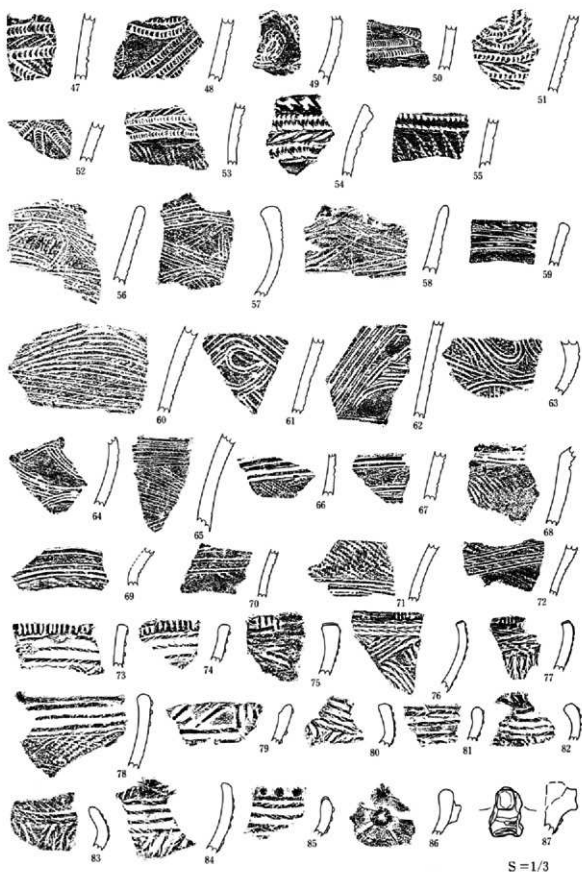
第63図 28号住居跡出土遺物(1)



第64図 28号住居跡出土遺物(2)

S=1/3

第3章 検出された遺構と遺物



S=1/3

第65図 28号住居跡出土遺物(3)

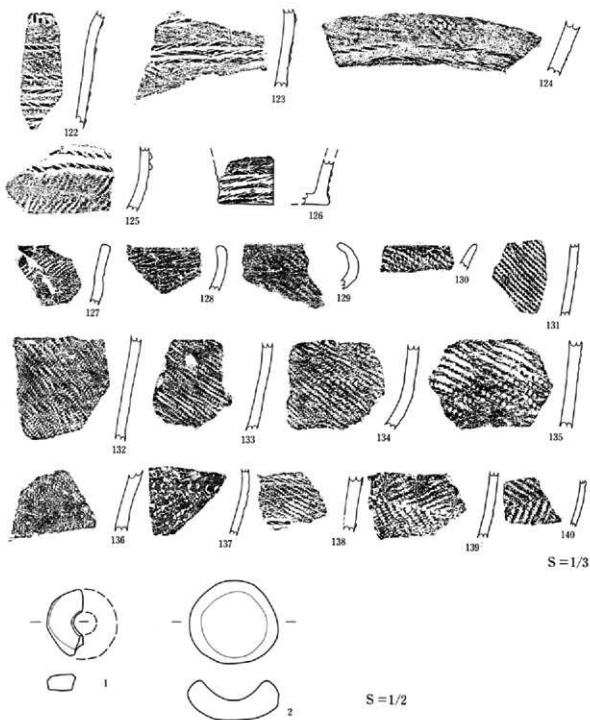




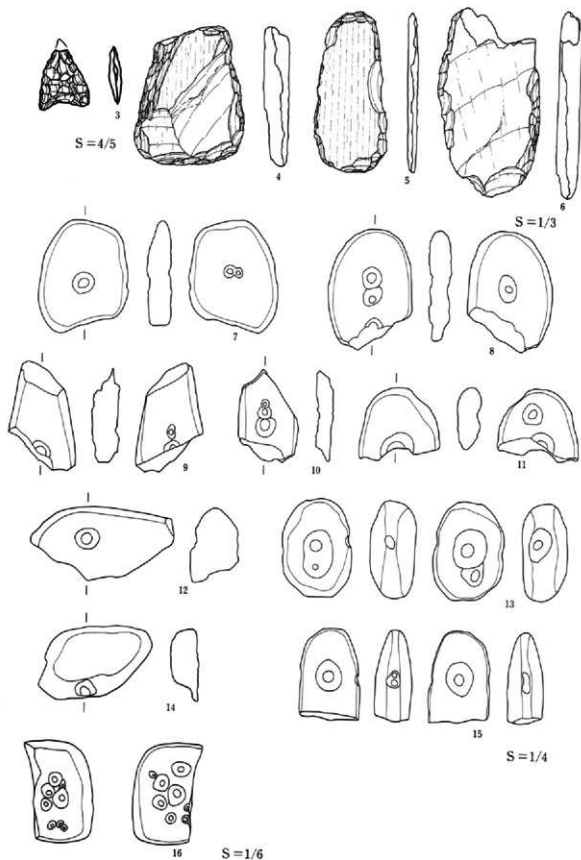
第66図 28号住居跡出土遺物(4)

S=1/3

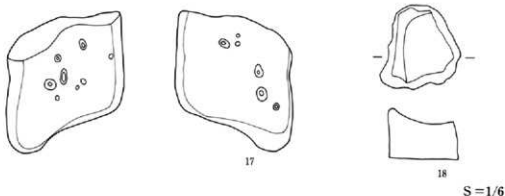
第3章 検出された遺構と遺物



第67図 28号住居跡出土遺物(5)



第68図 28号住居跡出土遺物(6)



第69図 28号住居跡出土遺物(7)

表8 28号住居跡出土石器計量表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	耳飾り	砂岩	3.5	2.0	0.8	5.3
2	石製品	砂岩	4.4	4.8	2.1	38.7
3	石鏃	チャート	1.9	1.7	0.4	1.2
4	打製石斧	黒色片岩	11.0	8.7	2.0	256.1
5	打製石斧	黒色片岩	12.6	5.9	0.8	75.0
6	打製石斧	緑色片岩	14.7	8.2	1.8	311.7
7	凹石	牛伏砂岩	12.2	9.5	2.6	320.0
8	凹石	雲母石英片岩	12.8	8.8	2.4	350.0
9	凹石	雲母石英片岩	11.5	6.7	2.8	265.0

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
10	凹石	緑色片岩	9.8	6.5	1.8	160.0
11	凹石	牛伏砂岩	7.7	8.5	2.5	170.0
12	凹石	牛伏砂岩	15.1	7.8	5.1	500.0
13	凹石	牛伏砂岩	10.5	7.0	4.8	360.0
14	凹石	黒色片岩	11.8	7.8	3.0	310.0
15	凹石	粗麻安山岩	9.7	6.4	3.7	260.0
16	多孔石	牛伏砂岩	16.2	10.4		1,200.0
17	多孔石	雲母石英片岩	22.0	18.3		4,150.0
18	石皿	牛伏砂岩	13.3	13.0	7.7	1,330.0

には縄文が施されている。33~36は細い半裁竹管により木葉文等の文様が描かれるもので、円形刺突が加えられる33や、爪形刺突をもつ35・36があり、文様の区画内には縄文がみられる。

40~53は口縁部から胴部上半に爪形文および刻みにより文様を描くもので、40~43は口縁部片であり、40・43の口縁には小突起をもつ。54は爪形文および刻みにより同様の文様を描くものであるが、爪形は支点を交互にする変形爪形文が用いられ、他の爪形とは異なるものである。55も同様の変形爪形文をもち、胴部下半にはアナグラ属の貝殻腹縁文が施されるものである。

56~72は口縁部位下に、半裁竹管による沈線のみで文様が描かれるものである。56~58の口縁部には、平行および弧状の文様が描かれ、61~65の胴部にも弧状等の曲線的な文様が描かれている。66~72の胴部には、平行沈線が巡るものである。この内、62・64は地文をもたないが、それ以外は地文に縄文を施している。

73~126は浮線により文様が描かれるもので、73・74の口舌部には刻みをもち、75~77の口舌部には浮線によるX字状の文様が描かれる。浮線による文様は、平行および渦状・弧状の曲線的な文様であり、口縁部だけではなく、97のように胴部にも描かれるものがある。また102~126にみられるように、胴部以下には平行な浮線が数条単位で数段にわたって施されている。なお、浮線には斜位の刻みを有するものや、八字状の刻みを有するもの、縄文を有するもの等がある。78は浮線と共に沈線による文様が描かれるものであり、86の波状口縁となる波頂下には円形の瘤状突起が貼付されている。87は断面突起となるものである。

127～140は口縁部以下の胴部に縄文が施されるものであり、139には結束による羽状縄文が施されている。140は器厚のかなり薄いもので、結束ではない羽状縄文が施されているものである。

67図下段の1・2は石製品であり、1は中央に孔を有するもので、扶杖耳飾りないし垂れ飾りとなるものである。2は片面が大きく凹状にくぼむものである。

#### 石器

出土した石器には、第68・69図に示すごとく、チャートを石材とする石鏃1点、片岩製の打製石斧3点、片面ないし両面に凹孔を有する凹石が9点、多孔石2点、石皿1点がある。この他にも、剥片類は多く存在する。

#### 35号住居跡（第11・70～72図 表9）

C区の台地の西側縁辺にあり、17・18—40グリッドに位置する。先の26・27・28号住居跡および40・41号住居跡・土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のもと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は、26・27・28号住居跡よりも古く、40・41号住居跡との関係については不明。

住居の北側の大半を27・28号住居跡と重複しているため、残存するのは南側の一部分である。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われる。また、重複する28号住居跡とは、僅かに段をもち、本住居床面の方が高い位置にあることが確認された。しかし、調査当初において、出土した遺物の一部に28号住居と混在した部分がある。壁は、南側で41号住居跡と重複していることから不明。残存する床面は、堅く平坦である。炉跡は確認されていない。住居内の周囲には周溝が巡っており、この周溝から住居規模が想定されよう。また、いくつかのピットが検出されており、本住居に伴うものも存在すると考えられるが、特定はできない。

出土遺物は、床面近くから繊維土器が主体の出土しており、無繊維土器は28号住居との混在の可能性が高い。遺物については、次の通りある。

#### 土器

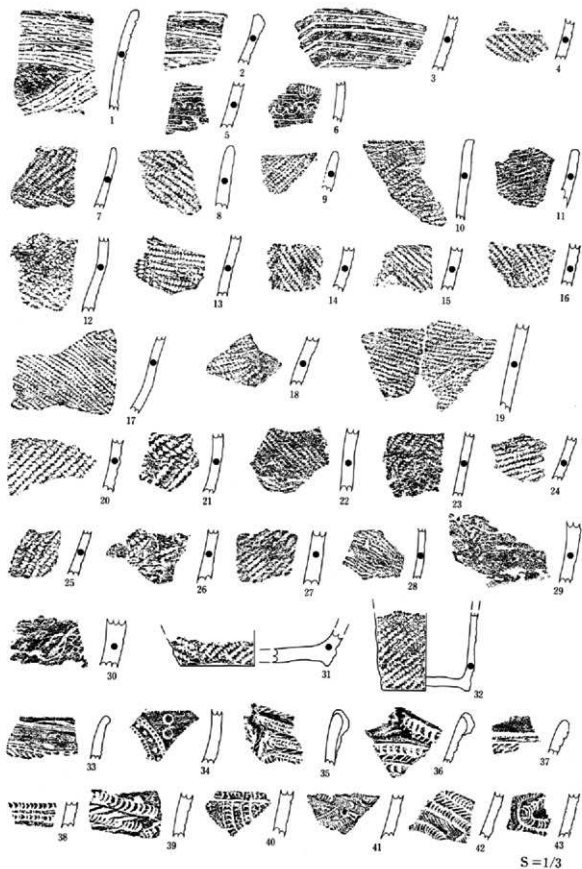
1～32は胎土に繊維を含むものである。1は波状口縁となる口縁部に半裁竹管による平行沈線を数条巡らせ、その下に菱形の文様を描くもので、2は平口縁となるが同様の文様を描くものである。3も口縁部に菱形文を描くもので、4は平行沈線内に爪形刺突を加え、胴部に縄文を施すものである。5・6は口縁部ないし胴部に、半裁竹管による平行沈線およびコンパス文で文様を描くもの。7～32は口縁部以下および胴部に縄文を施すものであり、15・28には無節の縄文が、9・17には1本附加の附加糸縄が用いられている。また、7・12～15・31は羽状縄文が施されるものであり、31・32の底部はやや上げ底気味となるものである。

33～63は胎土に繊維を含まないものである。33は平口縁となる口縁下に細い半裁竹管による平行沈線を巡らせ、沈線内に爪形刺突をもつ。34は沈線内に爪形刺突をもつ平行沈線で曲線的な文様を描くと共に、列点刺突および円形刺突をもつもの。35～43は口縁部から胴部に、爪形文と刻みにより平行および曲線的な文様を描くものである。44は口舌部に刺突をもち、口縁部に地文縄文とし、半裁竹管により弧状等の文様を描くもの。45は獣面突起である。46～51は刻みをもつ浮線で文様を描くもので、46は平行な浮線間に曲線的な文様をもつもの。47～51は数条を単位とする浮線を平行に施すものであり、いずれも地文に縄文をもつ。

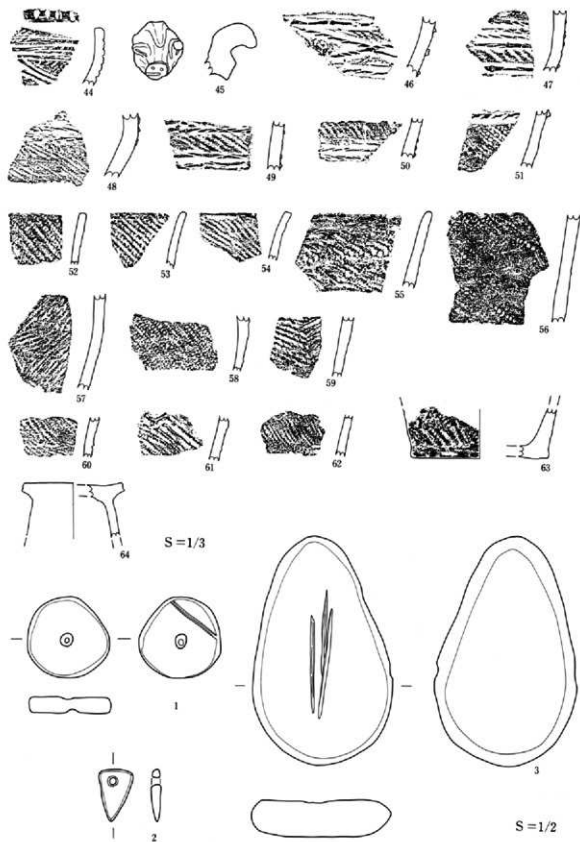
52～63は口縁以下および胴部に、縄文を施すものである。

64は混入と考えられる古墳時代初頭の土器で、台付土器の脚部である。

第71図下段の1～3は、石製品である。1は中央に孔とならない凹を両面にもつもので、扶杖耳飾りない



第70図 35号住居跡出土遺物(1)



第71図 35号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

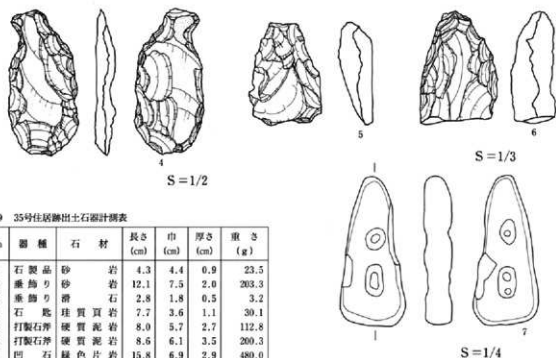


表9 35号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石製品	砂岩	4.3	4.4	0.9	23.5
2	垂飾り	砂岩	12.1	7.5	2.0	203.3
3	垂飾り	滑石	2.8	1.8	0.5	3.2
4	石匙	珪質頁岩	7.7	3.6	1.1	30.1
5	打製石斧	硬質泥岩	8.0	5.7	2.7	112.8
6	打製石斧	硬質泥岩	8.6	6.1	3.5	200.3
7	凹石	緑色片岩	15.8	6.9	2.9	480.0

第72図 35号住居跡出土遺物(3)

し垂れ飾り類の未製品と考えられる。2は三角形に研磨・整形され、孔をもつもので、ペンダント状の垂れ飾りである。3は片面に溝を有するものである。

石器

出土した石器は、第72図に示す4点と比較的に少なく、石匙1点、打製石斧2点、両面に2箇所の凹孔をもつ凹石1点である。

40号住居跡(第11・73図 表10)

C区の台地の西側縁辺にあり、17・18-40グリッドに位置する。先の26・27・28号住居跡、302号土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のもと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は、26・27・28号住居跡よりも古いことが確認されている。

住居のほぼ中央に26号住居跡、南側に27・28号住居跡と重複しているため、残存するのは東・北・西側の一部分である。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われる。壁は、残存する三方で検出されている。残存する床面は、壁周辺だけであり、平坦である。炉跡は確認されていない。

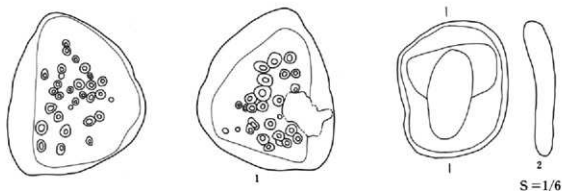
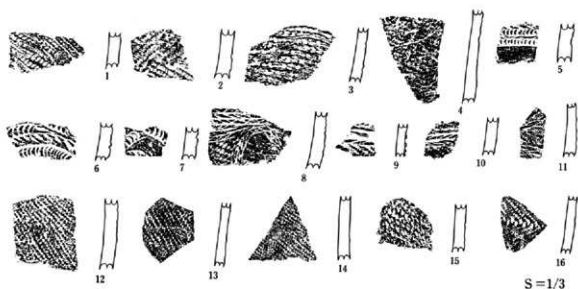
出土遺物は僅かであり、第73図に示すごとくで、遺物については、次の通りある。

土器

1～4は胎土に繊維を含むもので、胴部に縄文を施すもの。1は附加条縄が用いられ、2は羽状縄文となる。

5～16は胎土に繊維を含まないもので、5～7は胴部に爪形文と刻みにより平行および曲線的な文様が描





第73図 40号住居跡出土遺物

表10 40号住居跡出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	多孔石	黑色片岩	25.5	22.0		5,900.0
2	石皿	牛伏砂岩	21.0	17.4	4.8	1,675.0

### 第3章 検出された遺構と遺物

かれるもの。8～11は刻みをもつ浮線により文様を描くもので、8には弧状の曲線的な文様がみられる。9～11は平行な浮線が数条巡らされている。12～16は胴部に縄文が施されるもので、16は結束による羽状縄文である。

#### 石器

出土した石器は、第73図下段に示す大形の多孔石1点と、石皿1点の計2点である。

#### 41号住居跡（第11図）

C区の台地の西側縁辺にあり、17・18—40グリッドに位置する。先の26・27・28・35・40号住居跡と重複しており、出土遺物等から縄文時代のものと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は、26・27・28号住居跡よりも古いものと考えられるが、35号住居跡との関係については不明。

住居の北側の大半を35号住居跡と重複し、35号住居跡の南側周溝の南側に一部分が残存するだけである。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われる。この重複する35号住居跡とは、床面が同一面となっており、それぞれの周溝の方向の違いから異なる住居跡と断定した。しかし、新旧関係も不明であることから、同一住居の拡張の可能性もある。壁は、南側で検出されており、45cmを測る。残存する床面は平坦であり、炉跡は確認されていない。住居内の周囲には周溝が巡っており、この周溝から住居規模が想定されよう。また、柱穴については、35号住居跡との関係もあり、本住居に伴うものの特定はできない。

遺物の出土は、見られなかった。

#### 59号住居跡（第74・75図）

本住居跡は、東側台地の中世城郭外堀の西側平坦面にあり、7・8—51グリッドに位置し、60号住居と重複し、61号住居跡の北西側に隣接してある。また住居の北側には、242号土坑が隣接している。重複する60号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が新しい。

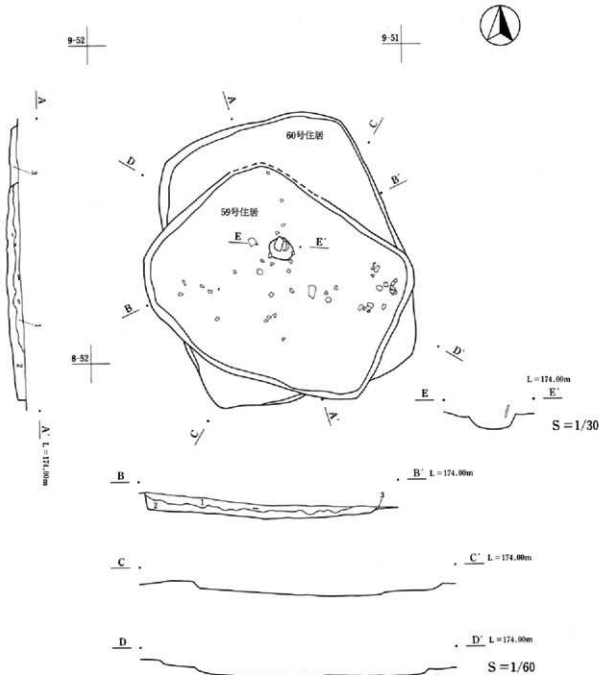
平面形は、長軸3.8m、短軸3.0mを測るやや不整な隅丸長方形を呈している。長軸方向は、南東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平をうけているが、以外に残存状態は良好で、壁高は最大で25cmほどを測る。床面は平坦ではあるが中央部がやや低く、中央部を中心に硬くしまった面を確認することができた。炉跡は、長軸上の中央より西寄りに、やや窪んで焼土を伴い検出されている。柱穴は、検出されなかった。

出土遺物は少なく、覆土および床面上に散漫に分布する。土器は小片が多く、第75図に示したものは、炉跡から出土したものである。遺物については、次の通りである。

図示した土器は、2個1対となる把手をもつ深鉢となるもので、把手部にV字状の隆帯をもち、口縁部には押し引き状の沈線が巡り、把手の右側には波状となる隆帯を一部にもつ。その下には、押し引き状の沈線が籠状ないしクランク状に把手下に配され、併せて短く垂下する隆帯を添わせている。胴部には指頭圧痕による凹凸を、横位に数段もち、胴部中央には押し引き状沈線が1条巡っている。また、裏面口縁部には、把手部およびその左側に波状の隆帯がみられる。

#### 60号住居跡（第74図）

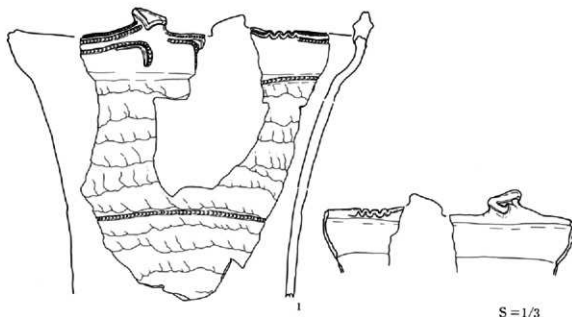
本住居跡は、東側台地の中世城郭外堀の西側平坦面にあり、7・8—51グリッドに位置し、59号住居と重複し、61号住居跡の北西側に隣接してある。また住居の北側には、242号土坑が隣接している。重複する59号



59・60号住居跡土層

- 1 褐色土 ローム粒・炭化物を少量・白色硬質軽石（二次堆積ローム下の土に近似）を多量に含む。硬質。
- 2 淡い褐色土 ロームブロック多量に含む。硬質。
- 3 淡い褐色土 2層に近似（60号住居）。

第74図 59・60号住居跡平面図



第75図 59号住居跡出土遺物

住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が古い。この59号住居跡は、本住居の中央部に重複し、本住居より掘り込みが深いため、本住居の残存状態はきわめて悪い。

平面形は、長軸4.4m、短軸3.6mを測り、59号住居より一回り大きい隅丸長方形を呈している。長軸方向は、南南東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平をうけているため薄く、壁高は最大で10cmほどを測る。床面は平坦な、やや硬くしまった面を確認できた。炉跡は、59号住居と重複しているため不明。柱穴等も、検出されなかった。

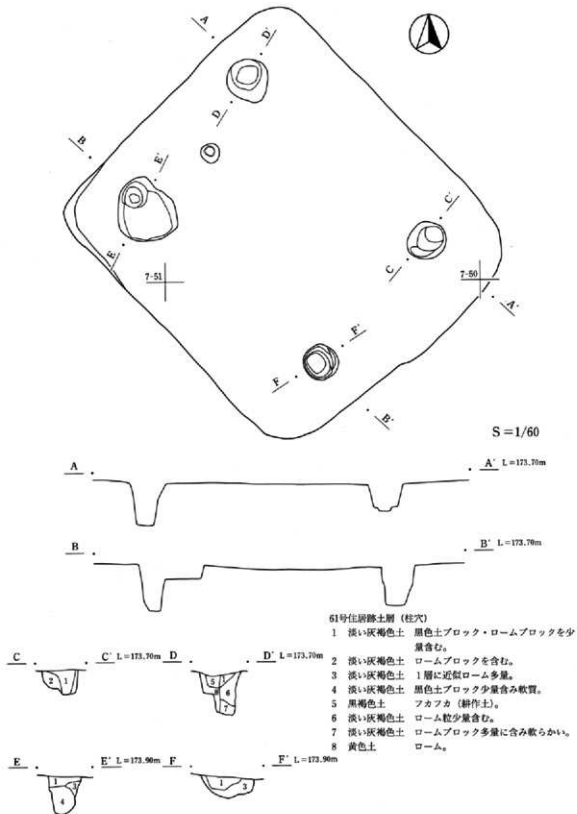
遺物等の出土はみられなかった。

#### 61号住居跡（第76・77図）

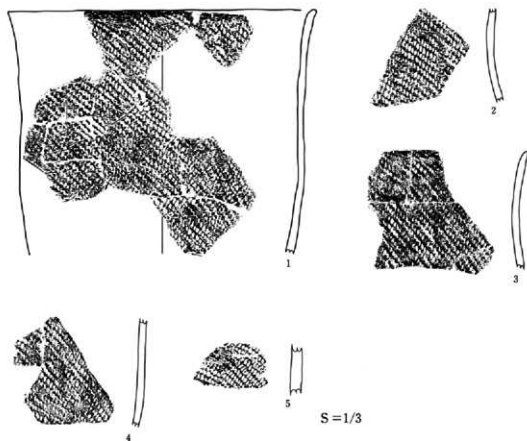
本住居跡は、東側台地の中世城郭外堀の西側平坦面にあり、6・7—50・51グリッドに位置し、59・60号住居跡の南東側に隣接してある。また住居の西側には、680号土坑が隣接している。住居覆土の大半が、中世城郭造成時の削平をうけ、残存状況は悪い。

平面形は、長軸5.7m、短軸5.0mを測る隅丸長方形を呈している。長軸方向は、南東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平をうけ、わずかに残存する西側の壁高は6cmほどを測る。床面は東側の3分の2ほどが削平をうけており、残存する西側部分で平坦なしまった面を確認することができた。炉跡は、長軸上の中央より西寄りに、埋壺炉が検出されている。柱穴は、住居の対角線上の比較的隅に寄った位置に、4本検出されている。なお西側の柱穴位置には、円形の土坑が伴っている。

出土遺物は少なく、第77図1に示したものは、埋壺炉に使用したもので、およびその周辺から出土したものである。遺物については、次の通りである。



第76図 61号住居跡平面図



第77図 61号住居跡出土遺物

土器

1は平口縁となり、頸部がややくびれる深鉢となるもので、口縁以下にRLの縄文を施すものである。2～4は、1と同一個体となる口縁部および胴部片である。5は胎土に繊維を含む胴部片で、RLの縄文を施すものである。

石器

図示できる定型な石器の出土はなかったが、剥片類が僅かに出土している。

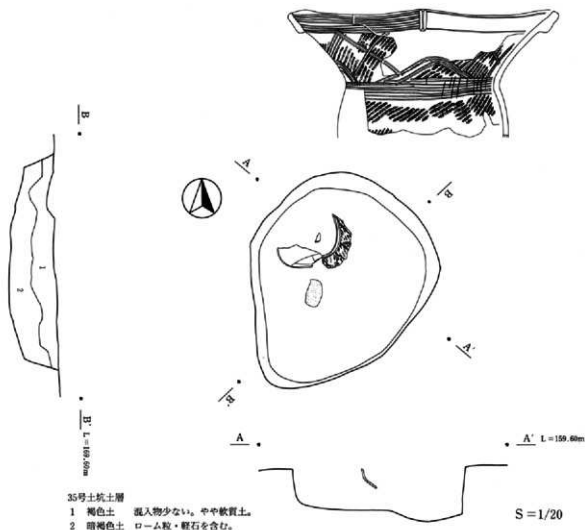
## 2. 土 坑

検出された土坑は、全体で800基余を数えるが、このうち堆積土・出土遺物等から明らかに縄文時代の所産と考えられるものは81基である。後述する不明土坑として扱った中でも、縄文時代の遺物を出土させている土坑が存在するが、共存する遺物に異なる時代のものを含むため、本項とは分別して扱うこととした。また、遺物を出土させていない縄文時代の土坑の存在も考えられるが、他の時代のものと区別が難しい為、不明土坑の項で扱っている。

なお、各土坑の遺構説明については、土坑一覧表として表11に示す通りであり、ここでは主な土坑についての記載にとどめ、各土坑出土の遺物について記すこととする。

## 35号土坑（第78図）

東側台地の東側寄り（B区）で、16-26グリッドに位置する。中世城郭により削平を受けているが、残存状態は比較的に良好である。平面形は長軸1.15m、短軸0.93mを測る不整形円形を呈し、深さは29cmを測る。



### 第3章 検出された遺構と遺物

出土した遺物は、第89図に示した大形の深鉢土器の半完形が1点のみで、覆土中の底面近くから出土している。土器から、縄文時代前期中葉の所産と考えられる。

#### 745号土坑（第80図）

東側台地の西側寄り（C区）で、12-40グリッドに位置する。中世城郭により削平を受けているが、残存状態は比較的に良好である。平面形は長軸2.93m、短軸2.44mを測る楕円形を呈し、深さは44cmを測る。出土した遺物は、第90図6・7に示した土器で、覆土中の底面近くから出土している。土器から、縄文時代中期後半の所産と考えられる。

#### 770号土坑（第79図）

東側台地の中央部（C区）で、11-41グリッドに位置する。中世城郭により削平を受けているが、残存状態は比較的に良好である。他の土坑と重複していることから南側が不明であるが、平面形は円形ないしは楕円形を呈しているものと思われ、深さは44cmを測る。出土した遺物は、第91図に示した大形の深鉢土器で、覆土中の中位から出土している。土器から、縄文時代中期前半の所産と考えられる。

#### 774号土坑（第80図）

東側台地の中央部（C区）で、13-38グリッドに位置する。26号住居跡の南側にある。中世城郭により削平を受けているが、残存状態は比較的に良好である。平面形は径1.33mを測る円形を呈し、深さは44cmを測る。出土した遺物は、第107図に示した土器片が少量であるが、覆土中からは多くの大形の礫がみられた。

#### 土坑出土遺物

##### 4号土坑（第92図）

胴部の小破片である。胎土に繊維を含み、縄文を地文とし、太い沈線を施す。

##### 7号土坑（第92図）

胴部の小破片である。胎土に繊維を含み、斜位に回転絡条体を施す。

##### 8号土坑（第92図）

1・2は、胴部に刻みをもつ浮線隆帯を数条巡らせるもの。3は平口縁片で、口縁以下にRLの縄文を施す。4は胎土に繊維を含み、胴部にLRの縄文を施す。

##### 10号土坑（第92図）

胎土に繊維を含み、胴部にRLとLRによる羽状縄文を施す。

##### 11号土坑（第92図）

頸部から胴部にかけて、半截竹管による平行沈線が数条巡らされ、円形刺突を縦位に施す。頸部上半には、半截竹管による鋸歯状の文様が施されるようである。



## 18号土坑 (第92図)

やや内反する波状ぎみの口縁部片で、口縁部に1条の沈線を巡らせ、以下にLRとRLによる羽状縄文を施す。

## 22号土坑 (第92図)

胎土に繊維を含む平口縁部片で、口縁以下にLRの縄文を施す。

## 23号土坑 (第92図)

1・2・11・12は、胎土に繊維を含む。1は、口縁部に半裁竹管による平行沈線を巡らせ、沈線上に爪形刺突を施す。2は、頸部に太い半裁竹管による平行沈線を巡らせたもの。11・12は、胴部に縄文を施すもので、11はLを、12はRLによるものである。3は縄文を地文とし、円形刺突を縦位に施したものである。4は口縁部に刻みをもつ浮線隆帯で文様を描くものであり、5・4は胴部に同様の浮線隆帯を数条巡らせるもの。7は集合沈線を施すもの。8は、波状口縁となる口縁に隆帯を巡らせ、波頂下にも隆帯を垂下させるもの。9は無文の胴部であり、10は胴部に結節縄文を施したものである。

## 25号土坑 (第92・108図 表12)

胎土に繊維を含むものには、4・7・9があり、いずれも胴部に縄文を施すもので、9は羽状縄文が施される。1は口唇部に刻みをもち、口縁部に爪形刺突を2条巡らせ多感に半裁竹管による平行沈線で鋸歯状の文様を描き、その下部に弧状の平行沈線を施す。2は地文縄文の胴部に、単沈線による曲線的な文様を描くもの。3は平口縁下に平行沈線を数条巡らせ、沈線間に連続する刺突を施す。5は胴部に刻みをもつ浮線隆帯で文様を描くものであり、隆帯間に細かな刺突を施す。6は口縁下に、半裁竹管による沈線と、単沈線で格子状に文様を施すもの。8は胴部にRLの縄文を施すものである。

出土した石器には、磨石の1点がある。

## 35号土坑 (第89図1、第108図 表13)

緩やかに波状を呈する平縁に近い深鉢で、頸部が大きくくびれ、口縁が外反する。波頂下には縦長の隆帯をもち、口縁および頸部下には半裁竹管による平行沈線が数条巡らせられ、主文様にはやや大形の菱形の文様を描き、地文にはLの縄文が施されている。胎土には、繊維を含む。

出土した石器は、片面に凹孔をもつ凹石が1点である。

## 163号土坑 (第92図)

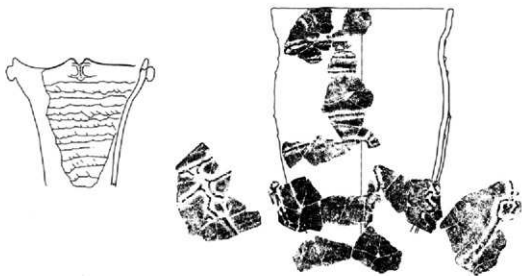
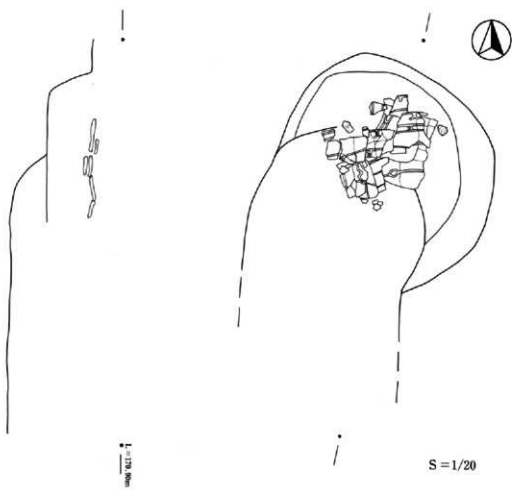
波状口縁の波頂部口唇に、刻み状の刺突をもち、口縁下にLRの縄文を施すもの。

## 166号土坑 (第92図)

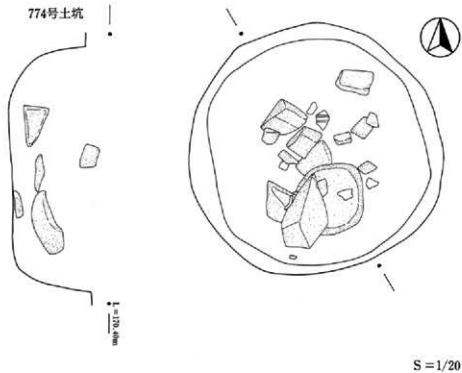
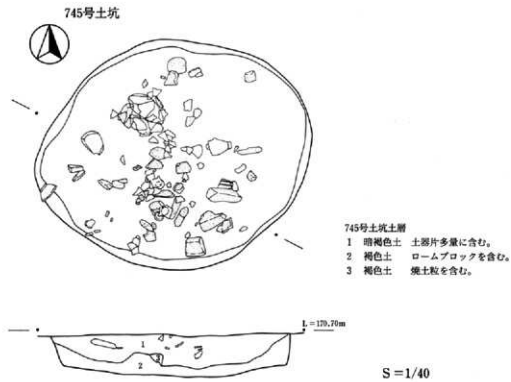
口縁下に、半裁竹管による集合沈線を施すもの。

## 211号土坑 (第93図)

1は胴部下半に、半裁竹管による集合沈線を巡らせるもの。2は弥生時代中期の甕ないし壺形土器の胴部

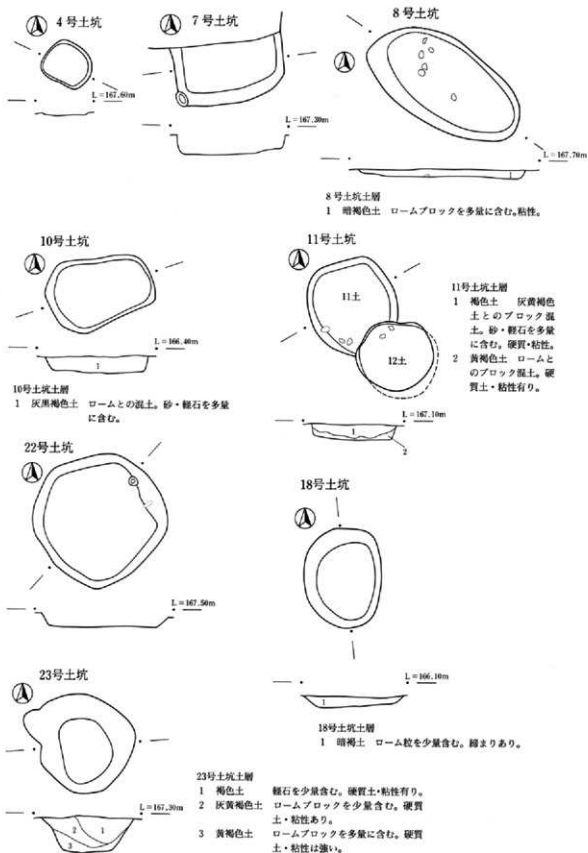


第79图 770号土坑平面图



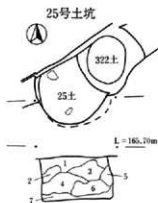
第80図 745・774号土坑平面図

第3章 検出された遺構と遺物



S=1/60

第81図 縄文時代土坑平面図(1)

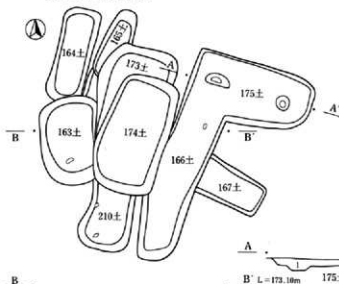


25号土坑土層

- 1 褐色土 黄褐色土とのブロック混土。ロームブロックを少量含む。
- 2 褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロックとの混土。
- 4 淡褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 褐色土 2層と同じ。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 7 褐色土 6層と同じ。B.P少量含む。



163・166・175号土坑



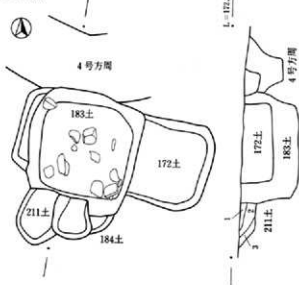
163・166号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。粘性弱い。
- 2 黒褐色土 やや締まりあり。

175号土坑土層

- 1 黒褐色土・ローム粒・炭化物を少量含む。粘性弱い。

211号土坑

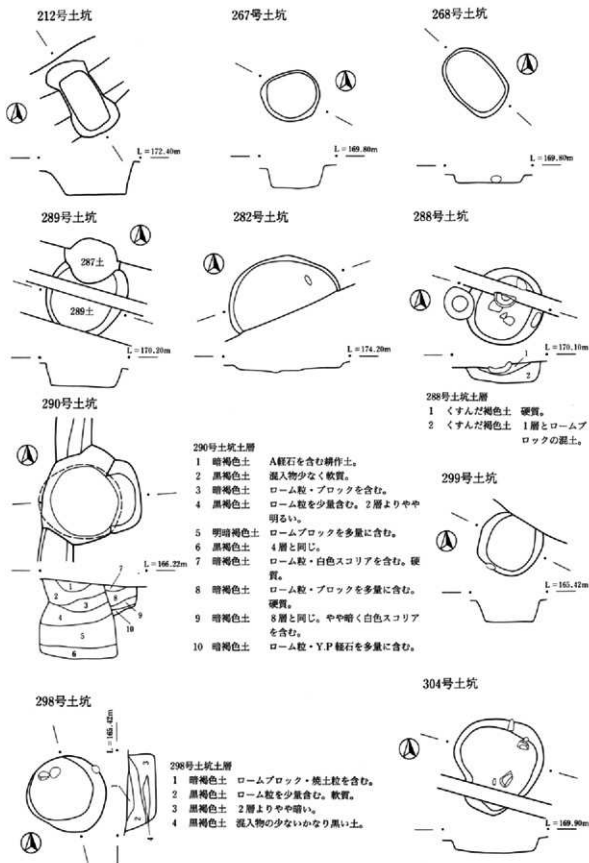


211号土坑土層

- 1 褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
- 2 褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 褐色土 大ロームブロックを含む。

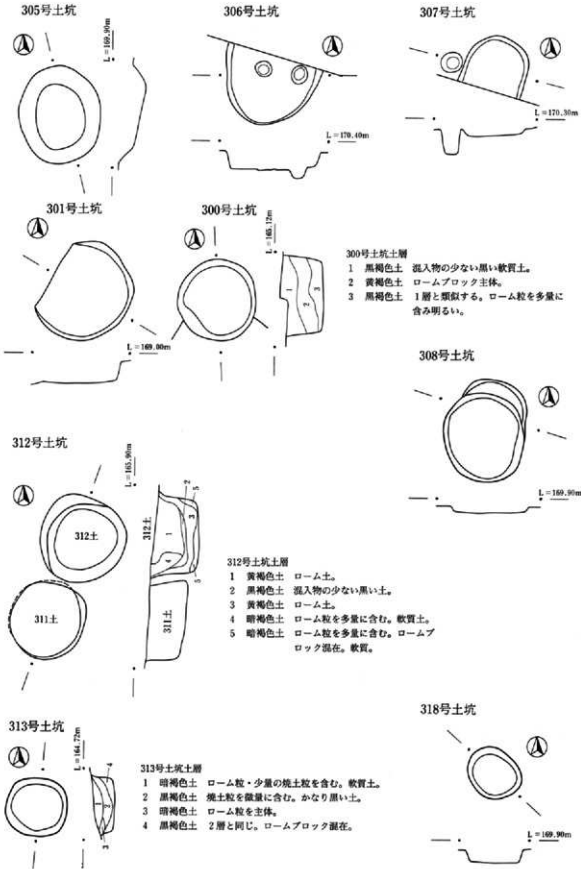
第82図 縄文時代土坑平面図(2)

S=1/60



第83図 縄文時代土坑平面図(3)

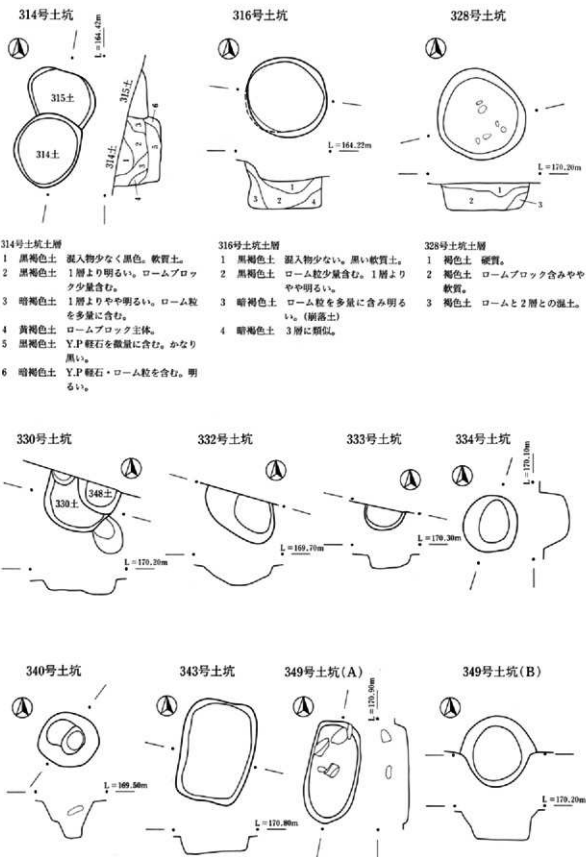
S=1/60



第84図 縄文時代土坑平面図(4)

S=1/60

第3章 検出された遺構と遺物

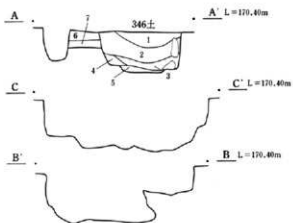
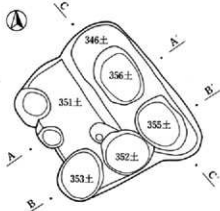


第85図 縄文時代土坑平面図(5)

S=1/60



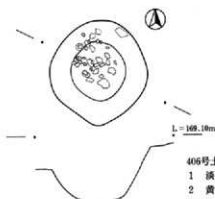
346・351・356号土坑



346・351・356号土坑土層

- 1 明暗褐色土 ローム粒を多量に含み明りい。硬質。締まりあり。
- 2 暗褐色土 混入物少ない。硬質。締まりあり。
- 3 暗褐色土 1層に類する。ロームブロック含む。やや軟質。
- 4 暗褐色土 3層に類する。かなり厚い粘質土。
- 5 暗褐色土 ローム粒・Y.P粒石粒を多量に含み明りい。(356号土坑)
- 6 暗褐色土 汚れたロームブロックが多量に混在。硬質土。(351号土坑)
- 7 明暗褐色土 ローム粒・ブロック混在により明りい。粒子の密な黒い土を含む。(351号土坑)

357号土坑



406号土坑



406号土坑土層

- 1 淡褐色土 軟質。
- 2 黄褐色土 ローム粒含む。軟質。
- 3 淡褐色土 ローム粒含む。軟質。
- 4 黒褐色土 3層との混土。やや硬質。下半5cmは特に硬い。

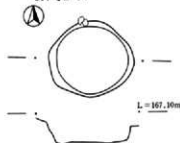
408号土坑



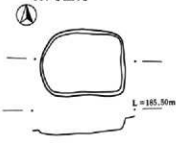
408号土坑土層

- 1 くすんだ黄褐色土 ハードロームとのブロック混土。硬質。(住居跡床)
- 2 くすんだ黄褐色土 ソフトロームとのブロック混土。軟質。
- 3 黒褐色土 軟質。
- 4 黒褐色土 3層に類似。

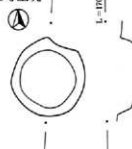
407号土坑



537号土坑

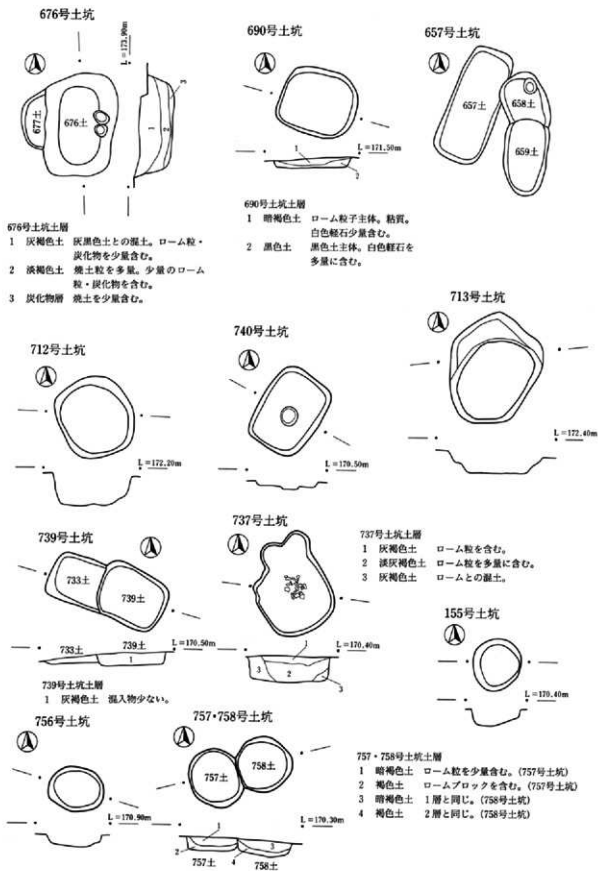


358号土坑



第86図 縄文時代土坑平面図(6)

S=1/60

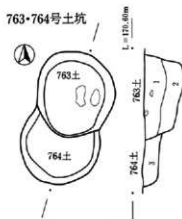


第87図 縄文時代土坑平面図(7)



759号土坑土層

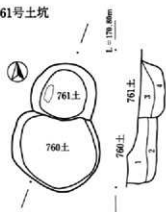
- 1 くすんだ黄褐色土 ローム粒を少量含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。



763・764号土坑土層

- 1 暗褐色土 (763号土坑)
- 2 褐色土 ロームブロック・粘質土ブロックを含む。(763号土坑)
- 3 暗褐色土 混入物少ない。(764号土坑)

760・761号土坑



760・761号土坑土層

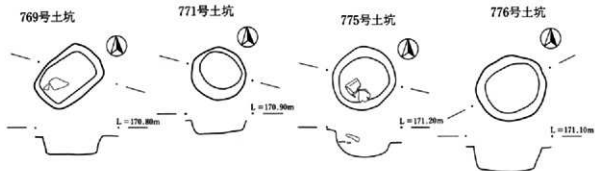
- 1 褐色土 混入物少ない。(760号土坑)
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む。(760号土坑)
- 3 淡褐色土 ローム粒を多量に含む。(761号土坑)
- 4 淡褐色土 ロームとの混土。(761号土坑)

767号土坑



767号土坑土層

- 1 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームとの混土。



S=1/60

第88図 縄文時代土坑平面図(8)

### 第3章 検出された遺構と遺物

表11 縄文時代土坑一覧表

土坑 №	グリット 位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
4	26-24	楕 円	0.81	0.64	6	
7	26-23	方 形	1.60	1.10	32	
8	25-25	長楕 円	2.58	1.34	36	
10	26-22	方 形	1.68	1.04	28	
11	26-22	楕 円	1.36	(1.12)	23	
18	27-20	楕 円	1.36	1.22	23	
22	25-24	不整形	2.10	2.00	38	
23	24-22	楕 円	1.74	1.46	113	
25	28-17	円 形	(1.22)	(0.90)	64	
35	16-26	不整形	1.15	0.93	39	
42	16-30	円 形	1.18	1.14	10	
163	15-57	楕 円	1.38	0.93	29	
166	14-56	方 形	(2.48)	0.82	26	
175	15-56	方 形	(1.20)	0.93	18	
211	15-54	楕 円	(1.06)	(0.84)	27	
212	16-54	楕 円	1.40	0.78	60	
267	16-37	円 形	0.92	(0.62)	38	
268	17-37	楕 円	1.30	1.10	14	
282	12-61	円 形	3.61	(1.90)	14	
288	15-38	円 形	1.27	1.20	38	
289	15-40	円 形	1.14	(1.08)	33	
290	28-20	円 形	1.58	1.50	116	プラスコ状
298	28-18	円 形	1.24	1.12	53	
299	28-17	円 形	1.00	(0.90)	46	
300	29-17	円 形	1.26	1.26	71	
301	17-42	円 形	1.60	(1.30)	24	
304	16-39	不整形	1.50	1.42	26	
305	16-42	楕 円	1.52	1.28	25	
306	15-40	楕 円	(1.10)	(1.54)	29	
307	15-40	楕 円	(0.88)	1.00	12	
308	16-40	円 形	1.60	1.30	60	
312	16-29	円 形	1.36	1.33	76	
313	16-30	円 形	0.96	0.93	47	
314	16-30	円 形	1.29	0.98	70	
316	15-30	円 形	1.30	1.30	78	
318	27-24	円 形	0.85	(0.43)	22	
328	14-41	円 形	1.45	1.38	44	
330	14-41	円 形	(0.82)	1.00	17	
332	17-37	不整形	1.21	(0.66)	30	
333	14-40	円 形	0.64	(0.34)	23	
334	15-39	楕 円	0.88	0.86	45	

土坑 №	グリット 位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
340	16-40	円 形	0.90	0.86	62	
343	12-40	方 形	1.60	1.16	25	
346	14-39	長楕 円	(1.84)	1.16	68	
349	13-43	円 形	1.64	0.82	13	
351	14-39	方 形	2.26	(0.86)	37	
352	14-39	円 形	0.73	0.72	50	
353	14-39	円 形	0.80	0.68	45	
355	14-39	円 形	0.90	0.68	83	
357	14-44	円 形	1.54	1.50	62	
358	12-25	円 形	1.20	1.20	28	
406	28-20	円 形	0.80	(0.36)	46	
407	26-21	円 形	1.36	1.20	37	
408	29-17	円 形	1.16	1.14	59	
537	3-93	方 形	1.48	1.04	25	
657	7-57	長 方 形	1.74	0.80	31	
676	6-52	楕 円	1.62	1.02	24	
690	10-45	方 形	1.20	1.04	16	
712	6-41	楕 円	1.39	1.26	55	
713	7-42	楕 円	1.78	1.46	39	
737	13-39	方 形	1.52	1.16	51	
739	13-42	方 形	1.10	0.86	19	
740	13-37	方 形	1.32	0.99	19	
745	12-40	楕 円	2.93	2.44	44	
755	13-38	円 形	0.84	0.76	30	
756	10-39	円 形	0.87	0.68	28	
757	13-37	円 形	0.94	(0.76)	24	
758	13-37	円 形	0.88	0.87	31	
759	13-38	楕 円	1.10	0.88	62	
760	12-38	円 形	1.42	(1.80)	48	
761	12-38	円 形	1.01	0.90	44	
763	12-39	楕 円	1.34	1.23	63	
764	12-39	楕 円	1.22	(0.77)	30	
766	11-39	円 形	0.86	0.83	22	
767	11-39	円 形	1.19	1.17	52	
769	11-39	方 形	1.08	0.87	30	
770	11-41	楕 円	1.42	1.15	44	
771	10-41	円 形	0.88	0.80	22	
774	13-31	円 形	1.33	1.32	44	
775	10-40	円 形	1.01	1.00	40	
776	12-39	円 形	1.08	1.01	40	

片で、斜位に条痕が施される。

石製品が1点出土しており、牛伏砂岩による身の薄い円盤である。

#### 212号土坑（第93・108図 表14）

口縁が大きく膨らみ内反するもので、刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を描くもの。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が1点である。

#### 267号土坑（第93図）

いずれも胎土に繊維を含むもので、1は沈線が施され、2・3は胴部にLRないしはRLの縄文が施されるもの。

#### 268号土坑（第93・108図 表15）

1～3の胎土には繊維が含まれる胴部片で、1はLRおよびLと1本付加のRLの縄により羽状縄文を施す。2はLの縄文を施し、3は2本付加の縄文を施す。4は無繊維で、胴部にLRの縄文を施したものである。

出土した石器は、両面に多孔をもつ多孔石が1点である。

#### 282号土坑（第90図4、第93・108図 表16）

第90図4は、胴部に半截竹管による集合沈線を巡らせるもの。第93図1は、口縁部にLの縄文を施した後、沈線を施すもの。2は口縁に耳タブ状の突起を有し、口縁部に横位の矢羽根状の沈線を施す。3は頸部に半截竹管による集合沈線を施すもの。4は口縁以下に、Lの縄文を施すものである。5は胎土に繊維を含む胴部片で、LRの縄文を施す。

出土した石器は、黒曜石製の石鏃1点、両面および側面に凹孔をもつ凹石が2点である。

#### 288号土坑（第93・109図 表17）

1は胴部に刻みをもつ浮線隆帯を巡らせ、半截竹管による連続爪形で曲線的な文様を施すもの。2は地文に縄文をもち、胴部に刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を施すもの。3・4は胴部に曲線的に逆U字状ないしV字状に沈線で文様を描き、文様内に縄文をもつもの。5は無文の口縁部であり、6は無文の胴部である。

出土した石器は、打製石斧が1点と、裏面に多孔をもつ石皿が1点、片面が多孔となる多孔石が1点である。

#### 289号土坑（第94・109・110図 表18）

4～13・15・16は胎土に繊維を含むもので、4は口縁下にLの縄文を施すものであり、5は口縁下にやや粗いRLの縄文を施すもの。6・9・10・12・15は胴部に0段多条のLRの縄文を施し、7・11・13・16は胴部にLの縄文を施す。8は胴部に、LRとRLにより羽状縄文を施す。1は口唇部が肥厚し、口縁部に半截竹管による併行沈線および爪形刺突を巡らせ、孔を有する。2・3は胴部に刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を描くもので、3は梯子状となる隆帯によるものである。14は胴部にRLの縄文を施す。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が2点と、両面に多孔をもつ石皿が1点である。

290号土坑 (第94・110図 表19)

繊維を含む胴部片で、LLR（正反の合）の縄文を施す。  
出土した石器は、両面に多孔をもつ多孔石が1点である。

298号土坑 (第94図)

全て胎土に繊維を含む。1は口縁部文様にLとRを2本1組とした燃糸側面圧痕で主文様を描き、円形刺突および刻み状の短沈線を充填させ、その下部に刻みをもつ細い隆帯を2条巡らせ胴部文様との区画をし、胴部には0段多条のLを2本で結節縄文を施す。2は波状口縁となる口縁直下に刻みをもつ隆帯を2条巡らせ、波頂下に同様の隆帯を曲線的に3条施し、LとRを2本1組とした燃糸側面圧痕で主文様を描くとともに、円形刺突を配する。3・4は胴部に0段多条のLを2本の結節縄文と、同様のRを2本の結節縄文とによる羽状縄文を施すもの。5・6は胴部にLRの縄文を施すものである。

299号土坑 (第94図)

繊維を含む胴部片で、縄文を施す。

300号土坑 (第94図)

2点ともに繊維を含む胴部片で、0段多条のLを2本の結節縄文と、同様のRを2本の結節縄文とによる羽状縄文を施すもの。

301号土坑 (第94図)

1は口縁部に刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を描くもので、地文に縄文が施されている。2は胎土に繊維を含む胴部片で、0段多条のLRとRL（附加条ではない）による羽状縄文を施すものである。

304号土坑 (第95・110図 表20)

1は内反する平口縁の口唇部に刻みをもち、口縁部に櫛歯状工具による平行・波状文を巡らせ、その下に円形刺突を配するとともにレンズ状の文様を描く。2は浅鉢となる胴部片で、胴部が大きく屈曲する器形を呈し、半裁竹管による沈線と爪形文で木の葉状の文様を描くもの。3は口縁部に半裁竹管による連続爪形文を数条巡らせ、その間に刻みを施す。4は胴部に、3と同様の文様を施したものの。6は胴部に、3・4と同様な手法で曲線的な文様を描くもので、刻みはもたない。5・7～25は、刻みをもつ浮線隆帯で文様を描くものであり、地文に縄文を施すものが多く、10・15・16・24のように口縁部に曲線的な文様を施す。25は口縁部に断面突起を有するものである。26は大形の深鉢となる頸部に、半裁竹管による集合沈線を施したものの。27～45は口縁部以下の胴部に縄文を施すもので、2・31・32・39・42・45は胎土に繊維を含むものである。31と39には羽状縄文が施されている。また、30・44には結節縄文がみられる。

出土した石器は、裏面に凹孔をもつ石皿と、両面に多孔をもつ石皿の2点である。

305号土坑 (第93図)

3は繊維を含む胴部片で、Lの縄文を施す。1・2は胴部に半裁竹管による沈線で文様を描くもの。

## 306号土坑 (第96・110図 表21)

2・4は胎土に繊維を含まないもので、他は繊維を含むものである。1・3は頸部に、半裁竹管による沈線で文様を描く。6は胴部に0段多条の閉端環付縄により、やや幅の狭いループ縄文が施される。5・8・10・12は、LRとRLによる羽状縄文が施されるもの。7・15はLRの縄文が施されるが、7は0段多条の縄が用いられている。11はRLの縄文が施され、9・14にはLが、13にはRの縄文が施されている。16・17にも縄文が施されている。2・4は地文に縄文をもち、半裁竹管による沈線ないし集合沈線を施すものである。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が1点である。

## 307号土坑 (第96図)

1は胎土に繊維を含み、波状口縁の波底部に小突起を有し、口縁下に粗いRLの縄文を施す。2は胴部にLRの縄文を施したものの。

## 308号土坑 (第96・97・110図 表22)

1は口縁部に半裁竹管による平行沈線を巡らせ刺突を施し、平行沈線間に鋸歯状に沈線を施す。2は口縁部に半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせる。4・7・14は口縁部ないし胴部に、半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線を施すもので、4の沈線間には刻み状の刺突が加えられている。5・6は胴部に地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で曲線的な文様を描くもので、4の沈線間には刻み状の刺突をもつ。8～10は胴部に刻みをもつ浮線隆帯で、曲線的ないし平行に文様を施すもので、9・10は縄文を地文とし、10の沈線間には刺突を施している。11～13・15～20は口縁部ないし胴部に半裁竹管による集合沈線を横位ないし縦位に施すもので、11・13・16・18の地文には縄文が施されている。21・23は口縁部に棒状の縦長な隆帯を施すもので、地文に斜位の沈線をもつ。22は斜位の沈線を施した上に、瘤状の隆帯を貼付するもの。24・25は口縁部ないし頸部に半裁竹管による結節浮線文による渦巻状ないしレンズ状の文様を描くもので、地文に斜位の沈線をもつ。26は胴部下半部に縦位に結節浮線文を施すもので、地文には沈線が施されている。27は頸部に半裁竹管による縦位の沈線が施されるもので、地文に縄文が施されるもの。28・29は胴部に半裁竹管による矢羽根状の沈線を横位に施したものの。30は胴部に角押し文により文様を描くもの。42は口縁部に沈線を1条巡らせ、沈線下に縄文を施す。32～47は胴部に縄文を施すもので、33・34・37・40・44・45は胎土に繊維を含み、LRないしRLの縄文を施し、40は羽状縄文を施すもの。32は結束による羽状縄文を施すもの。48は底部で、地文に縄文をもち、半裁竹管により平行沈線を巡らせるものである。

出土した石器は、周縁が作り出される石皿が1点である。

## 313号土坑 (第97図)

1・2ともに胎土に繊維を含む胴部片で、1はLとRによる羽状縄文を施し、2は0段多条のLを2本による結節縄文を施している。

## 314号土坑 (第97図)

1は胴部に沈線で懸垂文をもち、懸垂文間に縦位回転によるLの縄文を施す。2は胴部に0段多条のLRの縄文を施す。3は胎土に繊維を含む胴部片で、縄文を施している。

318号土坑 (第97図)

1は小突起をもつ口縁部で、口縁下に縄文を施し、沈線を巡らせる。2は胎土に繊維を含む胴部片で、LRの縄文を施すもの。

328号土坑 (第98・110図 表23)

4～8・10は胎土に繊維を含む胴部片で、LRないしRLの縄文を施し、7・10は羽状縄文を施す。1は口縁部に刻みをもつ浮線隆帯で文様を描くもの。2は胴部に半裁竹管による連続爪形刺突で文様を描くもので、刻み状の刺突を有する。3は口縁部直下に隆帯を巡らせ、隆帯下にLRの縄文を施す。9・11は胴部にRLの縄文を施すものである。

出土した石器は、片面に凹孔をもつ凹石が1点である。

330号土坑 (第98図)

全て胎土に繊維を含むもので、1は頸部に半裁竹管で平行沈線を巡らせるもの。2は頸部に半裁竹管で若干支点をずらせるようにコンパス文風に沈線を巡らせ、胴部に縄文を施すもの。3～12は胴部にLRないしRLの縄文を施すもので、4～6・9・10は羽状縄文を施す。9は0段多条の縄を用いている。

332号土坑 (第98図)

2以外は胎土に繊維を含むもので、1は頸部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、胴部に縄文を施す。3は口縁部以下に0段多条のLRの縄文を施すもの。4～9は胴部にLRないしRL、LないしRの縄文を施すもの。2は口縁部がやや外反し有段となり、口縁部以下にRLの縄文を施すもの。

333号土坑 (第98図)

1・3は胎土に繊維を含むもので、1は頸部に半裁竹管による平行沈線で文様を描くもので、3は胴部に0段多条のLRとRLにより羽状縄文を施すもの。2は胴部に結節縄文を施すものである。

334号土坑 (第98図)

胎土に繊維を含む胴部片で、薄く縄文が施されている。

340号土坑 (第89図2、第99・111図 表24)

第89図2は、胴部上半がくびれ、口縁が内反する深鉢で、口縁に獣面突起をもつ。文様は半裁竹管による平行沈線で、口縁部には曲線を主体に、胴部には数段の平行が巡らされ、地文にRLの縄文が施されている。第99図の1・2は、口縁部に半裁竹管による沈線で、平行および波状の文様を描くもの。3は口縁部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、円形刺突を配する。4・5・19は胴部に半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線で、曲線的な文様を描き、沈線間に刻みを有する。6は胴部に半裁竹管による平行沈線で文様を描くもので、地文には縄文をもつ。7・8は浅鉢の口縁部から肩部にかけての破片で、7は図が逆である。口縁部下と胴部の屈曲する位置に、刻みをもつ浮線隆帯を2条巡らせて文様帯の区画を行い、区画内に半裁竹管による刺突をもつ平行沈線で曲線的な文様を描く。8の口縁部には孔を有する。9は小突起を有する口唇部に刻みをもち、口縁部には刻みをもつ浮線隆帯で、並行・曲線的な文様を描くもので、地



文に縄文を施す。10・11は口縁に獣面突起をもち、口縁部には刻みをもつ浮線隆帯により曲線的な文様を描くもので、地文に縄文をもつ。13も同様に、口縁部に刻みをもつ浮線隆帯により曲線的な文様を描くもの。12・14・15は胴部に刻みをもつ浮線隆帯を数条巡らせるもので、地文には縄文をもつ。16は口縁下に半裁竹管により平行沈線を巡らせ、その下に格子状の文様を平行沈線で描き、格子内に円形突起を配し、地文に縄文を施す。17・18は胴部に半裁竹管による平行沈線で集合沈線状に描くもので、地文に縄文を施す。20～27は口縁以下および胴部にLRないしRLの縄文を施すもので、26には結節縄文が施されている。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が1点と、両面に多孔をもつ多孔石が1点、両面ともに多孔と石皿となるものと、両面に多孔をもつ石皿との2点がある。

#### 343号土坑（第99図）

胴部に縄文が施されるもの。

#### 346号土坑（第100・112図 表25）

1・4・16～18・21～23は胎土に繊維を含むもので、16は頸部に櫛齒状工具による列点刺突で文様を描くもの。1・4は頸部に半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線を施すもの。22は頸部下に半裁竹管による平行沈線を巡らせ、胴部に縄文を施す。17・18・21・24は胴部に縄文を施すもので、19・23は羽状縄文となるもの。2・4は胴部に半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線で曲線的な文様を施すもので、3の沈線間には刻みを有する。5は胴部に刻みをもつ浮線隆帯で、曲線的な文様を描くもの。6は口縁部に1条の太い沈線を巡らせ、沈線下にLRの縄文を施す。7は波状口縁となる口縁部に1条の沈線を巡らせ、胴部に逆U字状の文様を描き、縄文を施すもの。8は胴部に沈線で懸垂文およびU字状の文様を描き、区画内に縦位回転の縄文を施す。9は胴部に太い沈線でU字状の文様を描き、区画内に縦位回転の縄文を施す。10は胴部に隆帯による懸垂文をもち、区画内に縦位回転の縄文を施す。11は胴部に微隆帯により懸垂文および曲線的な文様を描き、区画内に縦位回転の縄文を施す。12・13は胴部に沈線で直線ないし曲線的な文様を描き、区画内に縄文を施す。14は口縁下に隆帯を巡らせ刺突を施し、口縁部内を文様区画した内部に縄文を施す。15・19・20は胴部にLRないしRLの縄文を施すものである。

出土した石器には、剥片素材の側縁に連続的な平坦剝離を加え調整加工を施したスクレイパーが1点と、両面に多孔をもつ多孔石が1点である。

#### 351号土坑（第100・112図 表26）

3・4・6・9～12は胎土に繊維を含むもので、口縁部以下ないし胴部に縄文を施すものである。3は1本付加の附加条縄を施し、それ以外はLRないしRLの縄文を施したものの。1は波状口縁となる口唇部に結節浮線文を施し、口縁部に三角の孔をもつ。2は口縁部に沈線により文様を描くもの。5・7・8は胴部に縄文を施すものであり、7は羽状縄文となる。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が1点である。

#### 353号土坑（第102図）

胴部にRLの縄文を施すもの。

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 355号土坑 (第102図)

内反する平口縁の口唇部に刻みをもち、口縁部に半裁竹管により平行沈線を巡らせて区画し、区画内に半裁竹管による平行沈線と細い短沈線とで格子状の文様を施すものである。

#### 357号土坑 (第101図)

1・2・15は胴部に半裁竹管により縦位および弧状に集合沈線と、その間に縦位の矢羽根状の沈線を施す。3・14は胴部下半に半裁竹管により弧状および「の」字状の曲線的な文様を描き、小瘤状の貼付文を配する。4～6は口縁部に棒状の隆帯を縦位に貼付させ、4・5は口唇部から裏面にかけてさらに隆帯貼付をもつものであり、地文には半裁竹管による斜位の沈線が施されている。7は胴部に半裁竹管による斜位の沈線を施し、小瘤状の貼付文を配するもの。8は胴部に縦位の結節浮線文および小瘤状の貼付文をもち、地文には半裁竹管による沈線を施す。9・10は同一個体で、口唇部に刻みをもち、口縁部に結節浮線文風の刺突をもつ隆帯を数条巡らせるもの。11は頸部に結節浮線文風に細い隆帯を渦巻き状に施した後に、隆帯上に刻みを施すもので、地文には半裁竹管による斜位の沈線が施される。12・13は頸部に半裁竹管により、渦巻ないしは同心円状に沈線で文様を描くもの。16は胴部に半裁竹管により平行および縦位の矢羽根状の文様を描き、その文様の隙間に三角形の印刻文を施すもの。1は16と同様の文様・印刻文を施すが、文様全体に刻み状に沈線を施すものである。18は胴部に半裁竹管による縦位の矢羽根状沈線と、三角および棒状に長い印刻文を施すもの。19は有段となる口縁部に三角印刻文を施し、その下に半裁竹管による沈線で文様を描くもの。20は胴部に半裁竹管を束にしたような工具で、細かく密に刺突を施し、太い沈線的な印刻により文様を描くもの。21は胴部に細い隆帯で鋸歯状に貼付するとともに、結節浮線文による文様を描くもので、地文には縄文をもつ。23～25は胴部に縄文を施すもので、26はLRを、24・25はLRとRLの結束による羽状縄文を施す。27・28は無文となる底部であり、26はミニチュア土器である。22は縄文の施された、胴部片利用の土製円盤。29は牛伏砂岩による石製円盤である。

#### 365号土坑 (第102図)

胴部に沈線を施すもの。

#### 406号土坑 (第102図)

胎土に繊維を含む胴部片で、縄文を施している。

#### 407号土坑 (第102図)

1は口縁部に半裁竹管により斜位の平行沈線を施すもの。2は胴部にRの縄文を施すものである。

#### 408号土坑 (第102・112図 表27)

1・2ともに胴部に半裁竹管による沈線を施すもの。

出土した石器は、片面に凹孔をもつ凹石が1点である。

#### 537号土坑 (第102図)

胴部に半裁竹管により縦位および弧状の文様を描くもの。

## 584号土坑 (第89図3、第90図5)

第89図3は、わずかに波状口縁となる深鉢で、頸部が大きくくびれ、口縁が外反する器形を呈する。波頂部には小突起を有し、口縁には半裁竹管による平行沈線が走り、以下にLとRによる羽状縄文が施されている。胎土には、繊維を含む。第90図5は、平口縁の深鉢形を呈するもので、口縁以下にLとRによる羽状縄文が施されている。胎土には、繊維を含む。

## 676号土坑 (第104・112図 表28)

1・2は胴部に半裁竹管による縦位の集合沈線を施すもので、1にはやや縦長の貼付文を配する。3は胎土に繊維を含む胴部片で、LRとRによる羽状縄文を施すもの。

出土した石器は、剥片素材の側縁に抉入状の調整加工を施したスクレイパーが1点である。

## 690号土坑 (第102図)

胎土に繊維を含む頸部片で、半裁竹管による平行沈線をもつ。

## 712号土坑 (第102図)

1～3は胎土に繊維を含むもので、1は口縁以下に縄文を施すものであり、2は胴部に0段多条のLRとRLの羽状縄文を、3は胴部にRLの縄文を施すものである。4は胴部に半裁竹管による平行沈線を施すもの。5～7は胴部に条痕を施すもので、弥生時代中期の土器である。

## 713号土坑 (第102図)

1・4～10・12・14は胎土に繊維を含むもので、1は口縁以下にLの縄文を施す。4は頸部に節歯状工具による沈線と列点刺突を施す。5は頸部に半裁竹管によるコンパス文的な沈線を施すもの。6～10・12・14は胴部にLRないしRLの縄文を施すもの。2は胴部に半裁竹管により平行沈線および三角印刻文をもつものであり、3は胴部に沈線で文様を描いた後に刻み状の沈線を施したもの。11・13は胴部にRLの縄文を施したものである。

## 737号土坑 (第103図)

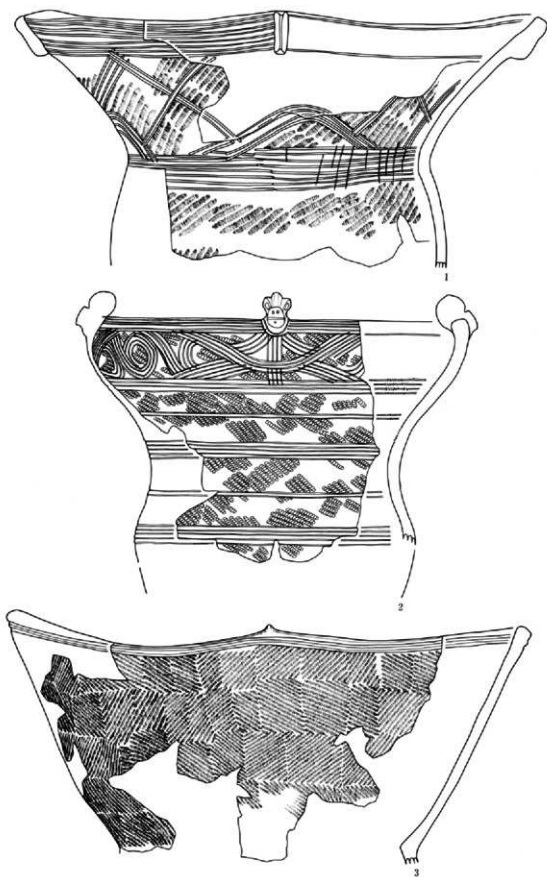
1・2は口縁部に1条の太い沈線を巡らせ、以下に縄文を施すものである。3～15は胴部に沈線による懸垂文およびU字状の文様を描き、その区画内に縦位回転の縄文を施すものである。

## 739号土坑 (第103図)

胴部に円形刺突を縦位にもつもの。

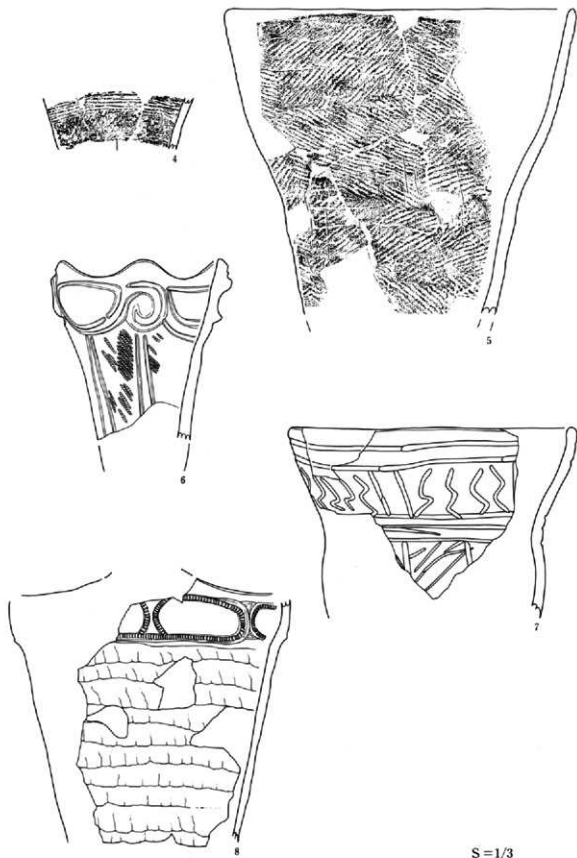
## 740号土坑 (第103図)

1は口唇部に刻みをもち、口縁部に刻みをもつ浮線隆帯を施すもの。2は胎土に繊維を含む胴部片で、LRの縄文を施すもの。3は胴部に微隆帯の懸垂文をもち、区画内に縄文を施すもの。4は胴部にRLの縄文を施すものである。

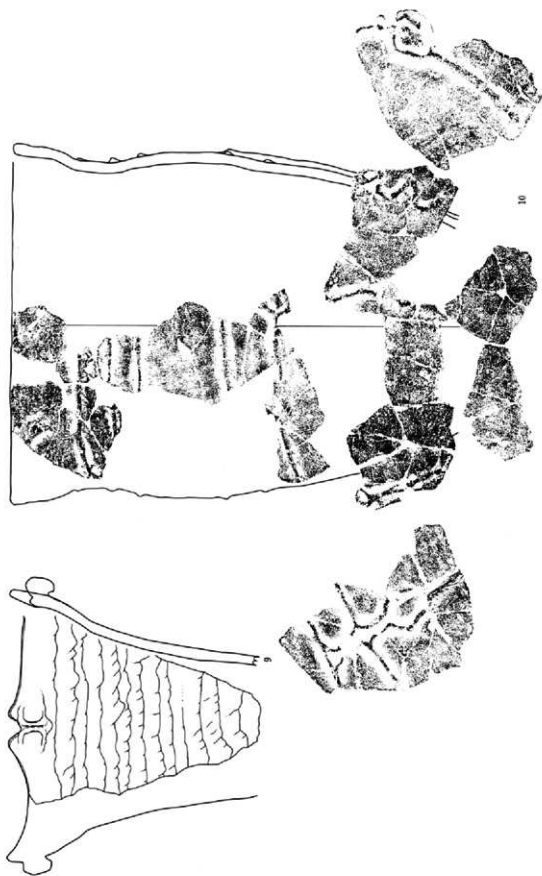


第89図 土坑出土遺物 (1)

S=1/3

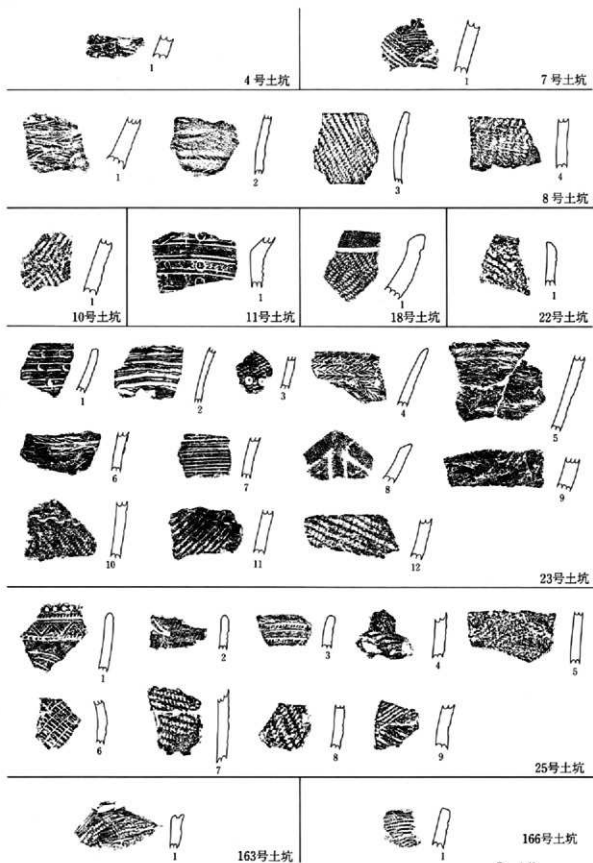


第90図 土坑出土遺物(2)



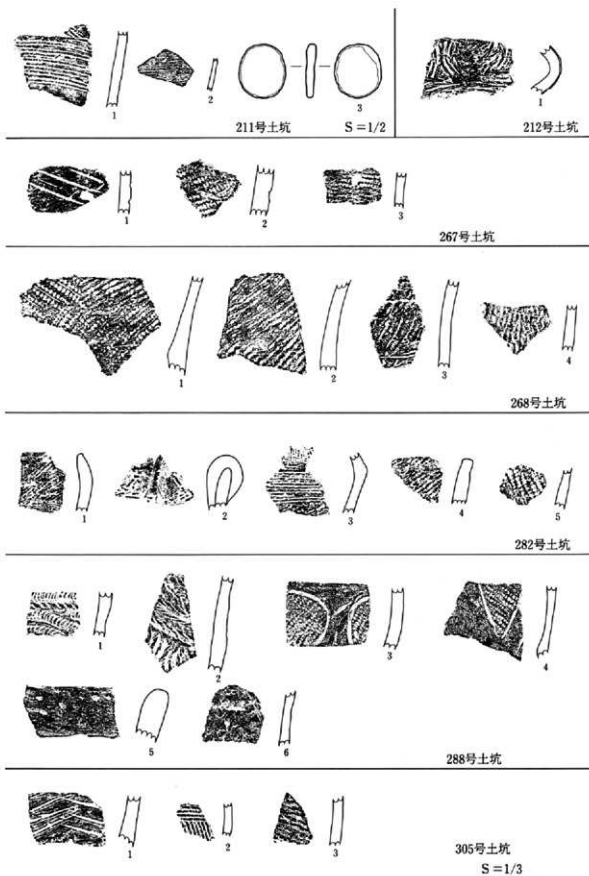
第91図 土坑出土遺物(3)

S=1/3



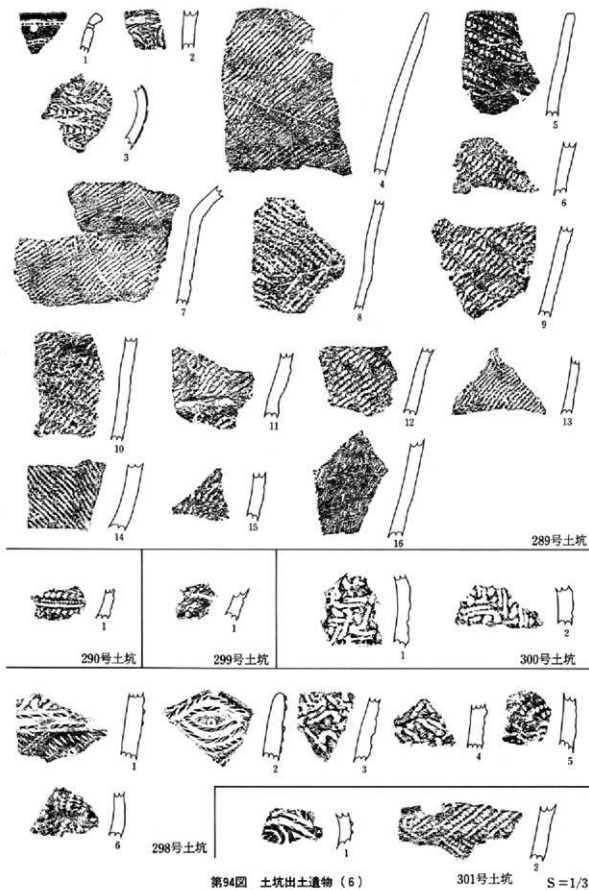
第92図 土坑出土遺物(4)

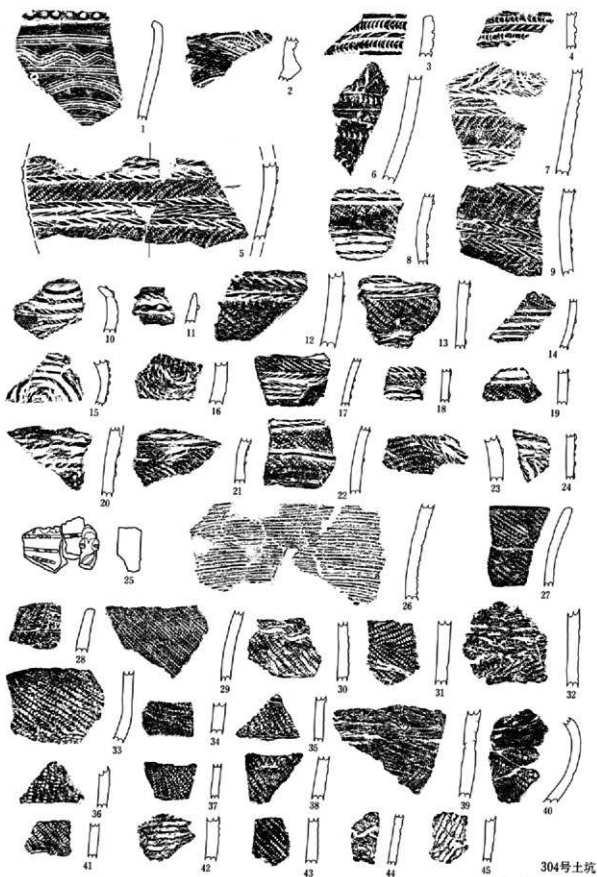
第3章 検出された遺構と遺物



第93回 土坑出土遺物(5)



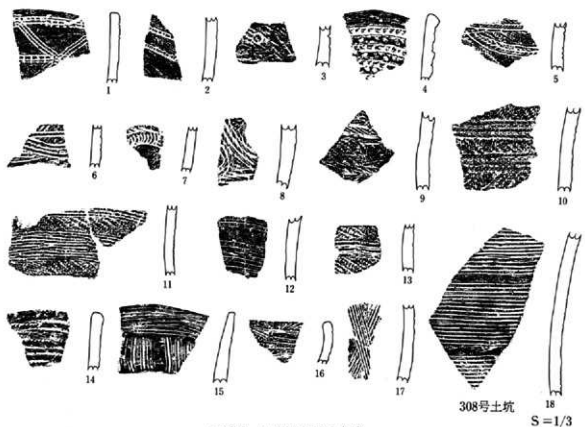
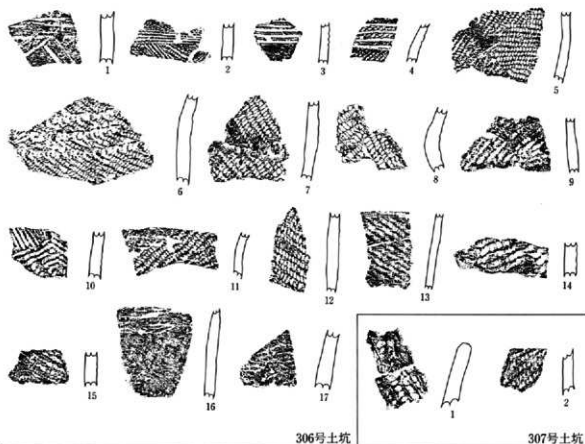




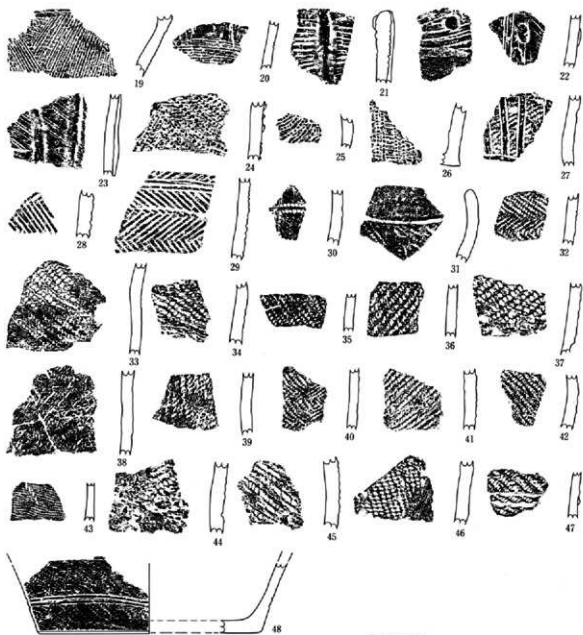
第95図 土坑出土遺物 (7)

S=1/3

304号土坑



第96図 土坑出土遺物(8)



308号土坑



313号土坑



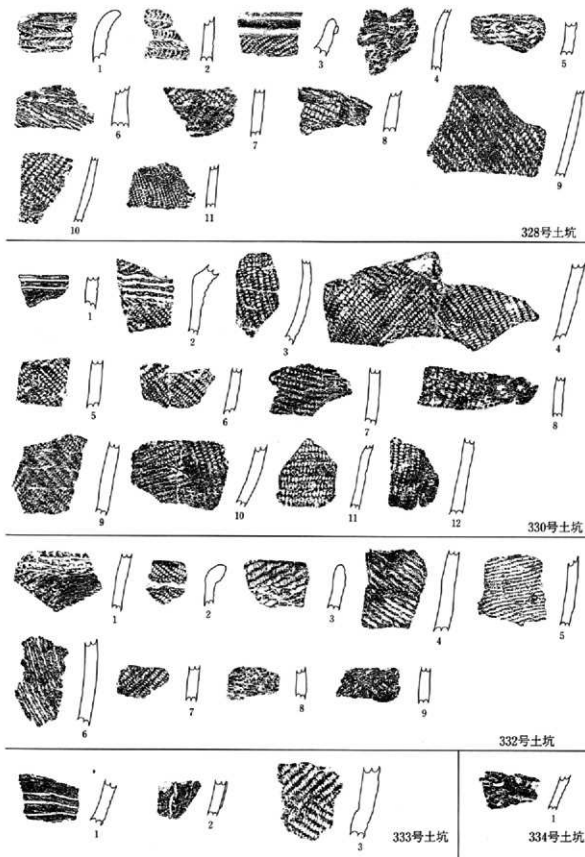
318号土坑



314号土坑

S=1/3

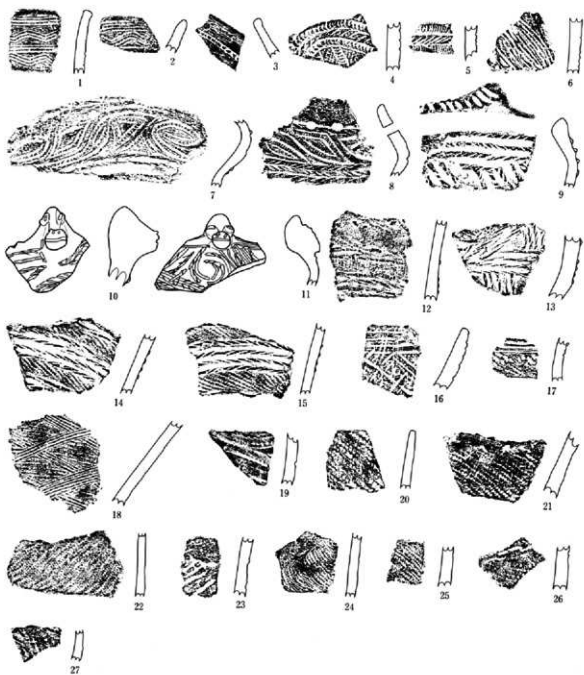
第97図 土坑出土遺物(9)



第98図 土坑出土遺物 (10)

S=1/3

第3章 検出された遺構と遺物



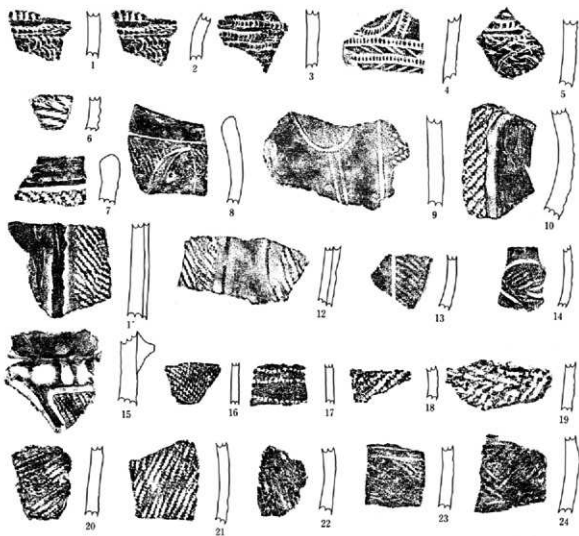
340号土坑



343号土坑

S=1/3

第99図 土坑出土遺物 (11)



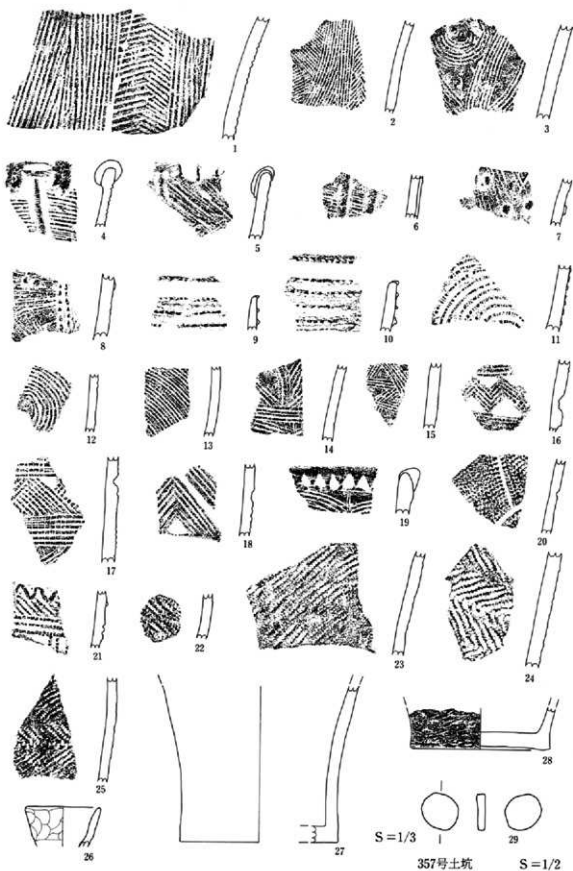
346号土坑



351号土坑

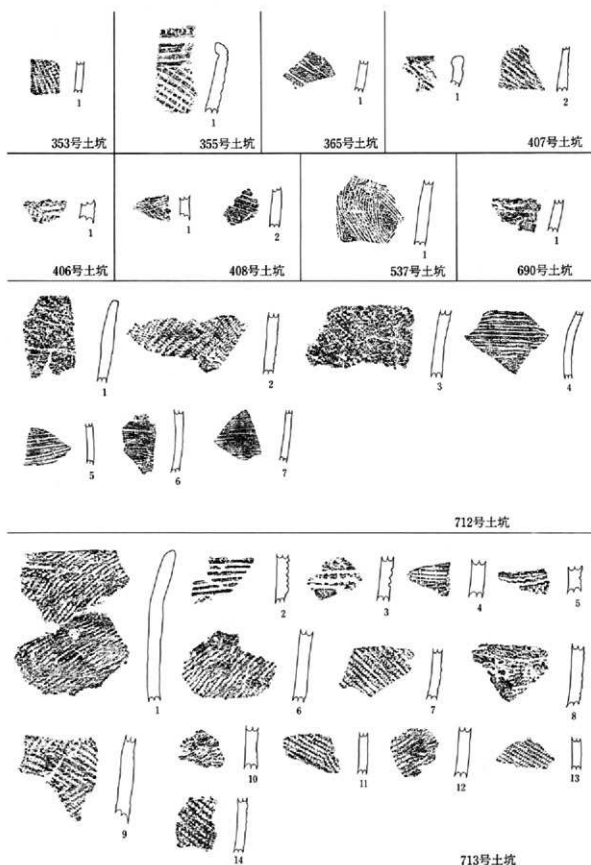
S=1/3

第100図 土坑出土遺物 (12)



第101図 土坑出土遺物 (13)

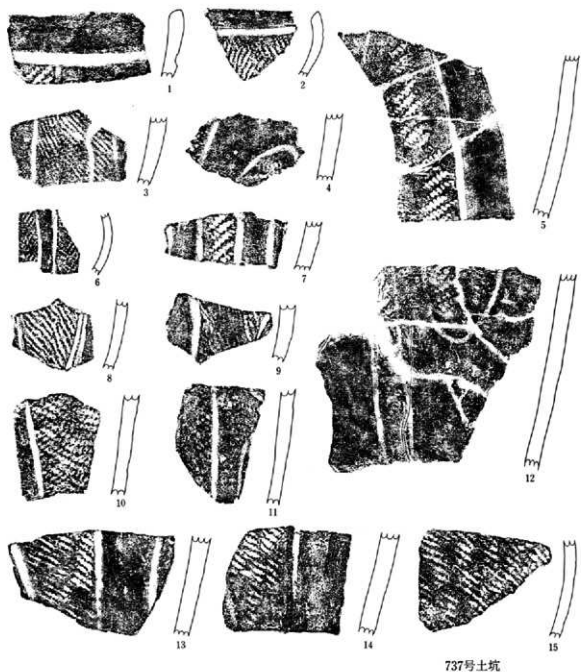




第102図 土坑出土遺物 (14)

S=1/3

第3章 検出された遺構と遺物



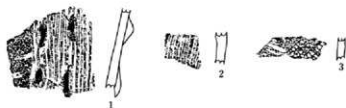
739号土坑



740号土坑

S=1/3

第103図 土坑出土遺物 (15)



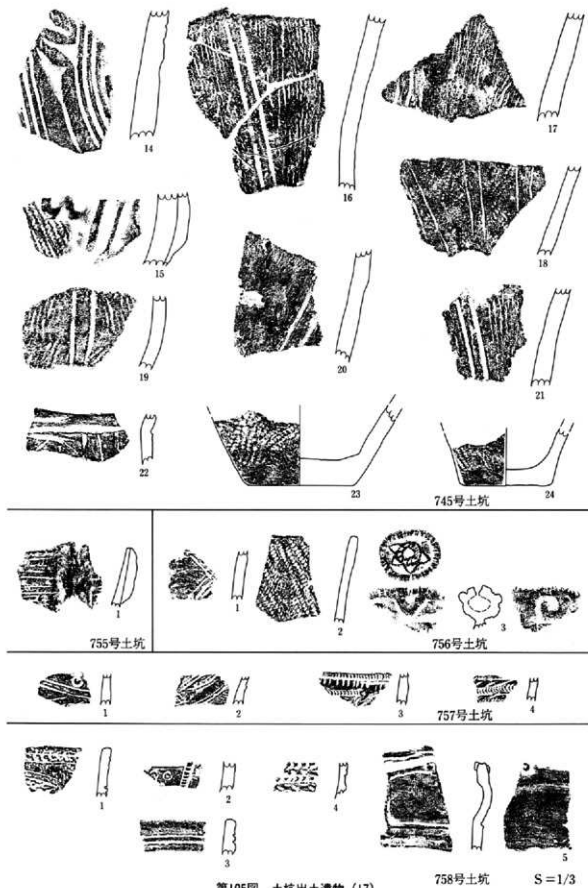
676号土坑



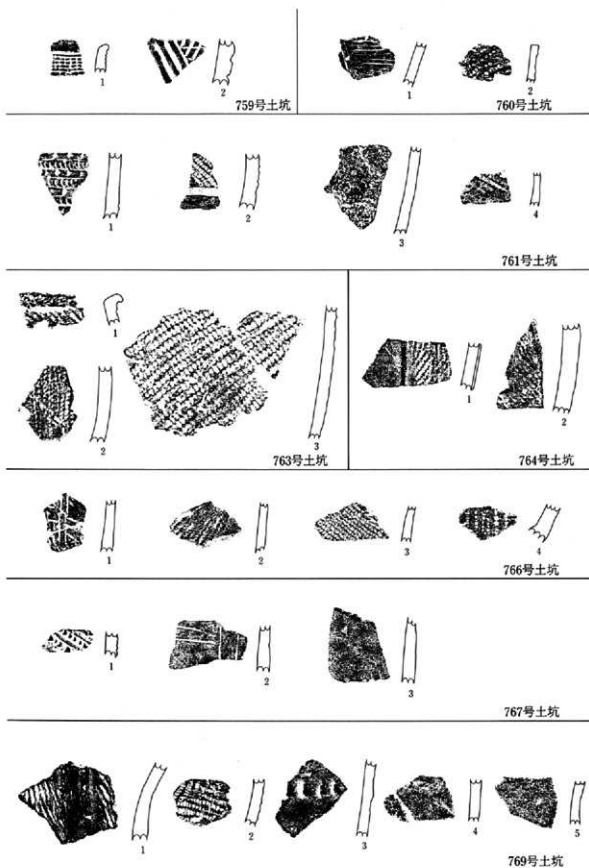
745号土坑

S=1/3

第104図 土坑出土遺物 (16)



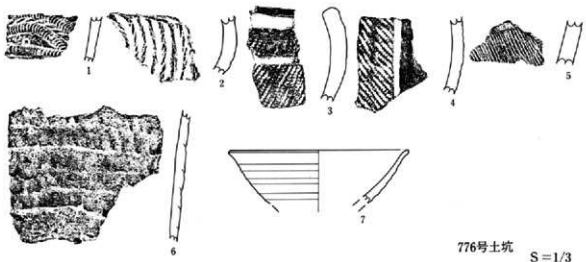
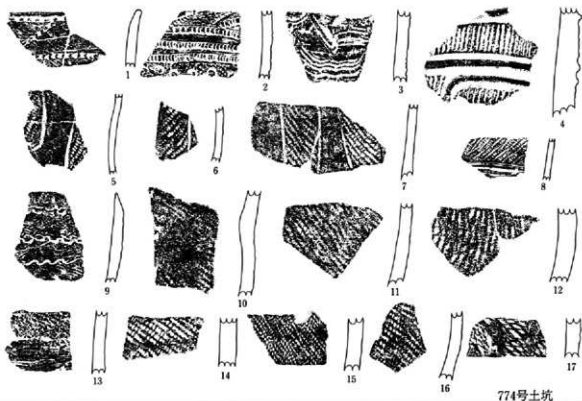
第105図 土坑出土遺物 (17)



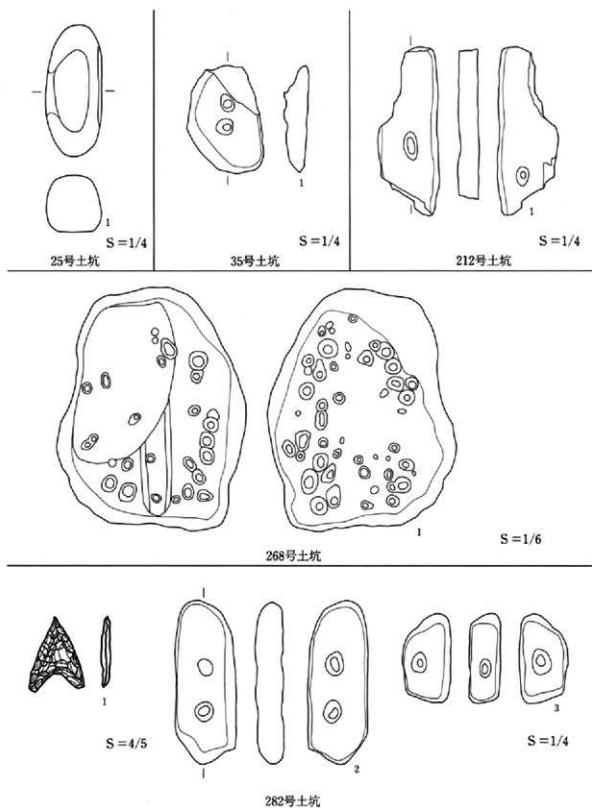
第106図 土坑出土遺物 (18)

S=1/3

第3章 検出された遺構と遺物

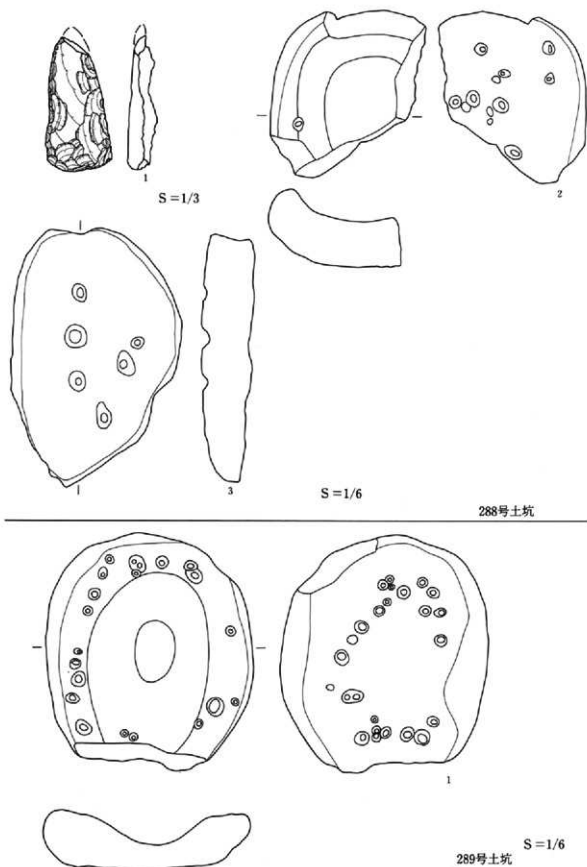


第107図 土坑出土遺物 (19)



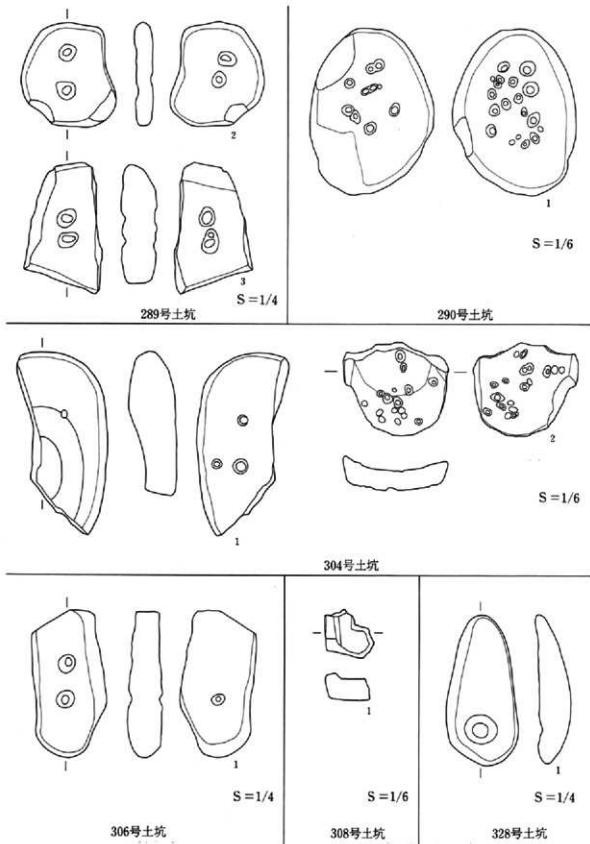
第108図 土坑出土遺物 (20)

第3章 検出された遺構と遺物

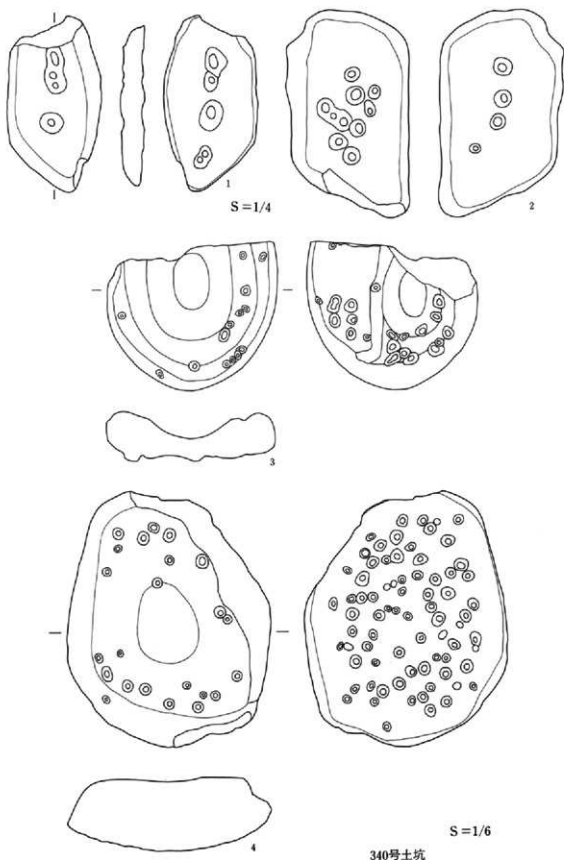


第109図 土坑出土遺物 (21)

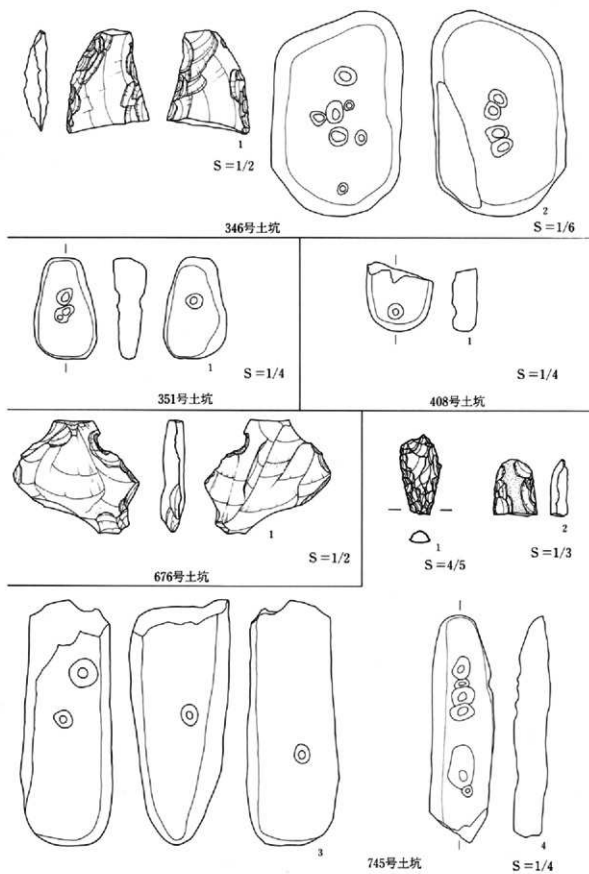




第110図 土坑出土遺物 (22)

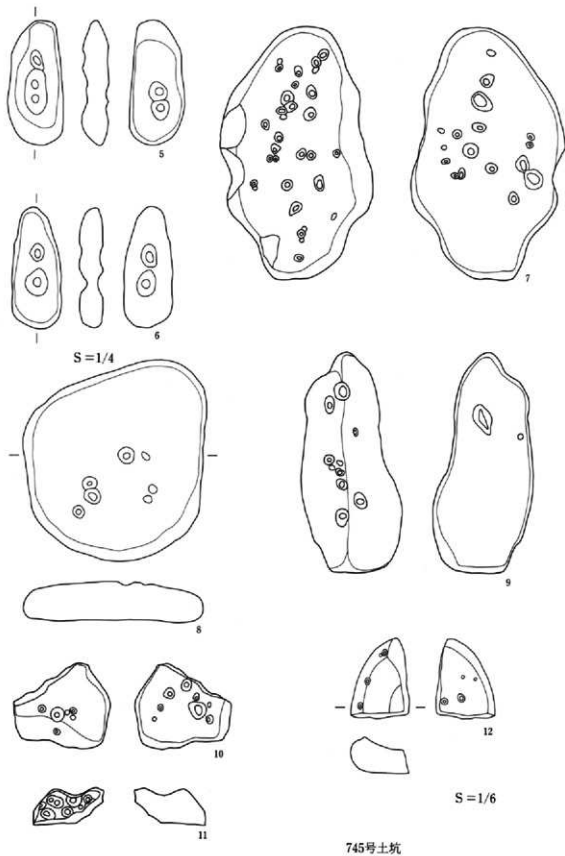


第111図 土坑出土遺物 (23)



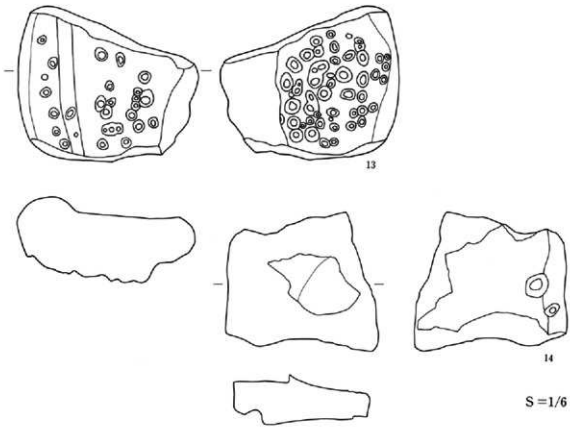
第112図 土坑出土遺物 (24)

第3章 検出された遺構と遺物

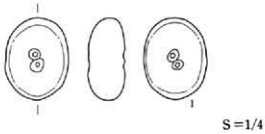


745号土坑

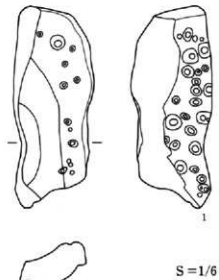
第113図 土坑出土遺物 (25)



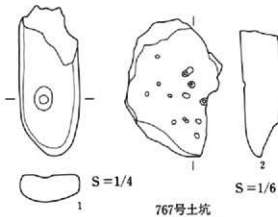
745号土坑



761号土坑



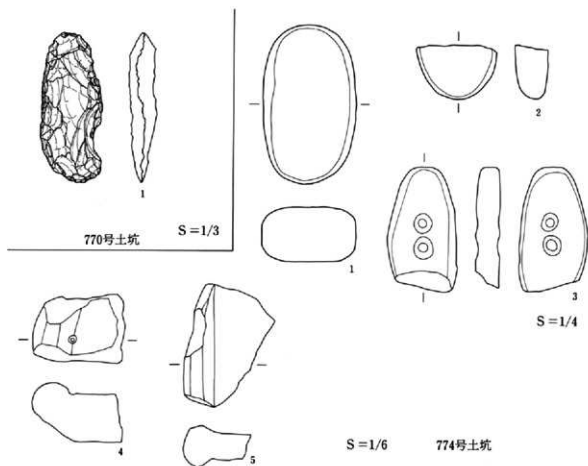
763号土坑



767号土坑

第114図 土坑出土遺物 (26)

第3章 検出された遺構と遺物



第115図 土坑出土遺物 (27)

表12 25号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	磨石	粗輝安山岩	14.0	5.9	6.0	810.0

表14 212号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	黒色片岩	17.8	6.5	2.2	295.0

表13 35号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	緑色片岩	11.5	8.2	2.6	250.0

表15 268号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	多孔石	牛伏砂岩	39.0	30.6		13,050.0

第2節 縄文時代の遺構と遺物

表16 282号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.3	0.8
2	凹 石	雲母石英片岩	17.1	6.6	3.1	530.0
3	凹 石	雲母石英片岩	9.5	5.1	3.3	250.0

表17 288号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	打製石斧	硬質泥岩	10.6	5.2	2.3	124.9
2	石 皿	牛伏砂岩	26.8	24.2	12.0	6,900.0
3	凹 石	黒色片岩	27.3	17.8	5.4	2,670.0

表18 289号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 皿	牛伏砂岩	37.6	32.6	9.5	12,400.0
2	凹 石	緑色片岩	10.9	10.0	1.9	360.0
3	凹 石	緑色片岩	13.8	6.2	3.6	670.0

表19 290号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	多孔石	黒色片岩	26.8	19.8		3,870.0

表20 304号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 皿	緑色片岩	29.5	14.5	7.6	4,050.0
2	石 皿	粗輝安山岩	7.5	8.0	4.2	650.0

表21 306号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹 石	緑色片岩	15.6	7.9	3.7	650.0

表22 308号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 皿	粗輝安山岩	15.0	17.0	5.7	230.0

表23 328号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹 石	緑色片岩	16.1	7.6	3.8	435.0

表24 340号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹 石	緑色片岩	18.6	9.8	2.6	780.0
2	凹 石	牛伏砂岩	22.0	13.2		2,845.0
3	石 皿	牛伏砂岩	23.7	27.0	8.9	5,350.0
4	多孔石	牛伏砂岩	41.2	33.0	11.8	21,700.0

表25 346号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	スレイバー	硬質泥岩	5.3	4.2	1.1	22.6
2	凹 石	黒色片岩	21.5	13.8		2,900.0

表26 351号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹 石	牛伏砂岩	10.7	6.6	3.5	270.0

表27 408号土坑出土石器計測表

No	器種	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹 石	雲母石英片岩	7.5	7.0	2.6	200.0

### 第3章 検出された遺構と遺物

表28 676号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 匙	珪 質 頁 岩	6.0	6.6	1.2	30.7

表29 770号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	打製石斧	硬 質 泥 岩	11.8	5.0	2.2	130.3

表29 745号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 錘	黒 曜 石	2.6	1.3	0.5	1.8
2	打製石斧	硬 質 泥 岩	4.5	3.5	1.3	25.2
3	凹 石	緑 色 片 岩	25.9	9.8	10.5	4,100.0
4	凹 石	緑 色 片 岩	24.0	6.8	3.8	815.0
5	凹 石	黒 色 片 岩	13.2	5.8	2.7	320.0
6	凹 石	緑 色 片 岩	13.0	5.3	2.5	300.0
7	多 孔 石	牛 伏 砂 岩	39.5	24.3		9,100.0
8	多 孔 石	黒 色 片 岩	19.5	21.1	4.0	2,740.0
9	多 孔 石	牛 伏 砂 岩	34.5	16.0		3,950.0
10	多 孔 石	牛 伏 砂 岩	13.7	15.7		1,255.0
11	多 孔 石	牛 伏 砂 岩	6.0	11.3		200.0
12	石 皿	粗 輝 安 山 岩	12.3	9.4	5.8	750.0
13	多 孔 石	牛 伏 砂 岩	24.2	28.5		8,300.0
14	石 皿	牛 伏 砂 岩	14.7	16.0	5.3	1,200.0

表34 774号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	磨 石	石 英 閃 緑 岩	16.7	10.0	5.8	1,735.0
2	磨 石	グ ー ン 石	5.9	8.4	3.5	240.0
3	凹 石	緑 色 片 岩	13.3	7.3	2.5	470.0
4	石 皿	牛 伏 砂 岩	11.0	14.5	9.3	1,590.0
5	石 皿	牛 伏 砂 岩	19.5	14.5	6.5	1,630.0

表30 761号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹 石	グ ー ン 石	8.8	6.6	3.8	305.0

表31 763号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 皿	牛 伏 砂 岩	32.2	12.7	6.5	2,530.0

表32 767号土坑出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹 石	緑 色 片 岩	15.8	6.4	2.8	600.0
2	石 皿	粗 輝 安 山 岩	21.6	15.2	6.6	2,870.0



## 745号土坑（第90図6・7、第104・105・112～114図 表29）

第90図6は波状口縁をなす小形の深鉢で、口縁部には沈線と隆帯により渦巻および楕円等の文様を描き、胴部には沈線による懸垂文と縦位回転の縄文を施している。第90図7は、平口縁のキャリバー状を呈する深鉢で、口縁および頸部下に平行沈線を数条巡らせて文様区画を行い、区画内に縦位の蛇行沈線等を描き、胴部には縦位および斜位の沈線で文様を描く。第104図1～6はキャリバー状を呈する深鉢の口縁部で、沈線と隆帯により口縁部文様帯を区画し、区画内に沈線等により渦巻や長楕円等の文様を描くとともに、その内部に縄文を施す。7は口縁部に沈線で文様帯を区画し、区画内に縦位の蛇行沈線を描く。8・12は口縁に2条の平行沈線を巡らせ、口縁部に沈線で重弧状の文様を描き、地文には沈線状の縦位の条痕を施す。10・11は口縁に2条の平行沈線を巡らせ、口縁部以下に沈線で蛇行懸垂文を描き、地文には縦位の条痕を施す。13は無文となる口縁下に1条の隆帯を巡らせて区画し、胴部に隆帯による蛇行懸垂文が描かれ、地文には薄く沈線状の条痕が施される。9は1～6と同様の口縁部文様帯をもち、その胴部に縦位回転のRLの縄文を施すものである。14は胴部に沈線および隆帯で、直線ないし曲線的な文様を描くもので、地文には縄文を施す。15は胴部に隆帯による蛇行懸垂文等をもつもので、地文には縦位回転のRLの縄文を施す。16～21は胴部に沈線による懸垂文をもつもので、地文には回転絡条体（撚糸）を施す16・21や、縦位回転の縄文を施すものである。

出土した石器は、黒曜石製の端部が欠損した石錐1点、欠損した打製石斧が1点、片面ないし両面に凹孔をもつ凹石が4点、片面ないし両面に多孔をもつ多孔石が5点、両面に多孔をもつ石皿2点と、両面石皿となるもの1点がある。

## 755号土坑（第105図）

胎土に繊維を含む波状口縁となる口縁部で、波頂下に縦長の隆帯をもち、口縁部に半截竹管による平行沈線を数条巡らせるもの。

## 756号土坑（第105図）

1は胎土に繊維を含む頸部片で、半截竹管による菱状の文様を描くもの。2は胴部にRLの縄文を施す。3は口縁部の把手であり、表面には三角状の隆帯と刺突が施され、裏面には渦巻状の隆帯が施される。さらに上面の周囲には刻みをもち、細い隆線と三角印刻で星状の文様を描き、中央に円形の孔を有する。

## 757号土坑（第105図）

1は胴部に半截竹管による文様を描き、円形刺突を施す。2は胴部に半截竹管による木の葉状の文様を描くと共に、区画内に縄文を施す。3・4は胴部に半截竹管による連続爪型文をもつ平行沈線で文様を描くもので、沈線間には刻みを有する。

## 758号土坑（第105図）

1は口縁部に半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせると共に、沈線で文様を描くもので、地文に縄文を施す。2・4は胴部に半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもので、2には円形刺突を配する。3は口縁部に半截竹管による平行沈線を巡らせるもの。5は小突起をもつ口唇部に沈線を巡らせ、口縁部に隆帯で文様を描くと共に、その内側に角押文を巡らせる。裏面の小突起部には、小さな渦巻状

### 第3章 検出された遺構と遺物

の隆帯を貼付する。

#### 759号土坑 (第106図)

1は口縁部に半裁竹管による平行沈線を数条巡らせるもの。2は半裁竹管による平行沈線と格子条の沈線を施すもの。

#### 760号土坑 (第106図)

1は胴部に斜行する沈線を施すもの。2は胎土に繊維を含む口縁部片で、口縁以下に縄文を施すもの。

#### 761号土坑 (第106・114図 表30)

1は胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。2は胴部に太い沈線で文様区画し、区画内に縄文を施すもの。3は胴部に縄文を施す。4は胎土に繊維を含む胴部片で、縄文を施すものである。出土した石器は、両面に凹孔をもつ磨石が1点ある。

#### 763号土坑 (第106・114図 表31)

1は大きく屈曲する口縁の口唇部位下に、RLの縄文を施すもの。2は胴部にRLの縄文を施すもの。3は胎土に繊維を含む胴部片で、LRの縄文を施すものである。

出土した石器は、両面に多孔をもつ石皿が1点ある。

#### 764号土坑 (第106図)

1・2は胴部に微隆帯ないしは沈線で懸垂文を描き、縦位回転の縄文を施すものである。

#### 765号土坑 (第106図)

1～3は繊維を含むもので、1は頸部に半裁竹管による菱状の文様を描くもの。2・3は胴部に縄文を施すもので、3はRLの縄による。4は底部近くの胴部片で、縦位の角押文が施されている。

#### 767号土坑 (第106・114図 表32)

1は胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。2は胴部に沈線で文様を描くものであり、3は無文の胴部片である。

出土した石器は、片面に凹孔をもつ凹石が1点と、浅い多孔をもつ比較的面が平らな台石とも思われる多孔石が1点である。

#### 769号土坑 (第106図)

2は胎土に繊維を含む胴部片であり、LRとRLによる羽状縄文を施す。1は隆帯で懸垂文を描き、区画内に縄文を施す。3は胴部に爪形刺突を巡らせるもの。4・5は無文の胴部片である。

#### 770号土坑 (第91図9・10、第115図 表33)

9は双頂突起をもつ平口縁の深鉢で、双頂下には耳タブ状の隆帯をもち、胴部は無文となるが、輪積み痕

と指頭圧痕を残す。10は大形の深鉢となるもので、隆帯による文様が、口縁部以下に多段にわたって描かれるものである。

出土した石器は、打製石斧が1点である。

#### 774号土坑 (第107・115図 表34)

1は口縁部に半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。2は胴部に半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描き、円形刺突を配する。3は胴部に半截竹管による平行沈線で、曲線的な文様を描くもの。4は胴部に隆帯と沈線で文様を描くもので、地文に回転絡条体(撚糸)を施している。5～7は胴部に沈線でU字状の文様等を描き、区画内に縄文を施すもの。9～17は口縁部ないし胴部にLRないしRLの縄文を施すもので、9には結節縄文が施されている。

出土した石器は、丁寧に研磨された磨石が2点と、両面に凹孔をもつ凹石が1点、周縁が作り出された石皿が2点である。

#### 775号土坑 (第107図)

1は胴部に沈線で文様を描き、区画内にLの縄文を施す。2は胴部にLRの縄文を施すもの。3は胴部に沈線で文様を描くものであり、4は無文の胴部に輪積み痕を残すもの。

#### 776号土坑 (第90図8、第107図)

第90図8は波状口縁となる口縁部に、隆帯で楕円状の文様を描くと共に、その内側に角押文を巡らせ、胴部は無文となるが、輪積み痕および指頭圧痕を残す。第107図1は、胴部に半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描き、円形刺突を配する。2は口縁部に刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を描くもの。3は口縁下に微隆帯を1条巡らせ、以下にRLの縄文を施すもの。4は胴部に沈線で懸垂文を描き、区画内に縦位回転の縄文を施すもの。6は無文の胴部片で、輪積み痕および指頭圧痕を残す。5は表裏両面に刷毛目痕をもつ円筒埴輪片である。7は須恵器の坏で、ロクロ整形によるものである。

### 3. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物の出土量は、膨大な量にのぼる。特に、C区とした地区からの出土物が、そのほとんどを占めている。これは、旧地形が北に延びる東側が高く、西側へ緩傾斜面を広くとる舌状台地であったものを、中世の城郭造成時に東側の高い部分を切り土し、西側の低い部分を盛り土したことで、結果的にC区とした西斜面部の包蔵状態が、極めて良好な状態にあったことに起因する。出土した遺物には、土器・石器が共に多く、土偶・岩偶等の土・石製品類も見られる。

#### 土器（第116～297図）

出土した土器の量は、遺物収納箱で250箱余を数える。これらの土器は、A区とした東台地の北端部に存在し多少谷地から出土したものと、C区とした同台地の西斜面で出土したものがほとんどであり、少量ではあるがC区の西側の中央台地（E区）からも出土している。土器は、縄文時代早期、前期、中期、晩期の資料であり、前期中葉以降から中期初頭までの出土量が最も多い。晩期のものは、僅かに4片だけであった。また、早期の資料については、C区に存在した谷地内から出土している。

記述するにあたり、次のように各土器群を大別し、各区ごとに土器の観察を行う。

第I期 早期	第I群	沈線土器
	第II群	絡条体瓦痕文土器
	第III群	条痕文土器
第II期 前期	第I群	二ッ木式土器
	第II群	関山式土器
	第III群	黒浜式土器
	第IV群	有尾式土器
	第V群	縄文施文土器群（繊維土器）
	第VI群	諸磯 a 式土器
	第VII群	諸磯 b 式土器
	第VIII群	諸磯 c 式土器
	第IX群	下島式土器
	第X群	刺突凹凸文土器
	第XI群	浮島式土器
	第XII群	北白川式土器
	第XIII群	上の坊式土器
	第XIV群	大木系土器群
第XV群	縄文施文土器群（前後後半無繊維土器）	
第XVI群	前期終末土器群	
第III期 中期	第I群	中期初頭土器群
	第II群	縄文施文土器群（中期初頭）

第III群	阿玉台式土器
第IV群	加曾利E式土器

## 第IV期 晩期

## A区出土土器 (第125～127図)

II期I群 この類に分別される土器は、かなり少ない。

61は胎土に繊維を含み、尖底深鉢となる胴部下半の土器で、0段多条の原体により縦位に長い菱形となる異方向縄文を施すもので、前期初頭の花積下層式土器の最も古い土器に位置づけられる。60は胎土に繊維を含む胴部片で、0段多条の短い原体により横位の羽状縄文が施されるものであり、花積下層式土器と考えられる。38は胎土に繊維を含む口縁部片であり、波状口縁となる。口縁部にはL・R・Lの3本を1組とする縹糸側面圧痕により、ループ等の文様が描かれ、竹管具による円形刺突が充填されている。新田野段階期のもので、ニッ木式土器と考えられよう。

## II期II群

39は胎土に繊維を含む口縁部片であり、波状口縁となる。地文に縄文をもち、口縁部に断面がD字状となる半裁竹管による沈線で、文様が描かれる。施文される文様は、口縁下に3条の沈線が巡り、波頂下にX字状の文様が施され、その交点に円形文が描かれる。41～47は同一個体となるもので、頸部がくびれ、口縁が開く深鉢の器形を呈し、口縁部から頸部には半裁竹管による粗い波状文が描かれ、頸部には平行沈線を巡らせる。胴部には縄文を施すようであるが、原体は不明。

## II期IV群

48は口縁から頸部に、櫛歯状工具により波状および円形の文様を描くものである。

## II期V群

49は胎土に繊維を含む口縁部で、波状口縁となり、波頂部に突起を有する。口縁以下には、正反の合による羽状縄文が施されている。52・56も同様に、正反の合の縄文を口縁部以下に施すものである。54・59は閉端還付縄（ループ文）が施されたものであり、54は口縁以下に、59は胴部片である。50・55は口縁部以下にLRの縄文を施すものであり、53・57・58は口縁部以下にRLの縄文を施すものである。60は胴部に短い0段多条のLRとRLにより羽状縄文を施すもの。61・69は胴部に0段多条のLRとRLで羽状縄文を施し、62～66はLRとRLで羽状縄文を施している。67は正反の合の縄で、LRとRLにより羽状縄文を施す。68はLRとRLによる結東羽状縄文である。70は胴部にLRの縄文を施すものであり、71～77はRLの縄文を施すものであるが、中には0段多条の縄を用いるものもある。

## II期VI群

78は平口縁となる口縁部に、細い半裁竹管具による平行沈線と沈線間に爪形刺突をもつ。79は平口縁の口縁部に、半裁竹管具により平行沈線を数段巡らせ、その間に波状沈線を巡らせる。さらに、縦位に円形刺突を施している。80・81は、79と同様の文様を胴部上半にもつものである。82は縦位の円形刺突と、波状沈線

### 第3章 検出された遺構と遺物

を数段巡らせるもの。85は平行沈線を数段巡らせるものであり、86は爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、胴部に RL の縄文を施すもの。

#### II期VII群

87は地文を縄文とする胴部に、連続する爪形文で曲線的な文様を描くもの。88～91は胴部に連続する爪形文と刻みにより曲線的な文様を描くものであり、88には円形刺突も施されている。92は胴部に半截竹管により格子目状の沈線を施すもの。93・94は胴部に半截竹管による沈線で文様を描くものである。95～103は刻みを有する浮線文で文様を描くものであり、95～97には曲線的な文様が、98～103には胴部に数条の浮線文が巡らされている。なお、これらの地文には縄文が施され、101の浮線には刻みではなく、縄文が施されている。

#### II期VIII群

104は口縁下に横位の集合沈線をもち、胴部に縦位および矢羽根状の集合沈線を施すもの。105は胴部下に横位の矢羽根状沈線を施すものであり、106は縦位の集合沈線を施すものである。110は胴部に弧状の集合沈線を施している。107～109は胴部に斜位の細い沈線を施し、小さな豆粒状のボタン状貼付文をもつもので、109には爪形刺突が施されている。

#### II期IX群

111は胴部に結節浮線文で文様が描かれるものである。

#### II期X V群

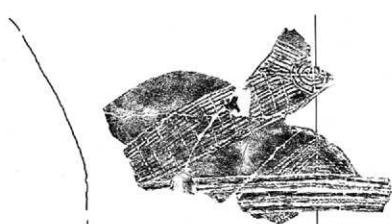
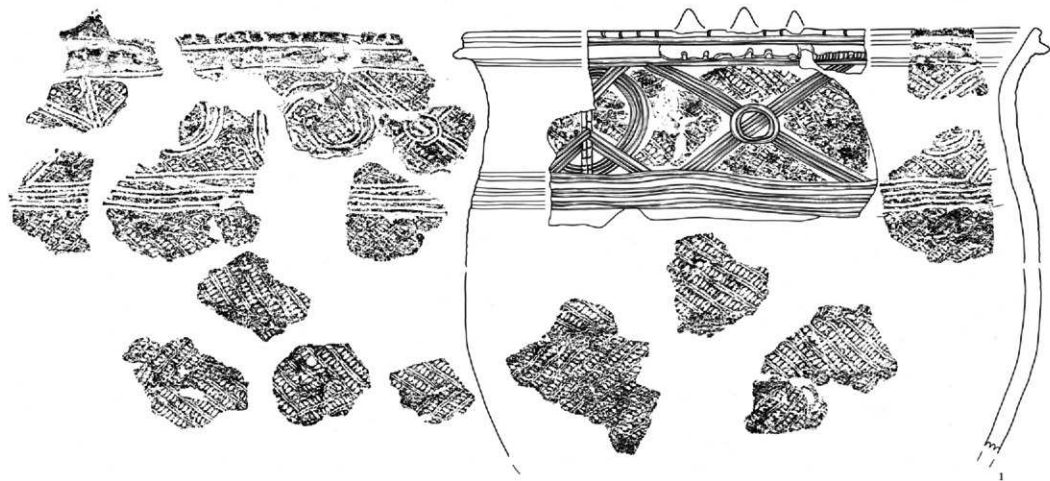
112は平口縁となる口縁部以下に、RL の縄文が施されるものであり、113～116は胴部に LR ないし RL の縄文が施されるものである。

#### III期I群

117は口縁部に隆帯等で文様区画し、区画内に格子状の沈線を施すもの。118は口舌部に縄文を施し、口縁部に波状沈線をもち隆帯で文様区画を行い、隆体の内側に角押し文をもつ。胴部には RL の縄文が施されている。119・120は同一個体であり、口舌部に刻みをもち、外反する口縁部には1条の角押し文が巡り、長楕円状の隆帯をもつ。122は胴部に垂下する沈線と、点列状の刺突が加えられるものであり、123は円形ないしY字状の沈線が施されるものである。124・125は胴部に垂下する隆帯ないし沈線をもち、縦位回転による縄文を施したものである。

#### III期II群

126は内反する平口縁の口縁部に、波状の角押し文を施し、その下に平行の角押し文で口縁部の文様区画を行うものである。127は内反する平口縁の口縁部に、隆帯により楕円状の文様を区画し、隆帯の内側に角押し文を添わせるように施すものである。

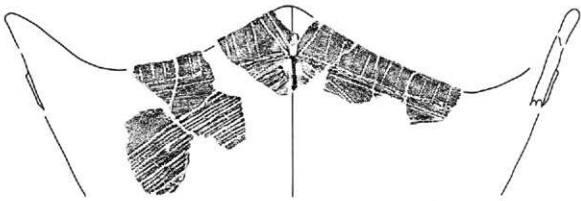


3=1/3

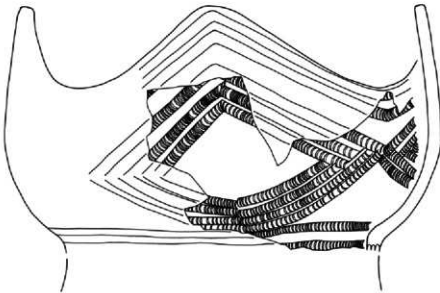
第116图 遼興外出土土器 (1)







4



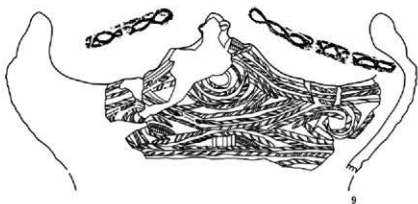
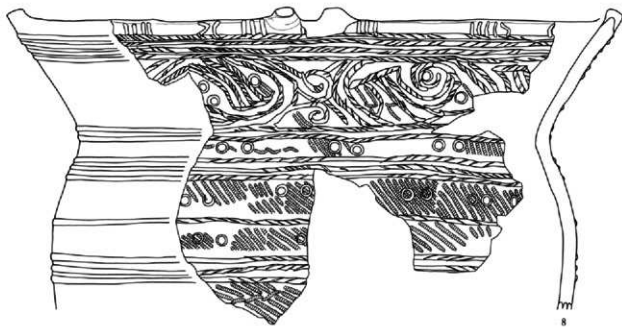
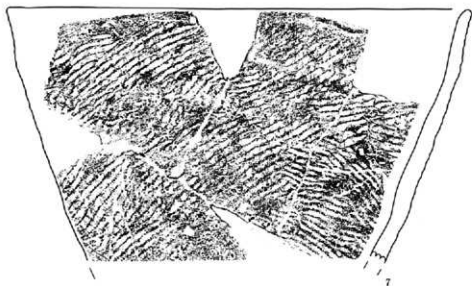
5



6

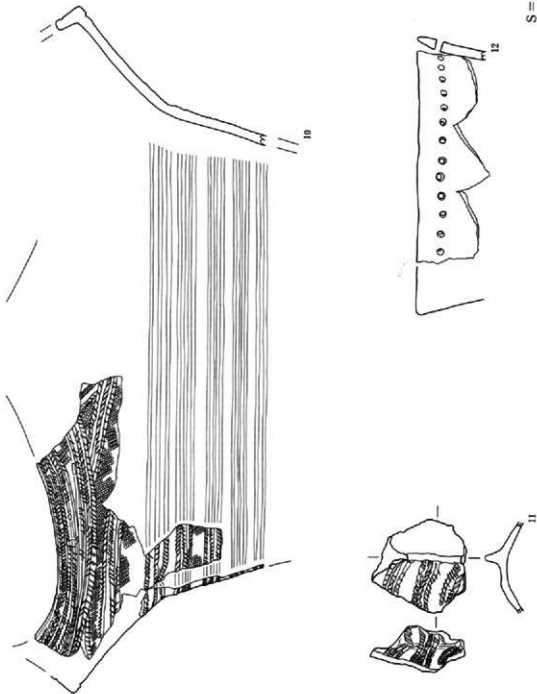
第117図 遺構外出土土器(2)

S=1/3



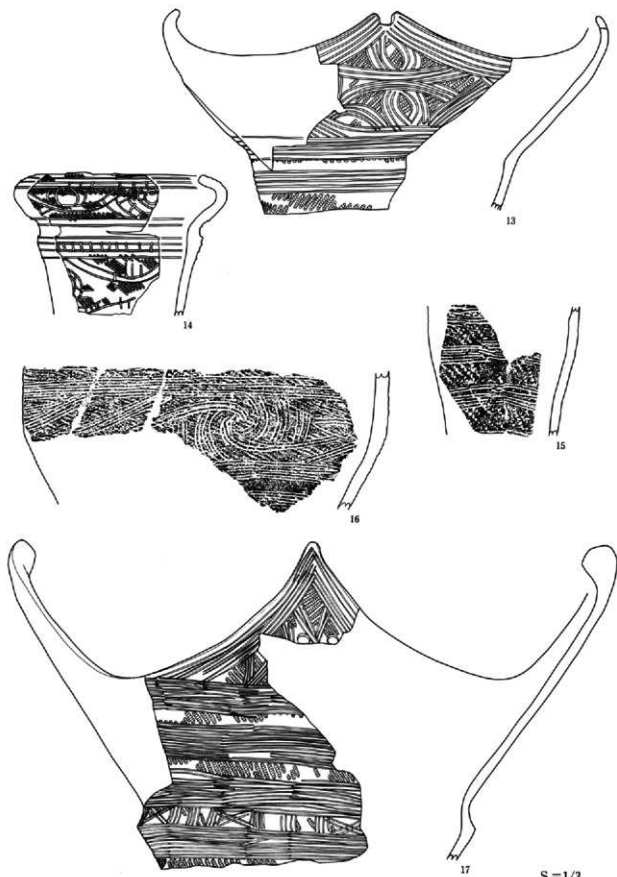
第118図 遺構外出土器(3)

S=1/3



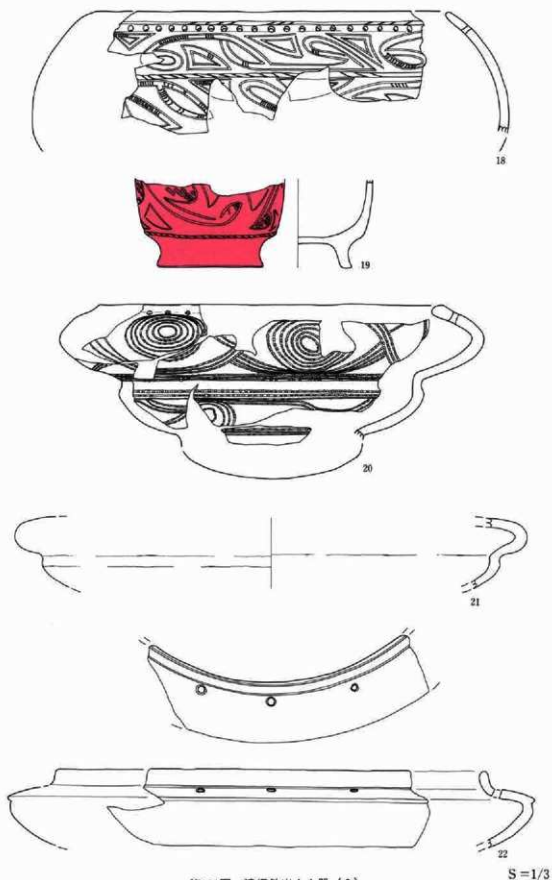
S=1/3

第119図 遺構外出土器(4)



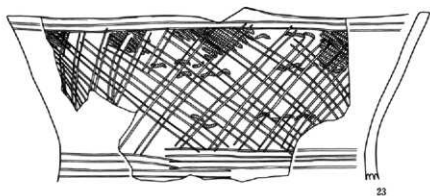
第120図 遺構外出土土器 (5)

S=1/3



第121図 遺構外出土土器(6)

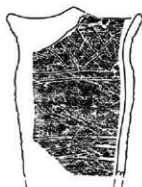
S=1/3



23



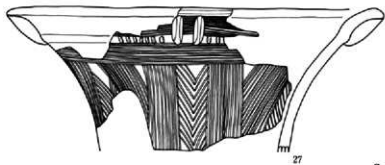
24



25



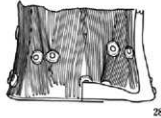
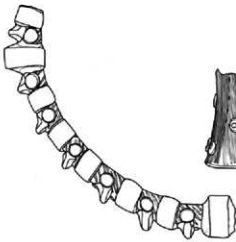
26



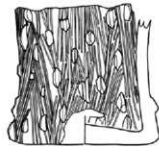
27

第122図 遺構外出土器（7）

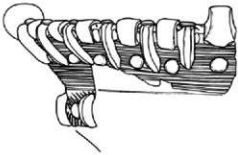
S=1/3



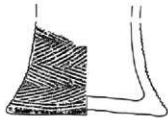
28



29



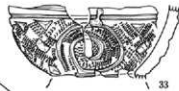
30



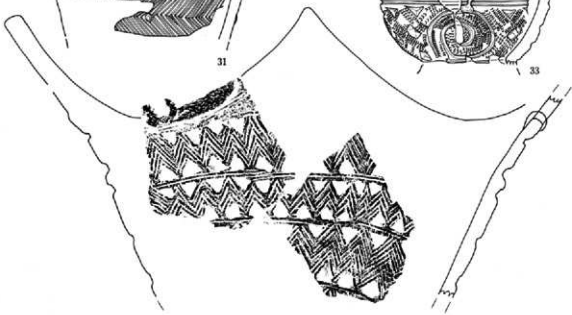
32



31



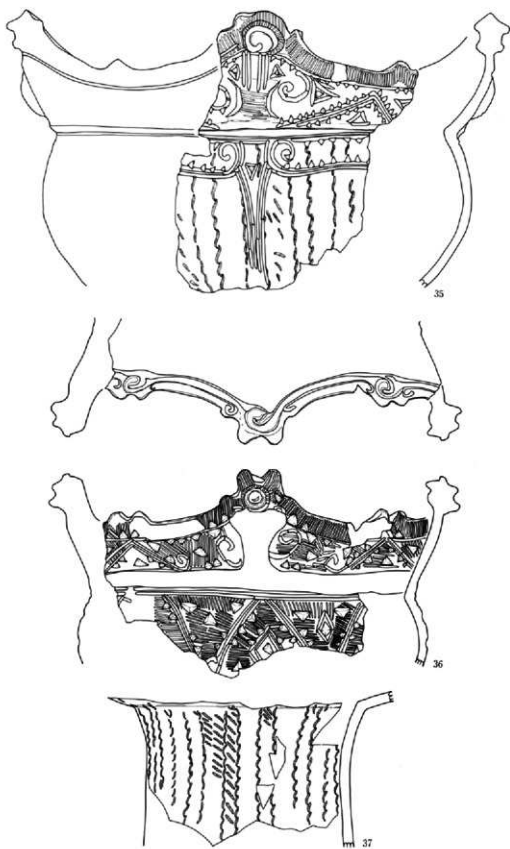
33



34

S=1/3

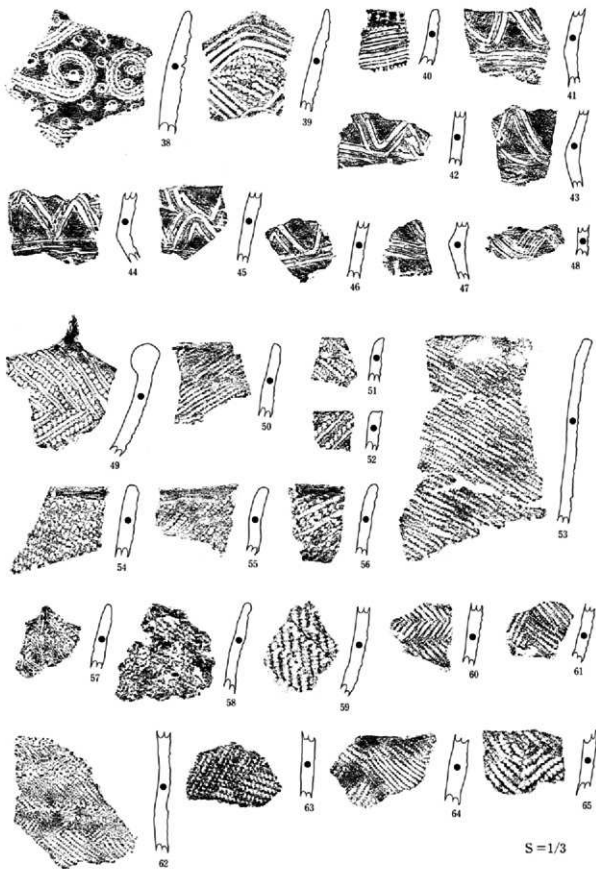
第123図 遺構外出土土器(8)



第124図 遺構外出土器（9）

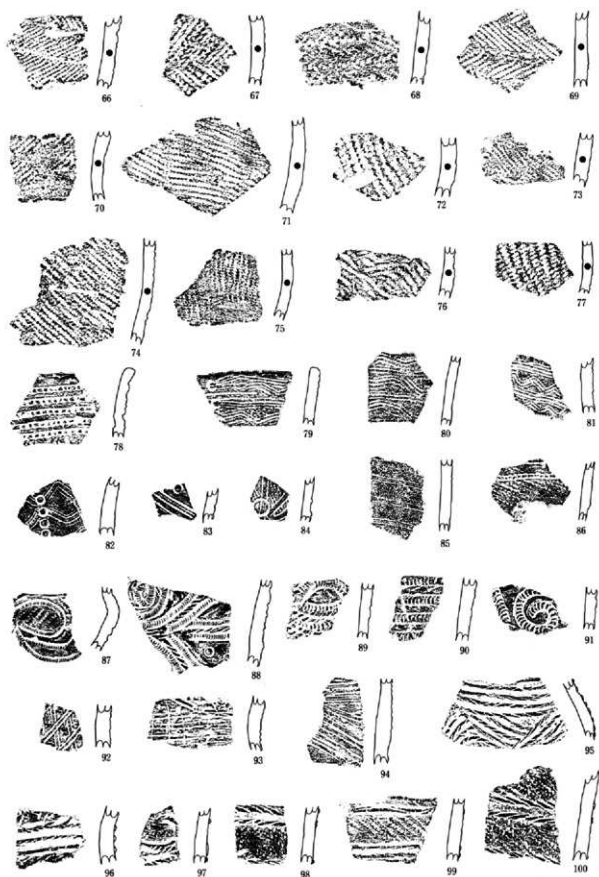
S=1/3





第125図 遺構外A区出土土器(1)

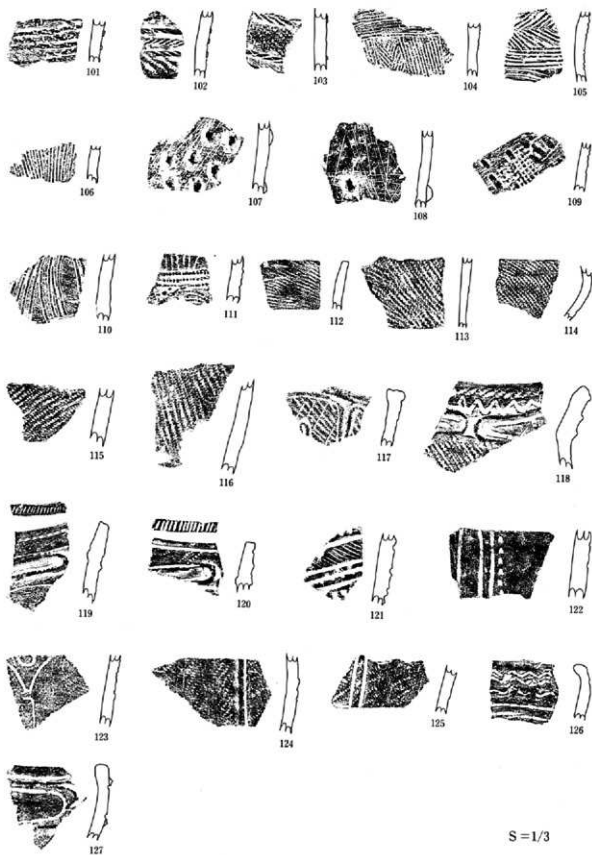
第3章 検出された遺構と遺物



第126図 遺構外A区出土土器(2)

S=1/3

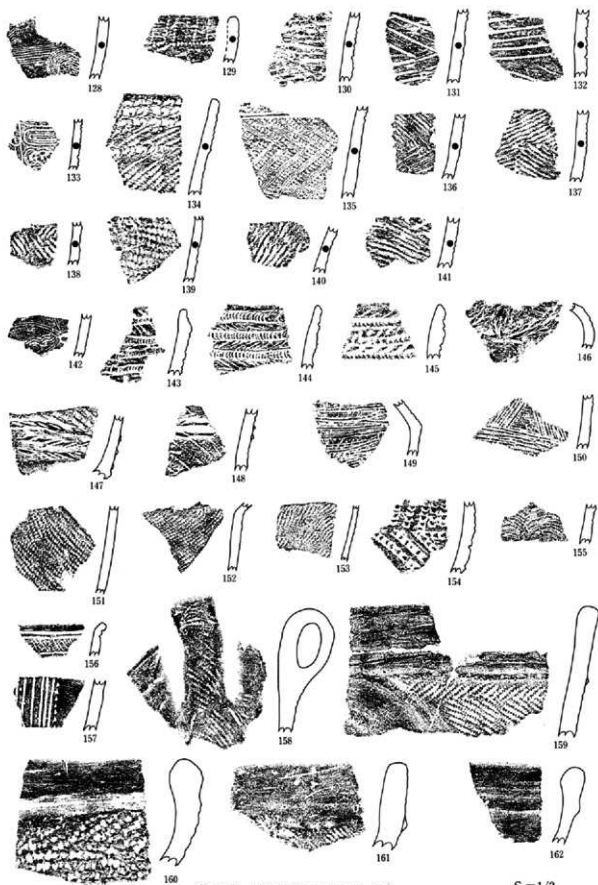
第2節 縄文時代の遺構と遺物



S=1/3

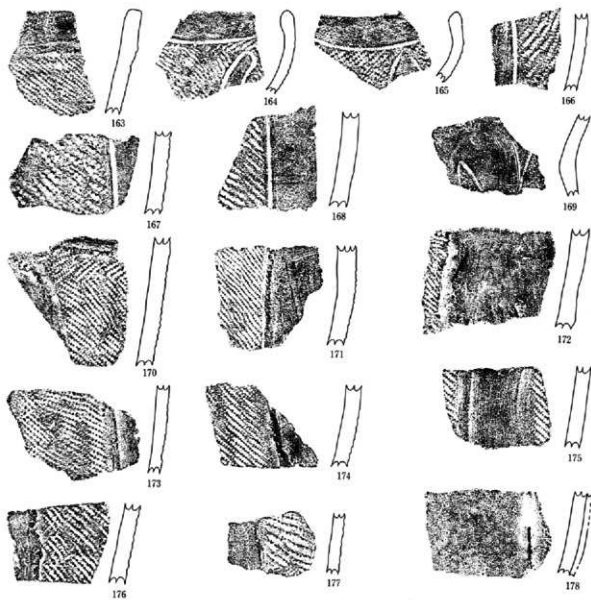
第127図 遺構外A区出土土器(3)

第3章 検出された遺構と遺物



第128図 遺構外B区出土土器 (1)

S=1/3



第129図 遺構外B区出土土器(2)

S=1/3

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### B区出土土器（第128・129図）

##### Ⅱ期Ⅲ群

133は胴部に半裁竹管による縦位・曲線的な文様を描き、さらにコンパス文を有し、円形刺突をもつ。土器の内外面は、共に丁寧に研磨されている。

##### Ⅱ期Ⅳ群

128は櫛歯状工具により、条線で円形等の文様を描くものであり、129は口縁部に縦位の連点状刺突帯をもち、以下に連点状刺突による文様を描くものである。130～132は口縁下に半裁竹管による平行沈線で、菱形等の文様を描くものである。

##### Ⅱ期Ⅴ群

134は口縁部以下に閉端環付縄によるループ文が施されるものであり、135は胴部に正反の合の縄による羽状縄文が施されるものである。136～138は羽状縄文が施されるものであるが、136・137にはLとRが、138にはLR（0段多条）とRL（0段多条）が用いられている。139はRLが施され、140・141にはLないしRが施されている。

##### Ⅱ期Ⅵ群

142は円形刺突をもち、横位にレンズ状の弧状沈線および波状沈線を施すものである。

##### Ⅱ期Ⅶ群

143～145は平口縁となる口縁部に、平行な爪形文を施し、爪形文の間に刻みを有するもので、143の口舌部にも刻みをもつ。146～148は刻みを有する浮線文で文様を描くものであり、146は頸部に曲線的な文様を描き、147・148は胴部に数条巡らせ、地文に縄文をもつ。149は屈曲する頸部に、平行沈線を巡らせるもので、地文には縄文をもつ。

##### Ⅱ期Ⅷ群

150は集合沈線で平行ないしは弧状に文様を描くもの。154は爪形刺突で縦位ないし斜位に文様を施すものである。

##### Ⅱ期Ⅸ群

155は口縁下に、沈線で弧状ないし渦巻き状の文様を描くものである。

##### Ⅱ期ⅩⅤ群

151～153は胴部に縄文を施すものであり、151にはRLが、152・153にはLRの縄文が施されている。

##### Ⅲ期Ⅰ群

156は平口縁となる口縁部に、沈線で口縁部区画を行い、区画内に格子状の沈線を施すものである。157は胴部に垂下する数条の沈線と、点列状の刺突を施したものである。

## III期IV群

158は波状口縁となる口縁部の波頂部に把手をもち、口縁部が無文で、以下にLRの縄文を施したもので、159は平口縁となる口縁部に、1条の隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、胴部に隆帯で曲線的な文様を描き、区画内にLRの縄文を施している。160は平口縁となる口縁部に、太い沈線で口縁部文様を区画し、区画内にLRの縄文を充填する。161も同様であるが、RLの縄文を施すものである。163は平口縁となる口縁部が無文帯となり、以下にRLの縄文を施すものである。164・165は同一個体となるもので、内反する口縁部が無文帯となり、1条の沈線で区画された口縁以下に弧状の文様が描かれ、LRの縄文が施されるものである。166～168は胴部に垂下する沈線で区画し、区画内に縦位回転のLRの縄文を施している。170～178は胴部に垂下しない弧状の隆帯で文様区画し、縦位回転のLRの縄文を施している。

## C区出土土器（第116～124・130～295図）

## I期I群

179・184～186・187が本群の土器であり、胎土に多量の繊維を含む。179は波状口縁となる波頂部に、垂下する隆帯をもち、表面には地文に条痕を施した後、縦位の爪形刺突を施すもので、裏面にも条痕を施している。184は表面に格子状の沈線を施し、裏面には条痕を施している。185は179と同一個体となるもので、表面に地文条痕と縦位の爪形刺突、裏面に条痕を施すものである。186・187は表面に地文条痕と縦位の平行沈線が施され、裏面に条痕が施されているものである。

## I期II群

180～183が本群の土器であるが、180・181は無繊維土器であり、182・183は胎土に多量の繊維を含む。180は口舌部に刻みをもち、口縁部に原体側面圧痕により2条の平行線を施し、その下に鋸歯状の文様を描く。181は口縁部に原体側面圧痕を斜位に施し、地文に縄文を施すもの。この180・181は、本期（早期）の所産のものではなく、他の時期の土器である可能性もある。182・183は口舌部および表裏面に条痕を施し、表面には絡条体圧痕がやや斜位に施されている。なお、182では羽状に施されている。

## I期III群

188～202が本群の土器であり、胎土に多量の繊維を含む。これらの土器は、いずれも表裏面に条痕を施すものである。

## II期I群

205・207の2点が本群の土器であり、胎土に繊維を含む。205は口縁下にL・R・Lの3本1組の摺糸側面圧痕によりループ状の主文様を描き、刺し切り文（棒状刺突）を充填させ、口縁部文様下に1条の刻みをもつ隆帯を巡らせて文様帯区画を行い、胴部にLRの縄文を施す。207は胴部上半に1条の刻みをもつ隆帯を巡らせ、以下の胴部にLRとRL（0段多条）による羽状縄文を施している。

## II期II群

1・20・206・208～239を本群としたが、この内の一部はII期III群に含めるべき土器も存在する。とりあえず、本群の中で観察する。これらの土器の胎土には、全て繊維が含まれている。1は頸部が緩やかに括れ、

口縁が外反する大形の深鉢の器形を呈する土器で、平口縁となる口縁に角状の突起を4単位もつものと思われる。口縁直下にはまばらに爪形刺突を施し、その下に1条の鐔状の隆帯を巡らせ、隆帯の上下には沈線を添わせ、隆帯の一部には刻みを有する。頸部の括れ部には、半載竹管による円形、X字状、の字状等の主文様が断面蒲鉾状の沈線で描かれ、部分的に爪形刺突をも有する。その下部には数条の平行沈線が巡らされ、文様帯の区画を行っている。なお、地文および胴部には、0段多条の正反の合の縄により羽状縄文が施されている。209～212は地文にLRの縄文を施し、半載竹管による断面蒲鉾状の沈線で菱形状の文様を描くものである。213～220は同一個体となるもので、頸部の括れ部上半に半載竹管による平行沈線と鋸歯文を数段描くもので、胴部には縄文が施されている。221は櫛歯状工具により平行および波状に文様を描くもの。222～224は同一個体となるもので、平口縁となる口縁下に半載竹管による刺突列を巡らせ、その下に菱状の文様を平行沈線で描く。さらに、胴部にも沈線と刺突を施している。225は地文縄文の口縁部に、半載竹管で菱状の文様を描くもの。226は半載竹管による刺突状の短沈線を施すものである。227は口縁下に半載竹管による菱形状ないしは三角状の文様を描き、口縁部以下にLの縄文を施すものである。228・229は口縁部に櫛歯状工具によりコンパス文を施すものである。230は口縁から頸部にかけて、櫛歯状工具による縦位の波状文を描き、胴部にLRの縄文を施している。234・235は同一個体となるもので、括れ部に円形および横位の隆帯で文様帯を区画し、上半にはX字状の隆帯と短沈線を施し、地文および胴部にRの縄文を施すもの。237は波状口縁となる口縁部に、隆帯と短沈線で文様を描くものである。204・206・208は同一個体となるもので、括れ部に3条の細い隆帯を巡らせるものであり、LR(0段多条)とRL(0段多条)による羽状縄文および0段多条のRLRの縄文が施されている。236・238・239は胴部に閉環環付縄によるループ縄文が施されるものであり、238・239には1条の爪形刺突が巡らされている。

### Ⅱ期Ⅲ群

240～329・1198～1212が本群の土器であり、胎土に繊維を含む。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

**A類** 沈線により、平行、鋸歯状、菱形状等の文様を描くものを本類とした。

240・241は同一個体となるもので、波状口縁となる波頂下に長楕円状の隆帯をもち、口縁下に半載竹管による数条の平行沈線を口縁に添わせるように巡らせ、口縁以下にLRとRLによる羽状縄文を施すものである。243・244も同一個体となるもので、波状口縁となる波頂下に垂れ下がるような円形の隆帯をもち、口縁下に半載竹管による数条の平行沈線を口縁に添わせるように巡らせている。この240・241と243・244は、同一個体である可能性があり、その場合は波頂下隆帯が2対の異なる隆帯形状の土器となる。242・251は波状口縁となる波頂下に棒状に垂下する隆帯をもち、口縁下に半載竹管による数条の平行沈線を口縁に添わせるように巡らせるもの。245は平口縁に棒状の垂下する隆帯をもち、口縁以下にRの縄文を施している。248は小波状口縁となる波頂部に垂下する隆帯をもち、口縁下に半載竹管による平行沈線と縄文を施すものである。249・250は口縁下に棒状の垂下する隆帯をもち、口縁部に半載竹管による平行沈線で菱形状等の文様を描くもの。246は平口縁となる口縁に角状突起をもち、口縁下に2条の隆帯を巡らせるもの。247は小波状口縁をなし、口縁下に2条の隆帯を巡らせ、さらに上下の隆帯を結ぶ縦位の隆帯をもち、以下に縄文を施すもの。252は平口縁となる口縁下に1条の隆帯を巡らせ、その下に半載竹管による沈線で鋸歯状の文様を描き、Rの縄文を施す。253・254は同一個体となるもので、平口縁となる口縁下に半載竹管による数条の平行沈線を巡らせ、その下に菱形状の文様を描く。地文にはLRの縄文が施されている。255は口縁下に沈線で菱形状の文様



を描き、その内部に十文字状の沈線を施している。257は口縁下に半截竹管による平行沈線を数条巡らせ、その下に RL の縄文を施すものである。

**B類** 主にコンパス文を施文するものを本類とした。

258・259・260・263は同一個体となるもので、口端部がやや内反する平口縁をなし、口縁部に半截竹管による平行沈線を数条巡らせ、その間にコンパス文を1条有する。胴部には LR (0段多条) と RL (0段多条) による羽状縄文が施されている。21・262・264は口端部がやや内反する平口縁をなし、口縁部に半截竹管によるコンパス文と平行沈線を数段巡らせるもの。265～268は内反ぎみの平口縁をなし、口縁部に1条のコンパス文を巡らせ、以下に L の縄文を施すもの。269・270は平口縁の口縁部に2条のコンパス文を巡らせ、地文に L の縄文を施している。271・272は平口縁の口縁部に間隔を開けた2条のコンパス文を巡らせ、地文に L の縄文を施すものである。273・274は口縁部にコンパス文のみを施すもの。275は内反ぎみの平口縁に小突起をもち、口縁部に1条のコンパス文を巡らせ、以下に L の縄文を施すもの。276は口端部がやや内反する平口縁をなし、口縁部に半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線と、コンパス文ないし波状文を数段巡らせるもの。277～279は口端部が内反する平口縁をなし、口縁部に1条のコンパス文を巡らせ、以下に右下がりないし左下がりの斜位に沈線およびコンパス文を施すものである。280は内反ぎみの小波状口縁をなし、口縁直下に1条のコンパス文を巡らせ、その下へは波頂下に縦位の沈線で区画し、横位の平行沈線とコンパス文を数段施している。281は口縁に小突起をもち、口縁下に2条のコンパス文を巡らせ、爪形刺突をもつ平行沈線で鋸歯状等の文様を描く。282・284は内反ぎみの平口縁の口縁部に、爪形刺突をもつ平行沈線とコンパス文を数段巡らせるもの。283は内反する平口縁をなし、口縁直下に爪形刺突をもつ平行沈線で横位の長楕円文を描き、その下に縦位ないし横位の長楕円およびコンパス文を描くものである。288～290・292～294・297は口縁部に平行沈線とコンパス文を横位に描くものである。291は口縁部に横位の平行沈線と斜位のコンパス文を描くものであり、295は斜位の平行沈線とコンパス文を施すものである。296は口縁部にコンパス文のみを施すもの。298～309は頸部の括れ部ないし胴部にコンパス文を巡らせるものであり、胴部には縄文が施されている。300・301・303・305・306は L の縄文が、298は RL、299・302は LR、304は LR (0段多条)、308は L と R による羽状縄文、307・309には LR と RL による羽状縄文がそれぞれ施されている。

**C類** 爪形刺突をもつ沈線で、対角線文を描くものを本類とした。

310～313は内反ぎみとなる平口縁をなし、口縁部に細い半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせ、胴部ないし地文に LR あるいは RL の縄文をもつものである。311には円形刺突が加えられている。1198は内反ぎみの平口縁の口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線を2条巡らせ、その下に同様の平行沈線を地文の縄文の条方向に斜位に描く。地文は RL の縄文である。1199は内反する平口縁の口縁部に平行沈線を巡らせ、その下へ地文に RL の縄文を施した後に縦位と斜位の平行沈線を描き、縦位沈線上には円形刺突を加えている。1200は内反ぎみの平口縁の口縁部無文帯に2条の平行沈線を巡らせ、その下へ地文として RL の縄文を施した後に、縦位、横位、斜位の平行沈線を描いている。1201は内反する波状口縁をなし、口縁に添って爪形刺突をもつ平行沈線で長楕円を描き、その下へ地文として RL の縄文を施した後、波頂下に同様の平行沈線で縦位に、さらには斜位に文様を描いている。1202は内反する波状口縁で、地文に LR と RL で羽状縄文を施し、口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、以下に同様の沈線で縦位および斜位の文様を描く。315～329・1203～1212は胴部に細い半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を、横位、縦位、斜位に描くもので、横位に巡る沈線内が無文帯となり、胴部地文に LR と RL による羽状縄文が施されている。これらに施される斜位の平行沈線は、地文である縄文の条方向に添うように施文されるのが特徴である。言い替えば、地文であ

る羽状縄文と一体化して、対角線文が施文されているといえよう。

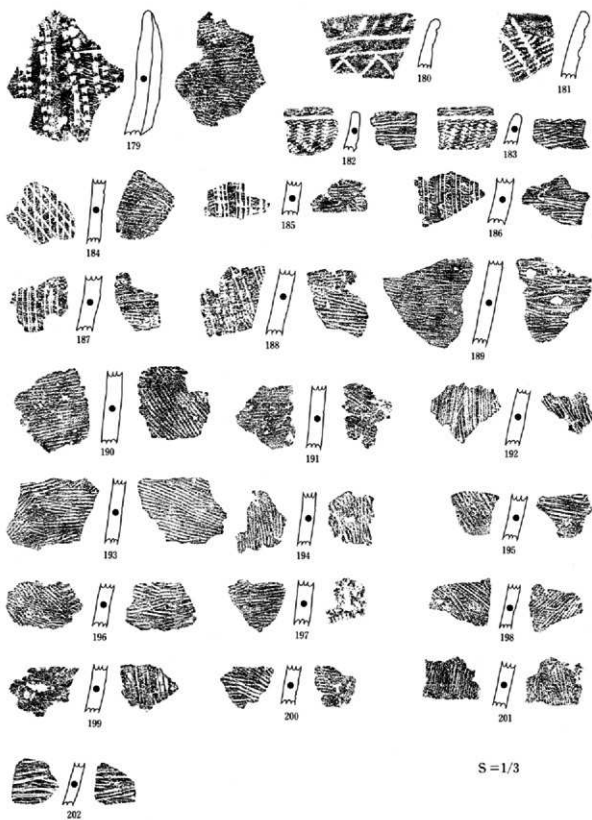
なお、1198～1212の胎土への繊維の混入量は、他の繊維土器に比べてやや少ない。

#### II期IV群

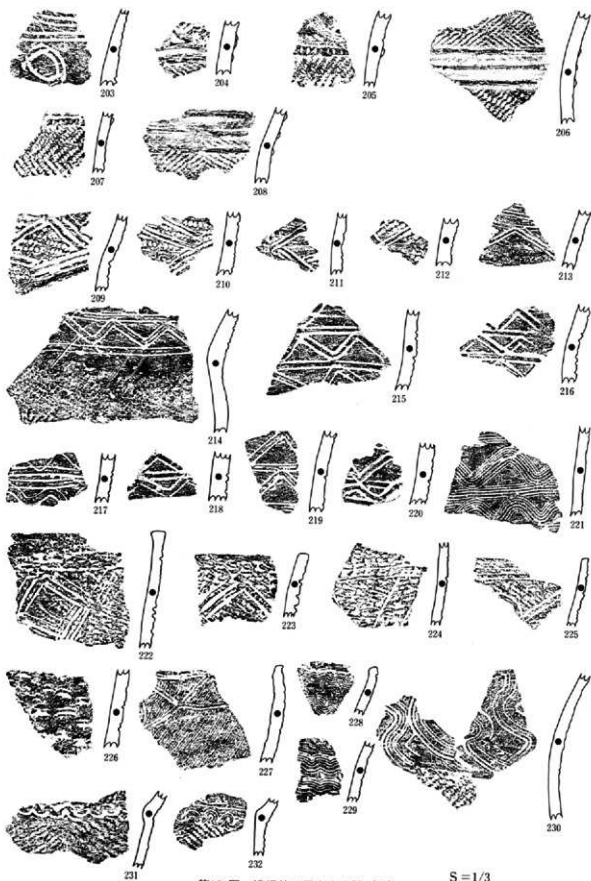
2～5・330～715が本群の土器であり、胎土に繊維を含む。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

**A類** 櫛歯状工具により、連点状刺突および条線等で主文様を描くものを本類とした。

2は頸部が括れ、口縁部が大きく外反する深鉢形を呈する土器で、主文様に櫛歯状工具による条線で大形の菱形を描き、菱形の交点部に小さな円を描く。菱形となる条線の上下には連点状刺突が添わせられ、条線内にも条線に直交するように連点状刺突が施される。また、菱形の交点下には、連点状刺突により山形状の文様が施されている。頸部の括れ部には、細い隆帯が3条巡り、隆帯の上下および隆帯間にも連点状刺突を巡らせている。3は4単位の大波状口縁をなし、頸部が括れ、口縁部が大きく外反する深鉢形を呈する土器で、口縁下に櫛歯状工具による横位の条線と連点状刺突を巡らせ、その下に大形の菱形を描く。この菱形の上部と下部では施文方法が異なり、上部は条線間に連点状刺突を施すのに対し、下部では条線の片側だけに連点状刺突を施している。頸部の括れ部にも、条線および連点状刺突が巡るようである。4は4単位の大波状口縁をなし、頸部が括れ、口縁部が大きく外反する深鉢形を呈する土器で、波頂下には細い隆帯が垂下する。文様は、口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下には2条の横位の連点状刺突を巡らせて区画し、その下に大形の菱形を描く。施文される菱形は、条線で菱形を描いた後、条線の上下を含めた4条の連点状刺突を施すものである。330は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に2条の横位の連点状刺突を巡らせて区画し、その下に大形の菱形を描く。施文される菱形は、条線で菱形を描いた後、条線の上下に2条、条線内に1条の連点状刺突を施している。331は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に1条の横位の連点状刺突を巡らせて区画し、その下に大形の菱形を描く。施文される菱形は、条線で菱形を描いた後、条線の上下および条線内に1条づつの連点状刺突を施し、条線内にも条線に直交するように連点状刺突が施されている。333は波状口縁となる波長下に細い隆帯を垂下させ、口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に1条の横位の連点状刺突を巡らせて区画するもの。332は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による条線を巡らせた後に縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に1条の細い隆帯を横位に巡らせて区画し、その下に大形の菱形を描く。施文される菱形は、条線で菱形を描いた後、条線の上下に1条づつの連点状刺突を施している。334～338は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に1条の細い隆帯を横位に巡らせて区画し、その下に連点状刺突等により大形の菱形を描くもの。339・342は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に1条の横位の連点状刺突を巡らせて区画し、その下に連点状刺突等により大形の菱形を描く。340・341は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による横位の連点状刺突を数条巡らせ、その下に連点状刺突により文様を描くものである。343は波状口縁となる口縁部に、半截竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を3条巡らせ、その直下に細い隆帯を1条巡らせて区画し、以下にRLの縄文を施した後、細い隆帯とその上下に連点状刺突を添わせて菱形等の文様を描く。344は口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に1条の細い隆帯を横位に巡らせて区画し、その下にLRとRLにより羽状縄文を施すもの。345～349は同一個体となるもので、波状口縁となる口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、以下にLR(0段多条)とRLにより羽状

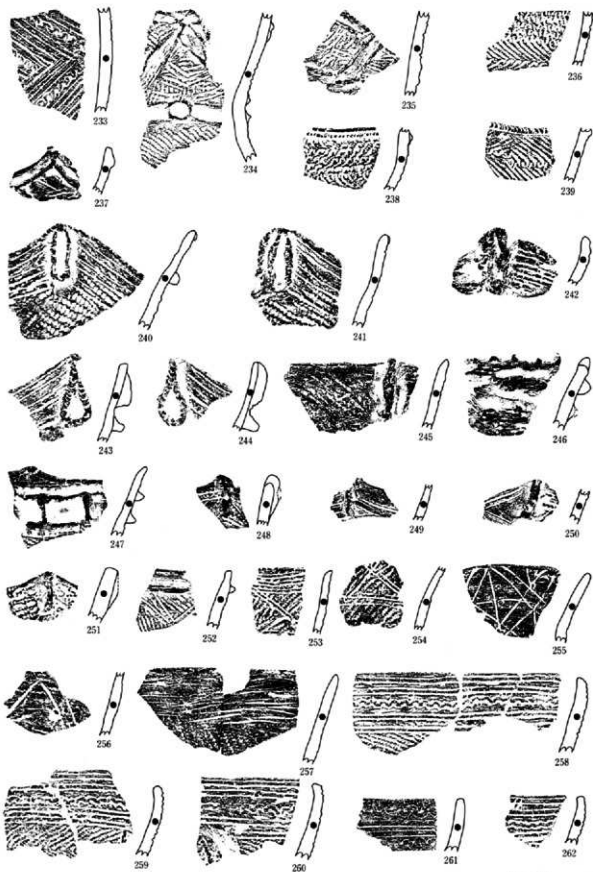


第130図 遺構外C区出土土器(1)



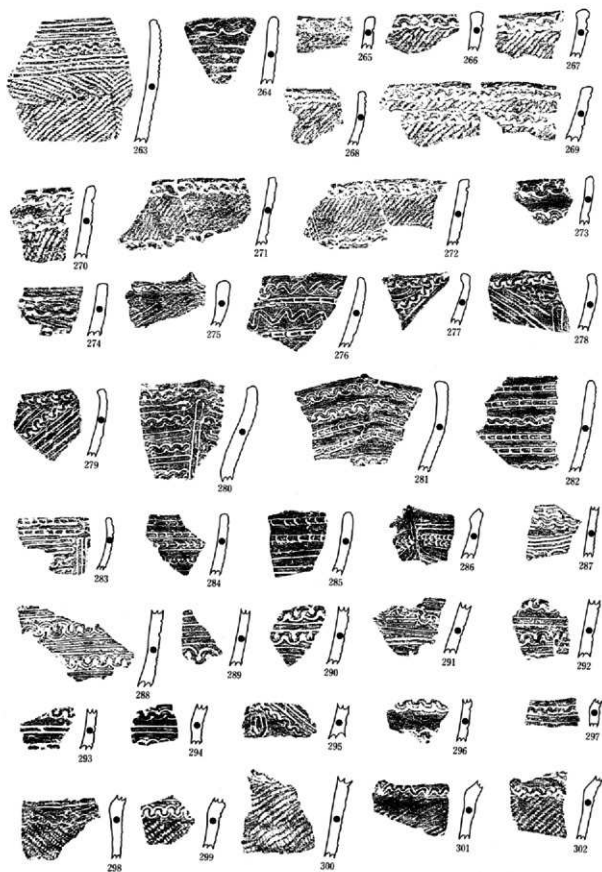
第131図 遺構外C区出土土器(2)

S=1/3



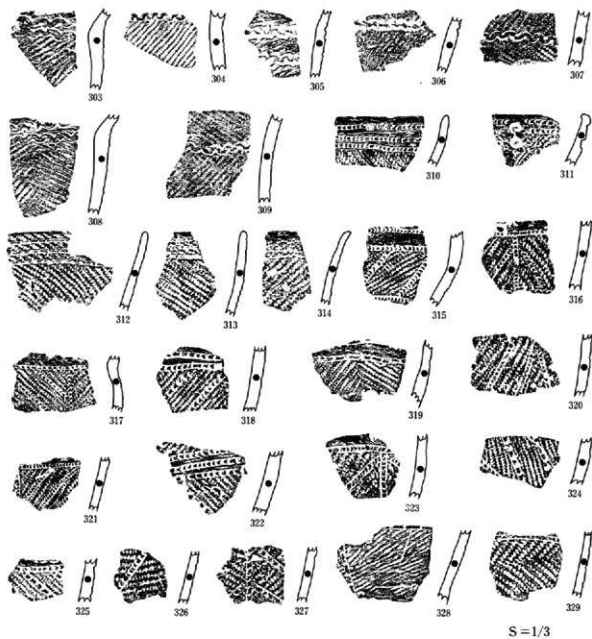
第132図 遺構外C区出土土器(3)

S=1/3



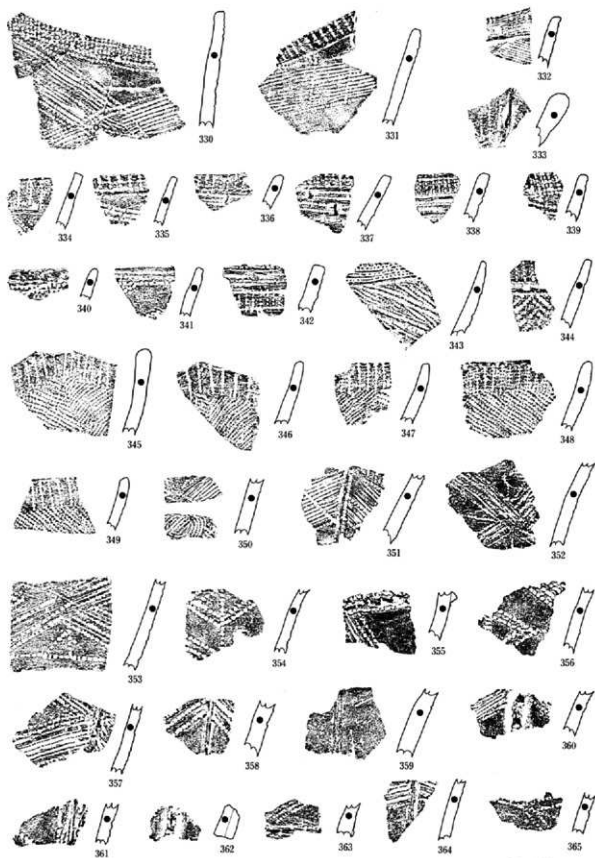
第133図 遺構外C区出土土器(4)

S=1/3



第134図 遺構外C区出土土器(5)

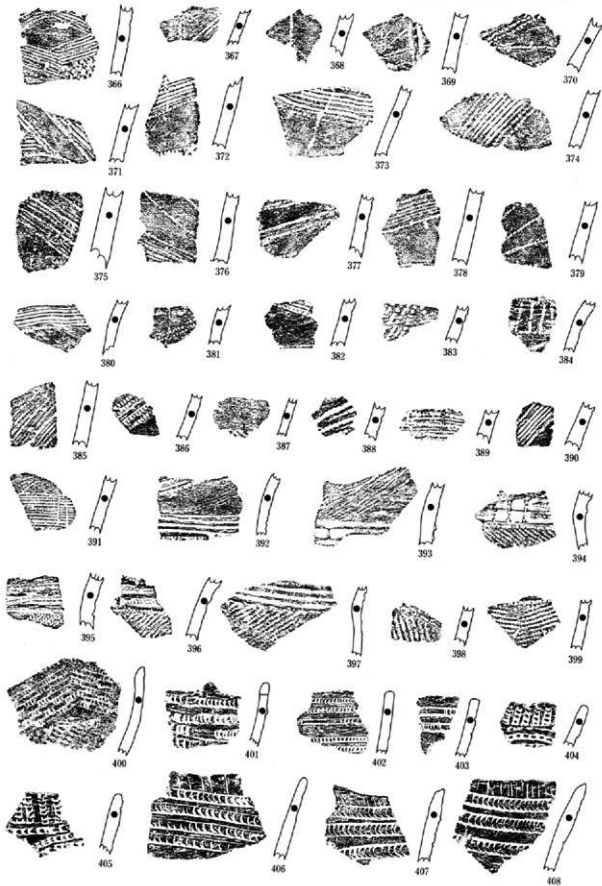
第3章 検出された遺構と遺物



S=1/3

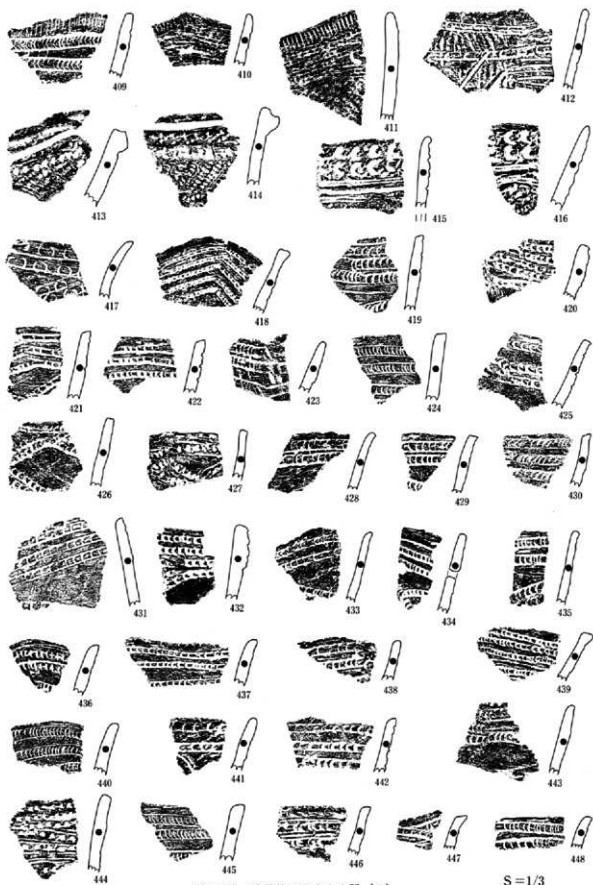
第135図 遺構外C区出土土器(6)





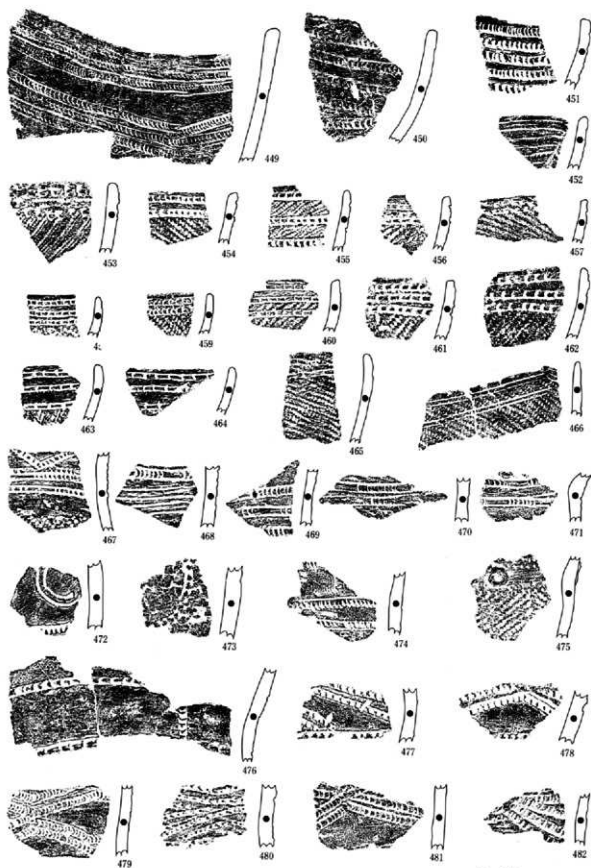
第136図 遺構外C区出土土器(7)

S=1/3



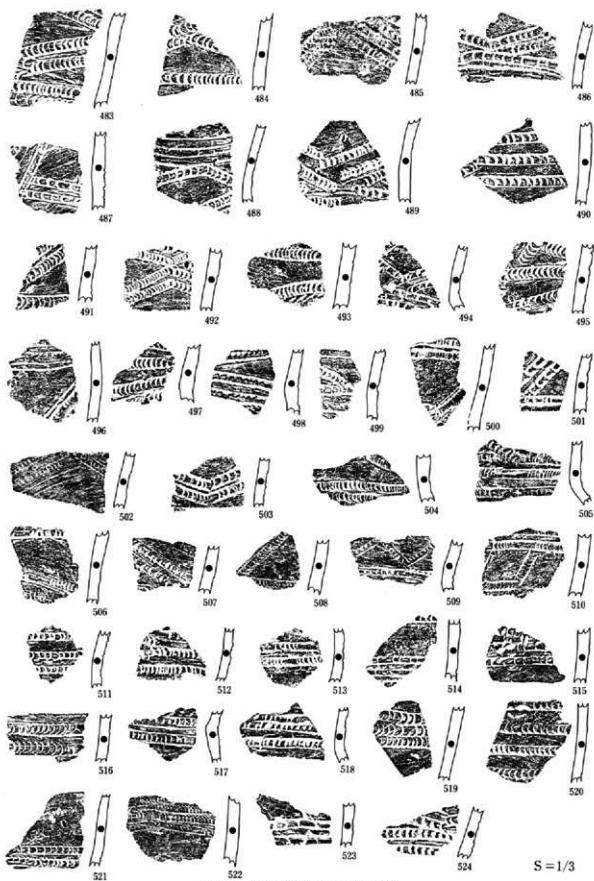
第137図 遺構外C区出土土器(8)

S=1/3



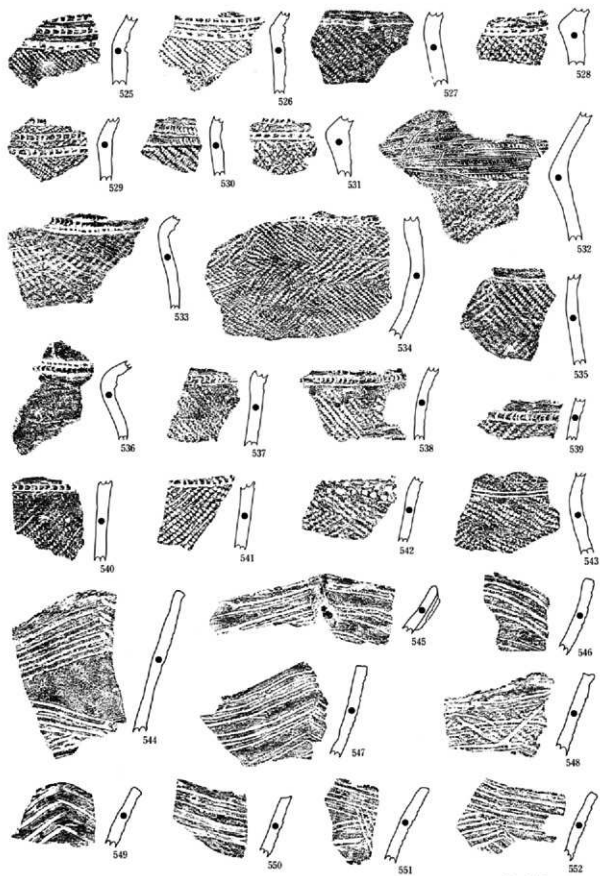
第138図 遺構外C区出土土器(9)

S = 1/3



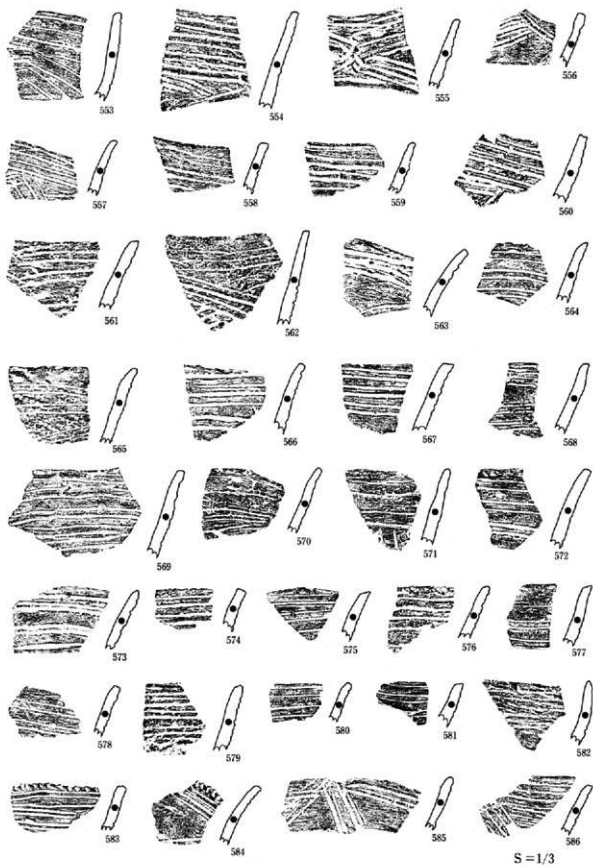
第139図 遺構外C区出土土器 (10)

S=1/3



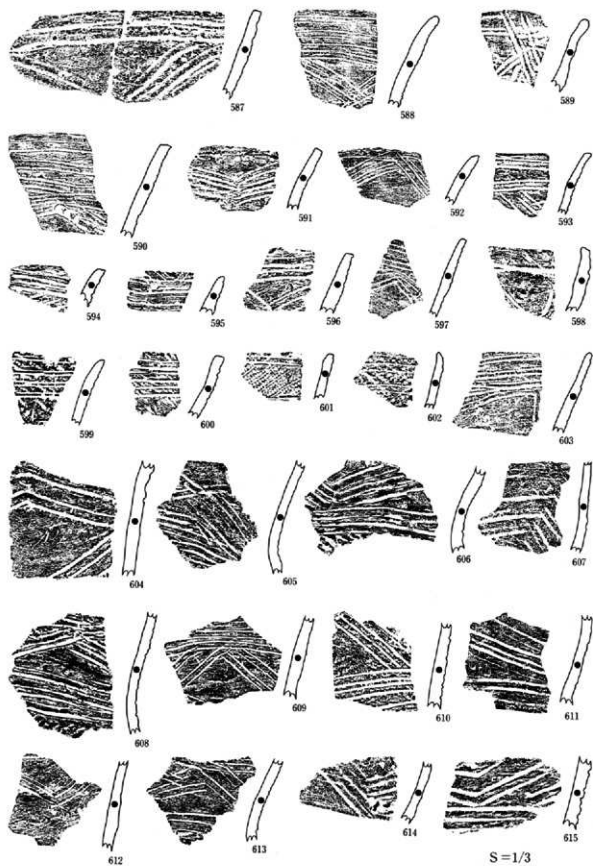
第140図 遺構外C区出土土器(11)

S=1/3

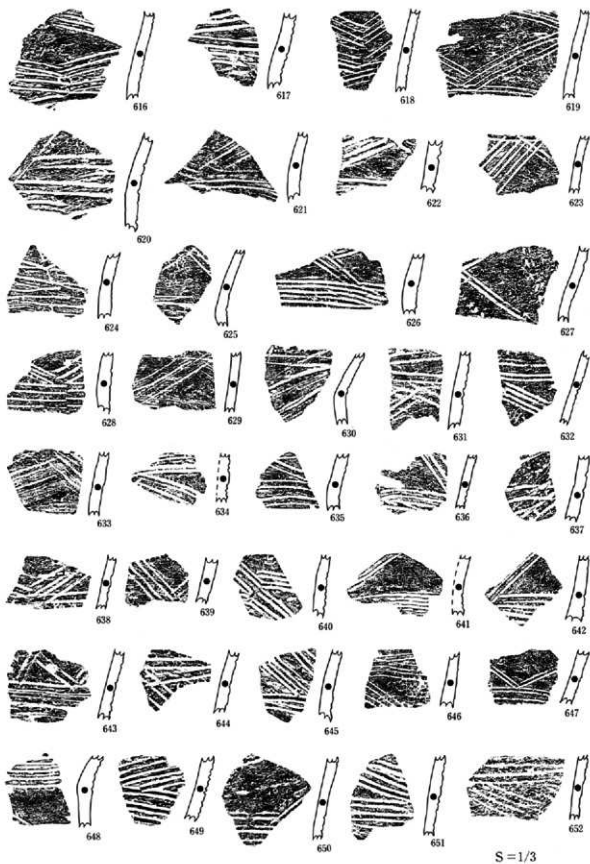


S=1/3

第141図 遺構外C区出土土器 (12)

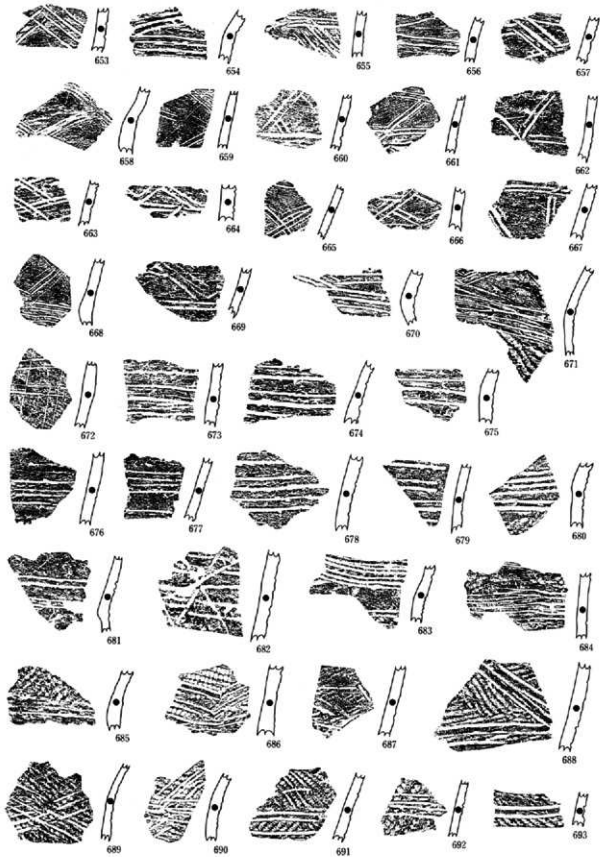


第142図 遺構外C区出土土器(13)



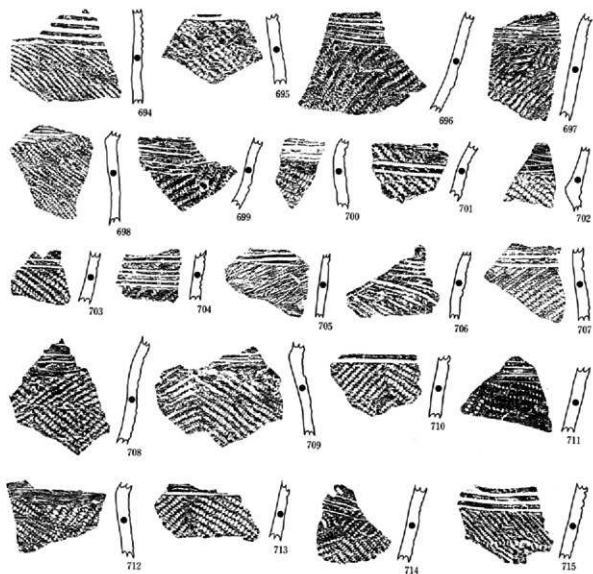
第143図 遺構外C区出土土器 (14)





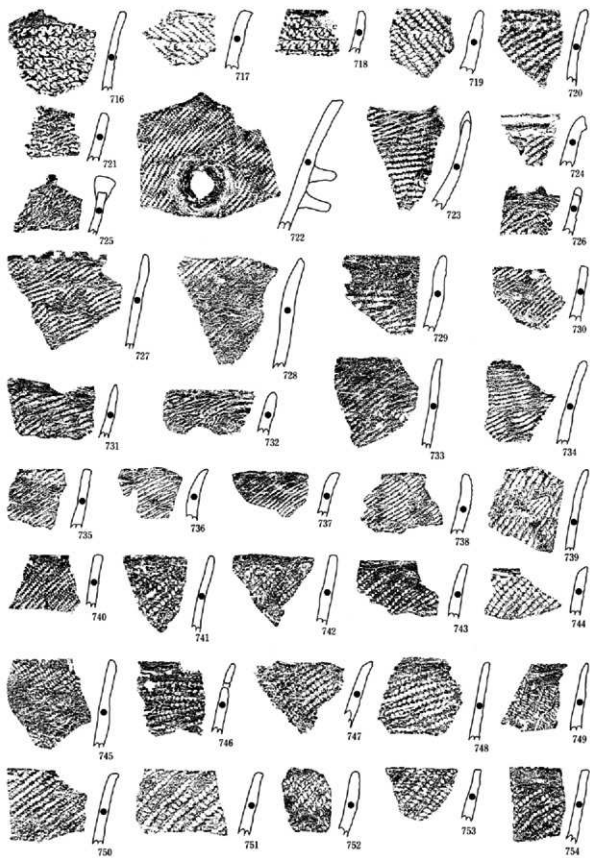
S=1/3

第144図 遺構外C区出土土器 (15)



S = 1/3

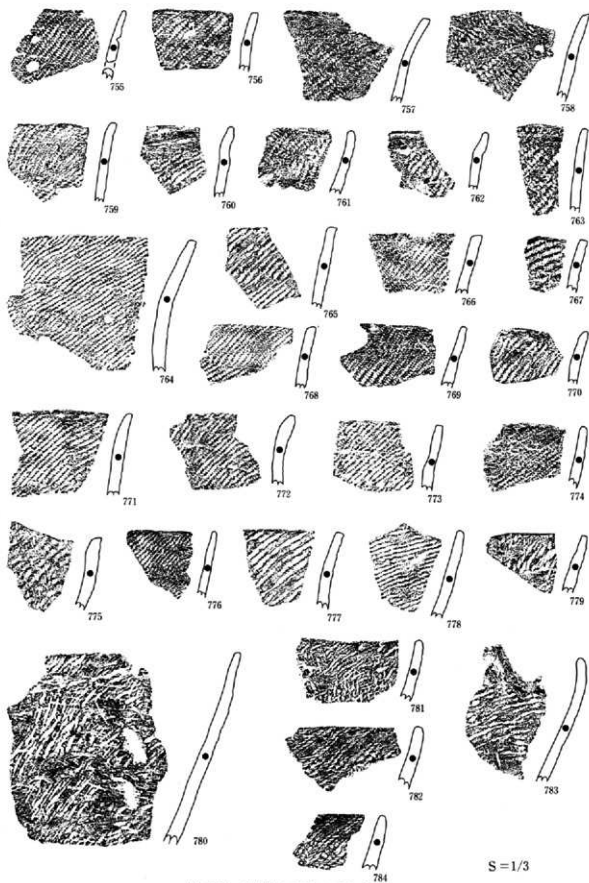
第145図 遺構外C区出土土器 (16)



S = 1/3

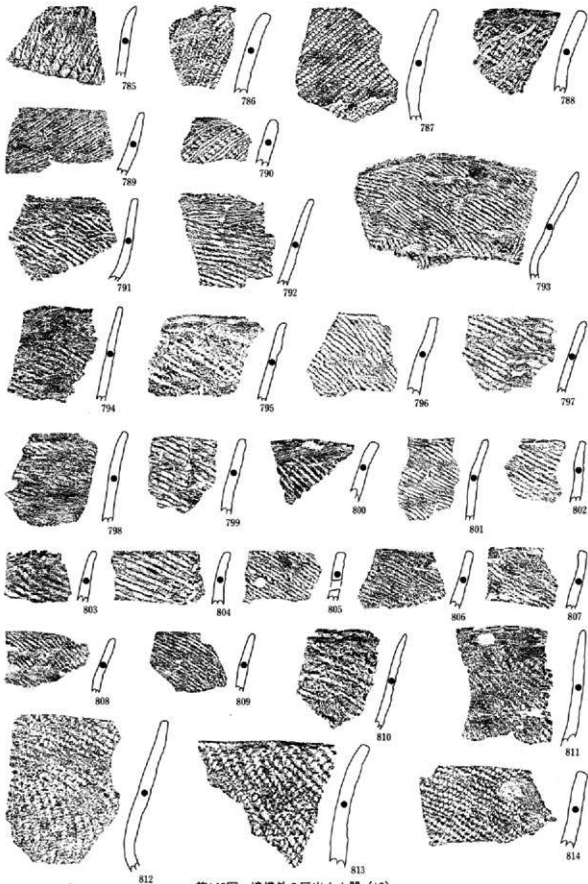
第146図 遺構外C区出土土器 (17)

第3章 検出された遺構と遺物



S=1/3

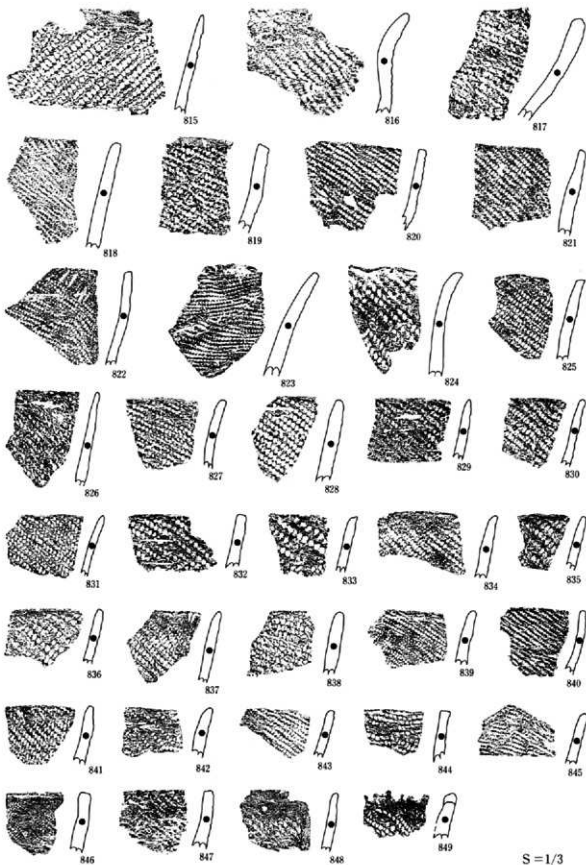
第147図 遺構外C区出土土器 (18)



第148図 遺構外C区出土土器(19)

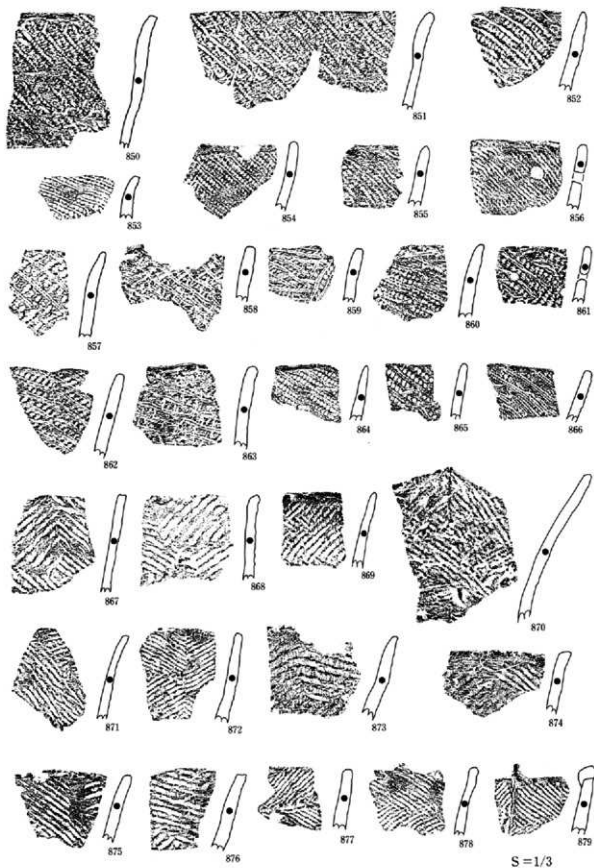
S=1/3

第3章 検出された遺構と遺物

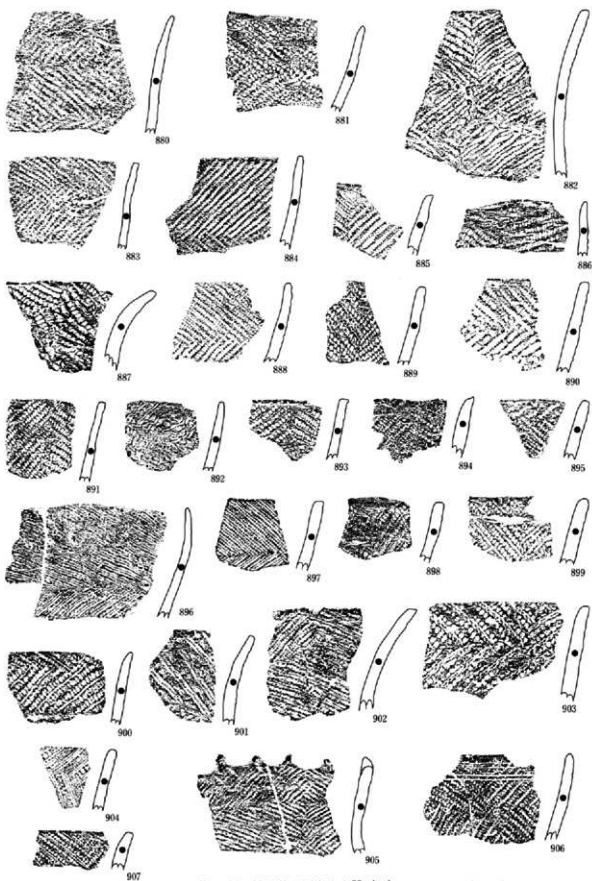


S = 1/3

第149図 遺構外C区出土土器 (20)



第150図 遺構外C区出土土器(21)



第151図 遺構外C区出土土器 (22)

S=1/3